



始



正 誤 表

五 四 一	四 七 二	二 一 九	二 一 八	頁	支那 事變 忠勇 列傳 海軍 之部 第貳 卷
二	九	七	一	行	
散 華 ず ……	勇 戰 武 勳 ……	□ ゐ た ……	落 さ れ た ……	誤	
散 華 ず ……	勇 戰 武 勳 ……	て ゐ た ……	落 さ れ た ……	正	

特218
291

恩賜財團 軍人援護會編纂

支那
事變

忠勇列傳

海軍之部 第貳卷

貳卷

贈本

明治天皇 御製
世と共に譲りて
万民を安んずる
御心を以て
御心を以て

御在位御歳二十八年御書

忠
烈
王
王

本會長 陸軍大將 男爵 奈良武次題字



送芳

千秋

武次



序

皇徳を六合に施し徳化を八紘に展べ以て普く人類の福祉を増進するは、是我が皇道不磨の大精神にして我等日本國民に課せられたる尊き使命である。日清日露の兩戦役も近くは滿洲事變等も皆此の使命を果さんが爲の聖戦に外ならなかつた。我等の父祖先輩は克く是等の國難を打開して皇猷を扶翼し奉り以て國運の隆昌を圖り、又東亞諸民族の爲安寧秩序を維持し黎明の曙光を仰がしむるに至つた。是宏大無邊の大御稜威の然らしめ給ふ所、又皇國軍民が祖先傳來の日本精神を發露せる所以に外ならない。

然るに列強中東亞に野望を抱く國々は新興日本の發展を喜ばず

利害の相反する所、正義人道を無視して事毎に壓迫排日の行動を
反復し、剩へ我と唇齒輔車の關係にあるべき隣邦支那を使喉し、
頑迷なる蔣政權亦之を奇貨となし夷を以て夷を制するの陋策を擅
にし我が既得權益を蹂躪して遂に挑戦の暴舉に出で、加之無辜の
自國民衆を塗炭の苦しみに陥れ恬として省みざるが如き、其の罪
神人共に赦さざる所、これ我が帝國が憤然起ちて蔣政權膺懲の一
大聖戰を起すに至つた所以である。

今や皇國の軍民は舉國一致聖戰の目的達成に邁進し、就中忠勇
無雙の皇軍は陸に海に空に偉大なる戦果を收め蔣政權をして山陬
に屏息するの已むなき窮境に陥らしめ、克く皇威を中外に宣揚す
るに至つた。其の間赫々たる武勳を奏して敵弾に斃れ聖戰の尊き

犠牲となつた幾多將兵の忠勇義烈に至つては、壯烈正に鬼神を哭
かしめ忠誠眞に百世の龜鑑と謂ふべきである。

吾人は前途尙重大なる時局に鑑み是等尊き犠牲者に思を致し飽
くまでも聖戰の目的貫徹に邁進するに共に又其の遺勳を千載に傳
ふべき責務を有するものと信ずる。

明治天皇の御製に

世と共に語り傳へよ國のため

命をすてし人のいさをを

と仰せられてある。聖旨の優渥深遠なる寔に感激に堪へざる次第
である。

曩に社團法人忠勇顯彰會はこの聖旨を奉戴し、明治三十七年以來累次の聖戰に殉職せる戰歿將兵の忠勇列傳を編纂刊行し、其の忠烈を顯彰して芳名を後世に傳へ遺族を慰藉すると共に兼ねて軍民の修養資料として之を頒布する事業を繼續し來たのであるが、本會の創設せらるるや同會は自ら進んで解散し本會に合同したるに依り、茲に本會が其の事業を繼承する事となつた次第である。抑々今次事變に關する忠勇列傳の編纂は、戰歿者の多數なるに加へ、現代戰の特質、各兵種の進歩せる性能、而して偉大なる精神威力を精察して實戰の真相と其の功績の眞價とを如實に傳ふる事は容易ならざる大事業であるが、幸にして貴重なる軍部の資料と戰地に生死を共にせる上官戰友の信書等に基き、百折不撓益々

編纂規模を擴張し所期の目的貫徹を企圖するものである。

若し夫れ本列傳が幾萬戰歿者の靈前に思出深き家寶として光彩を添へ、又遺族慰藉の一助ともなり、忠靈雄魂が永久に遺族及其の子孫の血肉に生き、遺族及子孫亦戰歿者の忠誠崇高なる精神を繼承し幽明一如以て皇猷を扶翼し奉り、併せて一家の前途に益々光華を顯揚するに至らば吾人の本懷蓋し之に過ぐるものはない。

昭和十五年四月三日

恩賜
財團 軍人援護會長

樞密顧問官 陸軍大將男爵 奈良武次

凡 例

一、本卷ニハ昭和十三年四月二十三日ヨリ十四年四月二十七日ニ至ル戦闘ニ於ケル戦歿殊勳者合計二百七十九名を掲載シタリ。

二、本書掲載順序ハ階級毎ニいろは順ニ依レリ。

三、傳記ニ多少精粗ノ別アルハ主トシテ資料ノ如何ニ依ルモノニシテ之ガ蒐集ニハ大イニ努力セル處ナルモ往々其ノ完キヲ得ザルモノアルハ洵ニ遺憾トスル所ナリ。

但シ本人ノ戰場ニ於ケル行動武勳ハ當局ノ援助ニ依リ専ラ海軍當局ノ調書ニ依リ記述セルモノナリ。

四、肖像ノ掲載ナキモノハ遺憾ナガラ寫眞ヲ入手シ得ザリシモ

ノナリ。

五、編纂上軍ノ機(祕)密保持ニ關係アル事項ハ總テ之ヲ省略シ又
出征部隊ハ當時ノ部隊長ノ姓ヲ冠シテ之ヲ表示セリ。
六、戰歴ニ記載ノ官等ハ凡テ生前ノモノヲ記シ且ツ准士官以下
ノ官職ハ左記略稱ヲ用ヒタリ。

官職	略稱	官職	略稱
航空兵曹長	空曹長	整備兵曹長	整曹長
一等兵曹	一曹	一等航空兵曹	一空曹
二等整備兵曹	二整曹	三等機關兵曹	三機曹
一等水兵	一水	一等工作兵	一工
二等看護兵	二看	三等主計兵	三主

支那事變 **忠勇列傳** 海軍之部 第貳卷目次

明治天皇御製

故元帥侯爵 東郷平八郎謹書

御題字

總裁 大勳位 朝香宮鳩彦王殿下

題字

會長 樞密顧問官 陸軍大將 男爵 奈良武次

一、序……………會長樞密顧問官陸軍大將男爵 奈良武次

一、凡……………例……………一〇二

一、索……………引……………一〇八

一、准士官以上之部……………一〇五

一、下士官之部
一、兵之部

六—四七
四六一—七〇

支那事變 忠勇列傳 海軍之部 第貳卷

索引

(本索引ハ姓頭字ノ發音ニ從ヒ各階級ヲ通ジ之ヲ「いろは」順ニ排列セリ、但シ便宜上「るゑお」ハ「いえを」ノ部ニ收メタリ)

いノ部

- 海軍 中尉 今村正治 (熊本縣) 難局二旬の苦闘を續けて武勳を樹て遂に上海油公司に散華す……………二五
- 海軍特務少尉 伊藤長次郎 (岩手縣) 參戰劈頭彈藥配給運搬に奮闘し惜しくも上海租界の華と散る……………二六
- 海軍一等航空兵曹 飯尾秀雄 (靜岡縣) 空前の壯舉渡洋爆撃に屢々武勳を奏し愛機と共に敵地に自爆す……………二六
- 海軍二等整備兵曹 井上清 (山梨縣) 壯烈渡洋爆撃に武勳を奏し惜しくも海安鎮附近に玉碎す……………二六
- 海軍二等航空兵曹 石島浩平 (茨城縣) 空前の壯舉渡洋爆撃に屢々武勳を奏し惜しくも揚州北方に玉碎す……………二六
- 海軍三等航空兵曹 岩田武雄 (北海道) 空前の壯舉渡洋爆撃に屢々武勳を奏し惜しくも揚州北方に玉碎す……………二六
- 海軍三等兵曹 狗卷繁一 (和歌山縣) 奮戰陣地を死守して惜しくも上海華德路に散華す……………二四
- 海軍三等兵曹 板金次郎 (廣島縣) 勇戦曲射砲の威力を發揮し惜しくも上海其美路第一橋附近に散華す……………二四
- 海軍三等兵曹 板持正光 (島根縣) 奮戰健闘二旬餘に互り武勳を奏して惜しくも上海北四川路に斃る……………二五
- 海軍三等兵曹 池田豊 (栃木縣) 勇戦健闘機銃の威力を發揚し惜しくも上海租界戰の華と散る……………二五
- 海軍三等兵曹 池嶋寅二 (新潟縣) 決死切斷電話の修理に奮闘し惜しくも上海陸戰隊本部屋上に散る……………二五
- 海軍三等機關兵曹 石原猪作 (埼玉縣) 勇敢なる運彈藥員奮戰敢闘武勳を奏し惜しくも上海公園坊に斃る……………二五
- 海軍三等兵曹 石川清 (愛媛縣) 彈雨の下奮戰敢闘陣地を死守して上海東體育會路に散華す……………二六

索引

海軍一等水兵 飯塚勝夫(神奈川県) 奮戦機銃の威力を發揮し惜しくも吳淞敵前上陸戦に散華す…………… 四六八
 海軍一等機關兵 伊藤福一(千葉縣) 勇戦武勳を奏して惜しくも上海西體育會路附近に斃る…………… 四六一
 海軍一等水兵 磯部義雄(山口縣) 奮戦武勳を奏して惜しくも上海天通庵路橋附近に散華す…………… 四六三
 海軍二等水兵 飯沼吉四郎(新潟縣) 上海各方面に轉戦奮闘して偉勳を樹て遂に東部租界の華と散る…………… 四六七
 海軍二等水兵 飯田修壽(茨城縣) 決死肉弾突撃を敢行し惜しくも吳淞敵前上陸戦に斃る…………… 四七〇
 海軍二等水兵 井原勉(廣島縣) 二十數日間奮戦を續けて武勳を樹て惜しくも上海北部戦線に散る…………… 四七三
 海軍二等機關兵 井上國廣(香川縣) 參戦以來二旬餘各陣地に奮戦健闘し遂に上海日本女學校に斃る…………… 四七五
 海軍二等水兵 今西辰夫(三重縣) 奮戦功を樹て惜しくも上海北部戦線に散華す…………… 四七七
 海軍二等水兵 石川晴喜(高知縣) 連續十數日間奮戦を續けて武勳を樹て惜しくも上海油公司に斃る…………… 四七九

はノ部

海軍三等航空兵曹 畠山倉三(廣島縣) 空爆參加十數回、奮戦武勳を樹て遂に愛機と共に江南上空に散る…………… 四八三
 海軍三等兵曹 濱田儀盛(鹿兒島縣) 奮戦力闘一ヶ月武勳を樹てて上海東部租界の華と散る…………… 四八六
 海軍三等兵曹 濱名明正(群馬縣) 參戦劈頭上海東部租界の激戦に奮闘し遂に其の任を完うして玉碎す…………… 四八八

にノ部

海軍 大尉 西脇英男(愛知縣) 壯烈火焰に包まれ敵陣に突入自爆して江灣鎮に玉碎す…………… 四九二
 海軍一等水兵 西村玉留(滋賀縣) 勇敢なる工作隊員、友軍救援に赴き決死奮闘遂に護國の神と化す…………… 四九五
 海軍二等水兵 二瓶忠平(福島縣) 決死肉弾となつて敵陣に突入し吳淞敵前上陸成功の端緒を開く…………… 四六一
 海軍二等機關兵 西尾吉明(北海道) 日夜奮戦武勳を樹て惜しくも上海水電路附近の激戦に散華す…………… 四九四

海軍二等水兵 西田秀生(福岡縣) 勇戦機銃の威力を遺憾なく發揮し惜しくも上海廣中路に散華す…………… 四九七

ほノ部

海軍二等航空兵曹 堀越志津恵(群馬縣) 壯烈無比の渡洋爆撃に屢々武勳を奏し惜しくも揚州東方に散華す…………… 一七二
 海軍三等兵曹 細谷武俊(鳥取縣) 勇敢なる測距員鮮血淋漓其の配置を死守し惜しくも江上の華と散る…………… 一七〇
 海軍三等機關兵曹 本田武雄(静岡縣) 彈雨を衝いて奮戦し惜しくも上海水電路附近の戦闘に散華す…………… 一七三
 海軍三等兵曹 本田槌吉(熊本縣) 敵彈雨注の中奮戦武勳を樹て遂に上海租界戦の華と散る…………… 一七五
 海軍一等水兵 保坂増太郎(北海道) 勇猛果敢斥候任務遂行中惜しくも上海齊物浦路上に斃る…………… 四八八
 海軍二等機關兵 堀川孝(香川縣) 累戦武勳を奏し惜しくも上海天寶路附近に斃る…………… 四八九
 海軍二等水兵 堀口龍(島根縣) 瀕死尙重傷の中隊長安否を氣遣ひつつ上海北部戦線に散る…………… 四九一

とノ部

海軍一等整備兵曹 鳥羽田季雄(茨城縣) 空前の壯舉渡洋爆撃に武勳を奏し惜しくも揚州東方に玉碎す…………… 四九八
 海軍二等兵曹 徳永常男(廣島縣) 勇敢なる信號長奮戦武勳を樹てて惜しくも上海北部戦線に散華す…………… 一七四
 海軍二等整備兵曹 時任正武(千葉縣) 空前の壯舉渡洋爆撃に武勳を奏し惜しくも揚州東方に玉碎す…………… 一七七
 海軍三等兵曹 鳥塚忠吉(埼玉縣) 彈雨の下測的任務に奮闘し惜しくも陸戦隊本部屋上に散る…………… 一七七
 海軍三等機關兵曹 富田傳治(宮城縣) 運彈薬員として雨飛する敵砲彈下に奮戦し惜しくも水雷艇上に散る…………… 一七九
 海軍三等兵曹 東條俊夫(島根縣) 連續奮戦二十餘日屢々武勳を奏して惜しくも上海愛國女學校南方に散る…………… 一八一
 海軍三等兵曹 土肥鎗平(静岡縣) 奮戦榴彈砲の威力を發揮して惜しくも上海新公園に散華す…………… 一八三
 海軍一等機關兵 富田松雄(岐阜縣) 勇戦彈藥補給に奮闘し惜しくも上海青雲路に斃る…………… 四七〇

ちノ部

海軍二等兵曹 近澤 一美 (廣島縣) 奮戦武勳を奏し惜しくも上海北部戦線に斃る……………一七九
海軍一等水兵 珍井 貞水 (宮崎縣) 勇戦武勳を奏し惜しくも上海北部戦線の華と散る……………四七三

をノ部

海軍航空特務少尉 岡田 一三 (廣島縣) 壯烈火焰に包まれ敵陣に突入自爆して江灣鎮に玉碎す……………一九〇
海軍特務少尉 小野 義雄 (山形縣) 累戦偉勳を奏し惜しくも吳淞敵前上陸戦に散華す……………三三
海軍航空兵曹長 大庭 彌一郎 (靜岡縣) 空前の壯舉渡洋爆撃に屢々武勳を奏し惜しくも揚州北方に玉碎す…一九
海軍二等航空兵曹 小原 一壯 (東京府) 壯烈無比の渡洋爆撃に屢々武功を樹て惜しくも揚州爆撃戦に散る…一八
海軍二等兵曹 大石 幸次郎 (栃木縣) 奮戦二十餘日間屢々武勳を樹て惜しくも上海開林公司に斃る……………一八四
海軍二等航空兵曹 斧田 卯之助 (山梨縣) 空前の壯舉渡洋爆撃に武勳を樹て惜しくも天長附近に自爆玉碎す…一八七
海軍三等航空兵曹 及川 至 (宮城縣) 空前の壯舉渡洋爆撃に屢々武勳を奏し愛機と共に天長附近に自爆す……………一八五
海軍三等航空兵曹 及川 喜智郎 (岩手縣) 壯烈渡洋爆撃に武勳を奏し惜しくも海安鎮附近に玉碎す……………一八九
海軍三等兵曹 大友 春雄 (宮城縣) 連續十數日間奮戦敢闘偉勳を奏し遂に上海北部戦線に斃る……………一九三
海軍三等兵曹 大坪 秀雄 (岐阜縣) 奮戦武勳を奏し惜しくも上海北四川路戦闘に斃る……………一九四
海軍三等兵曹 大崎 時雄 (鹿児島縣) 奮戦敢闘衆敵を撃破し惜しくも上海軍工路上の激戦に散華す……………一九六
海軍三等航空兵曹 小川 仁三 (東京府) 空前の壯舉渡洋爆撃に屢々武勳を奏し惜しくも惠州南方に玉碎す…一九九
海軍三等航空兵曹 小野 進司 (神奈川縣) 空前の壯舉渡洋爆撃に武勳を奏し惜しくも揚州東方に散華す……………三〇三
海軍三等兵曹 園城 正治 (滋賀縣) 苦戦中の友軍に應援し奮戦陣地を死守して惜しくも上海華徳路に斃る……………三〇五

海軍一等水兵 大橋 重作 (新潟縣) 累戦武勳を樹て遂に吳淞敵前上陸戦に散華す……………四七四
海軍一等水兵 大澤 萬次郎 (埼玉縣) 決死肉弾となつて敵陣に突入し吳淞敵前上陸戦に斃る……………四七七
海軍一等水兵 大下 正義 (廣島縣) 勇戦機銃の威力を遺憾なく發揮し遂に上海海國路に斃る……………四八〇
海軍二等水兵 大原 政勝 (山口縣) 奮戦負傷して再び戦線に参加し遂に上海北方戦線に斃る……………四九四
海軍二等水兵 小野田 速 (大分縣) 彈雨の下、哨兵勤務に奮闘中遂に上海租界戦の華と散る……………五九六
海軍二等水兵 小黒 勝 (香川縣) 奮戦力闘一ヶ月武勳を奏して惜しくも上海北部戦線に斃る……………五九八
海軍二等水兵 奥野 貞四郎 (岐阜縣) 勇猛果敢彈雨を冒して敵情監視中惜しくも上海華盛路に斃る……………六〇〇

わノ部

海軍特務中尉 渡邊 政太郎 (山形縣) 率先部下を提げて敵陣に突入し奮戦力闘戦勝の端を拓く……………一八
海軍一等航空兵曹 和田 正 (福岡縣) 壯烈火達磨となつて敵地に突入自爆す……………一〇二
海軍三等兵曹 渡邊 正三郎 (東京府) 奮戦彈雨を冒して敵情偵察の任に服し惜しくも上海租界戦に散華す……………三〇七
海軍一等水兵 渡邊 幸雄 (新潟縣) 上海戦に機銃の猛威を發揮して青雲路に玉碎す……………四八三
海軍二等水兵 和田 秀夫 (香川縣) 累次激戦に奮闘して武勳を樹て惜しくも上海廣中路に散華す……………六〇三

かノ部

海軍少佐 鎌田 喜一 (徳島縣) 奮戦敢闘二旬餘偉勳を奏して惜しくも上海愛國女學校附近に斃る……………一
海軍少佐 上敷 領清 (鹿児島縣) 壯烈火達磨となつて敵格納庫を粉砕し廣徳空襲に玉碎す……………四
海軍兵曹長 河合 英一 (愛知縣) 友軍陣地救援に赴き勇戦力闘惜しくも上海租界に散華す……………四三
海軍航空兵曹長 川口 雄一 (靜岡縣) 壯烈屢々渡洋爆撃に武勳を奏し惜しくも揚州爆撃戦に玉碎す……………四九

- 海軍兵曹長 梶原匡廣 (山梨縣) 吳淞敵前上陸に奮戦偉勳を樹てて玉碎す…………… 四九
- 海軍一等航空兵曹 川田正太郎 (東京府) 空前の壯舉渡洋爆撃に屢々武勳を奏し惜しくも揚州北方に玉碎す…………… 一〇五
- 海軍一等整備兵曹 龜田重 (千葉縣) 壯烈屢々渡洋爆撃に武勳を奏し惜しくも揚州東方に玉碎す…………… 一〇八
- 海軍二等航空兵曹 蒲池梅雄 (長崎縣) 壯烈火達磨となつて敵軍大工場中央に突入自爆す…………… 一六〇
- 海軍二等航空兵曹 片野正平 (神奈川縣) 空前の壯舉渡洋爆撃に屢々武勳を奏し惜しくも惠州南方に玉碎す…………… 一六三
- 海軍二等兵曹 風間俊吉 (新潟縣) 奮戦機銃の威力を發揮し惜しくも吳淞敵前上陸戦に散華す…………… 一六六
- 海軍三等兵曹 川端松樹 (福井縣) 奮戦武勳を樹て惜しくも上海租界戦の華と散る…………… 三〇九
- 海軍三等兵曹 川原實 (鹿兒島縣) 負傷後再び戦場に立ち從容任を了へ惜しくも陸戦隊本部に斃る…………… 三二一
- 海軍三等兵曹 川口辰志 (福岡縣) 勇戦十晝夜に互り武勳を奏して上海舟山路の激戦に散華す…………… 三二三
- 海軍三等兵曹 加藤平三郎 (秋田縣) 彈雨の下奮戦活躍して其の任務に邁進し遂に上海租界の華と散る…………… 三三五
- 海軍三等兵曹 金子竹雄 (福島縣) 奮戦武功を樹て惜しくも吳淞敵前上陸戦に散華す…………… 三三八
- 海軍一等水兵 掛川伴二 (長野縣) 二水の身を以て分隊下士官に代り勇戦奮闘上海戦に玉碎す…………… 四八五
- 海軍一等水兵 上村嘉次郎 (岩手縣) 力戦奮闘敵陣に突入し惜しくも上海公平路に散華す…………… 四八七
- 海軍一等水兵 高口一男 (福岡縣) 勇戦敢闘武勳を奏し惜しくも上海油公司の華と散る…………… 四九六
- 海軍二等水兵 蕪岩雄 (宮崎縣) 豪膽なる榴彈砲員奮戦武勳を奏し上海義勇隊射場に斃る…………… 六〇四
- 海軍二等機關兵 加世田寅七 (熊本縣) 彈雨の下屢々武勳を樹て遂に友軍救援に赴いて玉碎す…………… 六〇七
- 海軍少佐 吉田和雄 (東京府) 壯烈屢々渡洋爆撃に武勳を奏し惜しくも揚州爆撃戦に散華す…………… 七

よの部

- 海軍一等兵曹 米田春美 (愛媛縣) 奮戦克く機銃の威力を發揚し遂に上海愛國女學校南方に斃る…………… 一一二
- 海軍三等航空兵曹 横山正午 (茨城縣) 壯烈屢々渡洋爆撃に武勳を奏し惜しくも海安鎮附近に玉碎す…………… 三三一
- 海軍三等兵曹 吉田正晴 (河内山姓) (山口縣) 砲彈雨注の下奮戦陣地を死守して上海中新紡績工場に斃る…………… 四二〇
- 海軍一等水兵 米山幸衛 (山梨縣) 水雷艇乗組員として奮戦武勳を樹て惜しくも黄浦江上に散る…………… 四九〇
- 海軍二等水兵 横田國男 (東京府) 決死肉弾突撃を敢行し惜しくも吳淞敵前上陸戦に散華す…………… 六〇八

たの部

- 海軍兵曹長 立木孫二 (岩手縣) 豪勇の装甲車長轉戦武勳を奏し惜しくも上海公平路に斃る…………… 三三
- 海軍兵曹長 高橋富貴 (福島縣) 勇戦力闘通信員の重任を完遂し惜しくも上海租界戦に散華す…………… 三五
- 海軍兵曹長 高松勝孝 (和歌山縣) 陸軍揚陸掩護に奮戦武勳を奏し惜しくも吳淞敵前上陸戦に斃る…………… 六六
- 海軍兵曹長 田中初一 (山口縣) 將校斥候に加り敵情偵察中惜しくも上海大康住宅附近に斃る…………… 六〇
- 海軍兵曹長 竹内時雄 (兵庫縣) 奮戦部下を督勵して陣地を死守し遂に上海東部租界戦に斃る…………… 三三
- 海軍一等航空兵曹 高橋哲平 (山形縣) 空前の壯舉渡洋爆撃に屢々武勳を奏し惜しくも揚州北方に玉碎す…………… 二二五
- 海軍一等航空兵曹 瀧澤萬 (岩手縣) 水上偵察機勇敢に敵戦機と交戦し遂に上海敵陣地に玉碎す…………… 二二八
- 海軍二等兵曹 高木定夫 (岐阜縣) 奮戦克く機銃の威力を發揚し惜しくも上海華徳路に散華す…………… 一九九
- 海軍二等整備兵曹 田村正 (高知縣) 空前の壯舉渡洋爆撃に屢々武勳を奏し惜しくも惠州南方に玉碎す…………… 二〇一
- 海軍三等兵曹 依迫敏 (宮崎縣) 勇戦力闘十數日武勳を奏して遂に堅田艦上に散華す…………… 三四
- 海軍三等兵曹 谷口秀吉 (徳島縣) 剛膽不敵の重機銃射手奮戦武勳を樹て遂に上海東部租界戦の華と散る…………… 三三六
- 海軍三等兵曹 谷口進 (宮崎縣) 上海開戦以來重要任務に奮闘し遂に敵砲弾に斃る…………… 三三九

海軍三等兵曹 田吉正義 (福岡縣)	敵の橋梁爆破を阻止して我作戦を有利に導き遂に上海北八字橋に斃る……………	三三
海軍一等水兵 高橋文雄 (東京府)	奮戦武勳を奏し惜しくも吳淞敵前上陸戦に斃る……………	四九三
海軍一等水兵 田村重雄 (栃木縣)	奮戦武勳を樹て惜しくも上海北部戦線に散華す……………	四九八
海軍二等水兵 高井榮次 (新潟縣)	決死肉弾戦を演じ惜しくも吳淞敵前上陸戦に斃る……………	六一
海軍二等水兵 高橋辰江 (愛知縣)	勇戦力闘東部支隊本部を死守し遂に上海日本小學校に斃る……………	六四
海軍二等水兵 高橋七次 (大分縣)	勇敢なる傳令員、果戦武勳を奏して惜しくも上海天寶路に散華す……………	六六
海軍二等水兵 竹島三郎 (三重縣)	奮戦力闘遺憾なく機銃の威力を發揮し遂に上海眉州路に散華す……………	六八
そ / 部		
海軍三等兵曹 添田好治 (岩手縣)	決死切斷電話線の修理に奮闘し惜しくも陸戦隊本部屋上に斃る……………	三四
海軍三等兵曹 十川靜三 (香川縣)	勇戦力闘寡勢克く大敵を撃攘し遂に護國の華と散る……………	三六
つ / 部		
海軍一等兵曹 常木榮吉 (埼玉縣)	果戦武功を奏して惜しくも吳淞敵前上陸に玉碎す……………	一〇
海軍三等兵曹 津留貢 (熊本縣)	參戦直ちに彈火藥庫警戒の任に服し惜しくも上海租界の激戦に散華す……………	三九
海軍三等兵曹 辻本盈 (三重縣)	勇敢なる運彈藥員奮戦其の任を完遂し惜しくも上海眉州路に斃る……………	四一
な / 部		
海軍一等航空兵曹 中山榮 (福岡縣)	壯烈偉勳を樹て愛機諸共上海敵陣地爆撃戦に玉碎す(兄弟聯死)……………	一一
海軍等航空兵曹 中島策郎 (東京府)	空前の壯舉渡洋爆撃に世界の耳目を聳動し惜しくも揚州東方に散る……………	一六
海軍二等航空兵曹 永野忠藏 (福岡縣)	壯烈偉勳を樹て愛機諸共上海敵陣地爆撃戦に玉碎す……………	二四

海軍三等機關兵曹 中川留作 (長崎縣)	奮戦敢闘武勳を奏して惜しくも上海水電路附近に散華す……………	三三
海軍三等兵曹 中田八郎 (岩手縣)	彈雨の下揚陸部隊掩護に奮戦し惜しくも吳淞敵前上陸戦に斃る……………	三六
海軍三等機關兵曹 中田豊三 (兵庫縣)	敵の猛火を冒して傳令任務遂行中惜しくも上海華徳路附近に斃る……………	三八
海軍三等兵曹 中田滿敏 (鳥取縣)	勇戦奮闘曲射砲の威力を發揮し遂に上海其美路第一橋附近に散華す……………	三五〇
海軍三等兵曹 中島薫 (高知縣)	決死切斷電話線の修理に奮闘し惜しくも上海陸戦隊本部屋上に斃る……………	三五二
海軍一等水兵 中井助三郎 (兵庫縣)	奮戦武勳を奏し惜しくも上海愛國女學校附近に散華す……………	五〇〇
海軍一等水兵 仲丸巴 (新潟縣)	奮戦二十數日間武勳を樹てて惜しくも上海水電路陣地に散る……………	五〇三
海軍二等機關兵 中尾政繼 (熊本縣)	敵彈雨飛の下擔架隊員として奮闘し遂に上海開林公司前に斃る……………	五二〇
海軍二等水兵 中村昇 (鹿児島縣)	奮戦二十數日間武勳を樹てて惜しくも上海森陣地に散る……………	五三三
海軍二等水兵 中山博美 (岡山縣)	勇戦武勳を奏し惜しくも上海紡績第五工場の屋上に散華す……………	五三五
む / 部		
海軍三等兵曹 村田忠 (山口縣)	果戦武勳を樹て惜しくも上海其美路第二橋の激戦に散華す……………	五五五
海軍一等水兵 武藤元治 (新潟縣)	屢々武勳を累ね惜しくも上海東部租界に散華す……………	五〇五
海軍二等水兵 村石吉造 (東京府)	果戦武勳を奏し遂に吳淞敵前上陸戦に散華す……………	六二七
う / 部		
海軍一等兵曹 梅原仲作 (岩手縣)	果戦偉勳を奏し惜しくも吳淞敵前上陸の激戦に散華す……………	一五
海軍二等航空兵曹 植村啓三 (岩手縣)	空前の壯舉渡洋爆撃に武勳を奏し惜しくも揚州東方に玉碎す……………	二〇七
海軍二等兵曹 臼杵茂吉 (新潟縣)	勇敢なる山砲隊員奮戦武勳を樹て上海租界戦の華と散る……………	二一〇

海軍三等兵曹 上石秀男 (兵庫縣) 決死彈雨を冒し敵の橋梁爆破を阻止して我作戦を有利に導く…… 三五七
 海軍三等整備兵曹 内田幸助 (東京府) 壯烈渡洋爆撃に功を樹て惜しくも揚州北方に玉碎す…… 三五九
 海軍一等水兵 梅崎公幸 (佐賀縣) 大敵の包圍を受け惡戦苦闘十數日惜しくも上海油公司に斃る…… 三〇七
 海軍二等機關兵 上野勝元 (千葉縣) 砲煙彈雨の中奮戦十數日武勳を奏して上海水電路附近に斃る…… 三三〇
 海軍二等水兵 宇都木喜三 (茨城縣) 奮戦武勳を樹て惜しくも吳淞敵前上陸戦に散華す…… 三三三
 海軍二等水兵 浦川辰藏 (熊本縣) 奮戦武勳を奏して上海廣中路の華と散る…… 三三五

のノ部

海軍三等兵曹 野村龍平 (山口縣) 上海租界東部戦線に奮戦武勳を樹てて玉碎す…… 三六三

くノ部

海軍一等兵曹 黒畑峯松 (富山縣) 斥候長として偉勳を樹て寡兵克く大敵と戦つて上海八字橋に散る 一三三
 海軍二等航空兵曹 久下正太郎 (兵庫縣) 空爆参加十數回奮戦武勳を奏し遂に愛機と共に江南上空に散る…… 二二三
 海軍三等兵曹 久保清一 (愛媛縣) 彈雨を冒して斥候の重任を果して惜しくも上海廣中路の華と散る 三〇四
 海軍三等兵曹 栗崎美吉 (長崎縣) 奮戦二十數日、遺憾なく榴彈砲の威力を發揮して上海新公園に散華す…… 三〇六
 海軍三等機關兵曹 熊田平造 (福島縣) 勇戦奮闘して武勳を樹て惜しくも上海租界戦の華と散る…… 三〇八
 海軍一等水兵 倉田義行 (栃木縣) 捕獲隊員として敵船拿捕に赴き奮戦敢闘惜しくも艇内に斃る…… 三〇九

やノ部

海軍一等兵曹 山本儀三郎 (鳥根縣) 勇戦敢闘衆敵を撃破し惜しくも上海北四川路に倒る…… 一三五
 海軍三等兵曹 矢内春郷 (群馬縣) 奮戦死闘武勳を奏して惜しくも吳淞敵前上陸に散華す…… 三七〇

海軍三等兵曹 矢野武壽 (高知縣) 勇戦奮闘寡兵克く大敵の逆襲を撃退し上海新公園に玉碎す…… 三七三
 海軍三等兵曹 山島利登 (山口縣) 奮戦二十餘日屢々武勳を奏し惜しくも上海油公司附近に斃る…… 三七五
 海軍三等兵曹 山中良吉 (高知縣) 勇戦武勳を樹て上海租界東部戦線に玉碎す…… 三七七
 海軍三等兵曹 山内恒夫 (宮城縣) 奮戦死闘武勳を奏して惜しくも吳淞敵前上陸戦に散華す…… 三九九
 海軍三等機關兵曹 山本富記 (愛媛縣) 大敵の包圍を受け奮戦敢闘十數日惜しくも上海油公司に斃る…… 三六一
 海軍三等兵曹 山本 茂 (福岡縣) 勇戦武勳を樹て惜しくも上海兆豐路の激戦に散華す…… 三六三
 海軍一等水兵 山田安藏 (群馬縣) 決死肉彈突撃を敢行し惜しくも吳淞敵前上陸に斃る…… 三六二
 海軍一等水兵 安田善一 (岐阜縣) 寡兵克く衆敵を撃攘し遂に重傷を負ふて護國の華と散る…… 三六九
 海軍二等水兵 山下次榮 (鹿児島縣) 吳淞敵前上陸の掩護部隊として奮戦し惜しくも水雷艇上に斃る…… 三七一
 海軍二等水兵 山平武士 (鹿児島縣) 殘員二名を以て曲射砲を操作し奮戦力闘上海北部戦闘に散華す…… 三六九
 海軍二等水兵 山本次郎 (廣島縣) 勇戦奮闘其の任を完ふして上海大康社宅附近の激戦に斃る…… 三六一

まノ部

海軍 中尉 眞木定次 (東京府) 豪勇小隊長、身に重傷を負ひながら奮戦し遂に上海油公司に散華す…… 三六二
 海軍兵曹長 松本藤男 (兵庫縣) 勇戦敢闘武勳を樹て惜しくも上海滬山路に斃る…… 三六三
 海軍整備兵曹長 増山 傳 (福島縣) 壯烈渡洋爆撃に奮戦して武功を樹て惜しくも揚州東方に玉碎す…… 三六六
 海軍一等兵曹 松本文友 (大分縣) 勇戦奮闘武勳を奏し惜しくも上海油公司の激戦に散華す…… 三七一
 海軍一等兵曹 増淵茂二 (栃木縣) 奮戦肉彈となつて敵陣に突入し惜しくも吳淞敵前上陸に玉碎す…… 三四〇
 海軍三等兵曹 松尾昇 (福岡縣) 勇猛果敢身を挺して敵偵察中惜しくも上海廣中路に斃る…… 三六五

- 海軍三等兵曹 松崎義治 (高知縣) 奮戰敢闘十餘日、武勳を奏して惜しくも上海天寶路に散華す…… 三六八
 - 海軍三等兵曹 松本歳雄 (島根縣) 彈雨と敵機の空爆に曝露し奮戦武勳を樹てて玉碎す…… 三九〇
 - 海軍三等兵曹 松本武雄 (兵庫縣) 奮戦武勳を樹て惜しくも上海甯國路に散華す…… 三六一
 - 海軍三等航空兵曹 増子正行 (福島縣) 空前の壯舉渡洋爆撃に武勳を奏し愛機と共に天長附近に自爆す…… 三九四
 - 海軍一等水兵 丸尾貢 (宮崎縣) 勇敢なる内火艇員奮戦して吳淞沖に華と散る…… 三九七
 - 海軍一等水兵 牧野幾喜 (群馬縣) 奮戦功を樹て惜しくも上海滙山路の華と散る…… 三九九
 - 海軍二等水兵 前川熊義 (佐賀縣) 敵前七十米、大に機銃の威力を發揮して上海油公司に玉碎す…… 四〇三
 - 海軍二等水兵 松田郁雄 (石川縣) 奮戦二旬餘に互り武勳を奏して上海愛國女學校南方に散る…… 四〇五
 - 海軍二等水兵 松平正 (長野縣) 參戰劈頭敵の砲彈に依り惜しくも上海日本高等女學校に散華す…… 四〇七
 - 海軍二等機關兵 松延信吾 (福岡縣) 奮戦敢闘武勳を奏し惜しくも上海水電路附近に散華す…… 四〇九
 - 海軍二等機關兵 松本俊 (島根縣) 敵彈雨飛の下敢然繫留作業中惜しくも掃海艇上に斃る…… 四一三
 - 海軍二等水兵 松本秀雄 (香川縣) 孝子、赫々の武勳を樹て上海廣中路に散華す…… 四一四
- ふ / 部
- 海軍航空兵曹長 藤岡與 (愛媛縣) 累次空中戦に偉勳を樹て惜しくも上海方面上空に散華す…… 四一七
 - 海軍三等兵曹 古澤貞治 (群馬縣) 奮戦二旬、克く機銃の威力を發揮し惜しくも上海北部戦線に散る…… 四一七
 - 海軍一等水兵 藤井實 (山口縣) 奮戦十晝夜に互り武勳を樹てて上海陸戦隊本部屋上に散華す…… 四二一
 - 海軍二等水兵 古家留一 (鳥取縣) 奮戦敢闘遺愼なく陸戦隊の精華を發揮し上海戦の華と散る…… 四二六
 - 海軍二等機關兵 布施政治 (栃木縣) 奮戦敢闘武勳を奏して惜しくも上海水電路附近に散華す…… 四二九

こ / 部

- 海軍二等航空兵曹 小林義治 (山形縣) 壯烈屢々渡洋爆撃に武勳を奏し惜しくも海安鎮附近に玉碎す…… 四二七
 - 海軍三等兵曹 小西實雄 (兵庫縣) 便衣隊掃蕩に奮闘し惜しくも上海北四川路に斃る…… 四二九
 - 海軍三等兵曹 小林昇 (岡山縣) 勇戦奮闘寡兵克く大敵を制壓して惜しくも上海租界に散華す…… 四三〇
 - 海軍三等航空兵曹 小林喜八 (長野縣) 空前の壯舉渡洋爆撃に屢々武勳を樹て惜しくも揚州南方に玉碎す…… 四三〇
 - 海軍三等航空兵曹 後藤清 (山形縣) 空前の壯舉渡洋爆撃に屢々武勳を奏し惜しくも揚州南方に玉碎す…… 四三〇
 - 海軍一等水兵 小林吉藏 (北海道) 日夜上海戦線に奮戦武勳を樹て遂に開林公司陣地に斃る…… 四三三
 - 海軍一等水兵 小松政雄 (香川縣) 累戦榴彈砲の威力を發揮し惜しくも上海新公園の華と散る…… 四三六
 - 海軍二等水兵 古賀正喜 (福岡縣) 上海開戦以來各種重要任務に奮闘し惜しくも敵砲彈を受けて斃る…… 四三六
- え / 部
- 海軍航空兵曹長 江田庄三郎 (茨城縣) 壯烈火達磨となつて敵格納庫を粉砕し廣徳空襲に玉碎す…… 四三九
 - 海軍二等兵曹 江藤眞佐人 (熊本縣) 奮戦二週日克く高角砲の威力を發揮し惜しくも安宅艦上に散る…… 四三〇
 - 海軍二等整備兵曹 江連武雄 (茨城縣) 空前の壯舉渡洋爆撃に屢々武勳を奏し愛機と共に天長附近に自爆す…… 四三三
 - 海軍二等整備兵曹 遠藤利秋 (福島縣) 空前の壯舉渡洋爆撃に武勳を奏し愛機と共に天長附近に玉碎す…… 四三五
 - 海軍一等水兵 江口好作 (新潟縣) 累戦武勳を重ね惜しくも吳淞敵前上陸に散華す…… 四三八
- て / 部
- 海軍一等水兵 寺井三郎 (徳島縣) 奮戦武勳を樹て惜しくも上海北部戦線の華と散る…… 四三三
 - 海軍二等水兵 寺島秋雄 (富山縣) 上海戦線に轉戦して武勳を奏し惜しくも空爆に散華す…… 四三六

あ／＼部

- 海軍航空兵曹長 赤堀政一 (静岡縣) 空前の壯舉渡洋爆撃に武勳を樹て惜しくも揚州東方に散華す……………七
- 海軍一等兵曹 安東忠男 (大分縣) 奮戦敢闘克く战友の危機を救ひ惜しくも上海天寶路に散華す……………一四三
- 海軍二等航空兵曹 赤松保義 (栃木縣) 水上偵察機偵察員として屢々武勳を樹て惜しくも嘉定上空に散る……………三八
- 海軍二等兵曹 安藤清長 (香川縣) 勇戦敢闘遺憾なく機銃の威力を發揮し惜しくも上海油公司に散る……………三三
- 海軍三等兵曹 赤羽久夫 (群馬縣) 奮戦弾雨を冒して敵情偵察の任に……………四二
- 海軍三等航空兵曹 有川 勇 (鹿兒島縣) 嵐を衝いて渡洋爆撃を敢行し惜しくも南京空襲に散華す……………四四
- 海軍一等水兵 青木義雄 (三重縣) 奮戦武勳を奏して惜しくも上海蕪國路に斃る……………五三
- 海軍二等水兵 阿部良平 (高知縣) 開戦劈頭上海北部戦線に武勳を樹て、玉碎す……………六六
- 海軍二等水兵 青山秀雄 (香川縣) 奮戦武勳を奏し惜しくも上海軍工路の激戦に斃る……………六八
- 海軍二等機關兵 淺野九一 (愛知縣) 砲彈雨注の下、奮戦陣地を死守して上海申新紡績工場に斃る……………七〇
- 海軍二等水兵 安藤保一 (岐阜縣) 奮戦曲射砲の威力發揮に努め遂に護國の華と散る……………七三

さ／＼部

- 海軍航空兵曹長 佐藤久一 (福島縣) 壯烈屢々渡洋爆撃に武功を樹て惜しくも揚州東方上空に散華す……………八一
- 海軍航空兵曹長 佐藤 進 (岩手縣) 壯烈渡洋爆撃に屢々武勳を奏して遂に愛機と共に敵地に自爆す……………八四
- 海軍一等兵曹 佐藤 直 (宮城縣) 弾雨の下陸軍部隊揚陸掩護に奮戦し惜しくも吳淞敵前上陸戦に斃る……………八五
- 海軍一等航空兵曹 佐藤彦三郎 (福島縣) 壯烈屢々渡洋爆撃に武勳を奏し惜しくも海安鎮附近に散る……………八八
- 海軍二等航空兵曹 才田朝次郎 (福岡縣) 空前の壯舉渡洋爆撃に屢々武勳を奏し惜しくも惠州南方に玉碎す……………九三

海軍三等兵曹 酒 寄 清 (茨城縣)

敵陣地強行偵察中重傷を負ふて尙も奮戦し遂に上海東部租界に斃る……………四七

海軍三等兵曹 阪田五郎 (三重縣)

戦死せる機銃射手に代つて奮戦し遂に上海華徳路に斃る……………四九

海軍三等兵曹 坂下芳郎 (大阪府)

勇戦奮闘惜しくも上海租界に玉碎す……………四三

海軍三等兵曹 坂元時春 (宮崎縣)

戦傷分隊下士官に代つて奮戦し遂に上海廣中路北方に斃る……………四三

海軍三等兵曹 笹井聰雄 (奈良縣)

二旬餘連續奮戦して惜しくも上海愛國女學校南方に散華す……………四六

海軍一等水兵 佐保幸吉 (高知縣)

奮戦力闘遺憾なく機銃の威力を發揮し遂に上海眉州路に散華す……………五三

海軍一等機關兵 佐藤敏香 (徳島縣)

奮戦武勳を樹て惜しくも上海油公司の激戦に散華す……………五八

海軍一等水兵 澤野勇一 (岐阜縣)

奮戦敢闘武勳を奏して惜しくも上海其美路の戦闘に散華す……………五二

海軍一等機關兵 坂上茂治 (鹿兒島縣)

大敵の包圍を受け悪戦苦闘十數日惜しくも上海油公司に斃る……………五三

海軍二等主計兵 齋木基弘 (東京府)

参戦劈頭第一線に活躍中惜しくも敵砲弾に斃る……………五五

海軍二等水兵 目 八十吉 (大阪府)

陸戦隊員として上陸を寸前に控へ奮戦惜しくも艦上に斃る……………六六

海軍二等水兵 寒川菊夫 (香川縣)

彈雨の下、奮戦敢闘武勳を樹て惜しくも上海廣中路の激戦に散る……………六八

海軍二等水兵 佐野今朝治 (宮城縣)

奮戦武勳を奏し惜しくも吳淞敵前上陸に散華す……………六八〇

海軍二等水兵 佐々木嘉藏 (岩手縣)

奮戦功を樹て、上海油公司附近に於て負傷し遂に護國の華と散る……………六八三

き／＼部

- 海軍一等兵曹 清留清熊 (鹿兒島縣) 苦戦中の友軍を赴援し奮戦功を樹て遂に上海滙山路に斃る……………一五二
- 海軍一等兵曹 菊地龜治 (宮城縣) 果戦武勳を奏し惜しくも吳淞敵前上陸戦に斃る……………一五三
- 海軍三等兵曹 北浦 武 (和歌山縣) 勇猛果敢敵陣地の砲撃に奮戦し惜しくも艦上に斃る……………一八八

海軍一等水兵 鬼頭貫一 (愛知縣) 奮戦克く曲射砲の威力を發揮し上海東部戦線に玉碎す…………… 四五五
 海軍一等水兵 北島竹次郎 (岩手縣) 彈雨の下果次激戦を重ね力戦敢闘遂に上海籍明に斃る…………… 四五七
 海軍一等水兵 岸田猛 (兵庫縣) 勇戦功を樹て上海租界大康社宅附近の激戦に散華す…………… 五五〇

ゆノ部

海軍機關兵曹長 湯淺安司 (千葉縣) 勇敢なる豫備彈藥隊員奮戦武勳を奏し惜しくも上海東部租界戦に斃る…………… 八

みノ部

海軍二等航空兵曹 宮崎三郎 (北海道) 水上偵察機勇敢にも敵戦闘機と交戦し遂に敵陣地に玉碎す…………… 三三六
 海軍三等兵曹 三田清一 (京都府) 奮戦武勳を奏し惜しくも上海廣中路北方の激戦に散華す…………… 四三〇
 海軍三等兵曹 三谷俊明 (香川縣) 敵彈雨飛の下友軍救援に赴き奮戦武勳を樹て玉碎す…………… 四三三
 海軍三等兵曹 三木重顯 (徳島縣) 惡戦苦闘敵大部隊の猛襲を阻止し遂に上海租界戦の華と散る…………… 四三五
 海軍一等水兵 養島貞夫 (北海道) 奮戦武勳を奏し惜しくも吳淞敵前上陸に散華す…………… 五五三
 海軍一等水兵 三阪種男 (廣島縣) 決死彈雨を冒して敵の橋梁爆破を防止し味方の作戦を有利に導く…………… 五五五
 海軍二等水兵 水戸喜代雄 (福島縣) 決死肉弾突撃を敢行し惜しくも吳淞上陸戦に斃る…………… 六六五
 海軍二等機關兵 三好明 (徳島縣) 勇敢彈藥補給運搬の重任を完遂し遂に上海租界戦の華と散る…………… 六六八
 海軍二等水兵 三田村駒治 (岐阜縣) 決死彈雨を冒して敵の橋梁爆破を阻止し味方の作戦を有利に導く…………… 六九〇
 海軍 中尉 城増一 (長崎縣) 豪勇小隊長奮戦敵陣に突入し惜しくも上海水電路に散華す…………… 三二四
 海軍兵曹長 清水金治 (山口縣) 奮戦敢闘負傷再度に及び惜しくも上海眉州路に散華す…………… 九〇

海軍三等兵曹 品川定治 (山口縣) 友軍救援に赴き奮戦功を樹て惜しくも上海租界に散華す…………… 四三七
 海軍三等兵曹 白石敏男 (山口縣) 猛火の中に通信任務に奮闘し惜しくも上海六三園の華と散る…………… 四三九
 海軍三等兵曹 白田勝次 (茨城縣) 屢々武功を樹て惜しくも吳淞敵前上陸の激戦に散華す…………… 四四三
 海軍三等兵曹 島崎義治 (高知縣) 大敵に包圍せられ奮戦力闘十數日間武勳を樹て上海油公司に散る…………… 四四五
 海軍二等機關兵 柴田今朝治 (宮崎縣) 勇戦武勳を奏し惜しくも上海廣中路陣地に斃る…………… 六九五
 海軍二等機關兵 白石保一 (愛媛縣) 上海東部租界の激戦に奮戦し惜しくも敵の空爆に玉碎す…………… 六九五

ひノ部

海軍兵曹長 平子銀之助 (福島縣) 一ヶ月に亙り奮戦を続け遂に上海油公司北方に散る…………… 六九
 海軍一等兵曹 樋口榮四郎 (山形縣) 累戦武勳を奏し惜しくも吳淞敵前上陸戦に斃る…………… 一五五
 海軍二等兵曹 平山順一 (千葉縣) 歴戦勳功を樹て惜しくも吳淞敵前上陸戦に斃る…………… 三三六
 海軍三等兵曹 樋渡勝次 (佐賀縣) 挺身彈雨を冒して土囊陣地修復中惜しくも上海廣中路附近に斃る…………… 四七
 海軍一等水兵 東惣一 (和歌山縣) 奮戦克く曲射砲の威力を發揮し上海東部戦線に玉碎す…………… 五五七
 海軍一等水兵 東晋介 (福岡縣) 吳淞敵前上陸の掩護部隊として奮戦し重傷を負ふて水雷艇上に倒る…………… 五五九

もノ部

海軍航空特務少尉 森清磨 (長崎縣) 空前の壯學渡洋爆撃に世界の耳目を聳動し惜しくも揚州東方に散る…………… 三五
 海軍一等航空兵曹 毛利健榮 (富山縣) 壯烈屢々渡洋爆撃に武勳を奏し惜しくも海鎮附近に玉碎す…………… 一八八
 海軍三等機關兵曹 望月幸一 (靜岡縣) 奮戦敢闘便衣隊掃蕩に活躍中惜しくも上海東部租界に斃る…………… 四九九
 海軍三等兵曹 森井優也 (茨城縣) 勇猛果敢敵弾を冒し斥候任務に奮闘中上海閘路北方に斃る…………… 四五一

海軍三等兵曹 森 田 直 (高知縣)	奮戦敢闘十數日武勳を奏して惜しくも上海西體育會路陣地に斃る 四三
海軍三等兵曹 仙田 耕藏 (愛知縣)	苦戦中の友軍に應援し奮戦陣地を死守して惜しくも上海華徳路に斃る 四五
海軍一等水兵 齊 田 幸 雄 (山梨縣)	奮戦武勳を奏して惜しくも吳淞敵前上陸に斃る 四六
海軍二等水兵 關 勝 (茨城縣)	砲煙彈雨の中奮戦十數日武勳を奏して上海水電路附近に斃る 四八
海軍二等水兵 關 根 義 久 (群馬縣)	重傷を負ひ堅忍尙ほ彈藥補給に奮闘して上海齊甯路に斃る 五〇
海軍二等水兵 關 口 正 吉 (長野縣)	彈雨の下奮戦十數日武勳を奏して惜しくも上海水電路附近に斃る 五三
海軍一等整備兵曹 鈴 木 幸 三 (静岡縣)	空前の壯舉渡洋爆撃に屢々武勳を樹て惜しくも揚州北方に散華す 五六
海軍一等水兵 鈴 木 金 之 助 (神奈川縣)	果戦武勳を樹て惜しくも吳淞敵前上陸に斃る 五五
海軍二等水兵 鈴 木 泉 (千葉縣)	彈雨の下揚陸部隊掩護に奮戦し惜しくも敵前上陸戦に散る 五五

忠勇列傳海軍之部 第貳卷 索引 (終)

支那事變 忠勇列傳 海軍之部 第貳卷

恩賜 財團 軍 人 援 護 會

准士官以上之部

海軍少佐從六位勳五等功四級 鎌田 喜一

奮戦敢闘二旬餘偉勳を奏して惜しくも上海愛國女學校附近に斃る

氏は徳島縣板野郡鳴門町土佐泊浦の人にして父を福次郎、母をキヨシといひ明治四十一年十月十日に生れ未だ獨身であつた。性温厚篤實而も剛膽にして堅忍不拔の志厚く一念發する所之を貫徹せざれば止まざる氣概があつた。幼より水泳に長じ會て中學時代には有名なる鳴戸海峡の渦巻く潮流を横斷して世人を驚かしたとの事である。大正十一年三月鳴戸東小學校を卒業して縣立撫養中學校に入學し昭和二年三月同校を優秀の成績にて卒業し同年四月海軍兵學校に入校し同五年十一月同校を卒業と共に海軍少尉候補生を命ぜられ同七年四月海軍少尉に任官し果進して同十一年十二月海軍大尉に任じ正七位に叙せられた。此の間軍艦日向及出雲に乘組み同十一年十一月軍艦鬼怒分隊長に補せられた。尙ほ氏は昭和六年乃至九年事變の功に依り勳六等瑞寶章を賜はつた。

昭和十二年七月北支事變勃發以來中支方面の風雲亦急を告げ殊に上海に於ける日支間の情勢は益々惡化し當に一觸即發の危機を孕むに至つた。そこで氏の乘艦鬼怒は海軍特別陸戰隊輸送の爲め八月十日佐世保を出發し翌十一日上海に到着し

准士官以上之部

直ちに輸送陸戦隊を揚陸の上翌十二日吳淞沖に下江し警備の任に就いた。八月十三日上海に於て日支開戦となるや愈々江上警備を嚴にしてゐたが翌十四日には早くも敵機數機が所屬戰隊の錨地上空に襲來し連續二回に互り我が戰隊に對し空爆を敢行したが、各艦必死の防戦に依り其の一機を不時著せしめて之を撃攘した。此の日夕刻には吳淞砲臺、市政府及吳淞鎮等の敵陣地を砲撃して多大の戦果を収め午後十時半錨泊するや間もなく所屬戰隊より聯合陸戦隊を揚陸する事となり、



氏は選ばれて同陸戦隊に編入せられ岡野大隊長指揮の下に中隊長として乗員歡呼の裡に異常の決意を其の眉宇に閃かし驅逐艦に分乗し肅々として閘の黃浦江を週航し十五日午前二時十五分日本郵船碼頭に上陸し陸戦隊本部に入り豫備隊となり租界の警備及便衣隊の掃蕩に活躍奮闘を續けてゐた。十六日早朝廣中路方面の我が軍苦戦の報に接するや、所屬大隊は北部地區第一線に加入す可き命に接し直ちに廣中路、水電路間の最前線に進出し僅々百數十米の近距離を隔てて敵の大部隊と對峙し茲に激烈なる戦鬪を展開するに至つた。此の時氏の中隊は大隊命令に基き、雨飛する敵弾を冒して廣中路南方に陣地を構築し粵東中學、愛國女學校及特志大學方面に於ける我に數十倍の敵と對戦し勇猛果敢敵に猛撃を加へて之を撃退し以て友軍の危急を救援した。翌十七日所屬大隊は越野大隊と其の陣地を交代し、愛國女學校の南方に陣地を構へ同校に占據せる頑敵と約百米の近距離に對峙して戦鬪を交へてゐたが十八日夜半の如きは前後三回に互り敵の大部隊が怒濤の如く襲撃し來た。されど中隊長の適切なる指揮と部下隊員の果敢なる奮戦と相俟つて其都度敵に殲滅的打撃を與へて之を撃退した。爾來二十數日間に互り氏は同陣地の守備に當り、降り布く彈雨の中常に陣頭に立つて部下を指揮督勵し雲霞の

如き敵大軍の猛攻撃を支へて一步も譲らず勇戰奮闘敵の頑強なる抵抗を排除し克く陣地防禦の重任を果し後日同女學校の敵陣地占領の素因を築いたのであつた。

斯くて九月十日午前六時四十分氏は傳令堀口三水を從へ戦線の視察に當つてゐたが巡視中憎や敵の迫撃砲の一弾が陣地中央に落下し萬雷耳を劈く爆音と共に其の炸裂弾片は氏及堀口傳令に命中し、氏は頸部、左上膊部、左臀部及大腿部に重傷を負ひ其の場に打ち倒れた。部下直ちに駆け寄つて氏を室戸海軍病院に收容し手厚き治療を施したが其の甲斐もなく翌十一日午前八時十八分遂に名譽の戦死を遂げたのであつた。併し氏等の奮戦と尊き犠牲に依り其後幾何ならずして陸戦隊は寡兵克く敵を北部戦線外に撃破し以て全上海の安全を確保し得たのであつた。陸戦隊は開戦以來の赫赫たる武勳に依り時の第三艦隊司令長官より譽の感状を授與せられた、是れ全く氏等勇士の奮戦に俟つ所大なりといふ可きである。

氏は剛勇にして寡言、常に熾烈なる責任觀念及烈々たる氣魄と堅忍不拔の意志を以て其の職責を遂行すると共に率先躬行部下と其の苦樂を俱にして其の尊信を受け眞に有爲の青年將校として嚆望されてゐた。今次上海戦に参加するや聯合陸戦隊中隊長として上海に上陸し間もなく北部地區の第一線に進出し爾來二十餘日砲煙彈雨の中千辛萬苦に堪へ勇戰健闘克く中隊長たる負託の重責を完遂し以て我が軍戦勝に多大に寄與貢獻をなした。斯くの如きは眞に生死を超越し獻身奉公以て八紘一字の皇謨を翼賛し奉らんとする純忠赤誠の發露にして天晴れ指揮官の龜鑑とす可きである。開戦間もなく氏の如き忠勇義烈の士を喪ひ、今や其の颯爽たる風貌に接するを得ないことは洵に痛惜哀悼の極みである。併し其の赫赫たる武勳は永へに海軍戦史を照らし芳名は武人の華として千載に薫りて埋れず、不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬の的たる可く、神靈尙も皇國を護り又一家の前途に尊き加護照覽を垂れ給ふことであらう。

氏は戦死の日海軍少佐に任じ從六位に叙せられ次で拔群破格の功四級金鷄勳章並に勳五等雙光旭日章を賜はつた。

(恩地)

海軍少佐從六位勳五等功五級 上敷領 清

壯烈火達磨となつて敵格納庫を粉碎し廣徳空襲に玉碎す

氏は鹿兒島縣掛宿郡掛宿町の人にして亡父を領五郎、母を乙松といひ明治四十一年四月五日に生れ妻を節といふ。性沈著剛膽、頭腦明晰にして事に當り不屈不撓の氣概を有し眞摯なる勤勉家で小學校時代から克く勉學し終始首席を占めて模範生であつた。大正十一年三月柳田小學校高等科第一學年を修了と共に縣立指宿中學校に入學し昭和二年三月同校を卒業して海軍兵學校に入學し同五年十一月同校を卒業して海軍少尉候補生となり同七年四月海軍少尉に任ぜられた。任官後軍艦迅鯨及出雲等に勤務し海軍練習航空隊飛行學生教程を修了して大村海軍航空隊に勤務中前回の上海事變に参加して武勳を樹て勳六等瑞寶章を賜はり累進して同十一年十二月海軍大尉に任ぜられ正七位に叙せられた。此の間霞ヶ浦海軍航空隊附兼教官、軍艦加賀乗組を経て横須賀海軍航空隊分隊長兼教官に補せられた。

昭和十二年七月北支に事變勃發し其の餘波は中支方面にも波及し殊に上海に於ける彼我の情勢は日一日と惡化し八月十三日遂に上海に於て日支間に戦闘開始となるや間もなく我が海軍航空隊は一齊に起ち上り一舉に敵空軍を撃破して一大打撃を與へて赫々の武勳を奏し爾來息つく暇もなく敵航空兵力の各重要據點を強襲して巨彈を浴びせ敵の心膽を塞からしめてゐた。併し氏は未だ一回も出陣の機會を得ず切齒扼腕、骨肉の嘆を漏らしてゐたが八月十九日附で軍艦加賀分隊長に補せられた。當時同艦は上海方面前進根據地にゐたが突然燃料糧食等補給のため同月二十六日佐世保に入港したので同日同艦に乗艦し翌二十七日勇躍同地を出港し上海方面に向つた。

翌八月二十八日に至るや崑山鐵橋爆撃の命が下された。氏は攻撃隊指揮官として艦上攻撃機を操縦し偵察員江田一空曹を同乗せしめ部下各機を率ゐて午前七時二十八分勇躍母艦を出發し一路目的地に向つて轟進した。快翔を續くる事約一時

間、午前八時二十分目指す鐵橋の上空に達するや指揮官機を先頭に各機は次ぎ／＼に巨彈を投下した。投下爆弾は四發命中して橋梁を大破し敵の輸送路を完全に切斷した。氏は初陣に於て多大の戦果を収め意氣揚々鵬翼を連ねて吳淞及寶山上空の直衛に任じ同十時十二分全機無事凱歌を擧げて歸艦した。

翌二十九日廣徳飛行場爆撃及長興、蘇州偵察の命を受け氏は再び攻撃機隊指揮官として偵察員江田一空曹と同乗し午後三時二十分隊機を率ゐて勇躍母艦を進發した。當日は快晴の飛行日和で松江及長興の敵陣地を眼下に瞰下しつゝ快翔を續



け、午後五時十分頃廣徳飛行場東方に達するや氏は此の儘同じ方向から遂次に攻撃するのは不利である事を慮り隊を二手に分ち場内西側のガソリン庫を攻撃目標とし氏の直率する三機は北方から第二小隊の三機は野村航空兵曹長が之を率ゐて南方から夫々同時に攻撃するやうに命じた。そこで氏は高度三千二百米から突撃を下命し氏の機は自ら陣頭に立つて急降下爆撃の態勢に轉じ目標に向つて轟進すれば後續列機も之に遅れじと續いて殺到する。之を知つた敵の高角砲陣地からは一齊に防空砲火を浴びせて来る。敵弾は機の周圍に隙間なく炸裂し彈丸の幕が我が行手を遮る。氏は此の彈幕の中にも精細に飛行場を偵察すると十數機の飛行機が竝んでゐるのを發見したので格納庫内にも未だ多數の飛行機があるに相違ないと判断し咄嗟に目標を格納庫に変更し之に轟進せんとする利那高度千八百米附近で指揮官機に敵弾が命中した、其の瞬間機は忽ち火焰に包まれて火達磨となつた。氏はもはや是迄と觀念し火達磨となつた愛機を驅つて爆弾を抱いた儘、格納庫目掛けて突入自爆した。萬雷の如き爆音と共に該格納庫は木つ葉微塵に粉碎し氏等兩勇士は壯烈なる戦死を遂げた。併し

之を見た列機は悲憤の涙を打ち拂ひ復仇の念に燃え指揮官の意圖を體して尙も格納庫を爆破しガソリン庫に火災を起させ更に場内にあつた重爆撃機一機を粉碎して敵に多大の損害を與へ尙ほ残つた爆弾で松江及寶山を爆撃し午後七時十八分悲しき飛行の後母艦に歸還したのであつた。

氏は沈著勇敢にして平素より義勇奉公の念極めて厚く常に一身を顧ず黙々として職務を遂行し率先躬行部下を率ひ有爲の飛行將校として上下の信望厚かつた。氏は豪膽の一面、又常に兩親及二人の妹に對しては温情掬す可きものがあつて眞に親を思ひ妹思ひの士であつた。又其の出陣前妻宛書信の一節に「いよく出發するに臨み更に一言繰り返す武人の妻として清く正しく生活せよ」と記して其の妻を訓戒し更に親戚宛書信にも「花と散り玉と碎けて武夫は、すめらみくくの安けきを希ふ」との辭世を記し其の決死報國の堅き決意を披瀝してゐる。今次事變に際會し前進根據地に進出するや直ちに艦上攻撃機隊指揮官として部下隊機を率ひて崑山鐵橋を猛爆し敵の重要交通路を遮斷し次で廣徳飛行場の爆撃を敢行するや敵機を機體に受けて火災を起し爆弾を抱いて格納庫に突入して之を爆破し愛機と共に肉弾となつて玉碎した。壯絶悲壯斯くの如きは眞に生死を超越し獻身奉公盡忠報國の大信念を具現したるものにして天晴れ空軍將兵の鑑とす可きである。參戰劈頭而も爆撃參加僅かに二回にして、氏の如き忠勇義烈の空軍將校を喪つたことは洵に痛惜哀悼の極みである。されど其の壯烈鬼神を泣かしむる行動は我が海軍空戰の壯舉にして其の驍勇は正に中外の耳目を聳動した。武人としては最適の死所を得たるものと謂ふ可く以て後進を振起せしむるに足る。氏今や瞑すと雖も其の忠烈偉勳は燦として永へに空軍戰史を照らし芳名は千載に薫りて埋れず、不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬の的たる可く、氏死して亦餘榮ありと謂ふ可きである。而して其の神靈は尙も皇國を護り又一家の前途に尊き加護佑助を垂れ給ふことであらう。

氏は戰死の日海軍少佐に任じ從六位に叙せられ次で功五級金鷄勳章並に勳五等雙光旭日章を賜はつた。(恩地)

海軍少佐從六位勳五等功四級 吉田和雄

壯烈屢、渡洋爆撃に武勳を奏し惜しくも揚州爆撃戰に散華す

氏は東京市赤坂區丹後町の人にして亡父を健介、母をタケといひ明治四十年五月二日に生れ未だ獨身であつた。性謙嚴溫和にして人と争ふ事なく不言實行の努力家であつた。又中學校時代より柔劍道に長じ心身共に圓滿に發達し眞に武人らしき面影があつた。大正九年三月赤坂小學校を卒業し同年四月府立第一中學校に入學し同十三年三月同校第四學年を修了して同年四月海軍兵學校に入學、昭和二年三月同校卒業と共に少尉候補生となり練習航海を終へて同年十二月長門乗組となり同三年十月海軍少尉に任ぜられ軍艦神通、加古等に乘組み同五年十二月海軍航空隊飛行學生となり後又海軍練習航空隊高等科學生教程を卒業し果進して同八年十一月海軍大尉に任ぜられ正七位に叙せられた。此の間大村、霞ヶ浦、館山、第十一航空隊等に勤務し同十一年十一月館山海軍航空隊分隊長に同十二年七月木更津海軍航空隊分隊長に補せられた。

昭和十二年七月北支に事變勃發するや氏は聯合航空隊に編入せられ第三艦隊附屬となり八月上旬前進基地に進出し、出動準備を整へ待機してゐたが八月十三日遂に上海に於て日支間に戰鬪開始となり翌十四日より敵飛行機は屢々上海上空に飛來し我が陸戰隊本部及戰線部隊、旗艦出雲其の他の海軍艦艇等は勿論各種重要建物商業地區等に對し所嫌はず自爆撃を行ひ自國民及第三國民等幾多無辜の人々を殺傷するの暴舉を敢てし全上海市民の怨嗟の的となつた。當時颯風は上海沖に停滯し海上風浪高く何時鎮まるとも測り知れざる光景に全海軍航空隊は陸戰隊の苦戰と敵機の跳梁を耳にして義憤に燃えつつ空しく天を仰いで心なき暗雲の徂徠を眺めて脾肉の歎を漏らしてゐたが同日午後に至り遂に待望の進撃命令が發せられた。もはや荒天何のその、氏等決死の海軍航空隊將兵は感奮興起猛鷲の羽搏き物凄く上海沖に居た艦船水上機は眞先に激浪を蹴つて離水し上海附近の敵飛行場を襲つて大格納庫を爆破し又艦上及陸上攻撃機隊は嵐を衝いて長驅渡洋爆撃を敢

行し敵航空兵力の重要な各據點に對し有效なる巨弾を浴びせ茲に支那空軍殲滅の幕は切つて落された。

翌十五日氏は南京爆撃の命を受け陸上攻撃機隊長として平本少佐指揮の下に午前九時勇躍九州方面前進基地を進發し帽を振る戦友の姿に感激の眸を輝かせつつ支那海の怒濤を越え一路支那大陸へと轟進した。數日來の颯風は猶ほ収まらず翼も折れん許りの難飛行を続け聽て支那大陸の上空にさしかかった。風雨は益々激しく密雲のため屢々僚機を見失ふ程であ



つたが其の内雲の間から湖水が見えた太湖の上空に達せるもの如く其の途端に密雲の中から突如敵戦闘機數機が現れた。氏の機は隊長機として陣頭に立ち部下各機を率ゐて敵に肉薄し忽ち壯烈なる空中戦を演じ敵機一機を湖中に撃墜し他の一機を湖岸に不時著せしめた。初陣の此の戦果に我は勇氣百倍して悠々長江に沿ひ高度二百米乃至四百米の編隊で南京に向つて轟進した。間もなく南京胡宮飛行場が雲間から遙か彼方に現れた。「爆撃用意」の號令と共に機内は緊張し午後三時十五分南京上空に達し高度五百米の編隊にて北方より侵入した。折柄起る敵の地上防空砲火を物ともせず一機又一機密雲

を破つて急降下し胡宮飛行場に巨弾の雨を浴びせ大型格納庫一棟竝に庫外飛行機數機を爆破した。爆撃終つて飛び上つて來ると小癩にも敵戦闘機七、八機が我に肉薄して來た。もとより空中戦闘は我の希ふ所茲に南京上空に再び攻撃機對戦闘機の壯烈なる空中戦が始まつた。見敵必勝の我が海軍魂は火と燃えさかつて忽ち敵機三機を撃墜したが此の時氏の搭乗機は不幸敵弾を受け片側の發動機は遂に使用不可能となつた。されど沈著剛毅の氏は克く部下を指揮激勵しつつ右側發動機のみで再び歸途に就き暗夜逆巻く怒濤の大洋を翔破して遂に基地に歸著した。是れ實に氏の航空技術の優秀と適時的確なる處斷に依る所大なりと云ふ可きである。續いて翌十六日には蘇州飛行場を十七日には淮陰飛行場を十九日には再び南京を空襲して同地軍官學校を爆撃する等連日に互り渡洋爆撃を敢行し其の都度熾烈なる敵の防空砲火を冒し勇戦取闘敵に多大の損害を與へ其の心膽を寒からしめた。

越えて八月二十一日氏は曾我少佐の指揮する陸上攻撃機隊に屬し揚州飛行場爆撃の命を受け攻撃機隊長として僚隊入佐隊と共に午前二時二十分勇躍基地を進發し皎々たる満月を銀翼に浴び雲海を下に見つつ一路東支那海を翔破して支那大陸に轟進した。午前四時四十五分頃大陸上空に達したが折柄月は没し暗黒と雲霧のため氏の隊は何時しか入佐隊と分離し其の後連絡は全く杜絶し杳として其の消息を知るに由なかつた。入佐隊は雲霧のため揚州を發見する能はず浦口爆撃を執行しての歸途午前六時十五分過時正に日出に近く漸く地物を辨明し得るに至り揚州飛行場を發見したが既に吉田隊は同飛行場を爆撃したるものの如く場内には約十機の敵機二列にあり其の中央數箇所に大爆弾の彈痕と三機は盛に炎焼し他は大破せるを認めた。之れ吉田隊の奮戦の戦果なること明かである。其後地上指揮官との連絡亦斷絶し基地に於ける隊員一同は氏等の成功を祈りつつ聊か憂慮を感じる中入佐隊機は順次歸るも氏の率ゐる隊は正午に至るも一機も歸還せず前記入佐隊の行動より考察するに氏の隊は目さず揚州飛行場を爆撃し多大の戦果を収めたが多數の敵戦闘機と猛烈なる空中戦を演じ孤軍奮闘敵弾のため火災を起し惜しくも全機遂に敵地に墜落の運命を辿つて氏以下隊員悉く壯烈なる戦死を遂げたものと認定せられた。併し氏等の緒戦に於ける奮戦と尊き犠牲は我が空軍の制空權掌握の端緒を拓き爾後の戦闘を有利に導くを得たのであつた。其後所屬航空隊は其の赫々の戦果に依り時の第三艦隊司令長官より譽の感状を授與せられた之れ全く氏等の奮戦に俟つ所大なりと謂ふ可きである。

氏は人格識量共に卓越し而も人をして愛著を感じしむる人で曾て館山航空隊分隊長たりし當時屢々晝夜に互る數千軒の洋上大飛行を率先敢行し多數の部下搭乗員の養成訓練に渾身の努力を傾注し我が海軍航空界の至寶として上下の信望を一

身に集めてゐた眞に前途有爲の飛行將校であつた。今次聖戦に従ふや陸上攻撃機隊長として屢々荒天を衝いて支那海の怒濤千餘軒を翔破して支那大陸に往復し遠く敵の首都南京を襲ふ事二回又蘇州、淮陰飛行場を空襲する等實に我が航空戦史上劃期的渡洋爆撃の大壯舉を敢行し更に空戦を演じて敵機多數を撃墜し敵に絶大の損害を與へ以て我が海軍機の威力を遺憾なく發揮して世界の耳目を聳動し惜しくも揚州上空の華と散つた。斯くの如きは眞に生死を超越し獻身奉公以て皇國を扶翼し奉らんとする純忠赤誠の發露にして天晴れ皇國軍人の龜鑑とす可きである。參戰僅かに一週日にして氏の如き忠烈有爲の青年空軍將校を喪つた事は洵に國家のため痛惜の極みである。されど其の行動の壯烈なるに至りては海軍歴史ありてより空前の壯舉にして武人の一生に選む可き死所としては、之に優るものなく以て一世を激勵し後進を感奮せしむるに足る。氏今や瞑すと雖も其の赫々たる武勳は燦として永へに空軍戦史に輝き芳名は千古に薫りて埋れず、不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬の的たる可く、氏死して亦餘榮ありと謂ふ可きである。而して其の神靈は尙も皇國を護り又一家一門の前途に尊き加護照覽を垂れ給ふことであらう。

尙ほ氏の母は昭和十三年八月三十一日海軍省に出頭し「亡き俸の志として僅かですが海軍航空機製作資金に加へて下さい」と金參千圓を獻納したとの事、其の盡忠報國の赤誠は眞に感激に堪へざるものがある。嗚呼此の母にして此の子ありと謂ふ可きである。

氏は戦死の日海軍少佐に任じ従六位に叙せられ次で拔群破格の功四級金鷄勳章並に勳五等雙光旭日章を賜はつた。

(恩地)

海軍大尉正七位勳六等功四級 西脇英男

壯烈火焰に包まれ敵陣に突入自爆して江灣鎮に玉碎す

氏は名古屋市昭和區小針町の人にして父を幾三郎、母をみつと云ひ明治四十四年十月十一日に生れ未だ獨身であつた。性明朗豁達にして堅忍不拔の氣魄に富み、運動好きの人で體軀偉大心身共に鍛鍊せられ在學中は級中第一の運動家であつた。又孝心深く兄弟仲睦しく友情に厚い人であつた。大正十三年三月同市松枝小學校尋常科を昭和四年三月縣立熱田中學を卒業して海軍兵學校に入校し同七年十一月同校を卒業と共に少尉候補生となり同九年三月海軍少尉に任ぜられた。此の間軍艦榛名、名取及多摩等に乘組み同九年十一月海軍練習航空隊飛行學生を命ぜられ同十年七月同學生教程を卒業し館山海軍航空隊附となり同年十月軍艦龍嶽乗組に轉じ同年十一月海軍中尉に進み従七位に叙せられた。

昭和十二年八月十三日上海に於て日支間に戰鬪開始となるや、翌十四日より敵飛行機は屢々上海上空に飛來し我陸戰隊本部、戰線部隊、旗艦出雲其他の海軍艦艇等は勿論各種重要建物又は商業地區旅館等に對し所嫌はず自爆撃を行ひ以て自國民及第三國民等幾多無辜の人々を殺傷するの暴舉を敢てし全上海市民怨嗟の的となつた。恰も其の當時は支那海を北上中の颶風があつたので揚子江沖合某根據地に待機中の我が海軍航空隊は陸戰隊の惡戰苦闘と敵機の跳梁を耳にし義憤に燃えつつ脾肉の嘆を漏らしてゐたが、同日午後に至り待望の進撃命令が發せられた。もはや荒天何のその、氏等決死の海軍航空隊將兵は感奮興起猛鷲の羽搏き物凄く上海沖に碇泊してゐた艦載水上機隊は眞先に激浪を蹴つて離水し上海附近の敵飛行場を襲つて其の大格納庫を爆破したのを手始めに陸上及艦上攻撃機隊は嵐を衝いて長驅渡洋爆撃を敢行し敵航空兵力の各重要據點に有效なる巨弾を浴びせ茲に支那空軍殲滅の幕は切つて落された。

八月十六日嘉興飛行場爆撃の命が下された。氏は淺田少佐の指揮する艦上攻撃機小隊長として偵察員岡田航空兵曹長と

同乗し、午前四時二十分艦員一同の激勦の辭に送られて母艦を進發し勇躍同地爆撃の壯途に上つた。數日來の颯風の餘波未だ収まらず、暗夜にもそれと知られる淡々たる密雲、加ふるに瀧の如き豪雨さへ加はつて前方小隊の燈火すら微かに螢の光のやうに明滅して之を見失ふ様になる。氏等攻撃機隊は尙も猛雨を衝いて一路目的地に向つて驚進した。漸くにして目指す嘉興上空に達した。飛行場らしいものは見當らぬ。時は未だ日出約一時間程前で下界はまだ闇に包まれて靜かに眠つてゐる。指揮官は南の方を捜して見る事に決心し豪雨の中に突進した。午前五時五十分遂に前方小隊を見失つた。氏は小隊機を率ひ尙ほ搜索飛行を続けてゐたが午前六時十四分雲の晴れ間から整地した飛行場らしいものが氏の眼にちらと映じた。しかし高度が高くて判然せず、よしと許りに忽ち單機々首を下に向けてぐつと高度を下げた小隊列機も之に續いた。雨に曇つた眼鏡を外して見ると果して目指す飛行場で方形をなし、其の側に約二十機の敵機が竝んで殆んど全部が「プロペラー」を回轉してゐる。初めて見た敵機の姿に胸を躍らせ尙ほよく注視すると一機の戦闘機は既に離陸を始めてゐる。若し此の戦闘機を上昇せしめたら、續く味方の邪魔になる蹴散らすは今だと、列機に爆撃隊形をとる事を命じ、氏の機は恰も獲物を狙ふ隼の如く急降下爆撃に移つた。先づ地上敵機に精確な必中の第一弾を投下し急降下の餘勢を驅つて地上すれすれに降下し逃げ惑ふ敵戦闘機を急追し之に機銃の猛射を浴びせて其の一機を撃墜炎上せしめた。氏は之でよしとぐつと機首を引上げた。此時敵の地上防空陣地から一齊に高角砲機銃の猛射を浴びせかけて來た。氏は敢然反轉して敵に向ひ機銃掃射を加へたので、敵陣地は此の勇猛果敢の行動に俄然混亂に陥り蜘蛛の子を散らす如く持揚を離れて逃げ去つ



る。若し此の戦闘機を上昇せしめたら、續く味方の邪魔になる蹴散らすは今だと、列機に爆撃隊形をとる事を命じ、氏の機は恰も獲物を狙ふ隼の如く急降下爆撃に移つた。先づ地上敵機に精確な必中の第一弾を投下し急降下の餘勢を驅つて地上すれすれに降下し逃げ惑ふ敵戦闘機を急追し之に機銃の猛射を浴びせて其の一機を撃墜炎上せしめた。氏は之でよしとぐつと機首を引上げた。此時敵の地上防空陣地から一齊に高角砲機銃の猛射を浴びせかけて來た。氏は敢然反轉して敵に向ひ機銃掃射を加へたので、敵陣地は此の勇猛果敢の行動に俄然混亂に陥り蜘蛛の子を散らす如く持揚を離れて逃げ去つ

た。斯くて漂ふ雲と暗がり透過して飛行場を見渡すと、續く二、三番機の爆撃で地上の敵機や格納庫は粉碎され敵の死屍は累々として横たはり飛行場は濛々たる爆煙を擧げ無慚！翼をもがれ脚の折れた敵機が散らばつて折柄の小雨に濡れてゐる其數は五機を下らぬ、氏の機は悠々上昇した。岡田兵曹長は直ちに飛行場の位置を無電で友隊に知らせ飛行場を引き揚げた。折柄東の空は漸くほの／＼と明け初めてゐた雲海の中にさまよつてゐた吉澤小隊も氏の隊の爆撃閃光に依つて始めて飛行場の位置を知り續々と馳せ參じて爆弾の雨を降らせ多大の戦果を收め午前九時全機凱歌を擧げて無事歸艦した。

其後氏は尙ほ機翼を休む暇もなく連日拂曉から夜間に互り一日數回多きは七回に及ぶ空襲を敢行し、通州、蘇州及杭州飛行場又は閩北江灣鎮及吳淞一帶に互る敵陣地等を息をも繼かず亂潰しに爆撃し我が作戦上多大の効果を擧げた。越えて同月二十七日午後二時氏の指揮する艦上攻撃隊に江灣鎮時計臺爆撃の命が下された。氏は岡田兵曹長を同乗せしめて午後三時五十分勇躍甲板を躍つて母艦を進發した。此の日天氣は晴朗にして絶好の飛行日和であつた。快翔一時間餘聽て海上空に達し各機は豫定の如く江灣鎮時計臺の第一次爆撃を敢行して敵の心膽を奪ひ午後四時半爆撃終つて江灣鎮、大場鎮、南翔、嘉定、羅店鎮、廟行鎮及芦上鎮等の敵陣地を偵察し、大場鎮附近で裝甲自動車及敵密集部隊を發見して之に銃撃を加へ勇敢にも再び右時計臺を爆撃す可く午後五時二十分高空から準の如く時計臺目掛けて急降下爆撃し一弾は時計臺の礎石に一弾は觀覽席に見事命中して之を爆砕した。然るに第三弾を投下せんとした利那氏の機は敵弾を受け忽ち火焰に包まれ、高度八百米附近から爆弾を抱いた儘時計臺西方の敵陣地に突入自爆し、兩勇士は愛機諸共壯烈極まる最期を遂げた。之れ實に氏が十五回目の爆撃であつた。併し氏等の參戰以來十數回の奮戦と尊き犠牲に依り爾後の我が作戦を有利に導き遂に制空權は我が掌中に歸したのである。越えて十月二十七日我が軍江灣鎮を占領するや、級友國定、鈴木兩中尉は早速兩勇士最期の地點を確め其の遺骨を收容した。

氏は剛毅果敢航空技術亦優秀にして航空戦士として最適の性格及伎倆を有し有爲の青年將校として上下の信頼厚く將來

を嚆望せられてゐた。參戰旬日を出ずして大洋を越え屢々支那大陸上空を翔破し敵飛行場を襲つて格納庫及地上敵機多数を爆破し更に空戦を演じて敵機を撃墜し或は敵の各種陣地、密集部隊交通機關其の他重要軍事施設等を爆撃する事十五回毎回勇戦闘敵に多大の損害を與へ我が海軍機の威力を遺憾なく發揮し以て海軍の武威を中外に宣揚し遂に惜しくも江灣鎮に自爆玉碎した。其の壯烈鬼神を泣かしむる行動は眞に生死を超越し一意其の重責完遂に邁進し獻身以て君國に報むんとする純忠赤誠の發露にして天晴れ空軍將兵の龜鑑とす可きである。參戰十數日にして氏の如き忠烈有爲の將校を喪つた事は洵に痛惜の極みである。されど生きては國家の干城となり死しては護國の神となるは武人の本懐とする所、氏が兩軍環視の裡に名譽ある戦死を遂げしは眞に武人の一生に選む可き死所として之に優るものなく以て一世を激勵し後進を奮起せしむるに足る。

氏今や瞑すと雖も其の赫々たる武勳は燦として空軍戦史に輝き芳名は千載に薫りて埋れず不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬の的たる可く氏死して亦餘榮ありと謂ふ可きである。而して其の神靈は尙も皇國を護り又一家一門の前途に尊き加護照覽を垂れ給ふことであらう。

因に氏の父は陸軍上等兵として日露戦役に従軍し武勳を樹てた勇士で長兄一男氏は陸軍中尉、次兄忠男氏は陸軍々醫少佐、末弟徹男氏は陸軍伍長として共に今次事變に参加し、第一線に活躍して目下歸郷し各々其の職務に従事してゐるとの事で、一家より父子五人の軍人を出し國の護りに就いた名譽の家である。

氏は戦死の日海軍大尉に任じ正七位に叙せられ、次で拔群破格の功四級金鷄勳章並に勳六等單光旭日章を賜はつた。

(恩地)

海軍中尉從七位勳六等功五級 今村 正治

難局二旬の苦闘を續けて武勳を樹て、遂に上海油会社に散華す

氏は其の本籍を熊本市迎町に置き東京市世田ヶ谷區新町に住居せし人にして父を源作、母を千代といひ大正三年二月十三日に生れ未だ獨身であつた。性温厚著實にして頭腦明晰體軀は小柄であつたが膽力があり責任觀念旺盛にして何事に依らず初志を貫徹せざれば已まざる氣概の持主で情誼に厚く交友の信望を蒐めてゐた。又孝心殊に厚く克く弟妹を愛護善導し大に前途を嚆望せられてゐた。大正十五年三月東京市飯倉小學校を卒業と共に同年四月麻布中學校に入學し在學中は首席で通した秀才で同六年三月同校を卒業し同年四月海軍兵學校に入學し同九年十一月同校卒業と同時に海軍少尉候補生となり練習航海を了へ同十一年四月海軍少尉に任官し軍艦加賀乗組となつた。翌五月正八位に叙せられ同年十一月驅逐艦菊月乗組となり通信士兼航海士の職にあつた。

昭和十二年七月北支事變勃發以來、氏は驅逐艦菊月乗組員として高橋司令の指揮する驅逐隊に屬し、飛行基地に人員並に物件の輸送陸軍輸送船團の護衛又は航空隊の飛行警戒等の各種作戰要務に従事してゐたが、八月十三日遂に上海に於て日支開戦の火蓋を切るや、所屬驅逐隊は上海出動の命に接し、八月十四日深更内地を出發し十六日吳淞沖に達し、續いて黃浦江を週航せんとするや、兩岸の敵は忽ち我に向つて熾烈なる砲火を浴せて來たので、各艦は時を移さず一齊に砲火を開いて之を制壓しつつ上海に入港した。同日入港と共に所屬水雷戰隊より聯合陸戰隊を揚陸する事となり、氏は選ばれて同陸戰隊菅井大隊春日中隊の小隊長として上海に上陸し、同日午前十一時上海海軍特別陸戰隊本部に集合し、同地特別陸戰隊司令官の指揮下に入り總豫備隊となつた。同日午後一時五十分、所屬中隊は北部地區公園坊に進出を命ぜられた。此時氏は部下小隊を率ゐて同所に進出して中隊本部守備の任に服し、屢々敵と激戦を交へて奮戦してゐた。十九日に至る

や所屬中隊は北部戦線の最北端凸角陣地たる油公司に進出して、之が守備に當る可き命を受け氏の小隊亦同所に進出して陣地を構へ爾來連日連夜反復襲來する優勢なる敵部隊と對峙して激戦を交へ間斷なき敵の銃砲火を浴びつつ克く中隊長を輔佐して惡戰苦闘を續けてゐた。越えて二十三日午後二時三十五分中隊長負傷して後退するや、氏は之に代つて中隊の指揮を執るに至つたが、勇猛果敢終始陣頭に立ち、寡兵を以て愛國女學校方面の優勢なる敵と激戦を繰り返し、克く部下を



指揮激勵して其の志氣を鼓舞し、善戰健闘中隊長たる負託の重責完遂に奮闘し、以て敵の銳鋒を破碎し毅然として防備至難の油公司陣地を死守し、眞に一騎當千の概を示してゐた。斯くして氏は惡戰苦闘を重ねる事二旬に及び部隊本部にては氏の長期に互る難戦を思ひ遣り、幾度か守備陣地交代の議があつたが、剛勇無比の氏は頑として之を斥け尙も勇戰奮闘を續けてゐた。斯くて交代命令も將に發令されんとしてゐた九月七日午前二時三十分及同五時三十分の二回に互り愛國女學校方面より又、優勢なる敵襲を受けたので氏は敢然立つて部下を叱咤督勵し之に猛烈なる銃火を浴びせて遂に敵を撃攘した。同七時隣接部隊の岡野大隊内藤中隊は、頑敵の巢窟たる愛國女學校を焼打して一舉に之を屠る可く猛然行動を開始した。此時敵は同方面に大部隊を増援して我が焼打隊並に油公司に對し猛撃を開始したので、氏は右焼打に協力す可く敵の猛烈なる銃砲火を冒して三層樓の油公司屋上に上り自ら機銃隊を指揮して二百米前方の敵陣地を掃射し、以て友軍の進出を容易ならしめつつあつたが、折柄展張されてゐた煙幕を透して見れば我が焼打隊が敵の集中砲火を浴びて頗る苦境に陥つてゐるので、氏は奮然眦を決して陣頭に立ち軍刀高く右手に振翳し敵の銃火の發する據點を指し群がる敵の眞直中に機

銃の猛射を注いで之を撃攘した。此の一刹那偶々敵の一砲彈飛び來つて氏の附近に落下し耳を劈ざく爆撃と共に無念氏は其の炸裂彈片を右腹部に受け首管銃創を負ふて其の場に打ち倒れた。氏は直ちに後方に收容されんとするや、剛毅の氏は重傷の身を忘れ後任の指揮官に向ひ「俺は大丈夫だ、部下の士氣が阻喪せぬ様確かり頼む」と述べ嘔て病院に送られたが死の間際迄「突込め」「油公司は確保した」などと何回も讒語を口走つてゐた。されど毫も私事に及ばず其の烈々たる戰鬪意識は實に戰友をして感激の涙を催さしめた。然るに同日午後四時四十五分軍醫官の手厚き加療も效なく遂に戰友哀惜の裡に護國の神となつた。

氏は豪邁不撓にして上下の信望を一身に宛め將來有爲の青年將校として囑望せられてゐた。今次上海戦に従ふや水雷戦隊派遣の聯合陸戦隊小隊長として上海に上陸し直ちに北部戦線の激戦に参加し硝煙彈雨の下連日連夜凡ゆる辛酸を嘗め惡戰苦闘二旬、其の間中隊長の受傷に依り之に代つて中隊を指揮し奮戦力闘敵に甚大の損害を與へ克く部隊長たる負託の重責を全うし以て味方の戦勝に絶大の寄與貢獻をなした。其の烈々燃ゆるが如き攻撃精神と旺盛なる責任觀念は天晴れ皇軍幹部の面目躍如たるものがある。斯くの如きは眞に生死を超越し獻身報告斃れて後已まんとする純忠至誠の發露にして正に少壯指揮官の龜鑑とす可きである。氏が戦死の四日前に所屬驅逐艦長宛に認めた書信に全文愛する部下の壯烈なる最期を細々と述べて復仇の一念と烈々たる闘志を述べて居た。豈圖らんや四日の後には自ら壯烈江南の華と散つて部下の後を追つたのであつた。嗚呼氏や未だ春秋に富むの身を以て遂に聖戦の礎となつて散華したが、我が海軍が氏に期待せしは前途尙ほ多年の後であつたのである。屍を馬革を裹むは氏の期せし所ならんも、聖戦初期に於て氏の如き忠誠勇武の士を喪ひ、今や其の颯爽たる風貌に接するを得ない事は洵に痛惜の極みである。併し其の赫々たる武勳は燦として永へに青史に垂れ芳名は武人の華として千古に謳はる可く不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬の的となり神靈尙も皇國を護り又一家一門の前途に尊き加護照覽を垂れ給ふことであらう。

氏は戦死の日海軍中尉に任じ従七位に叙せられ、次で功五級金鷄勳章並に勳六等單光旭日章を賜はつた。(恩地)

海軍特務中尉従七位勳五等功五級 渡邊 政太郎

率先部下を提げて敵陣に突入し奮戦力闘戦勝の端を拓く

氏は山形縣西村山郡宮宿町上郷の人にして、亡父を波次、亡母をちうといひ明治二十七年三月七日に生れ、妻きよとの間に雅彦、孝雄、佐紀子の二男一女を擧げた。性温厚篤實にして事に當り不屈不撓難局に當るの氣概を有し又孝心厚く弟妹を愛護し常に諸人の親愛を受け模範的人物として近隣の賞讃を受けてゐた。明治四十年三月宮宿小學校高等科を卒業し其後は家に在りて農業に従事し克く家計を助け傍ら勉學修養に努めてゐたが、大正三年十二月徴兵として舞鶴海兵團に入團し忠實軍務に勵み其の成績優秀にして大正六年海軍砲術學校普通科砲術練習生教程を卒業し後再び同校に入校し同十年四月高等砲術練習生教程を卒業した。其の間勳八等瑞寶章を賜り昭和三年十一月果進して海軍兵曹長に任官し同九年十一月勳六等瑞寶章を授けられ、同年十二月従七位に叙せられ同十年十一月には海軍特務少尉に任ぜられ、同十二年横須賀海兵團附兼教官より轉じて横須賀鎮守府特別陸戰隊附となつた。

昭和十二年七月支那事變勃發以來中支方面の風雲亦急を告ぐるに至り氏は横須賀鎮守府特別陸戰隊竹下大隊大橋中隊の小隊長として八月二日以来旅順に待機してゐたが、八月十三日上海に於て遂に日支開戦となり、我が軍寡兵頗る苦戦に陥るに及び所屬大隊は命に依り上海特別陸戰隊増援部隊として八月十七日旅順を出發し翌十八日上海に上陸して同地海軍特別陸戰隊司令官の指揮下に入り東部支隊左地區隊として楊樹浦クリーク以西の租界境界線附近の敵掃蕩に任じ虹口クリーク迄の地域を警戒し日本郵船滙山碼頭及滙山路の線を確保する事となつた。此時氏の率ゐる小隊は大隊豫備隊として大連

路保定陣地に配備せられ滙山路の一線を守備してゐたが、翌十九日午前八時に至り中隊に復歸し、左翼第一線の配備に就いた。同日正午頃優勢なる敵軍は公平路及其附近道路を南下し來り、公平路と楊樹浦路との交叉點附近に於て我が軍守備線を東西に兩斷せんとするもの如く、敵は公平路と西華德路との交叉點を第一防禦陣地とし、夫より北方道路上の各交叉點毎に堅固なる數段の陣地を構築して機會あらば攻勢に移らんとする隊勢にあつた。そこで所屬大隊は敵の南下を阻止すると共に進んで公平路上の敵を攻撃掃蕩するに決し、銃隊三箇小隊、山砲一箇小隊及戰車一裝甲車二を以て臨時掃蕩



部隊を編成し長大尉指揮の下に渡邊小隊、高橋山砲小隊、相澤指揮小隊及戰車一及裝甲車一は第一掃蕩路たる公平路に黒川小隊及裝甲車一は第二掃蕩路たる鄧脫路に向はしむる事になつた。斯くて午後六時四十五分に至り渡邊小隊未だ來著せず、而も状況は寸刻の猶豫を許さざりし爲一時進撃部署を變更し第一掃蕩路には黒川小隊を加せしめ之を第一線とし第二掃蕩路には相澤小隊長の指揮する二箇分隊を以てし直ちに攻撃前進を開始した。第一掃蕩路を進撃した部隊は戰車及裝甲車を先頭とし黒川小隊は其の後方約五十米を進み高橋小隊は銃隊として之に續行し、戰車先づ公平路に突入するや忽ち

前方約二百米の敵第一陣地から重機、輕機を以て猛射を浴せて來た、我は降り布く彈雨を物ともせず敵を猛射しながら突進し遂に敵の第一陣地を占領し、猶も息つく暇なく敵の第二陣地に迫つた。敵は堅固なる陣地に據り頑強に抵抗し容易に後退の色を見せなかつたが、我は銃隊を以て之に肉薄して猛射を浴せたので流石の頑敵も漸く動搖を始め、我は此の機に乗じ斷然敵陣に突入し壯烈なる肉彈戰を演じて完全に之を占領した。此時氏は部下小隊を率ゐ疾驅して陣地に到着したの

で部隊長は部隊の陣容を立て直し、氏の小隊と高橋小隊を第一線として公平路上を、又黒川小隊をして西華徳路上を右翼に廻らしめ、相澤指揮小隊長をして公平路上の後方を警戒せしめつつ戦車を先頭として進撃した。敵は公平路と有恒路との交叉點に堅固なる第三防禦陣地を構へて之に據り擲弾筒、機銃小銃等有ゆる火器を以て猛射を浴せ來り、路上は忽ち焦熱地獄と化し、嵐の如き銃聲は耳を劈き飛彈雨霰の如く頑敵堅陣に據りて容易に退却の色を見せなかつた。此間氏は終始自ら陣頭に立ち勇猛果敢彈雨を濺つて突進すれば、部下亦何とて後れん、氏を先頭に決死の勇士等先を争ふて奮進し巧に陣を縫ひ路地を匍ふて敵陣に肉薄し、手榴弾を投げつけつつ遂に敵の土囊陣地の下に匍ひ寄り、氏は忽ち蹶起して飛鳥の如く土囊を乗り越え抜刀片手に敵陣に突入した。部下亦隊長に後れじと怒濤の堤を決するが如く無二無三に突入し、當るを得手と突き伏せ薙ぎ立て叩き付け火花を散らして奮戦した。高橋小隊及右翼に廻つた黒川小隊亦之に協力して敵陣に突入し白兵戦を交へて激闘した。敵は遂に我が銳鋒に敵し得ず、死屍累々山を築き、周章狼狽を亂して潰走し午後九時遂に敵の第三陣地を完全に占領した。斯くして氏等の阿修羅の如き奮戦は眞に敵の心膽を寒からしむるものがあつたが、敵陣奪取の直前飛來せし一弾は無念！氏の右胸部に命中した、流石に剛氣の氏も撞と其の場に打ち倒れた。部下直ちに駆け寄つて氏を後送り種々厚き手當を受けてゐたが其の甲斐もなく翌二十日午後九時十五分部下戦友に護られながら從容として護國の華と散つた。併し氏の奮戦と尊き犠牲は味方戦勝の端緒を開き部隊は尙も攻撃前進して敵の第四、第五陣地を奪取し遂に敵を租界線外に驅逐し完全に掃蕩戦の目的を達し得たのであつた。其後陸戦隊は赫々の武勳に依り時の第三艦隊司令長官より光輝ある感状を授與せられた。之れ全く氏等の尊き献身奮闘に俟つ所大なりといふ可きである。

氏は沈勇謹嚴の人にして海軍出身以來二十數年一日の如く克く軍務に精勵し率先範を示して部下を指導し上下の信頼殊に深かつた。今次上海戦に臨むや小隊長として有ゆる危険苦難を克服し常に率先陣頭に立ちて部下の儀表となり、勇戦奮闘以て戦勝の端緒を開いて遂に護國の華と散つた。其の壯烈なる奮闘振りは眞に鬼神をも泣かしむるものがあつた、是れ即ち一死身を以て君國に報むんとする盡忠赤誠の顯現にして天晴れ皇國軍人の鑑とす可きである。参戦劈頭斯かる忠誠勇武の士を喪ひたるは洵に痛惜の極みなるも、其の赫々たる武勳は燦として海軍戦史に輝き芳名は武人の華として千古に薫り、不滅の英魂は靖國の神と仰がれ、神靈尙も皇國を護り又一家殊に妻子の前途に尊き加護照覧を垂るるであらう。

氏は戦死の日海軍特務中尉に任ぜられ、次で功五級金鷄勳章並に勳五等雙光旭日章を賜はつた。(恩地)

海軍中尉從七位勳六等功五級 眞木定次

豪勇小隊長、身に重傷を負ひながら奮戦し遂に上海油会社に散華す

氏は東京市目黒區下目黒四丁目の人にして父を俊魁、母をまさといひ大正二年七月六日に生れ未だ獨身であつた。性快活眞摯にして挺身難局に當り不屈不撓の氣概ある努力家であつた。大正十五年三月幡代小學校を卒業して府立第六中學校に入學し昭和六年三月同校を卒業し同七年四月海軍兵學校に入校し同十一年三月同校卒業と共に海軍少尉候補生となり練習航海を了へ同年十一月軍艦羽黒乗組となり同十二年四月海軍少尉に任ぜられ同年五月正八位に叙せられて七月驅逐艦三日月乗組となつた。

昭和十二年七月北支事變勃發以來氏は驅逐艦三日月乗組員として高橋中佐の指揮する驅逐隊に屬し各種の作業要務に従事してゐたが八月十三日上海に於て遂に日支開戦の火蓋を切るや所屬驅逐隊は上海出動の命に接し八月十四日深更内地を出發し同月十六日吳淞沖に達し續いて黃浦江を遡江せしに兩岸の敵陣地より忽ち我に向つて猛烈なる砲火を浴びせて來たので所屬驅逐隊の各艦は時を移さず一齊に之に砲撃を加へて敵を制壓しつつ上海に入港した同日入港と共に聯合陸戦隊を揚陸する事となり、氏は選ばれて同陸戦隊首井大隊春日中隊に屬し小隊長として上海に上陸し同日午前十一時上海海軍特

別陸戦隊本部に集合し同地特別陸戦隊司令官の指揮下に入り總豫備隊となつた。午後一時五十分に至るや所屬中隊は北部戦線公園坊に出動を命ぜられた。此の時氏の率ゆる小隊は水電路上の陣地に分遣せられ越野大隊高橋中隊長の指揮下に入り山田、秋吉兩小隊に協力して奮戦し翌十七日氏の小隊は公園坊の春日中隊に復歸した。十九日に至るや所屬春日中隊は北部戦線の北方凸角陣地たる油公司に進出し之が守備に任ずる事となつたので氏の小隊亦同所に進出して陣地を構へ爾



來連日愛國女學校方面の優勢なる敵と對峙して激戦を交へてゐた。

其の間氏は終始陣頭に立ち敵彈雨飛の中克く中隊長の意圖を體し部下を督勵し其の志氣を鼓舞しつゝ奮戦敢闘以て小隊長たる負託の重責完遂に遺憾なかつた。越えて二十八日午後八時半敵陣地から信號火箭が打ち揚げられたので之れ正しく敵の逆襲ならんと我は満を持して待ち構へてゐたが果然敵は一齊に怒濤の如く逆襲し來り其の銃砲聲は股々として天地に轟き飛び來る敵彈は雨霰の如く戰場は忽ち鐵火の巷と化し戦鬪は愈々激烈を極めた。此の時氏は油公司屋上に在りて勇猛果敢軍刀右手に部下を指揮督勵して敵に猛射を加へてゐたが同十時頃敵の迫撃砲彈屋上に落下炸裂し附近一帶は爆煙に覆はれて咫尺を辨ぜず之と同時に濛々たる煙の中に「やられた」「残念だ」との聲が聞えた。やがて爆煙漸く薄らぐや氏は其の左肩部に負傷せるにも拘らず部下の安否を氣遣ひ附近を見廻りて重傷者を勞はり助け自らも亦應急手当を施し部下の要請をも耳にせず、鮮血に塗れながら尙も指揮を續けてゐたので之を見た部下勇士の士氣は百倍し敵を撃退せずば一步も陣地を退かずと慘烈悲壯の戦鬪は續けられ其の團結は鐵の如く其の行動は一手の指の如くであつた。斯くて翌二十九日午前一時頃に至り、さしも執拗に逆襲して來た頑敵も我が

鋭鋒に敵し得ず遂に沈黙するに至つた。茲に於て氏は屋上陣地の守備を指揮小隊長滿永兵曹長に委ね階下に降りて加療してゐたが同一時三十分又もや猛烈なる敵襲ありとの報に接し氏は負傷の身をも打ち忘れ直ちに部下二箇分隊を提げて固有陣地たる油公司左側陣地に進出し敵に猛射を浴びせて奮戦中同一時四十分偶々飛來せし敵の迫撃砲彈氏の直前に落下炸裂し無念！氏は其の彈片を胸部其他全身數箇所に受け軍刀片手に撞と其の場に打ち倒れた。傍にゐた小隊長傳令は其の重傷なるを見て急ぎ屋内に運び手当をなさんとしたが「十分働くことが出来ない内に残念だ」との一語を名残りに壯烈なる戦死を遂げた。併し氏等の奮戦と尊き犠牲は味方戦勝の素因を築き北部戦線は其後幾何ならずして我が軍の掌中に歸し上海の安全を確保し得たのであつた。陸戦隊は其の赫々たる武勳に依り時の第三艦隊司令長官より譽の感狀を授與せられた、是れ全く氏等奮戦の功に俟つ所大なりと謂ふ可きである。

氏は資性剛毅幼にして將來海軍々人となつて一身を君國に捧げん事を期してゐたとの事であるが其の宿望を達し身を海軍に投ずるや常に心身の修養と鍛錬に努むると共に切磋琢磨克く軍務の研鑽を怠らず將來有爲の青年將校として囑望せられてゐた。今次上海戦に従ふや水雷戦隊派遣の聯合陸戦隊小隊長として上海に上陸し直ちに北部戦線の激戦に参加し奮戦十餘日其の間連日連夜凡ゆる危険困苦を克服し勇戦敢闘克く小隊長たる負託の重任を完うして敵に多大の打撃を與へ以て味方の戦勝に絶大の寄與貢獻をなした。其の身に重傷を負ひながら部下の安否を慮り自己の負傷を忘れて敵の撃滅に奮闘したる如き其の壯烈なる奮戦振りは鬼神をも泣かしむるものがあつた。斯くの如きは眞に生死を超越し獻身以て君國に報ひんとする純忠至誠の顯現にして天晴れ少壯指揮官の龜鑑とす可きである。氏や春秋僅かに二十有四にして遂に興亞の礎石となつたが我が海軍が氏に待ちしは尙ほ前途多年の後にあつたのである。馬革に屍を裹むは氏の期せし所、參戰僅かに十餘日にして斯かる前途有爲の青年將校を喪ひ今や其の颯爽たる風貌に接するを得ざるは洵に痛惜の極みである。併し其の赫々たる武勳は燦として永へに青史を照らし忠誠國に報ゆるの芳名は武人の華として千古に轟はる可く、不滅の英魂は

靖國の神と祀られて國民崇敬の的たる可く神靈尙も皇國を護り又一家一門の前途に尊き加護照覽を垂れ給ふであらう。
因に氏の父は退役海軍少將にして兄成一氏は海軍飛行將校として今次上海戦に於て愛弟の弔合戦に、開北の敵陣地爆撃に参加して偉勳を奏した勇士で父子三人共我が海の護りに就いた譽れの一家である。

氏は戦死の日海軍中尉に任じ從七位に叙せられ次で功五級金鵄勳章並に勳六等單光旭日章を賜はつた。(恩地)

海軍中尉從七位勳六等功四級 城 増 一

豪勇小隊長奮戰敵陣に突入し、惜しくも上海水電路に散華す

氏は佐世保市松川町の人にして、父を牧之丞、母をヒデと云ひ大正二年五月に生れ未だ獨身であつた。性重厚寡黙にして沈著大膽、頭腦亦明晰にして事に當るや熱心勤勉初志を貫徹せざれば已まざる氣概があつた。大正十五年三月尾尾小學校を卒業して佐世保中學校に入り昭和六年三月同校を卒業、同年四月海軍兵學校に入校し爾來學業に勵み心身の鍛鍊を重ね同年十一月同校を卒業し同十一月四月海軍少尉に任官し同年五月正八位に叙せられ同年十二月驅逐艦時雨乗組となり通信士、航海士、機銃指揮官として勤務してゐた。

昭和十二年七月北支事變勃發するや氏は驅逐艦時雨乗組員として伊崎大佐の指揮する驅逐隊に屬し、陸軍輸送船團の護送任務に服してゐたが中支方面の風雲亦急を告げ殊に上海に於ける日支間の事態愈々緊迫し八月九日大山中尉射殺事件を惹起するや彼我が情勢益々悪化し當に一觸即發の危機を孕むに至つた。茲に於て所屬驅逐隊は海軍特別陸戰隊を上海に輸送す可き任務を帯び八月十日内地を出發し翌十一日上海に到着し直ちに陸戰隊を揚陸し吳淞沖に至りて江上の監視警戒に當つてゐたが八月十三日遂に上海に於て日支開戦の火蓋を切るに及び益々江上の警戒を嚴にしてゐた。而して翌十四日所

屬水雷戰隊に於て聯合陸戰隊を編成せらるるや氏は小隊長として同隊越野大隊高橋中隊に屬し乗員一同の歡呼の裡に異常の決意を其の眉宇に閃かしつつ同地日本郵船碼頭に上陸し上海日本電信局を中心に虹口地區の警備並に便衣隊掃蕩に身命を賭して活躍奮闘してゐた。然るに十六日早朝より我が北部戰線一帯に我が數十倍の大敵怒濤の如く押寄せ來り彼我が間に激戦が展開され我が軍寡兵頗る苦戦に陥るに及び同日午後一時より四時半に至る間、氏は部下小隊を掲げ廣中路の第一線に進出して同方面の激戦に参加したが其後は大隊本部にありて豫備隊となり翌十七日には陣地方面に於て奮戦中の高橋



中隊長の指揮下に入り水電路F陣地に進出し爾來寡兵を以て奮戰克く大敵を制壓して陣地を確保してゐた。二十二日夜より敵の大部隊は氏の守備せし水電路の戰線に對し屢々突撃して來たが我は其の都度之を邀撃して敵に甚大の損害を與へて撃退した。二十三日午前一時三十分頃約二個中隊の敵は勇ましく突撃喇叭を吹きならし猛烈に氏の守備せるF陣地に殺到して來た。忽ちワツといふ敵の喊聲が一度又二度と戰線に響いた我は寡兵でまともに應戦したのでは全滅必定の態勢であつたので沈毅豪膽なる氏は咄嗟に之を覺り寡兵と侮つて猛り立つ敵を目前に齒を喰ひしばつて憤激する部下を「まだく」

と鎮めて一發も射たせず、勢に乗じた敵がドツと潮の如く我が陣地近く迄押寄せて來た時、頃はやしと矢庭に奮ひ起つて「撃てッ、進めッ」と命令すれば月光皎々と照る前方に狙ひを定めて居た我が勇士は此の號令一下一齊に火蓋を切つた。敵は忽ち此の猛撃の下に折り重なつて累々たる死屍の山を築いた。茲に於て氏は部下を掲げて陣頭に立ち抜刀高く振りかざし我に續けと突撃すれば福手小隊亦之に續いて突撃した。敵は我が猛威に恐れをなし多數の死體を遺棄し殲滅的打撃を

被り隊を亂して敗退し、茲に小隊は敵を全く撃退して其の陣地確保の重責を果たすを得たのであつた。されど氏は此時何方から敵機銃の掃射を受け無念！其の一弾は氏の胸部に命中した。流石の豪勇なる氏も之には堪へ難く挫と其の場に打ち倒れ遂に壯烈なる戦死を遂げた。其後陸戦隊は赫々の武勳に依り時の第三艦隊司令長官より譽の感状を授與せられたが是れ實に氏等の奮戦と尊き犠牲に俟つ所大なりと謂ふ可きである。

氏は沈毅豪膽にして兵學校時代より常に身心の鍛錬と修養に努め短艇競漕の際にても如何に疲勞するも同僚の交代を肯せず終始頑張り通してゐた。氏は又平素より桐野利秋に私淑し利秋が山路獨眼龍將軍との問答中の「彈盡き、銃折れなば刀劍を以て戦ふ可し、刀劍亦用ふ可からるに至らば腕力を以て戦ふ可し、腕力用ふ可からるに至らば則ち精神氣魄を以て戦ふ可し之れ余が信念なり」との言に感激したものの如く氏も亦此の信念を常に保持してゐたとの事である。今次上海戦に臨むや選ばれて陸戦隊小隊長として上海に上陸し間もなく北部戦線の激戦に参加し連日有ゆる辛酸を嘗め奮戦敢闘克く小隊長たる負託の重任を完うし以て我が軍戦勝に多大の寄與貢獻をなし遂に興亞の礎となつて玉碎した。壯烈斯くの如きは眞に生死を超越し獻身以て皇謨を扶翼し奉らんとする純忠赤誠の發露にして天晴れ少壯指揮官の龜鑑とす可きである。氏や春秋僅かに二十有四にして遂に新東亞建設の礎石となつたが我が海軍が氏に待ちしは尙ほ前途多年の後にあつたのである。馬革に屍を裹むは固より氏の期せし所ならんも參戦間もなく此の前途有爲の青年將校を喪ひ、今や其の颯爽たる風貌に接する能はざるは洵に痛惜に堪へざる所である。併し氏の戦死や、武人の一生に選む可き死所としては之に優るものなかる可く其の赫々たる武勳は燦として永へに海軍戦史に輝き芳名は武人の華として千古に薫りて後進を感奮せしむ可く、不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬の的となるであらう。氏亦以て瞑す可きである。而して神靈は尙も皇國を護り又一家の前途に尊き加護佑助を垂れ給ふことであらう。

因に家郷には老父母を残し只一人の弟善一氏亦今次事變に應召し北滿に活躍中とのことである。

氏は戦死の日海軍中尉に任じ從七位に敘せられ拔群破格の功四級金鷄勳章並に勳六等單光旭日章を賜はつた。(恩地)

海軍特務少尉正八位勳六等功六級 伊藤 長次郎

參戰劈頭彈藥配給運搬に奮闘し惜しくも上海租界の華と散る

氏は岩手縣稗貫郡内川目村の人にして亡父を久藏、亡母をシヲと云ひ明治三十三年六月五日に生れ妻せつとの間に長男容之を擧げた。性温順にして志操極めて堅實の人であつた。大正六年三月内川目小學校高等科を卒業し其後は家庭に在つて農に従事し傍勉學に努め模範青年として賞讃を受けてゐた。大正九年六月志願兵として横須賀海兵團に入團し後海軍砲術學校普通科並に高等科砲術練習生教程を卒業し昭和五年二月勳八等瑞寶章を、同十年八月勳七等瑞寶章を賜はり同年十月昇進して海軍兵曹長に任ぜられた。此間軍艦長門、鳳翔及春日、海軍砲術學校、驅逐艦樺及太刀風横須賀海兵團等に勤務し忠實軍務に精勵し、克く上長の命に従ひ部下の指導亦適切にして上下の信望を一身に集め専心奉公の誠を盡してゐたが、同十年十一月服役延期解除となり豫備役に編入せられ其後は横須賀海軍軍需部に勤務してゐた。

昭和十二年七月北支に事變勃發するや中支方面の風雲亦急を告げ氏は同年八月應召して海軍砲術學校長の命を承けて服務してゐたが同月十五日上海海軍特別陸戦隊附となり、勇躍征途に就き同月二十日上海に著し直ちに同地陸戦隊に入隊した。當時陸戦隊は開戦以來約十晝夜に亘り激戦を交へ各戦線將兵は必死の防戦に努め寡兵克く我に數十倍の大敵と對戦し不眠不休眞に涙ぐましき苦闘を續けてゐたのであつた。此時に當り氏は豫備彈藥隊小隊長を命ぜられ彈藥配給運搬作業の指揮監督の重任に就く事となつた。茲に於て氏は第一線各隊に對する彈藥配給に遺憾なからしむ可く率先部下を督勵して其の運搬配給に活躍し第一線將兵をして意を安んじて戦闘に従事せしむる様萬全を期し傍陸戦隊本部に於ける彈藥庫の嚴

重警戒に任じてゐた。二十二日午後十一時頃に至るや敵の砲撃益々熾烈となり我が陸戦隊本部及彈火藥庫附近は敵の集中砲火の中心となり物凄き唸りを發して飛來する砲弾は至る所に落下炸裂し其の危険云ふ計なし氏は夫れ等身に迫る危険を物ともせず意氣愈々軒昂部下を叱咤督勵し同火藥庫の警戒を一層嚴にしつつ彈藥の配給運搬を指揮監督して前線部隊に對する彈藥の補給に努めてゐたが、午後十一時五十八分西方敵陣地より飛來せし迫撃砲の一弾は彈藥庫に隣接しある海軍俱樂部に命中炸裂し其の彈片のため無念！氏は左眼及頭部其他に瀕死の重傷を負ふた、流石に剛氣の氏も遂に起つ能はず直ちに病舎に收容せられ百方手當を加へたが其の甲斐もなく翌二十三日午前七時三十分居並ぶ部下や戦友に惜しまれつつ従容として永遠の眠に就いたのであつた。其後陸戦隊は赫々の武勳に依り時の第三艦隊司令長官より名譽ある感状を授與せられた、是れ實に氏等奮闘の勳功に俟つ所大なりと云ふ可きである。



氏は今次上海戦に参加するや豫備彈藥隊小隊長として彈雨の間に立ち有ゆる危難を克服し冷靜剛膽部下を率ゐ毅然として其の任務を完遂し以て第一線部隊の戦闘に寄與する事甚大であつた。其の崇高なる犠牲的精神と旺盛なる責任觀念は眞に獻身報國の赤誠の發露にして天晴れ武人の典型として後進の範とす可きである。參戰劈頭斯かる忠誠勇武の士を費ひ今や其の颯爽たる風貌に接する能はざるは洵に痛惜の極みなるも其の赫々たる武勳は永へに海軍戦史を飾り芳名は後世に傳へらる可く、不滅の英魂は靖國の神と祀られ神靈尙も皇國を護り又一家殊に妻子の前途に尊き加護照覽を垂るであらう。

氏は戦死の日海軍特務少尉に任じ正八位に叙せられ次で功六級金鷄勳章並に勳六等單光旭日章を賜はつた。(恩地)

海軍航空特務少尉正八位勳六等功五級

岡田 一三

壯烈火焰に包まれ敵陣に突入自爆して江灣鎮に玉碎す

氏は廣島縣佐伯郡地御前村の人にして父を定二、母をイチといひ明治四十年七月に生れ妻フジエとの間に長男正俊次男浩昭の二男を擧げた。性温厚にして極めて謙讓の精神に富める人であつた。大正十一年三月地御前小學校高等科を卒業し其後父母を扶けて農業に従事してゐたが幼少より軍人を志望し遂に其の宿望叶ひ大正十四年六月吳海兵團に入團し水兵となり忠實軍務に精勵し後霞ヶ浦海軍航空隊偵察練習生教程を卒業して航空兵となり果進して昭和十一年十一月海軍航空兵曹長に任ぜられ同年十二月勳八等瑞寶章を賜はつた。此の間佐世保及横須賀各航空隊並に軍艦能登呂及日向に勤務し同十二年一月軍艦龍驤乗組となつた。

昭和十二年八月十三日上海に於て日支間に戦闘開始となるや翌十四日より敵飛行機は屢々上海上空に飛來し我陸戦隊本部、戦線部隊、旗艦出雲其他の海軍艦艇は勿論各種重要建物又は商業地區、旅館等に對し所嫌はず盲爆撃を行ひ以て自國民及第三國民等幾多無辜の人々を殺傷するの暴舉を敢てし全上海市民怨嗟の的となつた。恰も其の當時は支那海を北上中の颯風があつたので揚子江沖合某根據地に待機中の我が海軍航空隊は陸戦隊の惡戰苦闘と敵機の跳梁を耳にし義憤に燃えつつ骨肉の嘆を漏らしてゐたが、同日午後に至り待望の進撃命令が發せられた。もはや荒天何のその氏等決死の海軍航空隊將兵は感奮興起猛鷲の羽搏き物凄く上海沖に碇泊してゐた艦載水上機隊は眞先に激浪を蹴つて離水し上海附近の敵飛行場を襲つて其の大格納庫を爆破したのを手始めに陸上及艦上攻撃隊は嵐を衝いて長驅渡洋爆撃を敢行し敵航空兵力の各重要據點に有效なる巨彈を浴びせ茲に支那空軍殲滅の幕は切つて落された。

八月十六日嘉興飛行場爆撃の命が下された氏は淺田少佐の指揮する艦上攻撃機隊に屬し偵察員として西脇小隊長機に同

乘し午前四時二十分艦員一同の激勵の辭に送られて母艦を進發し勇躍爆撃の壯途に上つた。數日來の颯風の餘波未だ收まらず暗夜にもそれと知られる渾々たる密雲、加ふるに瀧の如き豪雨さへ加はつて前方小隊の燈火すら微かに螢の光のやうに明滅して之を見失ふ様になる。氏等攻撃機隊は尙も猛雨を衝いて一路目的地に向つて奮進した。漸くにして目指す嘉興上空に達したが飛行場らしいものは見當らぬ。時は未だ日出約一時間程前で下界はまだ闇に包まれて靜かに眠つてゐる。指揮官は南の方を捜して見る事に決心し濛雨の中に突進した。午前五時五十分遂に前方小隊を見失つた。氏の機は小隊列機を率ゐる尙ほ搜索飛行を續けてゐたが午前六時十四分雲の晴れ間から整地した飛行場らしいものが小隊長の眼にちらと映じた。併し高度が高く判然せず小隊長はよしと許りに忽ち單機々首を下に向けてぐつと高度を下げた。小隊列機も之に續いた。雨に曇つた眼鏡を外して見ると果して目指す飛行場で方形をなし、其の側に約二十機の敵機が並んで殆ど全部がプロペラーを回轉してゐる。初めて見た敵機の姿に胸を躍らせ尙ほよく注視すると一機の戦闘機は既に離陸を始めてゐる。若し此の戦闘機を上昇せしめたら續く味方の邪魔になる蹴散らすは今だと列機に爆撃隊形をとる事を命じ氏の機は恰も獲物を狙ふ雉の如く急降下爆撃に移つた。先づ地上敵機に正確な必中の第一弾を投下し急降下の餘勢をかつて地上すれすれに降下し逃げ惑ふ敵戦闘機を急追し之に機銃の猛射を浴びせて其の一機を撃墜炎上せしめた。小隊長は之でよしと、ぐつと機首を引上げた。此時敵の地上防空陣地から一齊に高角砲機銃の猛射を浴びせかけて來た。氏の機は敢然反轉して敵に向ひ機銃掃射を加へたので敵陣地は此の勇猛果敢の行動に俄然混亂に陥り蜘蛛の子を散らす如く持場を離れて逃げ去つた。斯くて漂ふ雲と暗がりを透して飛行場を見渡すと續く二、三番機の爆撃で地上の敵機や格納庫は粉碎され敵の死屍は累々として横はり飛行場は濛々たる爆煙を擧げ無慚！翼をもがれ脚の折れた敵機が散らばつて折柄の小雨に濡れてゐる其の數は五機を下らぬ氏の機は悠々上昇した。氏は小隊長の命に依り直ちに飛行場の位置を無電で友隊に知らせ飛行場を引揚げた。折柄東の空は漸くほのぼのと明け初めてゐた。雲海の中に捜し廻つてゐた吉澤小隊も氏の小隊の爆撃閃光で

始めて飛行場の位置を知り、續々と馳せ參じて爆弾の雨を降らせ多大の戦果を收め午前九時全機凱歌を擧げて無事歸艦した。其後氏は尙ほ機翼を休む暇もなく連日拂曉から夜間に互り一日數回多きは七回に及ぶ空襲を敢行し通州、蘇州及杭州飛行場又は閩北、江灣鎮及吳淞一帶に互る敵陣地等を息をも繼かず風浪しに爆撃し我が作戦上多大の効果を擧げてゐた。越えて同月二十七日午後二時西脇中尉の指揮する艦上攻撃機隊は江灣鎮時計臺爆撃の命を受けた。氏は西脇指揮官機に同乗し午後三時五十分勇躍甲板を蹴つて母艦を進發した。此の日天氣晴朗にして絶好の飛行日和であつた。快翔を續くる事一時間餘、馳つて上海上空に達し各機は豫定の如く江灣鎮時計臺の第一次爆撃を敢行して敵の心膽を奪ひ午後四時半爆撃終つて江灣鎮、大場鎮、南翔、嘉定、羅店鎮、廟行鎮及芦上鎮等の敵陣地を偵察し大場鎮附近で装甲自動車及敵密集部隊を見つけて之に銃撃を加へ勇敢にも再度右時計臺を爆撃す可く午後五時二十分高空から雉の如く時計臺目がけて急降下爆撃し一弾は時計臺の礎石に一弾は觀覽席に見事命中して之を爆碎した。然るに第三弾を投下せんとした利那氏の機は敵弾を受け忽ち火焰に包まれ高度八百米附近から爆弾を抱いた儘、時計臺西方の敵陣地に突入自爆し兩勇士は愛機諸共壯烈極まる戦死を遂げた。之れ實に氏が十七回目の爆撃戦であつた。併し氏等の参戦以來十七回に互る爆撃戦と尊き犠牲に依り爾後の我が作戦は有利に進展し遂に制空權は我が手に掌握するを得たのであつた。越えて十月二十七日我が軍江灣鎮を占領するや西脇小隊長の級友國定、鈴木兩中尉は早速兩勇士最期の地點を確め其の遺骨を收容した。氏は思想堅實元氣頗る旺盛にして研究心に富み其の伎倆亦優秀にして常に軍務に恪勤勉勵し上下の信頼厚く有爲の航空幹部として前途を囑望せられてゐた。今次事變に際し前進根據地に進出するや旬日を出ずして大洋を越え屢々支那大陸上空を翔破し敵飛行場を強襲して格納庫及地上敵機多數を爆破し更に空戦を演じて敵機を撃墜し或は敵の各種陣地、密集部隊交通機關其の他重要軍事施設等を爆撃する事十七回、常に勇戦敢闘敵に多大の損害を與へ我が海軍機の威力を遺憾なく發揮し以て海軍の威武を中外に宣揚し惜しくも江灣鎮に自爆玉碎した。其の壯烈鬼神を泣かしむる行動は眞に生死を超越

し一意其の職責完遂に邁進し獻身以て君國に報せんとする純忠至誠の發露にして天晴れ空軍將兵の龜鑑とす可きである。參戰十數日にして氏の如き忠烈有爲の士を喪つた事は洵に痛惜の極みである。されど氏が兩軍環視の裡に壯烈なる戦死を遂げしは眞に武人の一生に選ぶ可き死所として之に優るものなく以て後進を奮起せしむるに足る。氏今や瞑すと雖も其の赫々たる武勳は燦として空軍戦史を照らし芳名は千古に薫りて埋れず、不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬の的たる可く氏死して亦餘榮ありと謂ふ可きである。而して其の神靈は尙も皇國を護り又一家の前途に尊き加護佑助を垂れ殊に妻子の將來を照覽して已まぬであらう。

氏は戦死の日海軍航空特務少尉に任じ正八位に叙せられ次で拔群破格の功五級金鷄勳章並に勳六等單光旭日章を賜はつた。(恩地)

海軍特務少尉從七位勳六等功五級 小野 義雄

累戦偉勳を奏し惜しくも吳淞敵前上陸に散華す

氏は山形縣最上郡稻舟村角澤の人にして亡父を常藏、亡母をキンといひ明治三十一年八月二十九日に生れ妻常葉との間に長男澄雄、長女洋子、次男勳の二男一女を擧げた。性温厚篤實極めて眞面目の人にして義務心厚く率先難事に當るの氣概があつた、又孝心厚く兄弟間も至極睦しく一般世人にも親切にして近隣の風評良好であつた。大正二年三月稻舟村日新小學校高等科を卒業し其後は家にありて農業に従事する傍農業補習學校に學び同五年三月同校を卒業した。大正六年六月志願兵として舞鶴海兵團に入團し誠實軍務に勤み同八年十一月海軍砲術學校普通科砲術練習生教程を、同十二年四月同校高等科砲術練習生教程を卒業し累進して昭和七年十一月海軍兵曹長に任ぜられた。此間軍艦、驅逐艦、海兵團、海軍砲術

學校及水雷學校等に勤務し昭和十二年七月横須賀鎮守府特別陸戰隊附となつた。尙ほ氏は大正四年乃至九年戦役の功に依り勳八等白色桐葉章を、昭和六年乃至九年事變の功に依り勳六等瑞寶章を賜はり同十二年六月從七位に叙せられた。

昭和十二年七月北支事變勃發以來中支方面の風雲亦急を告ぐるや氏は横須賀鎮守府特別陸戰隊竹下大隊に屬し通信隊長として八月二日以来旅順に進出し待機してゐたが八月十三日上海に於て遂に日支開戦となり我が軍寡兵頗る苦戦に陥るに及び所屬大隊は命に依り八月十七日同地を出發し翌十八日上海に上陸して同地特別陸戰隊司令官の指揮下に入り其の本部

を公大社宅に定め東部支隊左地區隊として楊樹浦「クリーク」以西の地域を警戒し日本郵船瀝山碼頭及瀝山路の線を占領確保する事となつた。



氏は上陸以來通信隊長として東部租界の第一線に進出し克く部下を指導督勵して東部支隊と大隊本部並に各陣地間の通信連絡に奮闘し又敵襲の撃退或は便衣隊の掃蕩に當る等連日不眠不休の奮戦を續けてゐたが八月十九日の戦鬪に於て大橋中隊小隊長渡邊特務少尉戦死するや翌二十日其の後任として小隊長職務代理を兼任せしめられ砲煙彈雨の中を馳驅して奮戦を重ねて敵に甚大の損害を與へ敵を

して一步も守備線内に侵入せしめず克く其の陣地を死守してゐた。斯くて我が陸戰隊各部隊は寡勢を以て大敵を邀撃し惡戦苦闘旬日に互り克く租界の安全を確保してゐたが、同地に於ける形勢は益々重大を加へ遂に陸戰部隊の派遣となり其の先遣部隊は上海に到着した。當時上海東部租界に奮戦中の所屬竹下大隊は八月二十一日夜陸軍揚陸隊掩護のため吳淞鐵道棧橋附近に敵前上陸を敢行す可き命を受け翌二十二日其の守備區域を土師大隊に譲り大阪商船碼頭に集合し暫時休養の後諸

準備を整へ同日午後十時半上海招商局棧橋より雲陽丸、當陽丸、信陽丸の三船に分乗し勇躍出發の時機を待つてゐた。轉て三船は江上艦艇に護衛せられ燈火を隠蔽して肅々として黃浦江を下つた。折柄皎々たる月は一片の浮雲さへなく晴れ渡つた江南の空に懸り船上の我が勇士の鐵兜の上に白き光を浴せてゐた。船は漸次進航を続け翌二十三日午前三時頃味方驅逐艦、水雷艇の掩護射撃の下に吳淞鐵道棧橋に近づいた。氏等の乗船信陽丸は豫定上陸地點たる「ドツク」會社の直ぐ下流に横付けせんとするや突如敵は前方家屋及左方陣地附近から猛射を浴せて來たので我が機銃隊は船上より直ちに之に應戦して之に猛射を加へて制壓し細田小隊は舳索及道板の準備を行ひ敵彈雨注の中各員の敏速果敢なる動作に依り横付作業は著々進捗し全員の意氣は愈々揚り戦はずして既に敵を呑むの概を示してゐた。午前三時五分岸壁と甲板との間に架橋終ると見るや全員は肩に縋り白禱の姿も勇ましく飛鳥の如く橋を蹴つて上陸を開始した。そこで氏は小隊の先頭に立ち部下を率ゐて中隊の右翼第一線として柴田小隊の右方に進出し當面の群がる敵を撃退しつつか砂山に達して兵を集結し自ら二個分隊を提げて上陸地點より約四十米にある右前方「コンクリート」家屋の敵を撃退して之を占領し敵情を偵察してゐたが附近家屋に潛伏してゐた敵は曩に我が艦砲射撃のため生じた數多の破孔から頻りに手榴彈を投げつけ轟然たる爆聲と共に其の彈片は土砂と混じて四邊に飛散し危険云ふ許りなく一方殘餘の隊員は先任分隊下士官指揮の下に砂山の前方「コンクリート」塊の堆積地に辿り著き直ちに敵に猛射を浴せかけた。敵亦小銃機銃を亂射し手榴彈を亂投して我が進撃を阻止せんとし彼我互に激戦を交へてゐたが我は忽ち死傷者相次で生じ其の惡戰苦闘は言語に絶するものがあつた。小野小隊の進撃と共に中隊本部は其の占據してゐた家屋から前方竹垣に近い次の家屋に進出した。氏も亦部下を率ゐて同家屋に進出し敵情を偵察するに竹垣の外側道路に多數の敵兵がゐるのを認めたので部下の一部をして竹垣を突破し之と道路間の凹所に進出せしめ自ら爾餘の隊員を率ゐて此の敵に對し突撃を令し敢然將に立上らんとせし刹那風を切つて飛來せし敵の一彈無念！氏の頭部を貫き其の場に壯烈なる戰死を遂げた。時に午前三時五十分であつた。斯くして小隊は小隊長以下多數の

死傷者を出し僅少の殘員を以て惡戰苦闘を續けてゐたが間もなく陸軍の一隊進出し來り之と協力して遂に鐵道構内の敵を撃攘し得たのであつた。

氏は眞撃にして克く上長を敬ひ部下を愛撫し盡忠報國の念極めて旺盛にして事皇室に關する話ともなれば如何なる場合と雖も直ちに襟を正すを常としてゐたとの事である。今次聖戰に参加するや上海上陸間もなく東部租界守備の任に就き連日晝夜有ゆる戦場の辛酸を嘗め勇戰奮闘遺憾なく其の職責を全うし次で吳淞敵前上陸に際しては砲煙彈雨の下、決死敵前上陸を敢行し勇猛果敢敵陣に突入せんとして遂に護國の華と散つた。其の壯烈鬼神を泣かしむる行動は眞に死生を超越し一意其の重責完遂に邁進せんとする純忠至誠の發露にして正に少壯指揮官の鑑とす可きである。參戰旬日を出ずして斯かる忠烈の指揮官を喪ひたるは洵に痛惜の極みなるも其の赫々たる武勳は永へに海軍戰史を飾り芳名は千載に薫りて埋れず不滅の英魂は靖國の神と祀られ神靈尙も皇國を護り又一家殊に妻子の前途に尊き加護佑助を垂るるであらう。

氏は戰死の日海軍特務少尉に任ぜられ次で拔群破格の功五級金鷄勳章並に勳六等單光旭日章を賜はつた。(恩地)

海軍航空特務少尉正八位勳六等功五級 森 清 磨

空前の壯舉渡洋爆撃に世界の耳目を聳動し惜しくも揚州東方に散る

氏は長崎縣東彼杵郡鈴田村の人にして父を林次郎、亡母をセンといひ明治三十七年三月十四日に生れ妻きよとの間に麗子、靜枝の二女を擧げ家族は山梨縣甲府市壽町に居住してゐる。性剛腹にして任侠且つ正直の人で一念發する所之を貫かざれば已まぬ氣概があつた。又孝心殊に深く海軍に勤務中も常に母を同居せしめて孝養を盡し又世人にも親切にて諸人の親愛を受けてゐた。大正四年三月鈴田村小學校を卒業と共に長崎縣大村町の縣立中學校に入校し後家庭の都合に依り上京

して成城學園に轉校し同學園を中途退學して北洋漁業に従ひ後又音樂學校に通學してゐたが飛行家たらん事を志望し大正十二年六月志願兵として横須賀海兵團に入團し誠實軍務に勵み後霞ヶ浦海軍航空隊普通科航空工術練習及偵察練習生教程を卒業し累進して昭和十年十一月海軍航空兵曹長に任ぜられ館山航空隊に勤務してゐたが同十二年七月木更津海軍航空隊附となつた。



昭和十二年七月北支に事變勃發するや氏は聯合航空隊に編入せられ第三艦隊附屬となり八月上旬以來九州方面前進基地に進出し出動準備を整へて待機してゐたが八月十三日上海に於て日支間に戦闘開始せられ翌十四日より敵飛行機は屢々上海上空に飛來し我陸戰隊本部、戰線部隊、旗艦出雲其の他海軍艦艇等は勿論各種重要建物又は商業地區、旅館等に對し所嫌はず百爆撃を行ひ以て自國民及第三國民等幾多無辜の人々を殺傷するの暴舉を敢てし全上海市民怨嗟の的となつた。當時颯風は上海沖に停滯し海上風浪高く何時鎮まるとも知れざる光景に我が海軍航空隊は陸戰隊の惡戰苦闘と敵機の跳梁を耳

にし義憤に燃えつつ進撃命令の降下今や遅しと骨肉の啖を漏らしてゐたが同日午後に至り遂に待望の命令は發せられた。もはや荒天何のその氏等決死の海軍航空隊將兵は感奮興起命令一下猛鷲の羽搏き物凄く上海沖にゐた艦船水上機隊は眞先に激浪を蹴つて離水し上海附近の敵飛行場を襲つて大格納庫を爆破したのを手始めとし更に陸上及艦上攻撃機隊は嵐を衝いて長驅渡洋爆撃を敢行して敵航空兵力の各重要據點に有效なる巨彈を浴びせ茲に支那空軍殲滅の幕は切つて落された。

翌十五日平本少佐の指揮する陸上攻撃機隊は南京爆撃の命を受け氏は吉田隊に屬し機長兼偵察員として午前九時勇躍前

進基地を進發し帽を振る戰友の姿に感激の眸を輝しつつ東支那海の怒濤を越え一路支那大陸へと霧進した。數日來の颯風は猶ほ收まらず翼も折れん許りの難飛行を續け體て支那大陸の上空に差しかかつた風雨は益々激しく密雲の爲め屢々僚機を見失ふ程であつたが其の内、雲の間から湖水が見えた太湖の上空らしい其の途端に密雲の中から突如敵戦闘機數機が現はれた。隊長機は列機の陣頭に立ち氏の搭乗機以下各機は之に續いて敵に肉薄し忽ち壯烈なる空中戦を演じ約三十分激烈なる戦闘の後僚機と協力して敵機一機を湖中に撃墜し他の一機を湖岸に不時著せしめた。初陣の此の戦果に氏等搭乗員の勇氣は百倍し悠々長江に沿ひ高度二百米乃至四百米の編隊で南京に向つて霧進した。間もなく南京胡宮飛行場が雲間から遙か彼方に現れた。氏等搭乗員の意氣は愈々昂揚して機内は緊張し午後三時十五分南京上空に達し高度五百米の編隊で北方から侵入した。折柄起る敵の地上防空砲火を物ともせず隊長機を先頭に一機又一機密雲を破つて急降下し爆彈投下を開始した。此の時氏は部下を指揮激勵し全員一致協力規を定めて胡宮飛行場に爆彈を投下した。忽ち起る轟然たる爆音と共に黒煙天に沖し大型格納庫一棟竝に庫外飛行機數機を爆破した。敵の防空砲火は愈々激しく爆撃終つて飛び上ると小癩にも敵戦闘機七、八機が挑戦して來た。元より空中戦は我の希ふ所、茲に南京上空に攻撃機對戦闘機の壯烈なる空中戦が始まつた。見敵必勝の我が海軍魂は火と燃えさかつて忽ち敵機二機を撃墜した。残る敵機は我の猛威に恐れをなしあらぬ方向へ遁走した。體て戦闘は終つて歸途に就き再び嵐を衝いて暗夜の大洋を越え其の重き使命を果し凱歌を擧げて基地に歸著した。翌十六日には再び大洋を越えて蘇州飛行場を襲つて敵の重要軍事施設を爆撃した。斯くて氏は前後二回に互る渡洋爆撃を敢行し其都度敵の熾烈なる防空砲火を冒し勇戰奮闘敵に甚大の損害を與へて其の心膽を寒からしめた。

越えて八月二十一日氏は曾我少佐の指揮する陸上攻撃機隊に屬し機長兼偵察員として吉田隊二番機に搭乗し部下六名と共に揚州爆撃に向つた。午前二時二十分勇躍機上の人となり僚隊入佐隊と相前後して基地を進發し皎々たる満月を銀翼に浴び雲海を脚下に見つて一路支那大陸へと霧進し午前四時四十五分大陸上空に蓋しかかつた。折柄月は没して暗黒と雲霧

のため何時しか入佐隊と分離し其後僚隊との連絡全く絶え杳として其の行方を知る事が出来なかつた。入佐隊は雲霧の爲め揚州を發見し得ず浦口爆撃を敢行し其の歸途午前六時十五分過恰も日出に近く視界漸く明瞭に地物を辨明し得るに至り揚州飛行場を發見したが既に吉田隊は同飛行場を爆撃したらしく場内には約十機の敵機二列に並び其の中央に數箇所の爆撃痕を生じ其の内三機は盛に炎焼し他は大破せる事を目撃した。之れ吉田隊奮戦の戦果なる事は確實である。入佐隊と分離後行方不明となつた氏の隊は地上指揮官との連絡亦断絶し基地にある隊員は氏等の成功を祈りつつ憂慮して待つてゐたが遂に正午に至るも歸還せず之を入佐隊の目撃状況より考察するに氏等吉田隊の各機は目指す揚州飛行場を爆撃し多大の戦果を収めたが多數の敵戦闘機と猛烈なる空中戦を演じ孤軍奮闘敵弾のため火災を起し遂に敵地に墜落の運命を辿り愛機と共に隊員悉く壯烈なる戦死を遂げたものと認定せられた。併し氏等の緒戦に於ける奮戦と尊き犠牲は我が海空軍の制空權掌握の端緒を拓き爾後の戦闘を有利に導くを得たのであつた其後所屬航空隊は其の赫々の武勳に依り時の第三艦隊司令長官より譽の感状を授與せられた、是れ全く氏等奮戦の功に俟つ所大なりと謂ふ可きである。

氏は剛膽質直にして武道音楽等に長じ就中柔道水泳に至りては其技素人の域を脱し身體魁偉にして堂々たる風貌を供へ航空隊の快男兒として其の驍名を轟かしてゐたとの事である。軍務に恪勤精勵し専心航空技術の研鑽に勵み其の伎倆亦優秀にして上下の信頼厚く有爲の航空幹部として將來を囑望せられてゐた。而して今次聖戦に従ふや陸上攻撃機々長兼偵察員として嵐を衝いて支那海の怒濤千餘軒を翔破し支那大陸に往復して敵の首都南京を襲ひて其の飛行場を爆撃し更に空戦を演じて敵機二機を撃墜し次で蘇州及揚州飛行場の爆撃に参加し敵の重要軍事施設に地上敵機を爆破する等實に我が空戦史上劃期的渡洋爆撃を敢行する事三回に及び奮戦敵に多大の損害を與へて我が海軍機の威力を遺憾なく發揮し海軍の威武を中外に宣揚して遂に聖戦の礎となつて玉碎した。其の壯烈鬼神の如き行動と其の忠烈偉勳は天晴れ空軍將兵の龜鑑とす可きである。参戦僅かに一週日にして斯かる忠烈勇武の空軍幹部を喪つた事は洵に痛惜の極みである。されど其の壯

烈なる行動は我が海軍空前の壯舉、武人の一生に選む可き死所としては之に優るものなかる可く以て一世を激勵し後進を振起せしむるに足る。氏今や瞑すと雖も其の赫々たる武勳は燦として永へに空軍戦史に輝き、不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬の的たる可く、氏死して亦餘榮ありと謂ふ可きである。而して其の神靈は尙も皇國を護り又一家の前途に尊き加護を垂れ其の妻子を照覽して已まぬであらう。

氏は戦死の日海軍航空特務少尉に任官し正八位に叙せられ抜群破格の功五級金鷄勳章並勳六等單光旭日章を賜はつた。

(恩地)

海軍航空兵曹長勳七等功五級 大庭 彌一郎

空前の壯舉渡洋爆撃に屢々武勳を奏し惜しくも揚州北方に玉碎す

氏は静岡縣磐田郡福田町の人にして亡父を彌太郎、母をきぬと云ひ明治四十一年十一月十二日に生れ妻よし子との間に敏彌、京子の一男一女を擧げた。性快活眞摯、責任觀念旺盛にして動作極めて機敏であつた。又孝心深く克く兩親を扶けて家業に精勵し弟妹を慈しみ諸人の親愛を受けてゐた。大正十二年三月福田小學校高等科を卒業し其後は家業に従事し昭和三年十二月徴兵として横須賀海兵團に入團、機關兵となり忠實軍務に勵み、後霞ヶ浦海軍航空隊普通科整備術練習生教程を更に横須賀航空隊偵察練習生教程を卒業し果進して同十一年五月海軍一等航空兵曹に任ぜられ後又横須賀海軍航空隊特修科航空術練習生教程を卒業して益々航空技術の研究練磨に努めた此の間軍艦多摩、赤城、驅逐艦帆風並に霞ヶ浦、横須賀、館山の各航空隊等に勤務し同十二年七月木更津海軍航空隊附となつた。

昭和十二年七月北支に事變勃發するや、氏は聯合航空隊に編入せられて第三艦隊附屬となり八月上旬以來九州方面前進

基地に待機してゐたが八月十三日遂に上海に於て日支間に戦闘開始となるや翌十四日より敵飛行機は上海上空に飛來し我陸戦隊本部、戦線部隊、旗艦出雲其他の海軍艦艇等は勿論各種重要建物、商業地区、旅館等に對し所嫌はず自爆撃を行ひ、以て自國民及第三國民等幾多無辜の人々を殺傷するの暴挙を敢てし全上海市民怨嗟の的となつた。當時颯風は上海沖に停滯し海上風浪高く何時鎮まるとも測り知れざる光景に我が海軍航空隊は陸戦隊の惡戰苦闘と敵機の跳梁を耳にし義憤に燃



えつつ骨肉の嘆を漏らしてゐたが同日午後に至り遂に待望の進撃命令は發せられた。もはや荒天何のその、氏等決死の海軍航空隊將兵は感奮興起猛鷲の羽搏き物凄く上海沖にゐた艦船水上機隊は眞先に激浪を蹴つて離水し上海附近の敵飛行場を襲ひて大格納庫を爆破したのを手始めに陸上及艦上攻撃機隊は嵐を衝いて長驅渡洋爆撃を敢行し敵航空兵力の各重要據點に對し有效なる巨弾を浴びせ茲に支那空軍殲滅の幕は切つて落された。

翌十五日所屬隊に南京爆撃の命が下つた。氏は平本少佐の指揮する攻撃機隊吉田隊に屬して機長として陸上攻撃機に搭乗し午前九時勇躍九州方面前進基地を進發し帽を振る戦友の姿に感激の眸を輝かせつつ東支那海の怒濤を越え一路支那大陸へと驍進した。數日來の颯風は猶ほ収まらず翼も折れん許りの難飛行を続け聽て大陸の上空に差しかかつた。風雨は益々激しく密雲のため僚機を見失ふ事も度々であつたが其の内雲の間から湖水が見えた、太湖の上空らしく、其の途端に密雲の中から突如敵戦闘機數機が現れた。隊長を先頭に氏等搭乗の列機は之に續いて敵に肉薄し忽ち壯烈なる空軍戦を演じ約三十分激烈なる戦闘の後僚機と共に敵一機を湖中に撃墜し他の一機を湖岸に不時著せしめ初陣の此の戦果に氏等搭乗員の勇氣は百倍

し悠々長江に沿ひ高度二百乃至四百米の編隊で南京に向つて驍進した。間もなく南京胡宮飛行場が雲間から遙か彼方に現れた。氏等搭乗員の意氣は愈々昂揚して機内は緊張し午後三時十五分南京上空に達し高度五百米の編隊で北方から侵入した。折柄起る敵の地上防空砲火を物ともせず隊長機を先頭に一機又一機密雲を破つて急降下し爆弾投下を開始した。此の時氏は部下を指揮督勵し全員一致協力規ひを定めて胡宮飛行場に爆弾を投下した。忽ち起る轟然たる爆音と共に黒煙天に沖し大型格納庫一棟竝に庫外飛行機數機を爆破した。敵の防空砲火は愈々激しく、爆撃終つて飛び上ると小嶺にも敵戦闘機七、八機が挑戦して來た。元より空中戦は我の希ふ所、茲に南京上空に壯烈なる空中戦が始まつた。見敵必勝の我が海軍魂は火と燃えさかつて忽ち敵機二機を撃墜した。残る敵機は我の猛威に恐れをなし、あらぬ方向へ遁走した。聽て戦闘終つて歸途に就き再び嵐を衝いて暗夜の大洋を越え其の重き使命を果し凱歌を擧げて基地に歸著した。次で十七日には淮陰飛行場を襲つて其の重要軍事施設を爆撃し、十九日には再度南京夜間空襲を敢行して同地軍官學校を爆撃し多大の戦果を収めた。斯くして氏は前後三回に互る渡洋爆撃を敢行し勇戰奮闘敵に甚大の損害を與へて其の心膽を寒からしめた。

越えて八月二十一日氏は曾我少佐の指揮する陸上攻撃隊に屬し機長兼偵察員として吉田隊三番機に搭乗し部下六名と共に揚州爆撃に向つた。午前二時二十分勇躍機上の人となり僚隊入佐隊と相前後して基地を進發し皎々たる満月を銀翼に浴び雲海を脚下に見つつ一路支那大陸へと驍進し午前四時四十五分大陸上空に差しかかつた。折柄月は没し暗黒と雲霧のため何時しか入佐隊と分離し其後僚隊との連絡全く絶え杳として其の行方は不明となつた。當時入佐隊は雲霧のため揚州を發見し得ず爆撃目標を浦口に變更し午前六時十五分同地飛行場を爆撃し其の歸途時恰も日出に近く視界漸く明瞭に地物を辨別し得るに至り揚州飛行場を發見したが既に吉田隊は同飛行場を爆撃したらしく、場内には約十機の敵機二列に並び其の中央に數箇所の爆彈々痕を生じ其の内三機は盛に炎焼し他は大破せる事を目撃した。之れ氏等吉田隊奮戦の戦果なる事は確實である。入佐隊と分離後行方不明となつた氏の隊は又地上指揮官とも連絡断絶し基地にゐた隊員は氏等の成功を祈

りつつ憂慮して待つてゐたが正午に至るも吉田隊は一機も歸還せず之を入佐隊の日撃状況から考察するに氏等吉田隊の各機は目指す揚州飛行場を爆撃し多大の戦果を収めたが多数の敵戦闘機の包圍の受け猛烈なる空中戦を演じ敵弾のため火災を起し遂に敵地に墜落の運命を辿り愛機と共に隊長以下隊員悉く壯烈なる戦死を遂げたものと認定せられた。併し氏等の緒戦に於ける奮戦と尊き犠牲は我が海空軍の制空権掌握の端緒となり爾後の戦闘を有利に導くを得たのであつた。其後所屬隊は其の赫々の武勳に依り時の第三艦隊司令長官より譽の感状を授與せられた。是れ全く氏等奮戦の功に依つ所大なりと謂ふ可きである。

氏は沈著剛毅にして海軍に身を投じて間もなく航空兵となり、常に熱心軍務に精勵して怠る事なく切磋琢磨其の技術を練り其の成績衆に拔んで將來有爲の人物として上下の信頼を受けてゐた。今次事變に際會し前進基地に進出するや、旬日の後には嵐を衝いて長驅東支那海の怒濤千餘軒を翔破して支那大陸に往復し遠く敵の首都南京を襲ふ事二回次で淮陰、揚州飛行場を空襲する等實に我が空戦史上劃期的渡洋爆撃を敢行する事前後四回に及び其の間機長として適時的確に部下を指揮し勇戦敢闘極めて有效なる爆撃を加へて多大の戦果を収め以て我が海軍機の威力を遺憾なく發揮し海軍の威武を中外に宣揚し惜しくも揚州北方上空に玉碎した。其の壯烈なる行動と忠烈偉勳は天晴れ空軍將兵の龜鑑とす可きである。参戦僅かに一週日にして氏の如き忠誠有爲の士を喪つた事は洵に痛惜の極みである。されど其の壯烈なる行動は我が海軍空前の壯舉、武人の一生に選む可き死所としては之に優るものなく以て後進を振起せしむるに足る。氏今や瞑すと雖も其の赫赫たる武勳は燦として永へに空軍戦史に輝き芳名は千載に薫りて埋れず、不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬的たる可く氏死して亦餘榮ありと謂ふ可きなり。而して其の神靈は尙も皇國を護り又一家の前途に尊き加護を垂れ其の妻子の身上を照覽して已まぬであらう。

尙ほ氏の父は日露戦役に従軍して武功を樹てた勇士である。

氏は戦死の日海軍航空兵曹長に任ぜられ、次で按察破格の功五級金鷄勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍兵曹長勳七等功六級 河合 英一

友軍陣地救援に赴き勇戦力闘惜しくも上海租界に散華す

氏は愛知縣半田市御中の人にして亡父を末次郎、亡母をそうといひ、明治三十八年八月九日に生れ妻春江との間に滿洲男、洋の二男を擧げた。性温厚寡黙而も剛膽にして乗馬を好み體力亦強健であつた。熱心業務に精勵し兩親を喪つた後は長兄を親の如く敬ひ克く姉弟を愛護してゐた。大正九年三月成岩第一小學校を卒業し後半田農學校に學び、大正十二年三月同校を卒業し其後東洋紡績知多工場に勤務してゐたが、大正十四年十二月徴兵として吳海兵團に入團し誠實軍務に努め後海軍砲術學校普通科砲術練習生教程を卒業し、軍艦日向、那智、淺間及大井特務艦艦隊等に勤務し、昭和十年十一月累進して海軍一等兵曹に任ぜられた。氏は嘗て昭和六年一月軍艦那智乗組中尉省の際又昭和八年十一月軍艦大井乗組中尉市に上陸の際、偶々町内に火災起り直ちに現場に馳せつけ青年團等を指揮し、又は市内防火隊と協力して消火に努め、いづれも大事に至らしめなかつたので、二回共夫々當時の艦長より其の善行を表彰せられた。斯くの如く氏は海軍出身以來、艦外に於ても屢々善行を重ね且つ其勤務振亦優秀にして大に將來を囑望せられてゐた。昭和十一年十一月現役延期解除と共に服役優等證を授與せられ豫備役に編入せられた。歸郷後は陸軍造兵廠名古屋工廠千種兵器製造所に勤務してゐた。今次事變勃發するや氏は充員召集を受け昭和十二年八月吳海兵團に入團した。而して八月十三日上海に於て日支開戦となるや、上海海軍特別陸戦隊に編入せられ、土師大隊佐藤中隊吉武小隊に屬し、分隊下士官として勇躍征途に就き八月十九日深更上海に著し大連碼頭に上陸して宿營し、翌二十日午後一時上海陸戦隊本部に至り總豫備隊となつた。越えて二十

二日午前八時所屬大隊は竹下大隊と交代し、東部支隊長の指揮下に入り東部支隊中央第一線として、華徳路、瀨山路の線に陣地を占領し大隊本部を公大第二社宅に置き、佐藤中隊は其の本部を瀨山公園北側に則ち中隊は其の本部を上海紡第五工場に定め、各所要地點に陣地を占領して守備に就き直ちに陣地構築作業に取りかかった。聽て敵は我が大隊各陣地に對し逆襲に轉ずるもの如く敵の銃砲火は漸次熾烈になつた。我は陣地構築作業半ばであつたが直ちに之に應戦し、彼我の



銃砲聲は殷々轟々雷の如く濛煙天を蔽ひて物凄き光景を呈した。斯くて午後に至るや、戦闘は愈々激烈となり敵の砲彈機銃及小銃彈は雨霰の如く飛來し、我が死傷者亦續出し戦場慘澹を極めた。中にも第五陣地の戦闘は最も激烈を極め、午後九時十分頃には殘員僅かに小隊長以下三名となり尙ほ力戰奮闘を續け、其の苦戰言語に絶するものがあつた。氏は此間部下分隊員と共に中隊本部附近家屋内に豫備隊として待機し、飛び來る敵彈の下に警戒を嚴にしてゐたが各陣地の苦戰を耳にし、戦線加入今や遅しと切齒慷慨骨肉の嘆を漏してゐた。午後十時四十五分頃第五陣地と中隊本部との中間に敵兵侵入し第五陣地危機に瀕するや中隊長は氏及中尾一曹外七名に對し同陣地に赴援す可き命を下した。氏は命令一下敢然部下を提げ我に續けと奮然先頭に立ち飛鳥の如く華盛路に飛び出した。部下亦何とて後れん氏を先頭に決死の勇士等先を争ふて勇躍突進、篠突く彈雨を物ともせず一進一止敵に必中の猛射を加へつつ第五陣地目がけて奮進した。必死を期した我兵の猛撃に、敵は稍動搖の色を見せた。氏等は進撃の機會は爰ぞと許り敵に息をもくれず奮進を續けた。部下の勇氣は更に振ふて殺氣天を衝かん許り銃劍を閃めかして飛龍の如く疾驅し忽ち第五陣地に到達し、同陣地の殘員と協力し銃も灼熱せん

許りに猛射を浴びせ、遂に敵を撃攘して同陣地の危急を救ひ得たのであつた。併し此の赴援の途上不幸氏は全身數箇所に機銃彈を又腹部に砲彈破片を受け壯烈なる戦死を遂げた。氏の戦死にも拘らず部下は寡勢克く奮戰躍進して友軍の危機を救ひ得た事は、眞に氏の奮戦と尊き犠牲に勵まされたものといつてよからう。其の後陸戦部隊は赫々たる武勳に依り時の第三艦隊司令長官より感状を授與せられた。之實に氏等の勳功に依る所大なりと謂ふ可きである。

氏は豪膽機敏にして、今次聖戰に参加するや有ゆる危険艱苦を克服し友軍陣地の救援隊として敵の猛火を冒し部下を率ゐて奮戦力闘遂に味方陣地確保の素因を築いて玉碎した。其の壯烈なる行動は、眞に獻身報國の赤誠の發露であつて正に陸戦隊員の精華を發揮したものと云ふ可きである。參戰劈頭殊に初陣に於て斯かる忠誠勇武を士を喪ひたるは洵に痛惜の極みなるも、一戰玉碎は百戰功なき瓦全に優ると、氏や上海租界東部戦線の一戰に玉碎せしも其の輝かしき武勳は永しへに海軍戦史を飾り芳名は千載を薫りて埋れず不滅の英靈は靖國の神と仰がれ神靈尙も皇國を護り又一家の前途に尊き加護佑助を垂るるであらう。

氏は戦死の日海軍兵曹長に任ぜられ次で功六級金鷄勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍航空兵曹長勳六等功五級 川口雄一

壯烈屢々渡洋爆撃に武勳を奏し惜しくも揚州爆撃戦に玉碎す

氏は静岡縣小笠郡大坂村の人にして父を榮吉、母をしげと云ひ明治四十三年二月一日に生れ妻美津江との間に長男浩を擧げた。性温順實直にして責任觀念旺盛で率先難局に當り不屈不撓の氣概を有し又孝心厚く克く兄弟を敬愛し交際圓滿にして諸人の親愛を受けてゐた。大正十三年三月大坂小學校高等科を卒業と共に同年四月私立双松學舎に入學し一時家庭の

都合で退學したが後再び同舎に學び昭和二年三月同舎を卒業し同年六月志願兵として横須賀海兵團に入團して水兵となつた。後海軍水雷學校普通科電信術練習生教程を卒業して掌電信兵となり直ちに航空兵を志望し偵察練習生として霞ヶ浦海軍航空隊に入隊、同四年九月同練習生教程を卒業し航空兵となり昇進して同十年十一月海軍一等航空兵曹に任ぜられ此の間霞ヶ浦、横須賀、館山等の各海軍航空隊附及軍艦鳳翔乗組を経て同十二年七月木更津海軍航空隊附となつた。尙ほ氏は

昭和六年乃至九年事變の功に依り勳七等青色桐葉章を賜はつた。



海軍航空隊は陸戦隊の苦戦と敵機の跳梁を耳にして義憤に燃えつつ空しく天を仰いで心なき暗雲の徂徠を眺めて脾肉の歎を漏らしてゐたが同日午後に至り遂に待望の進撃命令が發せられた。もはや荒天何のその、氏等決死の航空隊將兵は感奮興起猛鷲の羽搏き物凄く上海沖にゐた艦船水上機は眞先に激浪を蹴つて離水し上海附近の敵飛行場を襲つて大格納庫を爆破し又艦上及陸上攻撃機隊は嵐を衝いて長驅渡洋爆撃を敢行し敵航空兵力の各重要據點に對し有效なる巨弾を浴びせ茲に支那空軍殲滅の幕は切つて落された。

翌十五日平本少佐の指揮する陸上攻撃機隊は南京爆撃の命を受け氏は同隊吉田隊長偵察員として之に搭乘し午前九時勇躍九州方面前進基地を進發し帽を振る戦友の姿に感激の眸を輝かせつつ、支那海の怒濤を越え一路支那大陸へと轟進した。數日來の颱風は猶ほ収まらず翼も折れん許りの難飛行を続け體て支那大陸の上空にさしかかつた。風雨は益々激しく密雲の爲め屢々僚機を見失ふ程であつたが其の内雲の間から湖水が見えた。太湖の上空に達せしものの如く其の途端に密雲の中から突如敵戦闘機數機が現れた。氏の搭乘機は隊長機として陣頭に立ち所屬各機之に續いて敵に肉薄し、忽ち壯烈なる空中戦を演じ敵機一機を湖中に墜墜し他の一機を湖岸に不時著せしめた。初陣の此の戦果に我は勇氣百倍し悠々長江に沿ひ高度二百乃至四百米の編隊で南京に向つて轟進した。間もなく南京胡宮飛行場が雲間から遙か彼方に現れた。爆撃用意」の號令と共に機内は緊張し午後三時十五分南京上空に達し高度五百米の編隊で北方から侵入した。折柄起る敵の地上防空砲火を物ともせず一機又一機密雲を破つて急降下し胡宮飛行場に巨弾の雨を浴びせ大型格納庫一棟並に庫外飛行機數機を爆破した。爆撃して飛び上つて來ると小艇にも敵戦闘機七、八機が我に肉薄して來た。元より空中戦闘は我の希ふ所、茲に南京上空に再び攻撃機對戦闘機の壯烈なる空中戦が始まつた見敵必勝の我が海軍魂は火と燃えさかつて忽ち敵機三機を撃墜したが此の時氏の搭乘機は不幸敵弾を受け片側の發動機は遂に使用出来なくなつた。されど氏等搭乗員は隊長指揮の下に適時的確の處斷に依り片肺發動機にて暗夜の逆巻く怒濤の大洋を翔破して遂に基地に歸著した。續いて翌十六日には蘇州飛行場を十七日には淮陰飛行場を十九日には再び南京を空襲して同地軍官學校を爆撃する等連日に互り渡洋爆撃を敢行し其の都度熾烈なる敵の防空砲火を冒し勇戦奮闘敵に大打撃を與へて其の心膽を寒からしめた。

越えて八月二十一日氏は曾我少佐の指揮する陸上攻撃機に屬し揚州飛行場の爆撃に向ふ事となり吉田隊長機に搭乘し僚隊入佐隊と共に午前二時二十分勇躍基地を進發し皎々たる満月を銀翼に浴び雲海を下に見つつ一路東支那海を翔破して支那大陸に轟進した。午前四時四十分頃大陸上空に達したが折柄月は没し暗黒と雲霧のため氏の隊は何時しか入佐隊と分離

し其の後連絡全く絶え杳として其の消息を知る事が出来なかつたが入佐隊が雲霧のため揚州を發見する能はず浦口爆撃を
決行しての歸途午前六時十五分過ぎ恰も日出に近く漸く地物を辨別し得るに至り揚州飛行場を發見したが既に氏の隊は同
飛行場を爆撃したるものの如く場内には約十機の敵機二列に並び其の中央に數箇所の爆弾々痕と其の内三機は盛んに炎燒
し他は大破せるを確認した。之れ吉田隊奮戦の戦果である事明かである。入佐隊と分離後消息不明となつた氏の隊は地上
指揮官との連絡亦断絶し基地に於ける隊員一同は其の成功を祈りつつ憂慮して待つてゐたが遂に正午に至るも歸還せず之
を入佐隊の目撃状況から考察するに吉田隊は目ざす揚州飛行場を爆撃し多大の戦果を収めたが多數の敵戦闘機と猛烈なる
空中戦を演じ孤軍奮闘敵弾のため火災を起し遂に敵地に墜落の運命を辿つて愛機諸共に隊員悉く壯烈なる戦死を遂げたと
のと認定せられた。されど氏等の緒戦に於ける奮戦と尊き犠牲は我が海空軍の制空權掌握の端緒を拓き爾後の戦闘を有利
に導くを得たのであつた。其後所屬隊は其の赫々の武勳に依り時の第三艦隊司令長官より榮えある感狀を授與せられた、
是れ全く氏等奮戦の功に俟つ所大なりと謂ふ可きである。

氏は豪氣にして熱心軍務に盡瘁し常に技術の研鑽練磨に勉め率先躬行以て部下を指導し誠に有爲の人物として上下の信
望が厚かつた。今次事變に際會するや陸上攻撃機偵察員として屢々荒天を衝いて支那海の怒濤千餘軒を翔破して支那大陸
に往復し遠く敵の首都南京を襲ふ事二回又蘇州、淮陰及揚州飛行場を空襲する等實に我が航空戦史上劃期的渡洋爆撃の壯
舉に参加する事五回更に空戦を演じて多大の戦果を収めて我が海軍機の威力を中外に宣揚して世界の耳目を聳動せしめ
惜しくも揚州爆撃戦に玉碎した。其の壯烈なる行動と獻身報國の赤誠は天晴れ空軍將兵の鑑とす可きである。參戰僅かに
一週日にして氏の如き忠誠勇武の士を喪つた事は洵に痛惜の極みである。されど其の壯烈無比の活躍奮戦は我が海軍空前
の壯舉にして武人の一生に選む可き死所としては之に優るものなかる可く以て一世を激勵し後進を振起せしむるに足る。
氏今や瞑すと雖も其の赫々たる武勳は燦として永へに我が空軍戦史に輝き芳名は千古に薫りて埋れず不滅の英魂は靖國の

神と祀られて國民崇敬の的たる可く氏死して亦餘榮ありと謂ふ可きである。而して其の神靈は尙も皇國を護り又一家の前
途に尊き加護佑助を垂れ給ふことであらう。

氏は戦死の日海軍航空兵曹長に任ぜられ次で抜群破格の功五級金鷄勳章並に勳六等單光旭日章を賜はつた。(恩地)

海軍兵曹長勳七等功五級 梶原匡廣

吳淞敵前上陸に奮戦偉勳を樹て、玉碎す

氏は山梨縣東八代郡鶯宿村の人にして父を要、母をいわと云ひ明治三十七年十二月七日に生れ妻つるとの間に禮子、信
子の二女を擧げた。性寡黙沈勇の人にして責任觀念強く率先難事に當り不屈不撓の氣概があつた。又孝心厚く六人の兄弟
があつたが共に協力して父母を扶けて農業に精勵し家庭頗る圓滿であつた。大正八年三月村中小學校高等科を卒業し其後
は家において家業を扶けてゐた。夙に海軍に志し大正十一年宿望叶つて同年六月横須賀海兵團に入團し爾來軍務に勉勵し
後海軍砲術學校普通科並に高等科砲術練習生教程を卒業し果進して昭和七年十一月海軍一等兵曹に任ぜられた。此間軍艦
驅逐艦、海兵團、海軍砲術學校等に勤務し、同十二年七月軍艦摩耶乗組中選ばれて横須賀鎮守府特別陸戰隊に編入せられ
た。尙ほ氏は昭和六年乃至九年事變の功に依り勳八等白色桐葉章を賜はつた。

昭和十二年七月北支事變勃發以來中、南支方面の風雲急を告ぐるや氏は横須賀鎮守府特別陸戰隊竹下大隊に屬し大隊旗
手として八月二日以来旅順に進出し待機してゐたが八月十三日上海に於て遂に日支開戦となり我が軍寡兵頗る苦戦に陥る
に及び所屬部隊は命に依り八月十七日旅順を出發し翌十八日上海に到着し直ちに上陸し同地特別陸戰隊司令官の指揮下に
入り其の本部を公大社宅に定め東部支隊左地區隊として楊樹浦「クリーク」以西の地域を警戒し日本郵船瀨山碼頭及瀨山

路の線を占領確保する事となつた。

氏は上陸以來大隊旗手として常に大隊本部内外の警備並に附近便衣隊の掃蕩に奮闘し又各隊との通信連絡に任じ且つ豫備彈藥隊と共に銃隊の増援隊として華徳路、滙山路及舟山路方面の戦闘に参加し連日連夜不休砲煙彈雨の中を馳驅して奮戦を續け以て敵に甚大の損害を與へ敵をして一步も其の守備線内に侵入せしめなかつた。斯くて我が陸戰隊各部隊は



寡勢を以て大敵を邀撃し惡戰苦闘を續くること旬日に互り克く租界の安全を確保してゐたが同地に於ける形勢は益々重大を加へ遂に陸軍部隊の派遣となり其の先遣部隊は上海に到着した。當時上海東部租界に奮戦中の所屬竹下大隊は八月二十一日夜陸軍揚陸掩護の爲め吳淞鐵道棧橋附近に敵前上陸を敢行す可き命を受け翌二十二日其の守備區域を土師大隊に譲り大阪商船棧橋に集合し暫時休養の後諸準備を整へ同日午後十時半上海招商局棧橋より雲陽丸、當陽丸、信陽丸の三船に分乗し氏等大隊本部は雲陽丸に乗船し勇躍出發の時機を待つてゐた。聽て三船は江上艦艇に護衛せられ燈火を隠蔽して肅々

として黃浦江を下つた。折柄皎々たる月は一片の浮雲さへなく晴れ渡つた江南の空に懸り船上の我が勇士の鐵兜の上に白き光を浴せてゐた。船は漸次進航を續け翌二十三日午前二時總員上陸準備と共に最上甲板に土囊を築き上げて機銃陣地を構築し氏は之が指揮に任じて敵の攻撃に備へてゐた。又前後甲板には枋索取方の準備を行ひ午前二時四十五分吳淞棧橋の上流横付豫定地點の岸壁に接近するや敵は忽ち河岸數米前方の塹壕陣地より猛烈なる機銃掃射を浴せて來たので我亦直ちに輕機銃を以て之に應戦した。然るに當時我が艦砲に依る掩護射撃の爲め上陸地點附近の藁屋根に引火燃焼して其の火焰

は味方の横付位置を照明して頗る不利なる狀況となつたが氏は敵の集中射撃を受け乍ら飛び來る彈雨を物ともせず勇敢沈著に敵情を偵察して蠢動する敵を發見し輕機を以て有效的確なる射撃を加へて之を制壓した。此間枋索取方に従事せる勇士は直ちに水中に飛び込み敵彈雨注の中に之を附近の枕に取付け横付終ると共に更に架橋配置に定められた者亦水中に飛び込み道板を連ねて棧橋を作つた。斯くて架橋完了するや部隊長を始め全員は肩に縋なす白禱の姿も勇ましく直ちに上陸を開始し當面の敵を攻撃制壓しつつ前進した。之と殆ど時を同じくして上流に著岸上陸した宮野中隊亦頑敵を撃攘して前進してゐたが午前二時三十分頃氏は大隊本部と宮野中隊との連絡並に敵情偵察の爲め派遣せらるる事となり部下金澤一水を率ゐ降り布く彈雨を潛つて勇躍敵陣に向つて進發した。やがて敵陣近くに迫り月光を利用して敵情を偵察しつつ鐵道事務所附近にゐた宮野中隊本部に達し連絡任務を全うして歸途に就いた。斯くて尙ほ敵情を偵察しつつ鐵道線路に到達せし時突如附近塹壕に潛伏してゐた敵の射撃を受け直ちに應戦して敵三名を殲したが味方は少數にて且つ據る可き地物もなく對戦不利なるを知るや氏は突撃を敢行して之を追散らす外道なしと今や突撃に移らんとせし刹那物凄き唸を發して飛來せし敵彈は無念、其の胸部を貫き挫と其場に倒れた。剛氣の氏は之に屈せず起き上り更に前進を續けたが再び敵彈數發を受け全身血塗磨となつて打ち倒れた。續く金澤一水が直ちに之を助けんと近寄つたが「俺に構はず報告に行け」と命じ最後に至る迄烈々たる意氣を以て頑張つたが午前三時四十分遂に壯烈なる戦死を遂げた。併し氏の奮戦と尊き犠牲に依り部下の金澤一水は漸くにして歸隊し敵情報告の任務を全うして爾後の戦闘を有利に導くを得たのであつた。其後所屬大隊は特に敵前上陸に於ける赫々の武勳に依り時の第三艦隊司令長官より榮えある感狀を授與せられた。是れ全く氏等の勳功に俟つ所大なりと謂ふ可きである。

氏は剛毅果斷にして其の高潔なる人格と至誠の念は克く人を感動せしめ信用上官に厚く恩愛部下に過く眞に有望の下士官であつた。今次聖戦に参加するや上海上陸間もなく東部租界守備の任に當り連日晝夜の別なく有ゆる危険困苦を克服し

勇健闊達なく其の職責を全うした。殊に吳淞敵前上陸に際しては降り布く彈雨の中決死、中隊との連絡並に敵偵察に奮闘し以て味方の戦闘を有利に導き遂に護國の華と散つた。其の壯烈鬼神を泣かしむる行動は眞に生死を超越し一意其の重任の完遂に邁進せんとする純忠至誠の發露にして天晴れ武人の典型とす可きである。參戰幾何ならずして斯かる忠勇義烈の士を喪ひたるは國家の爲め洵に痛惜の極みなるも其の赫々たる武勳は燦として永へに海軍戦史に輝き芳名は千載に薫り、不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬の的たる可く神靈尙も皇國を護り且つ一家殊に妻子の前途に尊き加護照覽を垂るるであらう。

氏は戦死の日海軍兵曹長に任ぜられ次で拔群破格の功五級金鷄勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍兵曹長勳七等功六級 立木 孫 一

豪勇の装甲車長轉戰武勳を奏し惜しくも上海公平路に斃る

氏は岩手縣膽澤郡前澤町の人にして亡父を利平治、母をハツといひ明治四十三年十一月二日に生れ未だ獨身であつた。性温厚眞摯にして事を爲すに表裏なく率先難局に當るの氣概を有し家庭頗る圓滿であつた。大正十四年三月前澤小學校高等科を卒業し其後は家にありて農業に従事してゐたが昭和二年六月志願兵として横須賀海兵團に入團し爾來勉勵努力の效空しからず同四年十一月海軍砲術學校普通科、同七年七月高等科砲術練習生教程を卒業し其間軍艦山城、海軍砲術學校、横須賀海兵團、驅逐艦太刀風及時風、軍艦高雄及愛宕等に勤務し同十一年十一月上海海軍特別陸戰隊附となり累進して同十二年五月海軍一等兵曹に任ぜられた。

昭和十二年七月北支に事變勃發以來中、南支に於ける風雲急を告げ殊に上海に於ける空氣は日一日と悪化し八月九日大

山中尉射殺事件惹起するや彼我の情勢愈々緊迫し當に一觸即發の危機を孕むに至り八月十二日同地海軍特別陸戰隊は警備の態勢をとる事となり翌十三日遂に支那軍の不法射撃に依り上海に於ける日支開戰の幕は切つて落された。

當時氏は上海海軍特別陸戰隊戰車隊に屬し装甲車長として開戰と共に我が前線各部隊に協力して奮戦力闘克く其の全能を發揮してゐた。八月十八日午前九時三十分命に依り軍工路方面に於て激戰中の柴北大隊の所屬銃隊を掩護す可く他の装甲車一臺と共に陸戰隊本部を進發し午前十時五分同大隊本部たる公大第一廠に到り直ちに軍工路に進出して味方前線部隊



を掩護して敵に多大の損害を與へた。翌十九日正午頃優勢なる敵は江灣方面より移動し竹下部隊の守備地區たる公平路及其附近道路に進出し來り公平路と東老滙路との交叉點附近に於て我が守備線を東西に兩斷せんと企圖せるもの如く公平路と西華德路との交叉點を第一防禦陣地とし、それより北方公平路上の各交叉點毎に堅固なる數段の陣地を構築し、機を見て攻勢に轉ぜんとする氣勢を示してゐた。茲に於て同部隊は敵の南下を阻止すると共に進んで公平路上の敵を攻撃掃蕩す可く臨時掃蕩隊を編成する事となつた。此時吉野戰車隊長の指揮する装甲車二及戰車一は之に協力す可く勇躍陸戰隊本部を進發して竹下大隊陣地に著し午後七時十五分愈々敵攻撃を開始した。氏を長とする装甲車(吉野隊長搭乘)及戰車(濱口小隊長指揮)は第一線として公平路上を並列前進し銃隊一個小隊は其の後方百米を警戒前進し西華德路との交叉點の敵第一防禦陣地に近づくや敵は其の後方第二陣地の機銃と共に猛射を浴びせて來たが氏等は敵彈を物ともせず疾風迅雷の勢を以て敵に肉薄し銃身も灼けん計に機銃の猛射を浴せて遂に其の第一陣地を蹂躪粉碎して之を占領した。氏の装甲車

は同陣地占領と共に之を乗越えんとしたが崩壊した土囊のため前進不能となつたので公平路を迂回して東百老漚路から鄧脱路に出たが此處には他の装甲車が銃隊と協力して敵と交戦中であつたので直ちに之に應援し奮進しつゝ敵に猛射を加へて遂に之を撃退し鄧脱路上を掃蕩した。次で午後八時三十分氏の装甲車は塘山路を東進し公平路に達したが同所は敵の第二防禦陣地で殊の外堅固に木材を以て構築し装甲車の前進が出来なかつたので引き返し爾後隊長指揮の下に友隊との連絡銃隊の誘導等に當つてゐたが又々非豊路にて敵襲を受け交戦二十分にして之を撃退した。斯くて午後九時五十分銃隊の攻撃と相俟つて公平路上の敵の防禦陣地を悉く占領し其の掃蕩を完了した。そこで氏の装甲車は隊長連絡のため陸戦隊本部に歸つたが同十時三十分再び本部を出發して塘山路に至り銃隊が陣地構築中其の警戒に任じてゐた。然るに二十日午前零時二十分に至るや敵の一部は公平路上に現れ機銃を猛射しつゝ逆襲して來た同所に居た戦車は時を移さず之に應戦し猛烈なる反撃を加へ茲に激戦は再演せられた。氏の装甲車は之に協力する爲め急遽鄧脱路を迂回して塘山路を東に奮進して公平路上の敵陣地の側方五十米に迫つた。此時敵の銃聲稍衰へたので氏は隊長と共に下車した。月下に後ろ鉢巻をした勇壯なる二人の影が敵の第二陣地の中に忍び込んで行つた。併し陣中敵影を認めず、やがて偵察を終へた二人は引返して装甲車に歸らんとした利那、突如道路の向ふ側の屋内から敵の狙撃を受け其の一弾は無念！氏の咽喉部を貫いた。隊長は之に氣付かず「車長」と呼べども應答なく装甲車に近づいた時「隊長、隊長」と微かな聲で呼びかけつゝ後より駆け寄り鮮血迸る傷口に故國から贈られた千人針の手拭を取り出して咽喉に巻きつけながら「隊長やられました」と報告した。そこで隊長や戦友は直ちに氏を車内に助け入れ本部に歸り手當を加へんとしたが剛氣の氏は之を肯せず尙も自己の任務を遂行せんとして車外に乗り出さうとした。されど遂に力盡きて打ち倒れ居並ぶ隊長以下車員は皆感激の涙に咽びつゝ氏を勵まして本部病舎に運んだが途中流れ滴る血潮を手拭にて押へ毫も苦痛を訴ふることもなく平然として病舎に收容せられ軍醫官の手厚き治療を受けしも其の甲斐なく同日午前六時三十八分戦友哀情の裡に遂に護國の華と散つた。其後陸戦隊は赫々の武

勳に依り時の第三艦隊司令長官より榮えある感狀を授與せられた是れ實に氏等の奮戦に俟つ所大なりと謂ふ可きである。

氏は上海開戦前より同地海軍特別陸戦隊戦車隊員として克く部隊長の意圖を體し率先躬行以て部下を指導訓育し夙夜猛訓練を實施し市街戦に關する綿密周到なる研究を怠らなかつた。開戦と共に幾多戦場の辛酸を嘗めつゝ砲煙彈雨の中を馳驅活躍して各戦線に轉戦し勇戦奮闘克く装甲車の威力を發揮し以て敵に甚大の損害を與へ我が軍戦勝に絶大の寄與貢獻をなした。其の烈々燃ゆるが如き闘志と斃れて後己まんとする崇高なる責任觀念は眞に純忠赤誠の發露にして正に軍人の鑑とす可きである。參戰幾何ならずして斯かる豪勇の士を喪ひ今や其の颯爽たる英姿に接する能はざるは洵に痛惜の極みなるも其の赫々の武勳は永へに海軍戦史を飾り芳名は千載に亙りて埋れず、不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬の的となる可く武人としての榮譽之に過ぐるものなかるべし、氏亦以て瞑す可きである。而して神靈は尙も皇國を護り且つ一家の前途に尊き加護照覽を垂るるであらう。

氏は戦死の日海軍兵曹長に任ぜられ次で功六級金鷄勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍兵曹長勳七等功六級 高橋 富貴

勇戦力闘通信員の重任を完遂し惜しくも上海租界戦に散華す

氏は福島縣安達郡木幡村内木幡の人にして父を諫、母をスエといひ明治四十一年二月二十九日に生れ妻マサとの間に長女勅子を擧げた。性温厚篤實にして沈著、幼時より父母の手傳に専念し孝心厚き事實に涙ぐまじき程であつた。又家計豊でなかつたが克く弟妹を慈しみ常に家業に精勵し眞に模範青年として近隣の褒め者であつた。大正十一年三月内木幡高等小學校を卒業し其後は家に在りて農業に従事する傍同村農業補習學校に學び大正十四年五月同校を卒業した。大正十四年

六月志願兵として横須賀海兵團に入團し格勳軍務に勵み後海軍砲術學校普通科砲術練習生教程を卒業し累進して昭和十年十一月海軍一等兵曹に任ぜられ同年十一月勳八等瑞寶章を賜はつた。此の間軍艦山城、赤城、金剛及驅逐艦樺等に勤務し同十二年五月服役延期解除となり豫備役に編入せられ歸郷後は家業に従事してゐた。

今次事變勃發し間もなく充員召集を受け昭和十二年八月横須賀海兵團に入團した。同年八月十三日上海に於て日支開戦



となるや上海海軍特別陸戰隊附となり土師大隊則内中隊金崎指揮小隊に屬し同大隊長指揮の下に勇躍征途に就き八月十九日深更上海に著し大連碼頭に上陸して宿營し翌二十日午後一時、上海海軍特別陸戰隊本部に至り總豫備隊となつた。越えて二十二日午前八時所屬大隊は竹下大隊と交代し東部支隊長の指揮下に入り東部支隊中央第一線として華德路、滙山路の線に陣地を占領し大隊本部を公大第二社宅に置き佐藤、則内兩中隊は各其の本部を滙山公園北側及上海紡第五工場に定め各所要地點に陣地を占領して守備に就き直ちに陣地構築作業に著手した。聽て敵は我が大隊各陣地に對し逆襲に轉ずるもの如く敵の銃砲火は漸次熾烈となつた。我亦陣地構築半にして之に應戦するの止むを得ざる状況となり彼我の銃砲聲は殷々轟々雷の如く濛烟天を蔽ひて物凄き光景となつた。就中第五陣地は戦闘最も激烈を極め砲弾は到る所に落下炸裂し死傷者は生じ電話線は切斷せられて通信連絡杜絶し其の苦戰言語に絶するものがあつた。

氏は上海上陸以來砲煙彈雨の下に通信員として通信機關の整備調査に活躍し克く其の任を全うしてゐたが第五陣地激戦の爲め電話線は切斷せられ通信不能に陥つたので氏は小隊長より之が修理の命を受け部下一名を率ゐ午後八時四十五分夜

陰に乗じ敢然華德路ルナパーク陣地附近迄潛行したが忽ち三方より敵の猛烈なる十字火を浴せられて進出困難となり暫く身をひそめて待機してゐたが敵火の稍衰へたるを見るや忽ち飛鳥の如く突進し目指す第五陣地に到達した。此時該陣地は激戦中であつたが氏等は降り布く彈雨を知らざる如く沈著勇敢故障箇所の復舊に努め本部との通信連絡を完成し將に歸路に就かんとせし刹那氏は敵機銃の猛射を受け遂に其の場に昏倒した。午後十一時に至り敵を撃退して小康を得たので戦友直ちに駆け寄つて之を收容介抱せんとしたが既に事切れてゐた之を見た戦友は無言の裡に黙禱をささげ其の眼には玉の如き露が光つてゐた。其の後陸戰部隊は赫々たる武勳に依り時の第三艦隊司令長官より感狀を授與せられた。之實に氏等の勳功に依る所大なりと謂ふ可きである。

氏は今次上海戦に参加するや通信員として敵彈雨注の中を活躍し冷靜沈著克く通信機關の整備に奮闘し遺憾なく其の任を完うして味方の戦闘に貢獻する所甚大であつた。斯くの如く彈丸雨飛の眞直中にありて平然として克く與へられたる作業に従事することは猪突敵陣に赴くよりも寧ろ一層の難事にて眞の勇者にして始めて成し遂げ得らるるのである。氏の如きは眞に豪勇の士と云ふ可く、其の勇敢なる行動と犠牲的精神は天晴れ皇國軍人の精華を發揮したるものと云ふ可きである。參戰幾何ならずして斯かる忠烈の士を喪ひたるは洵に痛惜の極みなるも其の赫々たる武勳は芳名と共に長へに海軍戦史を飾り、不滅の英魂は靖國の神と祀られ神靈尙も皇國を護り又一家の前途に尊き加護佑助を垂るるであらう。

因に氏の父は陸軍々人として日露戦役に従軍して功を樹て次弟勇貴氏は海軍一等兵曹、次の二弟光貴、武貴兩氏は海軍水兵として何れも現在海の護りに就いて活躍中にて一家より父子五人の軍人を出したる名譽の家である。

氏は戦死の日海軍兵曹長に任ぜられ次で功六級金鷄勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍兵曹長勳七等功六級 高松勝孝

陸軍揚陸掩護に奮戦武勳を奏し惜しくも吳淞敵前上陸戦に斃る

氏は和歌山市關戸町の人にして父を久八、母を春枝といひ明治四十一年一月八日に生れ妻榮との間に貞春、園枝の一男一女を擧げた。性温厚篤實にして義務心厚く事に當りては不屈不撓初志を貫徹せざれば已まざる氣概を有し業務に熱心精勵且兩親に對し克く孝養を盡し弟妹を愛撫し家庭頗る圓滿にして近隣の風評極めて良好であつた。大正十一年三月同市雜賀高等小學校を卒業し、在學中は其の成績優秀にして常に首席を占め郡内模範兒童として表彰せられたとの事である、其後は家に在りて農業に従事し大正十四年六月志願兵として吳海兵團に入團して忠實業務に精勵し其の努力の功空しからず昭和三年五月海軍砲術學校普通科砲術練習生教程を同六年七月同校高等科砲術練習生教程を同九年五月同校特修科砲術練習生教程を卒業し同年同月累進して海軍一等兵曹に任ぜられ軍艦神通乗組となつた。此の間軍艦平戸、矢矧、那珂、天龍及扶桑等に勤務し、同九年三月勳八等瑞寶章を更に同年四月昭和六年乃至九年事變の功に依り勳七等瑞寶章を賜はつた。

昭和十二年七月北支に事變勃發以來氏は軍艦神通乗組員として陸軍輸送船團護衛の任務に服してゐたが、八月十三日遂に上海に於て日支開戦となり同地にある我が海軍陸戦隊は數十倍の大敵と相對峙して連日激戦を交へ悪戦苦闘旬日に互り克く其の守備線を守り租界の安全を確保してゐたが、上海に於ける形勢は益々重大を加へ其危険は日毎に増大するの傾向を生じ遂に陸軍を派遣せらるる事となり氏の乗艦神通は其の先遣部隊の一部の輸送並に護衛の命を受け驅逐艦數隻と共に八月二十日内地を出發して上海に向け急航した。二十三日午後一時十分艦は揚子江の假泊地を出發し同九時三十八分揚陸地點吳淞鐵道棧橋附近に到着し、直ちに陸軍部隊の揚陸を開始した。當日午前三時海軍陸戦隊竹下部隊及陸軍部隊若干は第一回及第二回上陸部隊として既に敵前上陸を決行し、鐵道棧橋附近を占領して敵を鐵道橋外に驅逐して對戦中であつた

が當時吳淞鎮方面には鐵道棧橋を中心として殘敵至近の距離一帯に抵抗線を築き、特に朱家濱附近には相當有力なる砲兵陣地あり又浦東方面からも敵歩兵の攻撃を受ける等寸時も偷安を許さざる情勢であつた。棧橋横付後、艦は附近兩岸より敵の狙撃を受けること十數發に及び更に午前十時半頃に至り吳淞、朱家濱の敵野砲陣地より猛烈なる砲撃を受け凄まじき唸りを發して飛來する砲弾は頻々として艦の附近に落下し、轟然たる爆音と共に土砂高く空に上り、其の弾片は砂塵と混じて雨霰の如く降り注ぎ危険云ふ計りなし時恰も陸軍部隊の揚陸作業中であつたので、艦は時を移さず其の艦尾砲を以て



之に應戦し、交戦約三十分にして敵を沈黙せしめた。此の砲撃に際し氏は艦尾砲旋回手として該野砲陣地に猛砲撃を加へ、平素練磨の伎倆を示すは此時ぞと其の適確なる照準發射に依り初弾を以て早くも敵の堅固なる陣地を粉碎し之を壊滅したのであつた。午後三時三十七分艦は揚陸掩護の任務を終了し、黃浦江を下江するに際し吳淞鎮附近の黃浦江左岸にある敵の攻撃氣勢旺盛なるを認め之を制壓せんと、同四時三十四分より二回に互り主砲の齊射を行つて敵の塹壕を破壊した。然るに初弾發放直後に後方の敵野砲陣地より飛來する砲弾は氏等の砲側に命中炸裂し無念其の弾片は照準發射中の氏の顔

面及び頭部に命中し鮮血四邊を眞紅に染め壯烈なる戦死を遂げた。氏は身體頑健にして克く職務に精勵し部下の指導亦極めて適切にして先任下士官として申分なく將來有爲の下士官として大に囑望されてゐた。今次事變勃發するや軍艦神通乗組員として陸軍輸送船團の護衛に任じ暑熱に抗し風濤と闘ひ克く其の任務を全うした。殊に吳淞敵前上陸に際しては奮戦克く陸軍揚陸掩護の重任を全うし次で敵陣地の砲撃に奮闘し以て

敵に壊滅的打撃を與へた。其の勇敢なる決死的奮闘は眞に死生を超越し一意其の重責完遂に邁進せんとする純忠至誠の發露と謂ふ可きである。參戰劈頭斯かる忠烈の士を喪ひたるは洵に痛惜の極みなるも其の赫々たる武勳は永へに海軍戦史を飾り芳名は千載に薫り不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬の的たる可く神靈尙も皇國を護り又一家の前途に尊き加護佑助を垂るるであらう。

因に氏の兄茂一氏は今次事變に應召し張鼓峯事件及南支上陸戦に参加し武勳を奏して歸還し弟佳三氏亦陸軍現役兵として目下中支方面に活躍中にて尙ほ父久八氏も日露戦役に従軍した勇士である。

氏は戦死の日海軍兵曹長に任ぜられ次で功六級金鵄勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍兵曹長勳七等功六級 田中初一

將校斥候に加里敵情偵察中惜しくも上海大康社宅附近に斃る

氏は山口縣熊毛郡阿月町の人にして父を佐太郎、母をシヲといひ、明治四十三年一月一日に生れ妻帯してゐたが目下は家庭の都合に依り離籍となつてゐる。性温厚篤實にして義務心厚く兩親に對しては孝養を盡し克く弟妹を愛撫し又世人にも親切にして模範青年として郷黨の風評良好であつた。大正十三年三月阿月小學校高等科を卒業し直ちに吳海軍工廠造機部製圖見習工に採用せられ勤務してゐたが同年九月病氣のため歸郷して靜養しつつ農業を手傳つてゐた。翌十四年八月阿月酒株式會社の店員となり勤務の傍ら海軍軍人を目指して勉學し昭和三年其の宿望を達し同年六月志願兵として吳海兵團に入團し誠實軍務に精勵し後海軍砲術學校普通科並に高等科砲術練習生教程を卒業し果進して同十一年十一月海軍一等兵曹に任ぜられ、更に海軍砲術學校特修科砲術練習生教程を卒業した。此の間軍艦淺間、神通上海海軍特別陸戰隊及吳海兵

團等に勤務し同十二年七月吳鎮守府特別陸戰隊附となつた。尙ほ氏は昭和六年乃至九年事變の功に依り勳八等瑞寶章を賜はつた。

昭和十二年七月北支事變勃發以來中支方面の風雲亦急を告ぐるや氏は吳鎮守府特別陸戰隊安田部隊小泉中隊植村小隊に屬し先任分隊下士官として七月二十九日以來旅順に進出し待機してゐたが、八月十三日遂に上海に於て日支開戦となり彼我の間に激戦が展開せられ、我が軍寡兵頗る苦戦に陥るに及び所屬部隊は命に依り上海特別陸戰隊増加部隊として八月十

七日勇躍旅順を出發し十八日上海に到着した。翌十九日午前九時三十分大阪商船瀨山碼頭に上陸し同地海軍特別陸戰隊司令官の指揮下に入り直ちに東部租界第一線に配備せられ部隊本部を東部日本小學校に定めた。

此時所屬小隊は東華紡より東に向ひ引翔港鎮の敵の便衣隊を掃蕩しつつ進撃し同日正午大康社宅西側に進出し陣地を構築して守備に就いた。當時敵は當方面に攻撃の重點を指向した時機であつたのと同陣地は市政府より東部租界に通ずる幹線道路に接してゐる地區であつたので、爾來敵の大部隊は市政府方面から猛攻を繰り返して我



に肉薄して來るので氏等隊員は全員一致協力、敵をして一步も租界内に侵入せしめずと死力を盡して敵に猛烈なる反撃を加へて之を撃退した。又附近一帶には敵の便衣隊が其の跳梁を恣にするので、之が絶滅を期す可く其の巢窟を掃蕩し或は敵の據點家屋の焼打を敢行して射界の清掃を行ひ、或は又敵機の空爆と敵の銃砲火を冒して陣地の構築強化に活躍する等連日灼くが如き炎天の下汗みどろ泥まみれとなり寡兵克く我に十數倍の大敵と對峙して激戦を交へ常に之を撃退して敵を

制壓してゐた。

越えて二十六日氏は選ばれて植松小隊長指揮の將校斥候に加り、我が陣地北方約二千米の楊家濱部落赤屋根附近の敵の主陣地偵察を命ぜられ、午前十時小隊長指揮の下に部下分隊員を率ゐ勇躍陣地を出發し同四十五分我が陣地前方約千七百米の敵第一線陣地を突破し更に前進して楊家濱部落に潛入し小敵を掃蕩して尙も躍進を続け同五十分同部落を通過し附近の小堆土に據りて敵情を偵察するに前方約二百米赤屋根の東西線一帶に鐵條網を以て圍繞してゐる敵の主陣地がある事を發見し氏は尙も部下を督勵して詳細に敵情偵察に當つてゐたが遂に敵に發見せられ忽ち敵の猛射を浴びせられた。同十一時頃氏は右側に據つてゐた敵兵の狙撃を受け其の一弾は無念！氏の頭部を貫通し遂に其の場に壯烈なる戦死を遂げた。

併し氏等の奮戦と尊き犠牲に依り其の後陸戦隊は時の第三艦隊司令長官より光輝ある感状を授與せられた。

氏は今次上海戦に参加するや、上陸後直ちに東部租界大康社宅附近の最前線に進出し連日有ゆる危険困苦を克服し衆敵と對峙して激戦を交へ勇戦敢闘克く其の任務を全うし以て我が軍戦勝に多大の寄與貢獻をなした。是れ即ち献身以て君國に報じ一意其の職責完遂に邁進せんとする純忠赤誠の發露にして天晴れ皇軍精兵の鑑とす可きである。參戦旬日を出ずして斯かる忠勇義烈の士を喪つた事は洵に痛惜の極みであるが、氏が死闘奮戦して樹てた赫々の武勳は燦として永へに青史を照らし芳名は千載に薫りて盡きざる可く、不滅の英魂は靖國の神と仰がれ神靈尙も皇國を護り又一家の前途に尊き加護佑助を垂れ給ふことであらう。

氏は戦死の日海軍兵曹長に任ぜられ次で功六級金鵝勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍兵曹長勳七等功六級 竹内時雄

奮戦部下を督勵して陣地を死守し遂に上海東部租界戦に斃る

氏は姫路市大藏前町の人にして父を幸藏、母をせんといひ明治四十三年五月二日に生れ妻絹子との間に長男正郎を擧げた。性快活眞摯頭腦亦明晰にして義務心厚く常に業務に精勵し諸人の敬愛を受けてゐた。大正十二年三月姫路市船場小學校第一學年修了と共に姫路中學校に入學したが同校第三學年を中途退學の上昭和十四年海軍に志願し同二年六月吳海兵團に入團し爾來奮勵努力して海軍砲術學校普通科並に高等科砲術練習生教程を卒業し累進して同十年十一月海軍一等兵曹に任ぜられた。此の間軍艦矢矧、海軍砲術學校、吳海兵團、軍艦古鷹及球磨等に勤務し、同十二年一月吳海兵團附より轉じて上海海軍特別陸戦隊附となつたが同年五月再び吳海兵團勤務となり同年七月吳鎮守府特別陸戦隊に編入せられた。尙ほ氏は昭和六年乃至九年事變の功に依り勳七等瑞寶章を賜はつた。

昭和十二年七月北支事變勃發以來中支方面の風雲亦急を告ぐるや氏は吳鎮守府特別陸戦隊安田部隊に屬し七月二十九日以來旅順に進出し待機してゐたが、八月十三日上海に於て日支開戦となり彼我激戦を交へ同地にある我が海軍陸戦隊は寡兵頗る苦戦に陥るに及び所屬部隊は命に依り上海海軍特別陸戦隊増加部隊として八月十七日急遽同地を出發し翌十八日上海に到着し直ちに上陸して同地特別陸戦隊司令官の指揮下に入り東部租界守備の任に就いた。

氏は同部隊種口大隊武田中隊永井小隊に屬し分隊下士官として中部地區第一線に配せられ氏の分隊は甯國路上東華紡西南側に陣地を構築し、同夜は陣地未完成の裡租界線を突破せんとして攻撃し來る優勢なる敵と交戦し激戦數時間にして天明に至り遂に之を撃退した。翌十九日氏の陣地前方數戸の家屋には便衣隊頻に出沒して我を狙撃し、剩へ同家屋は我が射界を妨げるので小隊長は之が焼拂ひを命じた。小隊長の命令一下氏は部下二名を提げ敵火を冒して突進し、最初の家屋

に突入して之に火を放ち次の家屋に移らんとするや、忽ち敵の狙撃を受けたので氏は部下に注意を與へつつ一計を案出し自分の鐵兜を脱いで之を窓際に置いたが果して敵は之に向つて銃火を集中して來たので氏は其の際に乗じ三人手分けして隣の家屋に放火した。斯くて氏の奇計功を奏し一人の犠牲者もなく該家屋を完全に焼拂ひ爾後の我が戰鬪を有利に導くを得たのであつた以後連日に互り晝間は屢々來襲する敵機の空爆に曝されつつ部下分隊員を指揮督勵して、銳意陣地の構築並に強化作業に活躍奮闘し日没後は我に數倍の敵と激戦を交へて奮戦に奮戦を續けてゐた。



越えて二十二日夕刻に至るや氏は夜戦の諸配備を完了して警戒を嚴にしてゐたが、午後九時頃より敵軍得意の青や赤の信號彈を打ち揚げて蠢動し始めた。屹度敵の逆襲ならんと、我は益々警戒を嚴にし満を持して待つてゐたが翌二十三日午前一時頃に至るや果然敵は我が前方二百米に近迫して猛射を浴びせて來た。氏は逸る部下を制しつつ一發も射たしめず思ふ存分敵を引寄せて後、頃はよしと計り一齊に射撃を開始し機銃小銃全火力を擧げて、銃身も灼けん計りに之に猛射を浴びせかくれば敵の斃るるもの數知れず。此の間敵機亦來襲し其の轟音は彼我の銃聲と共に耳も聾せん計りであつた。されど氏は沈著大膽敵を撃滅するは此處ぞと計り、部下を叱咤激勵し自らも銃を執り射つて射つて射ちまくり死力を盡して奮戦してゐたが同二時三十分飛來せし敵の一彈は無念に氏の胸部に命中した。剛毅の氏は更に屈せず尙も部下を督勵して射撃を繼續中、又もや一彈其の胸部に命中し遂に其の場に壯烈なる戦死を遂げた。併し氏の奮戦と尊き犠牲に依り部下分隊員は、分隊下士官の仇討とばかり奮戦力闘數時の後遂に此の頑敵を撃退して陣地を確保し得たのであつた。

其後陸戦隊は赫々の武勳に依り時の第三艦隊司令長官より譽れの感狀を授與せられた。

氏は細心綿密にして職務に對しては極めて熱心常に研鑽を怠らず部下の指導亦懇切を極め上下の信望厚く大に將來を囑望されてゐた。今次聖戰に従ふや上海に上陸間もなく東部租界中央地區の第一線に配せられ彈雨の下敵機の空爆に曝されつつ連日連夜不眠不休にて奮戦力闘克く其の任務を完遂した。殊に八月二十三日の戰鬪に於ては早曉より敵の大部隊と激戦を交へ其の壯烈果敢の行動は眞に鬼神を泣かしむるものがあつた。壯烈斯くの如きは眞に生死を超越し一意其の職責完遂に邁進し斃れて後已まんとする純忠赤誠の發露にして天晴れ皇軍精兵の鑑とす可きである。參戰幾日ならずして氏の如き忠烈の士を喪ひたるは洵に痛惜の極みである。併し一死以て君國に報ゆるは武人の本懐にして氏亦夙に之を期せし所も其の赫々たる武勳と一死奉公の芳名は千古に薫り永へに海軍戰史に輝きて後進を振起せしむ可く、不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬の的たる可し氏亦以て瞑可きである。而して神靈尙も皇國を護り又一家の前途に尊き加護照覽を垂れ給ふことであらう。

氏は戦死の日海軍兵曹長に任ぜられ次で功六級金鵄勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍兵曹長勳七等功六級 松本藤男

勇戦敢闘武勳を樹て惜しくも上海滙山路に斃る

氏は兵庫縣出石郡資母村の人にして亡父を彌太郎、母をちかといひ明治四十二年三月六日に生れ亡妻みどりとの間に一女茂子を擧げた。性温良にして動作活潑、家庭圓滿にして近隣の風評頗る良好であつた。大正十二年三月資母小學校高等科を卒業し其後は農業に従事する傍農業補習學校に通學してゐたが大正十五年六月志願兵として吳海兵團に入團し終身海

軍に奉公す可き希望を以て誠實軍務に精勵し昭和三年五月海軍砲術學校普通科砲術練習生教程を卒業し驅逐艦江風、菊、白雲、軍艦扶桑、長鯨及韓崎等に勤務し累進して同十年十一月海軍一等兵曹に任ぜられ同十二年四月現役満期となり歸郷し大阪湯淺蓄電池商會高槻工場守衛となつて勤務してゐた。

昭和十二年七月北支事變勃發以來、中支方面の風雲亦急を告ぐるや氏は應召し同年八月吳海兵團に入團した。八月十三



日遂に上海に於て日支開戦となるや上海海軍特別陸戰隊増加部隊に編入せられ同隊士師大隊佐藤中隊吉武小隊に屬し分隊下士官として同月十七日勇躍内地を出港し同月十九日深更上海大連碼頭に上陸して附近の警戒に任じ翌二十日午後一時上海特別陸戰隊本部に集結し同地陸戰隊司令官の指揮下に入り總豫備隊となつた。二十二日午前八時所屬大隊は竹下大隊と交代し東部支隊長指揮の下に東部支隊中央第一線として華德路滙山路の線を占領し大隊本部を公大第二社宅に置き所屬中隊は其の本部を滙山公園北側に定め各隊を所要地點に配置して直ちに陣地構築に著手した。應て優勢なる敵は我が陣地向つて潮の如く襲來し敵の銃砲火は愈々熾烈となつた。我は陣地構築未完成の儘之に應戦するの止むを得ざる狀勢となり彼等の銃砲聲は股々として天地を震撼し悽慘なる光景を呈した。されど氏等隊員は之を物ともせず奮戦克く敵を制壓して陣地を確保してゐた。翌二十三日午前九時五十五分中隊本部前面の支那人家屋に潛伏してゐた敵約百數十名を發見した。指揮小隊及當時中隊本部に待機してゐた豫備隊たりし氏の小隊は此の敵に對し猛射を浴せかけたが暫くにして敵は我が突撃を恐れて同家屋に放火した。而して尙ほ約五十名ばかりの敵は隣接家屋の周壁に銃眼を穿ちて盛に本部に向つて射撃し

て來た。そこで中隊長は時を移さず之が掃蕩を開始すると同時に一部のものに本部陣地の補強を命じた。此の時分隊下士官たりし氏は部下を率ゐ掃蕩隊に加り雨霰の如く飛來する敵弾下を勇敢に突進した。然るに吉武小隊長先づ傷つき倒れたが氏は部下を敵の蟠踞する家屋に迫り鐵板を以て敵の銃眼を穿つた陣地破口を塞がんとした瞬間、敵の投じた手榴彈のたぬ不幸氏以下數名の重傷者を出した。併し剛氣の氏は全身鮮血に塗れながら敢然として銃劍を振つて家屋内に突入し縦横無盡に突き捲り部下又之に續いて奮戦遂に敵は敗走し始めし時無念！氏は又もや敵の機銃弾を肩胛部に受け其の場に控と打ち倒れた。戦友駈け寄つて直ちに介抱し手當の上病舎に收容して種々醫療を加へられたが重傷後尙奮闘せし爲出血多量遂に翌二十四日從容として名譽の戦死を遂げたのであつた。斯くて所屬隊及氏等の奮戦と尊き犠牲に依り戰闘約一時間にして遂に敵を撃退して陣地を確保し得たのであつた。

氏は今次聖戦に参加するや上海に上陸間もなく東部租界中央第一線の激戦に奮闘し寡兵克く衆敵を撃攘し身に重傷を負ふも尙ほ之に屈せず勇戦敢闘以て其の任務を全うし遂に聖戦の礎となつて散華した。其の烈々燃ゆるが如き闘志は天晴れ皇國軍人の面目躍如たるものがある。是れ畢竟生死を超越して専心其の任務完遂に邁進せんとする純忠赤誠の顯現と謂ふ可きである。參戦間もなく斯かる忠烈の士を喪ひ今や其の壯容に接す可くもなく眞に痛惜の極みである。併し其の赫々の武勳と一死報國の芳名は永へに海軍戦史に輝き、不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬の的たる可く神靈尙も皇國を護り又一家殊に只一人の遺兒の前途に尊き加護佑助を垂れ給ふであらう。

氏は戦死の日海軍兵曹長に任ぜられ次で功六級金鷄勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍整備兵曹長勳七等功六級 増山 傳

壯烈渡洋爆撃に奮戦して武功を樹て惜しくも揚州東方に玉碎す

氏は福島縣安達郡二本松町の人にして亡父を熊吉といひ、明治四十一年八月に生れ未だ獨身であつた。性温厚篤實にして進取の氣性に富み武道に長じ劍道三段の伎倆を有してゐた。大正十年三月郷里の小學校を卒業し中學校に入學したが在學中家政の豊ならざるを見海軍に志願し大正十五年六月横須賀海兵團に入團し爾來忠實軍務に勵み後霞ヶ浦海軍航空隊普通科航空工術練習生教程を次で又高等科整備術練習生教程を共に優良の成績を以て卒業し累進して昭和十年五月海軍一等整備兵曹に任ぜられた。此の間横須賀、霞ヶ浦、館山及第一の各航空隊、軍艦青葉、鳥海及横須賀海兵團等に勤務し同十二年七月木更津海軍航空隊附となつた。

昭和十二年七月北支に事變勃發するや氏は聯合航空隊に編入せられ第三艦隊附屬となり八月上旬以來九州方面前進基地に進出し待機してゐたが八月十三日上海に於て日支間に戦闘開始となるや翌十四日より敵飛行機は屢々上海上空に飛來し我が陸戦隊本部、戦線部隊、旗艦出雲、其の他の海軍艦艇等は勿論各種重要建物又は商業地區、旅館等に對し所嫌はず盲爆撃を行ひ以て自國民及第三國民等幾多無辜の人々を殺傷するの暴舉を敢てし全上海市民怨嗟の的となつた。恰も其の當時颯風は上海沖に停滯し海上風浪高く何時鎮まるとも測り知れざる光景に我が海軍航空隊は陸戦隊の苦戦と敵機の跳梁を耳にし義憤に燃えつつ骨肉の歎を漏らしてゐたが同日午後に至り遂に待望の進撃命令が發せられた。もはや荒天何のその氏等決死の海軍航空隊將兵は感奮興起、猛鷲の羽搏き物凄く上海沖にゐた艦船水上機隊は眞先に激浪を蹴つて離水し上海附近の敵飛行場を襲つて大格納庫を爆破したるを手始めとし陸上及艦上攻撃機隊は嵐を衝いて長驅渡洋爆撃を敢行し敵航空兵力の各重要據點に有效なる巨弾を浴びせ茲に支那空軍殲滅の幕は切つて落された。

當時氏は整備員として基地にあり日夜不眠不休渾身の努力を傾注して飛行機の整備完成に活躍し以て搭乗員の戦闘に遺憾なからしめてゐた。氏は未だ一回も戦闘に参加せず基地に於て战友の奮戦の様を耳にしては肉躍り血湧くの思をしてゐたが八月二十一日に至るや待望の命令は發せられた。氏は曾我少佐の指揮する陸上攻撃隊に屬し吉田隊長機搭乗員として揚州飛行場爆撃の命を受けた。命令一下欣喜雀躍忽ち機上の人となり僚隊入佐隊と共に午前二時二十分勇躍基地を進發し皎々たる満月を銀翼に浴び雲海を下に見つと一路東支那海を翔破して支那大陸に躡進した。午前四時四十五分支那大陸上空に差しかかつた。折柄月は没し暗黒と雲霧のため所屬隊は何時しか入佐隊と分離した。其後氏の隊は僚隊との連絡全く絶え杳として其消息を知る事が出来なかつた。入佐隊は雲霧のため揚州を發見する能はず午前六時十五分浦口爆撃を敢行して歸還の途中時恰も日出に近く漸く地物を辨別するを得るに至り揚州飛行場を發見したが既に吉田隊は同飛行場を爆撃したるものの如く場内には約十機の敵機二列に並び其の中央に數ヶ所の爆弾々痕と其の内三機は盛に炎焼し他は大破せるを確認した之れ吉田隊奮戦の戦果である事は明らかである。入佐隊と分離後行衛不明となつた氏の隊は地上指揮官との連絡亦断絶し基地に於ける隊員一同は其の成功を祈りつつ憂慮して待つてゐたが遂に正午に至るも歸還せず之を入佐隊の目撃状況から考察するに氏の隊は目ざす揚州飛行場を爆撃し多大の戦果を收めたが多數の敵戦闘機と猛烈なる空中戦を演じ孤軍奮闘敵弾のため火災を起し遂に敵地に墜落の運命を迎つて愛機諸共に隊長以下隊員悉く壯烈なる戦死を遂げたものと認定せられた。併し氏等の奮戦と尊き犠牲は我が空軍の制空權掌握の端緒を拓き爾後の戦闘を有利に導くを得たのであつた。

氏は常に黙々として職務に盡瘁し其の勤務振り抜群にして有爲の下士官として上下の厚き信頼を受けてゐた。今次事變に際會するや前進基地にありて専ら飛行機の整備に全力を注ぎ以て攻撃機員の戦闘に支障なからしめ次で揚州飛行場爆撃に参加し勇戦奮闘敵の重要軍事施設並に地上敵機多數を爆破し遂に行方不明となり愛機と共に壯烈なる戦死を遂げたもの

と認定せられた。其の勇敢なる行動と獻身報國の赤誠は天晴れ我が空軍將兵の鑑とす可きである。參戰一週日而も初陣に於て氏の如き忠烈の士を喪つた事は洵に痛惜の極みである。氏今や瞑すと雖も其の赫々たる武勳は永へに我が空軍戦史に垂れ芳名は千古に薫りて埋れず、不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬の的たる可く氏死して亦餘榮ありと謂ふ可きである。而して其の神靈は尙も皇國を護り又一家の前途に尊き加護佑助を垂るるであらう。

尙ほ氏は遺書として叔父宛左の如く記して其の堅き決意を披瀝してゐる。

小生儀存命中は格別の御世話様に相成り厚く御禮申上候

海行かば水漬く屍山行かば草むす屍

大君の邊にこそ死なめ願みはせじ

是れ武人の常に本懐とする所何卒今回の殉職を御喜び被下度候今後兄弟達を一層御面倒の程よろしく御願申上候

又兄弟宛遺書には氏の戦死後に於ける御下賜金、藏書、墓石、葬儀等の諸事に至る迄細かに記して兄弟を激励し家運の挽回を計られ度き旨記述してあつた。

氏は戦死の日海軍整備兵曹長に任ぜられ次で功六級金鷄勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍航空兵曹長勳七等功五級 藤岡 與

累次空中戦に偉勳を樹て惜しくも上海方面上空に散華す

氏は愛媛縣温泉郡東中島村の人にして父を義太郎、母をヨシといひ明治四十四年十月十三日に生れ妻を房子といふ。性温厚著實頗る明朗にして豪膽の人であつた。又孝心深く賜暇歸省の際は先づ村の氏神に詣り又先祖の展墓をした後我が家

に入りて両親を慰むるを例とし克く弟妹を愛護善導し而も村人に接するに慇懃を極め模範青年として賞讃を受けてゐた。大正十五年三月東中島小學校高等科を卒業したが在學中は成績優秀で常に首位を占めてゐた。其後は家業の手傳ひをなす傍獨學勉勵し昭和二年六月志願兵として佐世保海兵團に入團し水兵となり後海軍水雷學校普通科電信術練習生教程を卒業して軍艦足柄艦裝員附となり次で軍艦陸奥、呂號第三十二潛水艦等に勤務し後更に海軍通信學校高等科電信術練習生教程を卒業して佐世保海軍電信勤務となり同八年十月通信檢定に優等の成績を得て賞狀及通信優等章を授與せられた。後又横

須賀海軍航空隊偵察練習生教程を卒業して航空兵に轉じ佐世保海軍航空隊附、軍艦那智乗組等を経て同十一年五月海軍一等航空兵曹に進み同年十月航空檢定に優等の成績を得て賞狀及航空優等章を授與せられ同年十一月軍艦川内乗組となつた。

昭和十二年七月北支に事變勃發以來氏の乗艦川内は第三艦隊附屬となり事變の進展に即應す可く上海方面に出動してゐた。八月十三日上海に於て日支開戦となるや翌十四日より敵飛行機は上海上空に飛來し陸戦隊本部、旗艦出雲其他の我が艦艇等は勿論各種重要建物及商業地區、旅館等に對し所嫌はず盲爆撃を行ひ以て自國民及第三國民等幾多無辜の人々を殺傷するの暴舉を敢てし全上海市民怨嗟の的となつた。恰も當時は東支那海を北上中の颶風があり上海方面は暗雲低迷し海上は風浪高く爲に港外の我が海軍航空隊は出動を阻まれ陸戦隊の惡戰苦闘と敵機の跳梁を耳にし義憤に燃えつつ體肉の歎を漏らしてゐたが同日午後に至るや待望の進撃命令は發せられた。もはや荒天何のその氏等決死の海軍航空隊將兵は感奮興起猛鷲の羽搏き物凄く上海在泊中の川内艦載水上機は敢然起つて驕慢なる敵機を邀撃して之



を蹴散らし更に虹橋飛行場を襲つて其の大格納庫を爆破して多大の戦果を収め茲に支那空軍殲滅の幕は切つて落された。

此日既に川内機は飛行場爆撃の際機體に數發の敵弾を受け急いで修理中であつたが同日午後四時十六分第三艦隊司令長官より「出雲機及川内機は直ちに發進對空警戒に任せよ」との命令が下つた。そこで川内では直ちに準備を整へ氏は偵察員として森澄夫三空曹の操縦する水上機に搭乗し午後四時二十七分勇躍激浪を蹴つて離水し其の任務に就いた。同五時十分折柄の密雲を衝いて、敵ノースロップ型輕爆撃機六機とカーチスホーク三型戦闘機三機が上空に現はれて爆撃を開始した。我が陸戦隊の防空陣地並に在泊艦艇から一齊に防空砲火を開き其の砲聲、爆音は天地を震撼させた。當日は悪天候で視界極めて狭かつたので氏の機は本艦から通信に依つて敵來襲の方向を教へられ急速其の方向に向つて躡進するや果然左下方に敵のカーチスホーク型戦闘機一機を發見した。氏は操縦員に令し電光石火の如く其の後尾上空五十乃至百米に肉薄して猛射を浴びせた。敵は此の奇襲に狼狽して逃走を企てたが我が急追に抗し得ず交戦五分にして忽ち黒煙を吐いて眞茹附近に墜落した。此の空戦の状況は我が艦艇及同胞の間にも手に取るやうに望見せられた。見よ唯一機に追ひ散らされたあの支那飛行機隊を、地上の同胞も艦上の皇軍も思はず萬歳を叫んで感激に泣いた。正に百萬の援軍を得た心地、全軍の士氣は爲に愈々振つた。同機は歸途更に敵ノースロップ型爆撃機六機に遭遇し單機で敢然之に挑戦したが戰意なき敵は忽ち其の高速を利用して密雲の中に遁走した。氏の機も既に彈藥が盡きたので再び歸途に就き午後六時五分凱歌を擧げて無事歸艦した。後で調べて見ると機體に敵弾が約十發命中してゐた。此の緒戦に於て氏等の水上偵察機が孤軍奮闘敵機を撃墜した事は全軍の士氣を昂揚し其の精神的效果は極めて大なるものがあつた。依つて其後第三艦隊司令長官より榮えある感狀を授與せられた。

氏は其後數回に互り敵の飛行場及陣地等の偵察及爆撃に参加し其都度勇戦力闘克く其の重任を果して多大の戦果を収めた。同月二十日には杭州灣北岸の松江驛を爆撃し鐵道線路を破壊して列車を銃撃した際敵彈で左足趾に輕傷を負つた。其

後は本艦に於て陸軍部隊の輸送及敵前上陸掩護等の作戰要務に服し活躍奮闘を續けてゐた。

越えて九月四日氏は敵地偵察及瀏河鎮爆撃の後泊地上空直衛の任に就く可き命を受け平山一空曹の操縦する水上機に搭乗し午後零時五分勇躍母艦を進發し獅子林砲臺附近より羅店鎮を経て七了口方面の偵察を終り瀏河鎮の敵陣地を猛爆して敵に多大の損害を與へ午後零時四十五分泊地上空直衛の任に就き同方面上空直衛中の我が艦上戦闘機二機と共に高度三千五百米で警戒中敵の戦闘機數機が突如密雲の中から襲撃して來た。敵を見ては後を見せぬ我が海鷲機、氏等は我が戦闘機と協力し時を移さず之に應戦し茲に壯烈なる空中戦が展開された。見敵必墜の我が海鷲魂は火と燃え盛り奮戦忽ち其の一機を射落した。殘る敵機は我が猛威に恐れをなし一目散に雲中に逃げ去つた。氏は此の戦闘で不幸敵彈を右腕及胸部に受けた。剛氣の氏も其の致命の重傷に堪へ難く無念の一語を残し機銃の引鐵を握りしめた儘遂に壯烈なる戦死を遂げた。時に午後一時四十分であつた。此の時機體には數發の敵彈を受けてゐたが同乗の平山一空曹は悲憤の涙を打ち拂ひ勇猛果敢敵機を追ひ散らしつつ歸途に就き傷き倒れた氏を載せて母艦に悲しき凱旋をした。

氏は海軍出身以來賜暇歸省の際には必ず其の出身小學校に舊師を訪問し小學生及青年を集めて海軍思想の普及徹底を計り以て後輩の指導誘掖に努め又軍隊に在りては常に致々として軍務に勵み其の技術の研鑽錬磨を怠らず有爲の人物として將來を期待せられてゐた。今次上海戦勃發するや眞先に嵐を衝いて鈍重の水上機單機を以て空中戦を交へ群り來る敵の優秀なる戦闘機及爆撃機を撃攘し尙ほ數回に互る敵陣地の偵察並に爆撃を敢行する等連日息つく暇もなく勇戦奮闘多大の戦果を収め遺憾なく我が海軍機の威力を發揮し聖戰遂行に絶大の寄與貢獻をなした。是れ畢竟生死を超越し獻身以て君國に報ひんとする純忠赤誠の發露にして天晴れ空軍將兵の鑑とす可きである。參戰二週日餘、氏の如き忠勇義烈の士を喪つた事は洵に痛惜の極みである。されど此の空中戦の先陣に馳名を謳はれ全軍の絶讃信頼の的となり歴戦偉勳を奏して護國の神となつたのである。眞に其の死所を得たるものと謂ふ可く以て後進を奮起せしむるに足る。氏今や瞑すと雖も其の忠烈偉

勳は永へに空軍戦史を飾り芳名は千載に薫りて埋れず、不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬の的たる可く氏死して亦餘榮ありと謂ふ可きである。而して其の神靈は尙も皇國を護り又一家の前途に尊き加護佑助を垂れ給ふことであらう。因に弟守氏は陸軍歩兵一等兵で今次事變に應召し第一線に活躍武勳を樹てて歸郷し弟徳藏氏は海軍に志願し現に掌電信兵として海の護りに就いてゐる一家三人の軍人を出した名譽の一家である。

氏は戦死の日海軍航空兵曹長に任ぜられ次で拔群破格の功五級金鷄勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍航空兵曹長勳七等功六級 江田庄三郎

壯烈火達磨となつて敵格納庫を粉碎し廣徳空襲に玉碎す

氏は茨城縣結城郡上山川村の人にして父を彌平、母をしけといひ大正三年二月十九日に生れ未だ獨身であつた。性温厚篤實寡言の人で研究心が旺盛であつた。克く両親を勞はり孝養を盡し又弟妹を愛撫善導し近隣の人にも親切で諸人の親愛を受けてゐた。昭和二年三月上山川小學校高等科一學年を修了し同年四月縣立下妻中學校に入學し同校第三學年在學中海軍に志願し同四年六月横須賀海兵團に入團し水兵となつた。同五年十二月海軍通信學校普通科電信術練習生教程を卒業して電信兵となつたが後航空兵を志望し同八年五月横須賀海軍航空隊偵察練習生教程を卒業と共に海軍一等航空兵となり更に同十一年五月同隊特修科航空術練習生教程を卒業し果進して同十一年十一月海軍一等航空兵曹に任ぜられた。此の間海軍通信學校軍艦長門、金剛、赤城、愛宕、横須賀及館山の各航空隊に勤務し再び横須賀海軍航空隊附となり教員として勤務してゐた。

昭和十二年七月北支に事變勃發し其の餘波は中支方面にも波及し殊に上海に於ける彼我の情勢は日一日と悪化し八月十

三日遂に上海に於て日支間に戦闘開始となるや、間もなく我が海軍航空隊は一齊に起ち上り一舉に敵空軍を撃破して一大打撃を與へて赫々の武勳を奏し爾來息つく暇もなく敵航空兵力の各重要據點を強襲して巨弾を浴びせて敵の心膽を寒からしめた。併し氏は當時横須賀海軍航空隊に勤務中にて未だ一回も出陣の機會を得ず切齒扼腕、髀肉の歎を漏らしてゐたが八月十八日附で軍艦加賀乗組を命ぜられた。當時同艦は上海方面前進根據地にゐたが突然燃料糧食等補給のため同月二十六日佐世保に入港したので同日同艦に乗艦し翌二十七日勇躍同地を出港し上海方面に向つた。



翌八月二十八日に至るや崑山鐵橋爆撃の命が下された。氏は攻撃隊指揮官上敷領清大尉指揮の下に偵察員として指揮官機に搭乘し僚機と共に午前七時二十八分勇躍甲板を蹴つて母艦を進發し一路目的地に向つて奮進した。快翔を續くること約一時間、午前八時二十分目指す鐵橋の上空に達するや各機は指揮官機を先頭に次ぎ／＼に巨弾を投下した。投下爆弾は四發命中して橋梁を大破し敵の輸送路を完全に切斷した。氏等各機は初陣に於て多大の戦果を收め意氣揚々鵬翼を連ねて吳淞及寶山上空の直衛に任じ同十時十二分全機無事凱歌を擧げて歸艦した。

翌二十九日には廣徳飛行場爆撃及長興、蘇州偵察の命を受け氏は再び上敷領大尉指揮の下に偵察員として指揮官機に搭乘し午後三時二十分僚機と共に勇躍母艦を進發した。當日は快晴の飛行日和で松江及長興の敵陣地を眼下に瞰下しつつ快翔を續け午後五時十分頃廣徳飛行場東方に達するや指揮官は此の儘同じ方向から逐次に攻撃するのは不利なるを慮り、隊を二手に分ち場内西側のガソリン庫を攻撃目標とし指揮官直率の一小隊三機は北方から第二小隊の三機は野村航空兵曹長

が之を率ゐて南方から夫々同時に攻撃する様に命じた。そこで指揮官は高度三千二百米から突撃を下命し氏の機は自ら陣頭に立つて急降下爆撃の態勢に轉じ目標に向つて暴進すれば後續列機も之に遅れじと續いて殺到する。之を知つた敵の高角砲陣地からは一齊に防空砲火を浴びせて来る。敵弾は機の周圍に隙間なく炸裂し弾丸の幕が我が行手を遮る。氏は此の彈幕の中にも精細に飛行場を偵察すると十數機の飛行機が竝んでゐるのを發見したので、格納庫内にも未だ多數の飛行機があるに相違ないと判断し、突進し目標を格納庫に變更し之に暴進せんとする刹那高度千八百米附近で氏の機に敵弾が命中した、其の瞬時機は忽ち火焰に包まれて火達磨となつた。指揮官以下氏等はもはや是迄と觀念し火達磨となつた愛機を驅つて爆弾を抱いた儘格納庫目がけて突入自爆した。萬雷の如き爆音と共に該格納庫は木ツ葉微塵に粉碎し、氏等兩勇士は壯烈なる戦死を遂げた。之を見た列機は悲憤の涙を打ち拂ひ復仇の念に燃え克く指揮官の意圖を體して尙格納庫を爆破しガソリン庫に火災を起させ更に場内にあつた重爆撃機一機を粉碎して敵に多大の損害を與へ尙ほ残つた爆弾で松江及寶山を爆撃し午後七時十八分悲しき飛行の後母艦に歸還したのであつた。

氏は海軍出身以來常に其の職責完遂に邁進し克く其の技術の向上發展に努め其の伎倆業に拔んで部下の指導亦適切にして上下の信望極めて厚く有爲の人物として前途を囑望せられてゐた。今次事變に際會し前進根據地に進出するや直ちに偵察員として艦上攻撃機隊指揮官機に搭乗し崑山鐵橋を猛爆して敵の重要交通路を遮斷し次で廣徳飛行場の爆撃を敢行するや敵弾を機體に受けて火災を起し爆弾を抱いて格納庫に突入して之を爆破し愛機と共に肉弾となつて玉碎した。壯絶悲壯斯くの如きは眞に生死を超越し獻身奉公盡忠報國の大信念を具現したるものにして天晴れ空軍將兵の鑑とすべきである。參戰劈頭而も爆撃參加僅かに二回にして氏の如き忠烈有爲の空軍勇士を喪つた事は海軍の爲め洵に痛惜の極みである。されど其の壯烈鬼神を哭かしむる行動は我が海軍空前の壯舉にして其の驍勇は正に中外の耳目を聳動した。武人としては最適の死所を得たものと謂ふべく、以て後進を振起せしむるに起る。氏今や瞑すと雖も其の忠烈偉勳は燦として永へに空軍

戦史を照らし芳名は千載に薫りて埋れず、不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬の的たるべく氏死して亦餘榮ありと謂ふべきである。而して其の神靈は尙も皇國を護り又一家一門の前途に尊き加護照覽を垂れ給ふことであらう。

氏は戦死の日海軍航空兵曹長に任ぜられ次で功六級金鷄勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍航空兵曹長勳七等功五級 赤堀政一

空前の壯舉渡洋爆撃に武勳を樹て惜しくも揚州東方に散華す

氏は静岡縣小笠郡千濱村の人にして父を太作、母をよねと云ひ大正二年九月十五日に生れ未だ獨身であつた。性温順寡黙にして伶俐、而も志操堅實にして率先難事に當り不屈不撓の氣概があつた。亦孝心厚く克く弟妹を愛撫し諸人の親愛を受けてゐた。昭和三年三月千濱小學校高等科を同五年三月私立雙松學舎を卒業したが小學校在學中より常に優秀の成績を収め小學校卒業の際は郡教育會より表彰せられ又雙松學舎在學中も常に「我は金殿玉樓美食を欲するものに非らず唯盡忠報國死して後已まん」と既に海軍出身前より烈々たる報國の念に燃えてゐた。昭和五年六月志願兵として横須賀海兵團に入團し水兵となり誠實軍務に精勵し同年十二月海軍三等水兵に進級と共に霞ヶ浦海軍航空隊附となつた。爾來征空の念禁じ難く日夜寸暇を惜しみて勉學に努め遂に其の宿望を達し、同七年三月同隊操縦練習生教程を卒業して航空兵となつた。後更に横須賀海軍航空隊特修科航空術練習生教程を卒業し果進して同十二年五月海軍一等航空兵曹に任ぜられた。此の間軍艦赤城、霞ヶ浦、館山、横須賀第一の各航空隊に勤務し同十二年七月木更津海軍航空隊附となつた。

昭和十二年七月北支に事變勃發するや、氏は聯合航空隊に編入せられ第三艦隊附屬となり八月上旬以來九州方面前進基地に進出し待機してゐたが、八月十三日上海に於て日支間に戦闘開始となるや翌十四日より敵飛行機は屢々上海上空に飛

來し我が陸戰隊本部、戰線部隊、旗艦出雲其の他の海軍艦艇等は勿論、各種重要建物又は商業地區、旅館等に對し所嫌はず盲爆撃を行ひ以て自國民及第三國民等幾多無辜の人々を殺傷するの暴舉を敢てし全上海市民怨嗟の的となつた。當時颯風は上海沖に停滞し海上風浪高く何時鎮まるとも測り知れざる光景に我が海軍航空隊は陸戰隊の惡戰苦闘と敵機の跳梁を耳にし義憤に燃えつつ進撃命令の降下、今や遅しと髀肉の歎を漏らしてゐたが同日午後に至り遂に待望の命令は發せられた。

もはや荒天何のその氏等決死の海軍航空隊將兵は感奮興起猛鷲の羽搏き物凄く上海沖にゐた艦船水上機隊は眞先きに激浪を蹴つて離水し上海附近の敵飛行場を襲つて大格納庫を爆破したのを手始めとし更に陸上及艦上攻撃機隊は嵐を衝いて長驅渡洋爆撃を敢行し敵航空兵力の各重要據點に有效なる巨彈を浴びせ茲に支那空軍殲滅の幕は切つて落された。



翌十五日平本少佐の指揮する陸上攻撃機隊は南京爆撃の命を受け氏は吉田隊森機操縦員として午前九時勇躍前進基地を進發し帽を振る戰友の姿に感激の眸を輝かせつつ東支那海の怒濤を越え一路支那

大陸へと驀進した。數日來の颯風は猶ほ収まらず翼も折れん許りの難飛行を續け聽て支那大陸の上空に差しかかつた。風雨は益々激しく密雲のため屢々僚機を見失ふ程であつたが其の内雲の間から湖水が見えた太湖の上空らしく其の途端に密雲の中から突如敵戰闘機數機が現れた。隊長機は陣頭に立ち氏等所屬列機は之に續いて敵に肉薄し忽ち壯烈なる空中戦を演じ約三十分激烈なる戰闘の後僚機と共に敵機一機を湖中に撃墜し他の一機を湖岸に不時著せしめた初陣の此の戦果に氏等搭乗員の勇氣は百倍し悠々長江に沿ひ高度二百乃至四百米の編隊で南京に向つて驀進した。間もなく南京胡宮飛行場が

雲間から遙か彼方に現れた。氏等搭乗員の意氣は愈々昂揚して機内は緊張し午後三時十五分南京上空に達し高度五百米の編隊で北方から侵入した。折柄起る敵の地上防空砲火を物ともせず隊長機を先頭に一機又一機密雲を破つて急降下し爆弾投下を開始した。此の時氏等は機長指揮の下に全員一致協力規を定めて胡宮飛行場に爆弾を投下した。忽ち起る轟然たる爆音と共に黒煙天に沖し大型格納庫一棟竝に庫外飛行機數機を爆破した。敵の防空砲火は愈々激しく爆撃終つて飛び上ると小癩にも敵戰闘機七、八機が挑戦して來た。元より空中戦は私の希ふ所茲に南京上空に壯烈なる空中戦が始まつた。見敵必勝の我が海軍魂は火と燃えさかつて忽ち敵機二機を撃墜した。殘る敵機は我が猛威に恐れをなしあらぬ方向へ遁走した。聽て戰闘は終つて歸途に就き再び嵐を衝いて暗夜の大洋を越え其の重き使命を果し凱歌を擧げて基地に歸著した。翌十六日には再び大洋を越えて蘇州飛行場を襲ひ敵の重要軍事施設を爆破した。斯くて氏は前後二回に亘る渡洋爆撃を敢行し其の都度敵の熾烈なる防空砲火を冒し勇戰奮闘敵に甚大の損害を與へて其の心膽を寒からしめた。

越えて八月二十一日氏は曾我少佐指揮の下に陸上攻撃機隊吉田隊森機に搭乘し揚州爆撃に向つた。午前二時二十分勇躍機上の人となり僚隊入佐隊と相前後して基地を進發し皎々たる満月を銀翼に浴び雲海を脚下に見つち一路支那大陸へと驀進し午前四時四十五分大陸上空に差しかかつた。折柄月は没し暗黒と雲霧のため何時しか入佐隊と分離し其後僚隊との連絡全く絶え杳として其の行方を知る事が出来なかつた。入佐隊は雲霧のため揚州を發見し得ず其の攻撃目標を變更して浦口爆撃を敢行し其の歸途午前六時十五分過恰も日出に近く視界漸く明瞭に地物を辨別し得るに至り揚州飛行場を發見したが既に吉田隊は同飛行場を爆撃したらしく場内には約十機の敵機二列に竝び其の中央に數箇所の爆弾痕を生じ其の内三機は盛に炎焼し他は大破せる事を目撃した。之れ吉田隊奮戰の戦果なる事は確實である。入佐隊と分離後行方不明となつた氏の隊は地上指揮官との連絡亦斷絶し基地にある隊員は氏等の成功を祈りつつ憂慮して待つてゐたが遂に正午に至るも氏の隊は一機も歸還せず之を入佐隊の目撃状況から考察するに氏の隊は目指す揚州飛行場を爆撃し多大の戦果を収めたが

多数の敵戦闘機の包围を受け猛烈なる空中戦を演じ孤軍奮闘敵弾のため火災を起し遂に敵地に墜落の運命を辿り愛機と共に隊員悉く壯烈なる戦死を遂げたものと認定せられた。併し氏等の緒戦に於ける奮戦と尊き犠牲は我が海空軍の制空権掌握の端緒を拓き爾後の戦闘を有利に導くを得たのであつた。其後所屬隊は其の赫々の武勳に依り時の第三艦隊司令長官より譽れの感状を授與せられた。是れ全く氏等奮戦の功に俟つ所大なりと謂ふ可きである。

氏は沈著果敢にして至誠報國の念に燃え常に軍務に恪勤精勵し専心航空技術の研磨に努め其の伎倆成績亦大に見る可きものがあり眞に有爲の人物として上下の厚き信頼を受けてゐた。今次事變に際會し前進基地に進出後旬日の後には嵐を衝いて大舉支那海を翔破して支那大陸に往復し遠く敵の首都南京を襲つて其の飛行場を爆撃し更に空戦を演じて敵機二機を撃墜し次で蘇州、揚州飛行場を襲ひ敵の重要軍事施設に地上敵機多数を爆撃する等實に我が空戦史上劃期的渡洋爆撃を敢行し勇戦奮闘敵に多大の損害を與へ以て我が海軍機の威力を遺憾なく發揮し海軍の威武を中外に宣揚して惜しくも揚州東方に散華した。是れ畢竟献身奉公、盡忠報國の赤誠發露にして正に空軍將兵の龜鑑とす可きである。參戰僅かに一週日にして氏の如き忠誠有爲の士を喪つた事は洵に痛惜の極みである。されど其の行動は我が海軍空前の壯舉、武人の一生に選む可き死所としては之に優るものなかる可く以て後進を振起せしむるに足る。氏今や瞑すと雖も其の赫々たる武勳は燦として永へに空軍戦史に輝き芳名は千古に薫りて埋れず、不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬の的たる可く氏死して亦餘榮ありと謂ふ可きである。而して其の神靈は尙も皇國を護り、又一家一門の前途に尊き加護照覽を垂れ給ふことであらう。

氏は戦死の日海軍航空兵曹長に任ぜられ次で拔群破格の功五級金鷄勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍航空兵曹長勳七等功五級 佐藤久一

壯烈屢、渡洋爆撃に武功を樹て惜しくも揚州東方上空に散華す

氏は福島縣伊達郡伏黒村伏黒の人にして父を久吉、亡母をイト義母をシノと云ひ明治四十四年三月十四日に生れ妻をよね子と云ふ。性剛直にして頭腦明晰、理解力に富み熱心事に當り初志を貫徹せざれば已まぬ氣概があつた。大正十三年三月庄村小學校高等科を卒業と共に福島商業學校に入學し昭和三年三月同校を卒業して同四年六月志願兵として横須賀海兵團に入團し水兵となり誠實軍務に精勵し後海軍砲術學校普通科砲術練習生教程を卒業し掌砲兵となつたが後又航空兵を志願し同七年五月横須賀海軍航空隊偵察練習教程を首席を以て卒業し御下賜品拜受の光榮に浴した。累進して同十一年五月海軍一等航空兵曹に任ぜられ更に横須賀海軍航空隊特修科航空術練習生教程を卒業した。其間軍艦、驅逐艦、横須賀防備隊、海軍砲術學校及横須賀、館山各海軍航空隊等に勤務し同十二年七月木更津海軍航空隊附となつた。尙ほ氏は昭和六年乃至九年事變の功に依り勳八等瑞寶章を賜はつた。

昭和十二年七月北支に事變勃發するや氏は聯合航空隊に編入せられ第三艦隊附屬となり八月上旬九州方面前進基地に進出し出動準備を整へて待機してゐたが八月十三日上海に於て日支間に戦闘開始せられ翌十四日より敵飛行機は屢々上海上空に飛來し我が陸戦隊本部、戦線部隊、旗艦出雲、其の他の海軍艦艇等は勿論各種重要建物又は商業地區、旅館等に對し所嫌はず盲爆撃を行ひ、以て自國民及第三國民等幾多無辜の人々を殺傷するの暴舉を敢てし全上海市民の怨嗟の的となつた。當時颯風は上海沖に停滯し海上風浪高く何時鎮まるとも測り知れざる光景に我が海軍航空隊は陸戦隊の苦戦と敵機の跳梁を耳にし義憤に燃えつつ骨肉の歎を漏らしてゐたが同日午後に至り遂に待望の進撃命令が發せられた。もはや荒天何のその氏等決死の海軍航空隊將兵は感奮興起猛鷲の羽搏き物凄く上海沖にゐた艦船水上機隊は眞先に激浪を蹴つて離水し

上海附近の敵飛行場を襲つて大格納庫を爆破したるを手始めとし艦上及陸上攻撃機隊は嵐を衝いて長驅渡洋爆撃を敢行し敵航空兵力の各重要據點に有效なる巨弾を浴びせ茲に支那空軍殲滅の火蓋は切つて落された。

翌十五日南京爆撃の命令が下された。氏は平本少佐の指揮する陸上攻撃機隊に屬し吉田隊長機に搭乘し午前九時勇躍九州方面基地を進發し帽を振る地上の戦友の姿に感激の眸を輝かせつつ嵐を衝いて海を越え一路支那大陸の上空へと轟進し



た。數日來の颱風は猶ほ収まらず翼も折れん許りの難飛行を続け纏て支那大陸の上空にさしかかつた。風雨は益々激しく密雲のため屢僚機も見失ふ程であつた、其の内雲の間から湖水が見えた太湖の上空に達したらしい其の途端密雲の中から突如敵戦闘機數機が現れた。氏の機は隊長機として陣頭に立ち各機は之に續いて敵に肉薄し忽ち壯烈なる空中戦を演じ敵機一機を湖中に撃墜し他の一機を湖岸に不時著せしめた。初陣の此の戦果に隊員は勇氣百倍し悠々長江に沿ひ高度二百乃至四百米の編隊で再び南京に向つて轟進した。間もなく南京胡宮飛行場が雲間から遙か彼方に現れた。搭乗員の意氣は

愈々昂揚し午後三時十五分南京上空に達し高度五百米の編隊で爆音勇ましく北方より侵入した。折柄起る敵の地上防空砲火を物ともせず一機又一機密雲を破つて急降下し胡宮飛行場に巨弾の雨を浴びせ大型格納庫一棟竝に庫外飛行機數機を爆破した。爆撃終て飛び上つて來ると小癩にも敵戦闘機七、八機が我に肉薄して來た元より空中戦は我の希ふ所茲に南京上空に攻撃機對戦闘機の壯烈なる空中戦が始まつた。見敵必勝の我が海軍魂は火と燃えさかつて忽ち敵機三機を撃墜したが此の時氏の搭乗機は不幸敵弾を左側發動機に受け使用不能となつた。併し隊長の適切なる指揮と氏等搭乗員の適時的確な

處斷に依り機は右側發動機のみで歸途に就き再び嵐を衝いて暗夜の大洋を翔破し遂に基地に歸著した。續いて翌十六日には蘇州飛行場を、十七日には淮陰飛行場を、十九日には再び南京空襲に参加する等連日に互り渡洋爆撃を敢行し其の都度熾烈なる敵の防空砲火を冒し勇奮闘敵に痛撃を加へ以て其の心膽を寒からしめた。

越えて八月二十一日氏は曾我少佐の指揮する陸上攻撃隊に屬し吉田隊長機搭乗員として揚州飛行場爆撃に参加する事となり僚隊入佐隊と共に午前二時二十分勇躍基地を進發し皎々たる満月を銀翼に浴び雲海を下に見つつ一路東支那海を翔破して支那大陸に轟進した。午前四時四十五分支那大陸上空に差ししかかつた。折柄月は没し暗黒と雲霧のため氏の隊は何時しか入佐隊と分離した。其の後氏の隊は僚隊との連絡全く絶え杳として其の消息を知る事が出来なかつたが入佐隊が雲霧のため揚州を發見する能はず浦口爆撃を敢行しての歸途午前六時十五分過恰も日出に近く漸く地物を辨別し得るに至り揚州飛行場を發見したが既に氏の隊は同飛行場を爆撃したるものの如く場内には約十機の敵機二列に並び其の中央に數箇所の爆弾痕と其の内三機は盛に炎焼し他は大破せるを確認した。之れ吉田隊奮闘の戦果である事明である。入佐隊と分離後消息不明となつた氏の隊は地上指揮官との連絡亦斷絶し基地に於ける隊員一同は其の成功を祈りつつ憂慮して待つてゐたが遂に正午に至るも歸還せず之を入佐隊の目撃状況から考察するに氏の隊は目ざす揚州飛行場を爆撃し多大の戦果を収めたが多數の敵戦闘機と猛烈なる空中戦を演じ孤軍奮闘敵弾のため火災を起し遂に敵地に墜落の運命を辿つて愛機諸共に隊員悉く壯烈なる戦死を遂げたものと認定せられた。されど氏等の緒戦に於ける奮戦と尊き犠牲は我が空軍の制空權掌握の端緒を拓き爾後の戦闘を有利に導くを得たのであつた。其後所屬隊は此の赫々の武勳に依り時の第三艦隊司令長官より譽れの感状を授與せられた、是れ全く氏等奮戦の功に俟つ所大なりと謂ふ可きである。

氏は豪邁不撓の意氣を以て常に軍務に盡瘁し其の航空技術は優秀にして上下の信頼を一身に集め大に前途を囑望せられてゐた。今次聖戦に従ふや陸上攻撃機搭乗員として屢々荒天を衝いて支那海の怒濤千餘軒を翹破して支那大陸に往復し遠

敵の首都南京を襲ふ事二回又蘇州、淮陰、揚州飛行場を空襲する等實に我が航空戦史上劃期的渡洋爆撃に参加する事五回更に空戦を演じて敵に多大の損害を與へ以て我が海軍機の威力を遺憾なく發揮して世界の耳目を聳動し惜しくも揚州上空の華と散つた。斯くの如きは眞に生死を超越し獻身以て君國に報ひんとする純忠赤誠の發露にして正に皇國軍人の龜鑑とす可きである。参戦僅かに一週目にして氏の如き忠勇義烈の士を喪つた事は洵に痛惜の極みである。されど其の壯烈なる行動は我が海軍空前の壯舉にして武人の一生に選む可き死所としては之に優るものなく以て一世を激勵し後進を感奮せしむるに足る。氏今や瞑すと雖も其の赫々たる武勳は燦として永へに空軍戦史を照らし芳名は千載に薫りて埋れず、不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬の的たる可く、氏死して亦餘榮ありと謂ふ可きである。而して其の神靈は尙も皇國を護り又一家の前途に尊き加護照覽を垂れ給ふことであらう。

因に氏の次兄一平氏は應召して南支に、次弟四郎氏は中支方面に、末弟五郎氏は海軍航空兵として共に戦線に活躍中に尙甥榮氏亦陸軍幹部候補生として勤務中との事にて實に一家より五名の軍人を出し殊に兄弟二人共空軍に身を投じ海の護りに就いた名譽の一家である。

氏は戦死の日海軍航空兵曹長に任ぜられ次で抜群破格の功五級金鷄勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍航空兵曹長勳七等功五級 佐藤 進

壯烈渡洋爆撃に屢々武勳を奏して遂に愛機と共に敵地に自爆す

氏は岩手縣東磐井郡舞川村の人にして父を久三郎、母をとめと云ひ明治四十五年一月に生れ妻きよ子との間に長女かつ子を擧げた。性温順實直、頭腦明晰にして交際圓滿且事をなすに表裏なく優良青年として賞讃せられてゐた。大正十三年

三月舞川小學校を卒業して中學校に入學したが在學中海軍に志願し第三學年の時退學し昭和五年六月横須賀海兵團に入團し機關兵となり忠實軍務に精勵しゐたが航空兵を志望し刻苦勉勵して後設ヶ浦海軍航空隊整備術練習教程を更に同隊操縦練習生教程を共に抜群の成績にて卒業し航空兵となり昭和八年九月海軍一等航空兵に進み同十二年五月横須賀海軍航空隊特修科航空術練習生教程を卒業し累進して同年同月海軍一等航空兵曹に任ぜられた。此の間軍艦赤城並に横須賀、霞ヶ浦及館山の各航空隊に勤務して益々其の技を練り同年七月木更津海軍航空隊附となつた。

昭和十二年七月北支に事變勃發するや氏は聯合航空隊に編入せられ第三艦隊附屬となり八月下旬以來九州方面前進基地に進出し待機してゐたが八月十三日上海に於て日支間に戦闘開始となるや、翌十四日より敵飛行機は屢々上海上空に飛來し我が陸戦隊本部、戦線部隊、旗艦出雲其の他の海軍艦艇は勿論各種重要建物、又は商業地區、旅館等に對し所嫌はず盲爆撃を行ひ以て自國民及第三國民等幾多無辜の人々を殺傷するの暴舉を敢てし全上海市民怨嗟の的となつた。當時颯風は支那海を北上中にて海上風浪高く何時鎮まるとも測り知れざる光景に我が海軍航空隊員は陸戦隊の惡戰苦闘と敵機の跳梁を耳にし義憤に燃えつつ骨肉の歎を漏らしてゐたが同日午後に至り遂に待望の進撃命令が發せられた。もはや荒天何のその氏等決死の海軍航空隊將兵は感奮興起猛鷲の羽搏き物凄く上海沖に碇泊してゐた艦載水上機隊は眞先に激浪を蹴つて離水し上海附近の敵飛行場を襲つて大格納庫を爆破したのを手始めに陸上及艦上攻撃機隊は嵐を衝いて長驅渡洋爆撃を敢行し敵航空兵力の各重要據點に有效なる巨弾を浴びせ茲に支那空軍殲滅の幕は切つて落された。

翌十五日南京飛行場爆撃の命が下された。氏は林田少佐指揮の下に操縦員として陸上攻撃機に搭乘し午前九時萬歲聲裡に勇躍九州方面前進基地を進發し帽を振る戦友の姿に感激の眸を輝かせつつ嵐を衝いて大洋を越え一路支那大陸へと驀進した。當時颯風は東支那海を北上中で、其の中心は上海沖合より北北西に進みて將に南京を通過せんとし強風は物凄く吹き捲り豪雨頻りに至り密雲高く閉ざして視界は頗る狭少であつたので、荒れ狂ふ海上を僅かに四、五百米に過ぎない低空

に駕し翼も折れん許りの難飛行を続け長驅敵首都南京上空に達し敵の熾烈なる地上防空砲火を冒して其の飛行場を爆撃して格納庫及地上敵機數機を爆破し更に空戦を演じ敵機を撃墜して多大の戦果を収め鵬程千餘軒を翔破して初陣の渡洋爆撃を完遂し悠々凱歌を擧げて基地に歸還した。次で十七日には蚌埠飛行場を襲つて其の軍事施設を爆破し十九日には南京夜間空襲を敢行して同地軍官學校を爆撃する等連日息つく暇もなく敵の重要據點を強襲し勇戦敢闘敵に甚大の損害を與へて其の心膽を寒からしめた。

越えて八月二十六日には南京憲兵團及航空署爆撃の命が下された。氏は空襲部隊小谷小隊に屬し機長兼操縦員として部下六名と共に陸上攻撃機に搭乗し午後九時四十分僚機と相前後して勇躍前進基地を進發した。此の夜空は晴れて一點の雲翳だなく海上は波靜かにして折柄の月光を銀翼に浴び威風堂々鵬翼を連ねて支那大陸へと蔦進した。轉て支那大陸上空に差しかかり、間もなく遙か彼方に月光に映じてゐる湖水が見えた。之は高郵湖らしい、下界は靜かに夜陰に包まれて眠つてゐる。やがて湖上を過ぎ翌二十七日午前一時三十分南京上空に達した。其の瞬間忽ちけたたましい空襲警報のサイレンが鳴り渡り、光芒一閃探照燈の光が上空に向つて伸びて来る。敵の高角砲陣地から一齊に火を吐き我に猛射を浴びせて來た。忽ちにして南京上空深夜の靜寂は破られて轟々たる鐵火の巷と化した。氏等の各機は之を物ともせず冷靜沈著全員一致協力規を定めて爆彈投下を開始した。各機は次ぎ／＼に巨彈を投下し機を離れた爆彈は全彈目標及其の附近に命中し轟然たる爆音と共に黒煙濛々として舞ひ上り火柱は天に沖し紅蓮の焰は南京上空を焦して悽慘の光景を呈した。斯くて氏等は奮戦敵に多大の損害を與へ其の重大使命を果して歸途に就いた。氏の機は嚮導機に隨ひ敵の地上砲火を避けつつ南京上空を去つた。すると突如翼下を流星の如く敵彈らしいものが頻りに飛んで來る。よく見ると照空燈の光で氏等が眩惑せられてゐる間に敵機二機が追躡喰ひ下つて我を攻撃して來てゐたのであつた。之を知つた氏は部下を叱咤督勵し時を移さず之が撃墜を命じ茲に壯烈なる夜間空中戦が展開された。見敵必墜の我が海鷲魂は火と燃え盛り奮戦又奮戦死力を盡して

之が撃墜に力めてゐたが午前一時四十五分頃氏の機は遂に敵彈を右側燃料タンクに受け忽ち火焰を吐いて火災を起すと見るや、約一分後には火達磨となり南京北東二十哩の高郵湖畔天長附近の敵地に墜落し氏以下搭乗員全部愛機諸共に壯烈なる戦死を遂げた。併し氏等の累次の奮戦と尊き犠牲に依り爾後の我が作戦を有利に導き遂に制空權は我が手に掌握するを得たのであつた。其の後所屬隊は其の赫々たる武勳に依り時の第三艦隊司令長官より榮えある感狀を授與せられた。是れ全く氏等の奮戦に俟つ所大なりと謂ふべきである。越えて昭和十四年十一月二十四日陸軍某司令部の通報に依り木更津海軍航空隊本隊先任衛兵伍長檀上兵曹が氏等墜落現地に派遣せられ其の遺骸を發掘收容したのであつた。

氏は其の明敏なる頭腦と、責任觀念旺盛にして些かの表裏ない人格とは其の優秀なる航空技術と相俟つて上下の信望頗る厚く稀に見る逸材として將來を囑望せられてゐた。今次事變に際會し前進基地に進出するや旬日の後には嵐を衝いて東支那の怒濤千餘軒を翔破して支那大陸に往復し長驅敵の首都南京を強襲すること前後二回に及び同地飛行場及地上敵機數機を爆破し更に空戦を演じて敵機を撃墜し次で蚌埠飛行場を空襲して其の軍事施設を爆破し三度南京を襲つて同地憲兵團及航空署を爆撃する等實に空戦史上劃期的渡洋爆撃を敢行し勇戦敢闘敵に多大の損害を與へ我が海軍機の威力を遺憾なく發揮し以て海軍の威武を中外に宣揚し自機又敵彈を機關に受け愛機諸共敵陣に突入し惜しくも天長上空に玉碎した。其の壯烈鬼神を哭かしむる行動は眞に盡忠報國の赤誠の發露にして天晴れ空軍將兵の龜鑑とすべきである。參戦十餘日氏の如き忠烈有爲の空軍戦士を喪つたことは洵に痛惜の極みである。されど其の壯烈なる行動は眞に空前の壯舉にして武人として最も適當の死所を得たるものと云ふべく以後進を奮起せしむるに足る。氏今や瞑すと雖も其の赫々たる武勳は燦として永へに空軍戦史を照らし芳名は千載に薫りて埋れず、不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬の的たるべく、氏死して亦餘榮ありと謂ふべきである。而して其の神靈は尙も皇國を護り又一家の前途に尊き加護を垂れ妻子の前途を照覽して已まぬであらう。

氏は戦死の日海軍航空兵曹長に任ぜられ次で抜群破格の功五級金鷄勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍機關兵曹長勳七等功六級 湯 淺 安 司 勇敢なる豫備彈藥隊員奮戦武勳を褒し惜しくも上海東部租界戦に斃る

氏は千葉縣千葉郡千城村の人にして父を常吉、母をとよと云ひ明治三十六年七月二十日に生れ妻すみとの間に長男一、長女幸子を擧げた。性温順實直にして品行方正常に業務に勉勵し近隣の風評極めて良好であつた。大正七年千城小學校高等科を卒業し其の後は父母兄を扶けて農業に従事してゐたが大正十年六月志願兵として横須賀海兵團に入團して機關兵となり同十二年五月海軍潛水學校機關練習生教程を卒業し長く潛水艦に乘組み、後更に海軍機關學校普通科機關練習生教程を卒業し、爾來専心軍務に精勵し、累進して昭和七年十一月海軍一等機關兵曹に進み、同九年六月服役延期解除と共に豫備役に編入せられて歸郷し、川崎市昭和肥料會社合成工場壓縮機械係となつて勤務してゐた。尙ほ氏は昭和六年乃至九年事變の功に依り勳八等瑞寶章を賜はつた。

今次事變勃發するや氏は應召し昭和十二年八月横須賀海兵團に入團した。同月十三日上海に於て日支開戦となるや上海海軍特別陸戰隊増加部隊士師大隊に屬し豫備彈藥隊先任下士官として八月十七日内地を出港し勇躍征途に就き同月十九日深更上海に到着し大連碼頭に上陸宿營して附近の警戒に任じ翌二十日午後一時上海特別陸戰隊に集結して同地陸戰隊司令官の指揮下に入り總豫備隊となつた。二十二日午前八時所屬大隊は竹下大隊と交代し東部支隊長の指揮下に入り東部支隊中央第一線として華德路、滙山路の線を占領し大隊本部を公大第二住宅に定め各隊を所要地點に配置して守備に就き直ちに陣地構築作業に著手した。嚮て優勢なる敵は大隊各陣地に向つて潮の如く襲來し敵の銃砲火は愈々熾烈となつた。我亦陣

地構築未完成の儘之に應戰するの止むを得ざる状態となり彼我の銃砲聲は股々轟々として雷の如く砲煙空に漲りて悽慘なる光景を呈した。此の間氏は敵彈雨飛の裡に強行彈藥供給に活躍し、克く其の任務を敢行して第一線部隊の火力發揮に遺憾なからしめた。二十二日午後十一時四十分頃より我が華德路と華盛路との交叉點にある第五陣地は我に十數倍の敵部隊の猛攻撃を受け、其の後方山砲陣地も亦頗る苦戦に陥つてゐた。此の時氏等彈藥隊は敵情の偵察に活躍奮闘すると共に降り布く彈雨を冒し彈藥供給の爲め該陣地に赴いたが戰闘は激烈にして僅かに一兵と雖も増援を必要とする情况であつたので彈藥隊長は獨斷にて部下五名をして砲隊土囊陣地に就かしめた。



そこで氏は隊長の命に依り部下四名と共に銃を執つて火線に進出し山砲隊に協力して奮戦し銃も灼けん許りに敵に猛射を浴びせ勇戦敢闘遂に此の大敵を沈黙せしめた。併し此の時虚空を切つて飛來せし敵の一弾は無念氏の下腹部に命中し其の場に控と打ち倒れた。されど剛氣の氏は之に屈せず起き上らんとしたが力及ばず直ちに後方病舎に收容せられて百方手當を受けてゐたが其の甲斐もなく「残念なり後をお願ひします」と最後の辭を残して翌二十三日午後四時二十分遂に悲壯なる戦死を遂げた。其の後陸戰隊は赫々の武勳に依り時の第三艦隊司令長官より榮えある感状を授與せられた。是れ全く氏等の奮戦の勳功に俟つ所大なりといふべきである。

氏は今次聖戦に参加するや、上海上陸間もなく東部支隊中央第一線に進出し連日連夜不眠不休彈雨を冒して彈藥供給に活躍奮闘し克く其の重大任務を完うし以て我が部隊の戦勝に多大の寄與貢獻をなした。斯くの如きは實に獻身奉公、盡忠報國赤誠の發露にして天晴れ皇國軍人の範とすべきである。參戰劈頭斯かる忠烈の士を喪ひ今や其の壯容に接すべくもな

し眞に痛惜の極みである。併し其の赫々たる武勳は永へに海軍戦史に輝き、芳名は武人の華として千古に譁はるべく、不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬の的となる、氏亦以て瞑すべきである。而して神靈は尙も皇國を護り又一家の前途に尊き加護佑助を垂れ給ふであらう。

氏は戦死の日海軍機關兵曹長に任ぜられ次で功六級金鷄勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍兵曹長勳七等功六級 清水 金治

奮戦敢闘負傷再度に及び惜しくも上海眉州路に散華す

氏は山口縣厚狹郡小野村の人にして亡父を養之進、亡母をウメと云ひ明治四十四年十月に生れ妻をフミエといふ。性温厚寡黙、頭腦明晰にして率先難事に當り致々として業務に勉勵し倦む事がなかつた。大正十五年三月郷里の小學校高等科を卒業し其の後は兄を扶けて農業に従事する傍村役場にも勤務してゐた。昭和三年六月志願兵として吳海兵團に入團し忠實軍務に勉勵し後海軍砲術學校普通科並に高等科砲術練習生教程を卒業し累進して同十一年十一月海軍一等兵曹に任ぜられた。此の間軍艦那智、淺間、加古、吳海兵團、聯合艦隊司令部及軍艦青葉等に勤務し同十二年七月選ばれて吳鎮守府特別陸戰隊附となつた。尙ほ氏は昭和六年乃至九年事變の功に依り勳八等白色桐葉章を賜はつた。

昭和十二年七月北支事變勃發以來中支方面の風雲亦急を告ぐるや氏は吳鎮守府特別陸戰隊安田部隊樋口大隊武田中隊小幡小隊に屬し先任分隊下士官として七月二十九日以来旅順に進出し待機してゐたが八月十三日上海に於て日支開戦となり彼我の間に激戦が展開せられ我が軍寡兵頗る苦戦に陥るに及び所屬部隊は命に依り上海海軍特別陸戰隊増加部隊として八月十七日急遽同地を出發し翌十八日上海に到着し同日午後三時三十分上陸して同地海軍特別陸戰隊司令官の指揮下に入り

直ちに東部租界第一線の守備に就き甯國路、眉州路、東華紡績、申新紡績及河間路等の各陣地に急速土囊陣地の構築に著手し、同九時頃漸く膝射程度の土囊陣地を構築して敵と對峙した。此の時氏は申新紡績第五廠の陣地に配せられて其の守備に當り屢々逆襲し來る敵と激戦を交へて之を撃退し翌十九日には甯國路陣地に至りて第一線中央の敵と對峙して陣地の守備に任じてゐたが、敵約四百名が迫撃砲を亂射して租界線を突破せんとして我が各陣地に對し數回に互り猛烈に攻撃して來たので我が軍は沈著果敢山砲、機銃、小銃等の全火器を擧げて之に應戦し銃身も灼熱せん許りに之に猛射を加へて奮戦したが二十日午前二時四十分頃敵は益々我に肉薄して頻りに手榴彈を投げつけ其の一弾は氏の陣地に命中炸裂し不幸氏は大腿部に貫通銃創を負つた。併し剛氣の氏は尙も之に屈せず意氣益々加り部下を叱咤督勵して奮戦を續けてゐたので之を見た小隊長は假纒帯をなすべく勸めた。併し氏は「何夔！之れしきの事で」と頑張りながら綿布を取り出し傷口に巻きつけ「さあ、之からうんと遣つづけるぞ」と小隊長傳令橋二水に向ひ「橋、擲彈筒を此處へ持つて來い」と命じたが橋二水も亦右手を負傷して倒れたので自ら其の擲彈筒を執り敵に痛撃を加へ奮戦力闘數時間の後天明に至り遂に敵に多大の損害を與へて之を撃退した。斯くて氏は病舎に運ばれ治療を受けてゐたが味方の苦戦を耳にして黙止するに忍びず負傷未だ治癒せざるにも拘らず、二十二日午後再び前線に駆つけ所屬小隊の陣地救援に赴き、爾後眉州路陣地に至り其の負傷の身をも打ち忘れ連日連夜逆襲し來る敵の撃退に或は敵偵察橋梁爆破、便衣隊の掃蕩並に陣地の強化作業等に活躍奮闘を續け其の奮戦振りは眞に涙ぐまじきものがあつた。

越えて九月二日眉州路陣地に在りて夕食を終り夜戦配置に就くや敵は例の如く機銃、小銃を亂射して屢々逆襲を繰返して湖の如く押し寄せ來り彼我の銃聲は嵐の如く敵弾は雨霰の如く降り注ぎ戦闘は愈々激烈を極めた。此の時氏は毅然として彈雨の間に立ち部下を督勵して奮戦中三日午前三時五分敵の投げつけた手榴彈が氏の背後にて炸裂し無念！氏は其の破片に依り頭蓋骨を打ち碎かれ、勇猛鬼神の如き流石の氏も遂に其の場に打ち倒れて再起不能となり馳て救護隊に運ばれん

とするや「未だ大丈夫だよ」の一言を漏らし陸戦隊假病舎に收容せられて手當を受けしも其の甲斐なく遂に名譽の戦死を遂げた。時に午後十二時三十分であつた。併し氏等の奮戦と尊き犠牲に依り其の後幾何ならずして陸戦隊は寡兵克く敵を租界線外に撃破し以て租界の安全を確保し得たのであつた。

氏は頭腦明敏にして膽力あり、平素より克く軍務の研鑽を怠らず、又上下の信望を一身に蒐め將來有爲の下士官として囑望されてゐた。今次上海戦に従ふや砲煙彈雨の下、連日凡ゆる危険困苦に堪へ奮戦敢闘克く其の本分を完うし以て我が軍戦勝に多大の寄與貢獻をなした。而も身に負傷して苦痛の裡にも味方の苦戦を耳にして再び戦線に立ち勇猛果敢彈雨の中に激闘を續け再度敵彈を受けて遂に壯烈なる戦死を遂げた。斯くの如きは實に生死を超越し一意其の職責完遂に邁進し斃れて後止まんとする純忠赤誠の發露にして其の烈々たる闘志と旺盛なる責任觀念は天晴れ皇國軍人の面目躍如たるものがある。正に後進の鑑とすべきである。参戦十餘日にして斯かる忠勇義烈の士を喪ひ今や其の壯容に接するを得ざるは洵に痛惜の極みなるも、其の赫々たる武勳は燦として海軍戦史に輝き、不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬の的たるべく神靈尙も皇國を護り又一家の前途に尊き加護照覽を垂れ給ふことであらう。

氏は戦死の日海軍兵曹長に任ぜられ次で功六級金鵝勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍兵曹長勳七等功五級 平子銀之助

一ヶ月に互り奮戦を續け遂に上海油公司北方に散る

氏は福島縣石城郡上遠野村の人にして父を玉之助、母をアキといひ明治四十年五月二十九日に生れ妻ステとの間に長男博三を擧げた。性温良著實にして思慮周密、孝養の念厚く熱心勤勉倦む事なく又兄弟を愛撫し一般世人にも親切にして優

良青年として近隣の風評頗る良好であつた。大正十一年三月上遠野小學校高等科を、翌年三月同校補習科を卒業し其後は家に在りて農業に従事してゐたが海軍に志願し大正十五年六月横須賀海兵團に入團し水兵となり忠實軍務に精勵し後海軍砲術學校普通科並に高等科砲術練習生教程を卒業し累進して昭和十年十一月海軍一等兵曹に任ぜられ此間軍艦古鷹、海軍砲術學校、軍艦嚴島及赤城等に勤務し同十一年五月上海海軍特別陸戦隊附となり同十二年八月勳八等瑞寶章を賜はつた。

昭和十二年七月北支事變勃發以來中、南支方面の風雲亦急を告げ殊に上海に於ける日支間の空氣は日一日と悪化し八月



九日には大山中尉射殺事件を惹起し彼我の情勢は當に一觸即發の危機を孕むに至つた。茲に於て八月十二日上海海軍特別陸戦隊は在留邦人保護のため警戒配備に就き萬一に備へてゐたが八月十三日に至るや支那軍前線部隊は我に對し發砲挑戰して來たので隱忍自重してゐた我軍も遂に勘忍袋の緒を絶ち斷乎之に應戦し茲に日支開戦の幕は切つて落された。氏は當時橋本大隊貴志中隊(八月三十日より福永中隊)秋吉指揮小隊に屬し傳令分隊下士官として北八字橋地區の警戒に當つてゐたが開戦と共に同地區の便衣隊の掃蕩に従ひ次で廣中路、蔡家宅の中隊本部に至りて北部地區の激戦に参加し十六日廣

中路の大激戦となるや中隊長は中隊全線危しと見て前線に進出した。此時中隊先任下士官たりし氏は指揮小隊長となり部下を率ゐて中隊長に従ひ陣地に進出し寡兵を以て雲霞の如き大敵と激戦を交へ幾度か苦戦に陥つたが不屈不撓益々勇氣を倍し敵彈雨飛の中克く中隊長を輔佐し部下を激勵しつつ自ら彈雨を漚つて命令傳達に疾走中偶々敵彈右肩に命中したが剛氣の氏は之に屈せず左翼の團畑小隊との連絡を敢行した。氏は負傷のため全身鮮血に塗れながら尙も奮戦を續け中隊

長以下死傷者續出して殆ど最後の一人となる迄指揮を続け其の奮闘振りは眞に鬼神をも泣かしむるものがあつた。翌十七日より北部地區右翼隊として模範村大隊本部に進出し爾來約二週間は同本部に、又九月二日より陣地東南家屋福永中隊本部に在りて前後十數日間に互り終始第一線に奮戦を重ねて敵大部隊の制壓撃攘に當り或は斥候に、或は敵陣に突入し肉弾相搏つ白兵戦を演じて無數の敵を殲ぎ登し或は怒濤の如く押寄せ來る敵に猛射を加へて之が撃退に當る等連日連夜不眠不休にて勇戦激闘を續け以て敵に甚大の損害を與へて其の心膽を寒からしめた。

越えて九月十三日午後二時頃各陣地より有力なる斥候を派遣し前方森陣地其の他の敵情を偵察せしめたが敵の兵力は豫想した程有力でなかつたので午後三時半頃橋本大隊長は福永中隊長に崇徳女學校森陣地及其の東方赤屋根家屋を占領す可く命じた。そこで同中隊長は勝村小隊長をして崇徳女學校の占領に當らしめ自ら岡畑小隊を率ゐて森陣地攻略の爲め前進を起し敵の抵抗を排除して同四時半頃同陣地及東方赤屋根家屋を占領し爾後岡畑中隊の一箇小隊と共に陣地の構築に活躍中敵は森陣地の占領せられたのを知るや同五時二十分頃愛國女學校、新市路及屈家橋方面から猛射を浴びせ來り銃聲は豆を煎るが如く飛彈は雨霰の如く戰鬪次第に激烈となつたが中隊長の適切なる指揮及び部下隊員の奮戦と彈藥運搬員架橋作業員及曲射砲員等の決死的協力奮戦と相俟つて戰鬪數時間の後克く敵を制壓して陣地を確保し其後の北部地區作戦に資する所甚大なるものがあつた。此の戰鬪に於て岡畑小隊長傷き氏は中隊先任下士官として克く中隊長の意圖を體して之を輔佐し奮戦力闘を續けてゐたが折柄虚空を切つて飛來せし敵の一彈は無念一氏の頭部に命中し其の場に壯烈なる戦死を遂げた。時に午後五時三十五分であつた。併し氏等の奮戦と尊き犠牲は我軍戦勝の端緒となり其後幾何ならずして陸戦隊は敵を遠く租界外に撃破し以て全上海の安全を確保し得たのであつた。

陸戦隊は開戦以來八月二十二日に至る赫々の武勳に依り時の第三艦隊司令長官より譽れの感狀を授與せられた。是れ全く氏等奮戦の功に俟つ所大なりと謂ふ可きである。

氏は海軍出身以來常に至誠以て事に當り頗る忠實なる人として上下の信頼厚く銃劍術は二段の伎倆を有し將來有爲の下士官として囑望されてゐた。而して開戦前より上海に駐屯し陸戦隊員として克く其の本分を完うして遺憾なかつた。愈々開戦となるや爾來一ヶ月間に互り上海北部戦線の各陣地に轉戦し砲煙彈雨の下幾多の辛酸を嘗め且つ身に敵彈を受くるも之に屈する事なく勇戦奮闘克く中隊長を輔佐して味方の戰鬪を有利に導き以て我軍の戦勝に多大の寄與貢獻をなした。斯くの如きは眞に生死を超越し一意其の職責完遂に邁進し斃れて後已まんとする崇高なる献身奉公の赤誠發露にして其の鬼神の如き奮戦振りは天晴れ後進を振起せしむ可く正に皇國軍人の鑑とす可きである。聖戦中途斯かる忠勇義烈の士を喪ひしは洵に痛惜の極みなるも、其の赫々たる武勳は永へに海軍戦史に垂れ芳名は千載に驚りて埋れず、不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬の的たる可く神靈尙も皇國を護り又一家の前途に尊き加護佑助を垂れ給ふことであらう。

氏は戦死の日海軍兵曹長に任ぜられ次で拔群破格の功五級金鷄勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

准士官以上之部 終

下士官之部

海軍一等航空兵曹勳七等功六級 飯尾 秀雄

空前の壯舉渡洋爆撃に屢々武勳を奏し愛國機と共に敵地に自爆す

氏は濱松市高林町の人にして亡父を銀太郎、母をとくとひ明治四十二年七月二十五日に生れ妻きみとの間に長女幸子を挙げた。性温順淡泊にして頭腦明晰、率先難事に當り克く業務に精勵してゐた。又常に兩親兄弟姉妹に對し温情拘す可きものがあつて眞に親を思ひ兄弟思ひの人であつた。大正十三年三月同市曳馬小學校高等科を卒業と共に東京通信省講習所に入り同十四年四月同所の課程を修了し其後は東京中央郵便局に勤務し誠實業務に服し厚き信望を受けてゐた。此の間餘暇を利用して講道館に於て柔道を鍊磨して當時三段の伎倆を有してゐた。昭和五年六月徵兵として横須賀海兵團に入團し機關兵となつたが、後横須賀海軍航空隊偵察練習生教程を卒業し航空兵となり累進して同十年十一月海軍二等航空兵曹に任ぜられた。此の間軍艦赤城、鳳翔、横須賀及館山の各海軍航空隊に勤務し同十二年五月木更津海軍航空隊附となつた。昭和十二年七月北支に事變勃發するや氏は聯合航空隊に編入せられ第三艦隊附屬となり八月月上旬以來九州方面前進基地に進出し待機してゐたが八月十三日上海に於て日支間に戦闘開始となるや翌十四日より敵飛行機は屢々上海上空に飛來し我陸戰隊本部、戰線部隊、旗艦出雲、其他の海軍艦艇等は勿論各種重要建物又は商業地區、旅館等に對し所嫌はず盲爆撃を行ひ以て自國民及第三國民等幾多無辜の人々を殺傷するの暴舉を敢てし全上海市民怨嗟の的となつた。當時颯風は支那海を北上中にて海上風浪高く何時鎮まるとも測り知れざる光景に我が海軍航空隊員は陸戰隊の惡戰苦闘と敵機の跳梁を耳にし義憤に燃えつつ骨肉の歎を漏らしてゐたが同日午後に至り遂に待望の進撃命令が發せられた。もはや荒天何のその、

氏等決死の海軍航空隊將兵は感奮興起猛鷲の羽搏き物凄く上海沖に碇泊してゐた艦載水上機隊は眞先に激浪を蹴つて離水し上海附近の敵飛行場を襲つて大格納庫を爆破したのを手始めに陸上及攻撃機隊は嵐を衝いて長驅渡洋爆撃を敢行し敵航空兵力の各重要據點に有效なる巨彈を浴びせ茲に支那空軍殲滅の幕は切つて落された。

翌十五日以來所屬航空隊に對し南京、蘇州等敵の航空兵力の據點爆撃の命令が相次で發せられたが氏は未だ一回も之に参加の命に接せず戰友の壯烈なる戰鬥物語りを耳にし血湧き肉躍るの思ひをなし命令の降下今や遲しと待つてゐた。轉て



八月十七日に至るや遂に蚌埠飛行場爆撃參加の命に接した。氏は待ちに待つた此の命令に欣喜雀躍し偵察員として陸上攻撃機に搭乘僚機と共に勇躍前進基地を進發し長驅東支那海を越え一路蚌埠へと奮進した。轉て支那大陸に達し目的地上空に差しかかるや忽ち起る敵の地上防空砲火を物ともせず一機又一機急降下爆撃を敢行し其の飛行場及地上敵機を爆破して多大の戦果を収めた。斯くて氏等は颯風千餘軒を翔破して初陣の渡洋爆撃を完遂し悠々凱歌を擧げて基地に歸還した。次で十九日には南京夜間空襲を決定して同地軍官學校を爆撃し二十一日には蘇州を襲つて其の飛行場及地上敵機を爆撃する

等連日機翼を休む暇もなく勇戰奮闘敵に多大の損害を與へて其の心膽を寒からしめた。越えて八月二十六日南京憲兵團及航空署爆撃の命が下された。氏は偵察員として空襲部隊小谷小隊佐藤機に搭乘し午後九時四十分僚機と共に勇躍前進基地を進發した。當夜は空晴れ渡り一點の雲翳だになく海上波靜かにして折柄の月光を銀翼に浴び威風堂々颯翼を連ねて支那海を越え一路支那大陸へと奮進した。轉て大陸上空に差しかかるや遙か彼方に月光に

映じてゐる湖水が見えた。高郵湖の上空らしい、下界は静かに夜陰に包まれて眠つてゐる。やがて湖上を過ぎ翌二十七日午前一時三十分南京上空に達した。其の瞬間忽ちたましい空襲警報のサイレンが鳴り渡り光芒一閃探照燈の光が上空に向つて伸びて来る敵の高角砲陣地から一齊に火を吐き我に猛射を浴びせて来る。忽ちにして南京上空深夜の静寂は破られて轟々たる鐵火の巷と化した。氏等搭乗員は之を物とせず機長指揮の下に冷靜沈著全員一致協力視を定めて爆弾投下を開始した。各機は次ぎ／＼に巨弾を投下し機を離れた爆弾は全弾目標及附近に命中し轟然たる爆音と共に黒煙濛々として舞ひ上り火柱天に沖し紅蓮の焰は南京上空を焦して悽慘なる光景を呈した。斯くて氏等は奮戦敵に多大の損害を與へ其の重大使命を果して歸途に就いた。氏の機は嚮導機に随ひ敵の地上砲火を避けつつ南京上空を去つた。すると突如翼下を流星の如く敵弾らしいものが頻りに飛んで来るよく見ると探照燈の光で氏等が眩惑せられてゐる間に敵機二機が追蹶喰ひ下つて我を攻撃して來てゐたのであつた。之を知つた機長は部下を叱咤督勵し時を移さず之が撃攘を命じ茲に壯烈なる夜間空中戦が展開された。見敵必墜の我が海鷲魂は火と燃え盛り氏等は直ちに機銃の火蓋を切り猛然之に應戦した、彼我の銃聲は豆を煎るが如く銃火は夜の空を縦横に劈き眞に壯烈を極めた。斯くて氏等は奮戦又奮戦死力を盡して之が撃攘に力めてゐたが午前一時四十五分頃氏の機は遂に敵弾を右側燃料タンクに受け、忽ち火焰を吐いて火災を起すと見るや約一分後には火達磨となり南京北東二十哩の高郵湖畔の天長附近敵地に墜落し機長以下氏等搭乗員全部愛機諸共に壯烈なる戦死を遂げた。併し氏等の累次の奮戦と尊き犠牲に依り爾後の我が作戦を有利に導き遂に制空権は我が手に掌握するを得たのであつた。其後所屬隊は其の赫々の武勳に依り時の第三艦隊司令長官より榮えある感状を授與せられた、是れ全く氏等奮戦の功に俟つ所大なりと謂ふ可きである。越えて昭和十四年十一月二十四日陸軍某司令部の通報に依り木更津海軍航空隊本隊先任衛兵伍長禮上兵曹が氏等墜落現地に派遣せられ其の遺骸を發掘收容したのであつた。

氏は頭腦明敏にして海軍出身以來終始一貫黙々として軍務に精勵し其の澁刺たる元氣は優秀なる航空技術と相俟つて偵察爆撃の名手として前途を嚮望せられてゐた。今次事變に際會し前進基地に進出するや旬日の後には東支那海の怒濤千餘軒を翔破して支那大陸に往復し長驅蚌埠飛行場を襲ひ、南京軍官學校を猛爆し滄州飛行場を爆破し再度南京夜間空襲を敢行して其の憲兵團及航空署を爆撃し屢々空戦を演じて敵機を屠る等實に我が空戦史上劃期的渡洋爆撃に従ひ奮戦力闘克く至難の使命を果して多大の戦果を收め、以て我が海軍の威武を中外に宣揚し自機亦敵弾を受け愛機と共に天長附近に玉碎した。其の壯烈なる行動と獻身報國の赤誠は天晴れ空軍將兵の龜鑑とす可きである。参戦十餘日、氏の如き忠勇義烈の士を喪ひしは洵に痛惜の極みである。されど其の行動は我が海軍空前の壯舉、武人としては最適の死所を得たるものといふ可く以て後進を奮起せしむるに足る。氏今や瞑すと雖も其の赫々たる武勳と芳名は燦然として永へに我が空軍戦史を照らし不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬の的たる可く、氏死して亦餘榮ありと謂ふ可きである。而して其の神靈は尙も皇國を護り又一家の前途に尊き加護を垂れ殊に妻子の將來を照覽して已まぬであらう。

因に氏の兄磯平次氏は海軍下士官として某艦に乘組み弟徳之進氏は陸軍上等兵として滿洲に在りて共に第一線に活躍中である、一家より三人の軍人を出した名譽の家である。

氏は戦死の日海軍一等航空兵曹に任ぜられ次で功六級金鷄勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍一等整備兵曹勳七等功六級 鳥羽田 季雄

空前の壯舉渡洋爆撃に武勳を奏し惜しくも揚州東方に玉碎す

氏は茨城縣東茨城郡上野合村の人にして幼時父を喪ひ母をきくと言ひ明治十年二月に生れ妻を久子といふ。大正八年三月上野合小學校を卒業して農學校に學び同校卒業後は家事を扶けてゐたが昭和二年十二月徴兵として横須賀海兵團に入

團し忠實軍務に勵み後復ヶ浦海軍航空隊普通科航空工術練習生教程を卒業し累進して同十一年五月海軍二等整備兵曹に任ぜられた。此の間復ヶ浦、館山の各航空隊及軍艦神威に勤務し同十二年七月木更津海軍航空隊附となつた。

昭和十二年七月北支に事變勃發するや、氏は聯合航空隊に編入せられ第三艦隊附屬となり八月上旬以來九州方面前進基地に進出し出動準備を整へて待機してゐたが八月十三日上海に於て日支間に戦闘開始となるや翌十四日より敵飛行機は屢屢上海上空に飛來し我陸戦隊本部、戦線部隊、旗艦出雲其の他海軍艦艇等は勿論各種重要建物又は商業地區、旅館等に對し所嫌はず百爆撃を行ひ、以て自國民及第三國民等幾多無辜の人々を殺傷するの暴舉を敢てし全上海市民怨嗟の的となつた。當時颱風は上海沖に停滞し海上風浪高く何時鎮まるとも測り知れざる光景に我が海軍航空隊は陸戦隊の惡戰苦闘と敵機の跳梁を耳にし義憤に燃えつつ進撃命令の降下今や遅しと骨肉の歎を漏らしてゐたが、同日午後に至り遂に待望の命令は發せられた。もはや荒天何のその、氏等決死の海軍航空隊將兵は感奮興起猛鷲の羽搏き物凄く上海沖にゐた艦船水上機隊は眞先に激浪を蹴つて離水し上海附近の敵飛行機を襲つて大格納庫を爆破したのを手始めとし更に陸上及艦上攻撃機隊は嵐を衝いて長驅渡洋爆撃を敢行して敵航空兵力の各重要據點に有效なる巨彈を浴びせ茲に支那空軍殲滅の幕は切つて落された。氏は所屬隊に對する進撃命令が發せらるるや八月十六日及十七日の兩日に互り空前の渡洋爆撃に参加して蘇州及淮陰飛行場を襲ひ勇戰奮闘敵の熾烈なる地上防空砲火を冒して其の重要軍事施設を爆撃し多大の戦果を収めて敵の心膽を寒からしめた。

越えて八月二十一日氏は曾我少佐の指揮する陸上攻撃隊に屬し吉田隊森機に搭乘し機長以下戰友六名と同乘し揚州爆撃に向ふ事となつた。午前二時二十分勇躍機上の人となり僚隊入佐隊と相前後して基地を進發し皎々たる満月を銀翼に浴び雲海を脚下に一路支那大陸へと驀進し午前四時四十五分大陸上空に差しかかつた。折柄月は没し暗黒と雲霧のため何時しか入佐隊と分離し其後僚隊との連絡全く絶え杳として其の行方を知る事が出来なかつた。入佐隊は雲霧のため揚州を發見

し得ず止むなく目的を變更して浦口爆撃を敢行し其の歸途午前六時十五分過恰も日出に近く視界漸く明瞭に地物を辨別し得るに至り揚州飛行場を發見したが、既に氏の隊は同飛行場を爆撃したらしく場内には約十機の敵機二列にあり其の中央に數箇所の爆彈々痕を生じ其の内三機は盛に炎焼し他は大破せる事を目撃した。是れ氏等吉田隊の各機が奮戦力闘の戦果なる事は確實である。入佐隊と分離後行方不明となつた氏の隊は地上指揮官との連絡亦斷絶し基地にある隊員は氏等の成功を祈りつつ憂慮して待つてゐたが遂に正午に至るも歸還せず之を入佐隊の目撃状況より考察するに氏等吉田隊各機は目指す揚州飛行場を爆撃し多大の戦果を収めたが多數の敵戦闘機の包围を受け猛烈なる空中戦を演じ孤軍奮闘敵弾のため火災を起し遂に敵地に墜落の運命を辿り愛機と共に隊員悉く壯烈なる戦死を遂げたものと認定せられた。併し氏等の緒戦に於ける奮戦と尊き犠牲は我が海空軍の制空權掌握の端緒となり爾後の戦闘を有利に導くを得たのであつた。其後所屬隊は其の赫々の武勳に依り時の第三艦隊司令長官より譽れの感狀を授與せられた。是れ全く氏等奮戦の功に依る所大なりと謂ふ可きである。

氏は今次事變に際會し間もなく前進基地に進出して待機してゐたが上海戦の開始となるや一兩日の後には嵐を衝いて大舉支那大陸に往復し遠く蘇州、淮陰、揚州等の飛行場を強襲する等實に我が空戦史上劃期的渡洋爆撃を敢行し勇戰奮闘敵に多大の損害を與へ以て我が海軍機の威力を遺憾なく發揮し海軍の威武を中外に宣揚して惜しくも揚州東方に玉碎した。其の壯烈なる行動と獻身報國の赤誠は天晴れ皇國軍人の面目躍如たるものがある。參戰僅かに一週日而も爆撃戰參加三回にして氏の如き忠烈の士を喪ひたるは洵に痛惜の極みである。されど其の壯烈なる行動は我が海軍空前の壯舉、武人の一生に選む可き死所としては之に優るものなく以て後進を振起せしむるに足る氏今や瞑すと雖も其の偉勳は永へに空軍戦史を照らし芳名は千古に薫りて埋れず不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬の的たる可く氏死して亦餘榮ありと謂ふ可きである。而して其の神靈は尙も皇國を護り又一家の前途に尊き加護を垂れ其の妻女の前途を照覽して已まぬであらう。

氏は戦死の日海軍一等整備兵曹に任ぜられ次で功六級金鷄勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍一等航空兵曹勳七等功六級 和田 正

壯烈火達磨となつて敵地に突入自爆す

氏は福岡縣朝倉郡福田村平塚の人にして父を佐太郎、亡母をタツエと云ひ、大正四年三月十五日に生れ未だ獨身であつた。資性温順寡黙であつたが一面極めて快活の人であつた。責任觀念頗る旺盛で又孝心深く常に家業を勵みて父母を扶け克く弟妹を愛撫し交際圓滿にして諸人の親愛を受けてゐた。昭和四年三月平塚小學校高等科を卒業し其の後は家に在りて農業に従事してゐたが少年航空兵を志願し見事合格の上同六年六月第二期豫科練習生として横須賀海軍航空隊に入隊し刻苦勉勵同練習生教程を卒業して軍艦島海乗組となり後更に霞ヶ浦海軍航空隊偵察練習生教程を卒業して大村海軍航空隊勤務となり同十年十一月軍艦加賀乗組となつた。

昭和十二年八月十三日上海に於て日支間に戦闘開始となるや翌十四日より敵飛行機は屢々上海上空に飛來し我が陸戦隊本部及戦線部隊、旗艦出雲其他の海軍艦艇等は勿論、各種重要建物、商業地区、旅館等に對し所嫌はず自爆撃を行ひ以て自國民及第三國民等幾多無辜の人々を殺傷するの暴舉を敢てし全上海市民怨嗟の的となつた。恰も其の當時は支那海を北上中の颱風があつたので揚子江沖合某根據地に待機中の我が海軍航空隊は陸戦隊の惡戰苦闘と敵機の跳梁を耳にし義憤に燃えつつ骨肉の歎を漏らしてゐたが同日午後に至り待望の進撃命令は發せられた。もはや荒天何のその氏等決死の海軍航空隊將兵は感奮興起猛鷲の羽搏き物凄く上海沖に碇泊してゐた艦載水上機隊は真先に激浪を蹴つて離水し上海附近の敵飛行場を襲つて其の大格納庫を爆破したのを手始めに陸上及艦上攻撃機隊は風を衝いて渡洋爆撃を敢行し敵航空兵力の各重

要據點を襲ひ巨彈を浴びせて敵の心膽を奪ひ茲に支那空軍殲滅の幕は切つて落された。

翌八月十五日以來氏は艦上攻撃機に搭乗し連日機翼を休む暇もなく紹興飛行場、江灣鎮南方の敵陣地、蘇州飛行場及杭州、笕橋飛行機製作廠等の各地を風潰しに空爆して多大の戦果を収めた。

越えて八月二十二日氏は機長兼偵察員として浦地三等航空兵曹の操縦する艦上攻撃機に搭乗し支那屈指の要塞江陰の軍事施設を爆破すべく總飛行大尉指揮の下に僚機數機と共に午後三時二十五分艦員一同の激勵の辭に送られながら勇躍母艦



を進發し江陰目指して爆撃の壯途に上つた。支那大陸の空は晴れ渡つて眞夏の太陽はきら／＼と機翼の日の丸を照らし今日の成功を豫告してゐるかの如く見えた。氏は既に紹興飛行場爆撃を手始めに敵地空爆を敢行すること八回に及び意氣は將に天を衝き未だ戦はずして敵を呑むの概があつた。斯くて列機は威風堂々快翔を續け午後五時三十分豫定地點の上空に達した。指揮官は黃山南麓の大工場に目標を選定し急降下爆撃の命を下すや陣頭に立つてぐつと機首を下げた。全機之に従つて高度三千五百米より急降下爆撃に轉じ爆彈投下を開始した。忽ち起る轟然たる大爆音と共に黒煙は濛々と舞ひ上り

大工場は瞬く間に粉碎された。此の間要塞を始めとし十數隻の在泊艦艇から高角砲、機銃の猛射を浴びせかけて來た。然し列機は之等熾烈なる敵の防空砲火を物ともせず勇猛果敢彈幕を破つて急降下爆撃を敢行した。此の時編隊の最後に在つて爆撃を決行せんとしてゐた氏の機は不幸敵彈を受け高度千五百米附近で突如火を吐いたと見るや忽ち一塊の火達磨となつた。其の當時の機位から察するに假令爆彈を投下するも所詮命中しないものと思つて僚機は固唾を呑んで見てゐると、

氏はもはや之れ迄と決心したらしい、同じ戦死するなら暴戻なる敵軍を冥土の道連れにせんものと操縦員蒲地兵曹を激励した。同兵曹は死力を盡して燃ゆる愛機を立て直し平素の訓練通り再び的確なる角度で急降下爆撃の姿勢をとり聽て火達磨の中から爆弾投下を實施した。爆弾は見事工場内に命中した。次の瞬間氏の機は同工場内中央に矢の如く突入し邊りは一而火焰に包まれ愛機諸共に肉弾となつて自爆し兩勇士は壯烈鬼神を哭かしむる最期を遂げた。併し氏等の参戦以來數回に互る爆撃戦と尊き犠牲に依り爾後の我が作戦は有利に進展し其の後旬日を経ずして制空權は我が手に掌握するを得たのであつた。

氏は沈著豪膽にして齡十七歳を以て少年航空兵として海軍に身を投じ爾來切瑛琢磨學術技能の研磨に努め其の伎倆成績共に優秀にして前途有爲の航空下士官として囑望せられてゐた。今次事變に際會し前進根據地に進出するや旬日を出づして連日大洋を越え支那大陸上空を翔破し有ゆる危険困苦を克服し敵飛行場、陣地及工場其他の重要軍事施設の爆撃を敢行すること數回、毎回奮戦敢闘敵に多大の損害を與へ我が海軍機の威力を遺憾なく發揮し以て海軍の威武を中外に宣揚し惜しくも江陰空爆に自爆玉碎した。曩に蘇州爆撃に於て南野中尉機の肉弾自爆機あり、茲に再び氏の自爆戦術を見る正に之れ大和魂の大爆撃である。火焰裡に生死を超越し機長と操縦者が冷靜沈著一心一體となり而も其の意識に聊かの動搖もなく旺盛なる攻撃精神を死の直前迄發揮した事は是れ畢竟盡忠報國の大信念を具現したもにして天晴れ空軍將兵の龜鑑とすべきである。参戦僅かに一週日、氏の如き忠烈有爲の空軍勇士を喪つたことは洵に痛惜の極みである。されど其の壯烈なる行動は空前の壯舉武人の一生に選むべき死所としては之に優るものなく以て後進を振起せしむるに足る。氏今や瞑すと雖も其の赫々たる武勳は燦然として永へに空軍戦史を照らし芳名は千載に薫りて埋れず、不滅の英魂は靖國の神と祀られ國民崇敬の的たるべく氏死して亦餘榮ありと謂ふべきである。而して其の神靈は尙も皇國を護り又一家の前途に尊き加護照覽を垂れ給ふことであらう。

氏は戦死の日海軍一等航空兵曹に任ぜられ次で功六級金鷄勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍一等航空兵曹勳七等功五級 川田 正太郎

空前の壯舉渡洋爆撃に屢々武勳を奏し惜しくも揚州北方に玉碎す

氏は東京市江戸區逆井の人にして幼時父を喪ひ母を信と云ひ、大正四年二月に生れ未だ獨身であつた。性快活にして頗る敏捷の人であつた。昭和四年三月小松川小學校高等科を卒業し其の後は内務省に給仕となりて勤務してゐたが少年航空兵を志願し昭和五年六月第一期豫科練習生として横須賀海軍航空隊に入隊し爾來熱心學術技能を練磨し同七年十月同課程を卒業し後更に霞ヶ浦海軍航空隊第一期飛行練習生(操縦)教程を卒業し累進して同十一年十一月海軍二等航空兵曹に任ぜられた。此の間横須賀、霞ヶ浦及館山の各航空隊並に軍艦霧島、金剛等に勤務し同十二年七月木更津海軍航空隊附となつた。

昭和十二年七月北支に事變勃發するや、氏は聯合航空隊に編入せられて第三艦隊附屬となり八月上旬以來九州方面前進基地に待機してゐたが、八月十三日遂に上海に於て日支間に戦闘開始となるや翌十四日より敵飛行機は上海上空に飛來し我が陸戦隊本部、戦線部隊、旗艦出雲其他の海軍艦艇等は勿論各種重要建物、商業地區、旅館等に對し所嫌はず首爆撃を行ひ以て自國民及第三國民等幾多無辜の人々を殺傷するの暴舉を敢てし全上海市民怨嗟の的となつた。當時颯風は上海沖に停滯し海上風浪高く何時鎮まるとも測り知れざる光景に我が海軍航空隊は陸戦隊の惡戰苦闘と敵機の跳梁を耳にし義憤に燃えつつ脾肉の敷を漏らしてゐたが同日午後に至り遂に待望の進撃命令は發せられた。もはや荒天何のその、氏等決死の海軍航空隊將兵は感奮興起、猛鷲の羽搏き物凄く上海沖にゐた艦船上機隊は眞先に激浪を蹴つて離水し上海附近の敵

飛行場を襲つて大格納庫を爆破したのを手始めに、陸上及艦上攻撃機隊は嵐を衝いて長驅渡洋爆撃を敢行し敵航空兵力の各重要據點に對し有效なる巨弾を浴びせ、茲に支那空軍殲滅の幕は切つて落された。

翌十五日所屬隊に南京爆撃の命が下された。氏は操縦員として平本少佐指揮の下に吉田隊に屬し陸上攻撃機に搭乗し午前九時勇躍前進基地を進發し、帽を振る戦友の姿に感激の眸を輝かせつつ東支那海の怒濤を越え一路支那大陸へと奮進した。數日來の颯風は猶ほ収まらず翼も折れん許りの難飛行を続け聽て大陸上空に差しかかった。風雨は益々激しく密雲のため僚機を見失ふことも度々であつたが、其の内雲の間から湖水が見えた、太湖の上空らしく其の途端に密雲の中から突如敵戦闘機が現はれた。好敵來れと氏等搭乗の列機は隊長機を陣頭に威風堂々敵に肉薄し忽ち壯烈なる空中戦を演じ約三十分激烈なる戦闘の後僚機と協力し敵機一機を湖中に撃墜し他の一機を湖岸に不時著せしめた。此の戦果に氏等隊員の勇氣は百倍し悠々長江に沿ひ高度二百乃至四百米の編隊で南京に向つて奮進を續けた。間もなく南京胡宮飛行場が雲間から遙か彼方に現はれた。氏等搭乗員の意氣は愈々昂揚して機内は緊張し午後三時十五分南京上空に達し高度五百米の編隊で北方から侵入した。折柄起る敵の地上防空砲火を物ともせず隊長機を先頭に一機又一機密雲を破つて急降下し爆弾投下を開始した。此の時氏等は機長指揮の下に全員一致協力規を定めて胡宮飛行場に爆弾を投下した。忽ち起る轟然たる音響と共に黒煙天に沖し大型格納庫一棟竝に庫外飛行機數機を爆撃した。敵の防空砲火は愈々激しく爆撃終つて飛び上ると小癩にも敵戦闘機七、八機が挑戦して來た。素より空中戦は私の希ふ所、茲に南京上空に壯烈なる空中戦が始まつた。見敵必勝の我が海軍魂は火と燃えさかつて忽ち敵機二機を撃墜し残る敵機は我が猛威に恐れあらぬ方向へと遁走した。聽て戦闘終つて歸途に就き再び嵐を衝いて暗夜の大洋を越え其の重き使命を果し凱歌を擧げて基地に歸著した。次で十七日には再び大洋を越えて淮陰飛行場を襲ひ其の重要軍事施設を爆撃し勇戰奮闘敵に多大の損害を與へて其の心膽を寒からしめた。

越えて八月二十一日には曾我少佐指揮の下に陸上攻撃機隊吉田隊大庭機に搭乗し戦友數名と共に揚州爆撃に向ふこととなつた。午前二時二十分勇躍機上の人となり僚隊入佐隊と相前後して基地を進發し皎々たる満月を銀翼に浴び雲海を脚下に見つ一路支那大陸へと奮進し、午前四時四十五分大陸上空に差しかかった。折柄月は没し暗黒と雲霧のため何時しか入佐隊と分離し其後僚隊との連絡全く絶え杳として其の行方は不明となつた。當時入佐隊は雲霧のため揚州を發見し得ず爆撃目標を浦口に變更し午前六時十五分同地飛行場を爆撃し其の歸途、時恰も日の出に近く視界漸く明瞭に地物を辨別し得るに至り揚州飛行場を發見したが既に吉田隊は同飛行場を爆撃したらしく、場内には約十機の敵機二列にあり其の中央に數箇所の爆弾々痕を生じ其の内三機は盛に炎焼し他は大破せることを目撃した。之れ吉田隊奮戦の戦果なることは確實である。入佐隊と分離後行方不明となつた氏の隊は地上指揮官との連絡亦断絶し基地にゐた隊員は氏等の成功を祈りつつ憂慮して待つてゐたが正午に至るも吉田隊は一機も歸還せず、之を入佐隊の目撃状況から考察するに、吉田隊は目指す揚州飛行場を爆撃し多大の戦果を収めたが多數の敵戦闘機の包围を受け猛烈なる空中戦を演じ敵弾のため火災を起し遂に敵地に墜落の運命を辿り愛機と共に隊長以下隊員悉く壯烈なる戦死を遂げたものと認定せられた。併し氏等の緒戦に於ける奮戦と尊き犠牲は我が海空軍の制空權掌握の端緒を拓き爾後の戦闘を有利に導くを得たのであつた。其の後所屬隊は其の赫々の武勳に依り時の第三艦隊司令長官より榮えある感状を授與せられた、是れ全く氏等奮戦の功に俟つ所大なりと謂ふべきである。

氏は幼にして父を喪ひ兄武重氏戸主となり母を中心として四人の兄妹にて極めて圓滿なる家庭に養育せられてゐたが齡十六歳の夏我が海軍最初の少年航空兵に採用せられて海軍に入り爾來日夜心身の鍛錬及學術技能の研鑽に努め眞に若き有爲の航空下士官として將來を囑望せられてゐた。今次事變に際會し前進基地に進出するや旬日の後には嵐を衝いて長驅東支那海の怒濤千餘軒を翺破して支那大陸に往復し敵の首都南京を襲つて其の飛行場及地上敵機數機を爆破し更に空戦を演じて敵機を撃墜し、次で淮陰及揚州飛行場を空襲して其の重要軍事施設を爆撃する等實に空戦史上劃期的渡洋爆撃を敢行

し多大の戦果を収めて我が海軍機の威力を遺憾なく發揮し以て我が海軍の威武を中外に宣揚し惜しくも揚州北方に玉碎した。是れ即ち獻身奉公、盡忠報國の大信念を具現したるものにして天晴れ空軍將兵の龜鑑とすべきである。參戰僅かに一週日、氏の如き純忠至誠の士を喪つたことは洵に痛惜の極みである。されど其の行動は我が海軍空前の壯舉武人の一生に選むべき死所としては之に優るものなく以て後進を振起せしむるに足る。氏今や瞑すと雖も其の赫々たる武勳は燦然として永へに空軍戦史を照らし芳名は千載に薫りて埋れず、不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬の的たるべく氏死して亦餘榮ありと謂ふべきである。而して其の神靈は尙も皇國を護り又一家の前途に尊き加護照覽を垂れ給ふことであらう。氏は戦死の日海軍一等航空兵曹に任ぜられ次で拔群破格の功五級金鷄勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍一等整備兵曹勳七等功六級 龜田 重

壯烈屢、渡洋爆撃に武勳を奏し惜しくも揚州東方に玉碎す

氏は千葉縣安房郡主基村の人にして父を定太郎、母をいちと云ひ明治四十二年九月一日に生れ未だ獨身であつた。性温厚篤實にして堅忍不拔の志厚く率先難事に當りて倦む事なく頗る眞面目なる努力家であつた。大正十三年三月主基小學校高等科を卒業し其の後は東京市に出で鐵道の手荷物係となり昭和三年六月志願兵として横須賀海兵團に入團し機關兵となり忠實軍務に勉勵してゐたが後霞ヶ浦海軍航空隊普通科整備術練習生教程を卒業して整備兵に轉じ累進して同十一年五月海軍二等整備兵曹に任ぜられた。此の間軍艦長門、八雲、特務艦膠州、横須賀海兵團及霞ヶ浦、館山、横須賀等の各航空隊に勤務し同十二年七月木更津海軍航空隊附となつた。

昭和十二年七月北支に事變勃發するや、氏は聯合航空隊に編入せられ第三艦隊附屬となり八月上旬以來前進基地に進出

し出動準備を整へて待機してゐたが八月十三日遂に上海に於て日支間に戰闘開始となり、翌十四日より敵飛行機は屢々上海上空に飛來し我が陸戦隊本部及戰線部隊、旗艦出雲其他の海軍艦艇等は勿論各種重要建物、商業地區、旅館等に對し所嫌はず首爆撃を行ひ自國民及第三國民等幾多無辜の人々を殺傷するの暴舉を敢てし全上海市民の怨嗟の的となつた。當時颯風は上海沖に停滯し海上風浪高く何時鎮まるとも測り知れざる光景に全海軍航空隊は陸戦隊の苦戦と敵機の跳梁を耳にして義憤に燃えつつ空しく天を仰いで心なき暗雲の徂徠を眺めて骨肉の敷を漏らしてゐたが同日午後遂に待望の進撃命令

は發せられた。もはや荒天何のその氏等決死の航空隊將兵は感奮興起猛鷲の羽搏き物凄く上海沖にゐた艦船水上機隊は眞先に激浪を蹴つて離水し上海附近の敵飛行場を襲つて大格納庫を爆破し又艦上及陸上攻撃機隊は嵐を衝いて長驅渡洋爆撃を敢行し敵航空兵力の各重要據點に對し有效なる巨弾を浴びせ茲に支那空軍殲滅の幕は切つて落された。



翌十五日平本少佐の指揮する陸上攻撃機隊は南京爆撃の命を受けた氏は同隊吉田隊長機整備員として之に搭乘し午前九時勇躍九州方面前進基地を進發し帽を振ふ戦友の姿に感激の眸を輝かせつつ嵐を衝いて支那海の怒濤を越え一路支那大陸へと蕩進した。數日來の颯風は猶ほ収まらず翼も折れん許りの難飛行を続け纏て支那大陸の上空にさしかかつた。風雨は益々激しく密雲の爲め屢々僚機を見失ふ程であつたが其の内雲の間から湖水が見えた。太湖の上空に達したものの如く、其の途端に密雲の中から突如敵戰闘機數機が現はれた。氏の搭乘機は隊長機として陣頭に立ち所屬各機は之に續いて敵に肉薄し忽ち壯烈なる空中戦を演じ敵機一機を湖中に撃墜し他の一機を湖岸に不時

著せしめた。初陣の此の戦果に我は勇氣百倍し悠々長江に沿ひ高度二百乃至四百米の編隊で南京に向つて轟進した。間もなく南京胡宮飛行場が雲間から遙か彼方に現はれた。「爆撃用意」の號令と共に機内は緊張し午後三時十五分南京上空に達し高度五百米の編隊で北方から侵入した。折柄起る敵の地上防空砲火を物ともせず一機又一機密雲を破つて急降下し胡宮飛行場に巨弾の雨を浴びせ大型格納庫一棟竝に庫外飛行機數機を爆破した。爆撃して飛び上つて來ると小癩にも敵戦闘機七、八機が我に肉薄して來た。素より空中戦は我の希ふ所茲に南京上空に再び攻撃機對戦闘機の壯烈なる空中戦が始まつた。見敵必勝の我が海軍魂は火と燃えさかつて瞬く間に敵機三機を撃墜したが此の時氏の搭乗機は不幸敵弾を左側發動機に受け之が使用不能となつた。併し隊長の適切なる指揮と氏等搭乗員の適時的確なる處断に依り機は片側發動機のみで歸途に就き再び嵐を衝いて暗夜の大洋を翔破し遂に基地に歸著した。翌十六日には再び渡洋爆撃に参加して蘇州飛行場を爆撃する等連日勇戰奮闘敵に多大の損害を與へて其の心膽を寒からしめた。

越えて八月二十一日氏は第三回目の渡洋爆撃に参加する事となり曾我少佐指揮の陸上攻撃機隊吉田隊長機に搭乗して揚州飛行場爆撃に向ふ事となつた。午前二時二十分僚隊入佐隊と相前後して勇躍基地を進發し皎々たる満月を銀翼に浴び雲海を下に見つ一路支那大陸に向つて轟進し午前四時四十五分支那大陸上空にさしかかつた。折柄月は没し暗黒と雲霧のため氏の隊は何時しか入佐隊と分離し、其の後僚隊との連絡全く絶え杳として其の行方を知る事が出来なかつた。入佐隊は雲霧のため揚州を發見し得ず、浦口爆撃を敢行し其の歸途午前六時十五分過ぎ恰も日出に近く視界漸く明瞭となり地物を辨別し得るに至り揚州飛行場を發見したが既に吉田隊長は同飛行場を爆撃したらしく、場内には約十機の敵機二列にあり其の中央に數箇所の爆弾々痕と其の内三機は盛に炎焼し他は大破せるを目撃した之れ氏の隊が奮戰の戦果である事は確實である。入佐隊と分離後消息不明となつた氏の隊は地上指揮官との連絡亦断絶し基地に於ける隊員は氏等の成功を祈りつつ憂慮して待つてゐたが遂に正午に至るも歸還せず之を入佐隊の目撃状況から考察するに氏の目指す揚州飛行場を爆撃し

多大の戦果を収めたが多數の敵戦闘機と猛烈なる空中戦を演じ孤軍奮闘敵弾のため火災を起し遂に敵地に墜落の運命を辿つて愛機と共に隊員悉く壯烈なる戦死を遂げたものと認定せられた。併し氏等の緒戦に於ける奮戰と尊き犠牲は我が空軍の制空權掌握の端緒を拓き爾後の作戰を有利に導くを得たのであつた。其の後所屬隊は其の赫々の武勳に依り時の第三艦隊司令長官より譽れの感狀を授與せられた。是れ全く氏等奮戰の功に俟つ所大なりと謂ふべきである。

氏は沈著果敢常に飛行機の整備技術の研鑽に努め其の伎倆成績共に優秀にして前途有爲の下士官として上下の信望を厚くしてゐた。今次事變に際會するや、陸上攻撃機搭乗員として荒天を衝いて支那海の怒濤千餘軒を翔破して支那大陸に往復し遠く敵の首都南京を襲ひ更に空戦を交へて敵機三機を撃墜し次で蘇州、揚州飛行場を空襲する等實に我が空戦史上劃期的渡洋爆撃を敢行し敵に多大の損害を與へて我が海軍機の威力を遺憾なく發揮し海軍機の威武を中外に宣揚して惜しくも揚州爆撃戦の華と散つた。其の壯烈なる行動と獻身報國の赤誠は天晴れ我が空軍將兵の鑑とすべきである。參戰僅かに一週日、氏の如き忠烈の士を喪つたことは洵に痛惜の極みである。されど其の行動の壯烈なる事は我が海軍空前の壯舉武人の一生に選むべき死所としては之に優るものなく以て後世を激勵し後進を振起せしむるに足る。氏今や瞑すと雖も其の赫々たる武勳と芳名とは永へに我が空軍戦史に輝き、不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬の的たるべく氏死して亦餘榮ありと謂ふべきである。而して其の神靈は尙も皇國を護り又一家の前途に尊き加護佑助を垂れ給ふことであらう。

尙ほ氏が第一回南京爆撃参加後父母に宛てた書信の一節を記して其の堅き決意の程を偲ぶ事とする。小生第一回南京飛行場爆撃に参加空中戦闘を行ひ、運良くも小生の飛行機は敵弾十數發を受けたるも急所を外れて無事基地に歸つた。小生は再度の生還を期して居りません云々何一つ思ひ残す事なし幾重にも生前の御恩を謝す。友人親戚に呉れども宜しく御願ひいたします父母様御健在を祈ります。

空に散る我が身は軽くいくさ人の常

では皆様御機嫌にて左様なら。

氏は戦死の日海軍一等整備兵曹に任ぜられ次で功六級金鷄勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍一等兵曹勳七等功六級 米田春美

奮戦克く機銃の威力を發揮し遂に上海愛國女學校南方に斃る

氏は愛媛縣温泉郡湯山村溝邊の人にして父を巳之次、亡母をシゲといひ明治四十二年五月十五日に生れ妻繁子との間に長女美智子を擧げた。性温厚篤實幼にして母を喪ひ義姉を買母の如く敬慕し又事務的才能に長じ同僚との交遊圓滿にして諸人の親愛を受けてゐた。大正十四年三月湯山第一小學校高等科を卒業し同年四月松山市農業學校に入校し翌十五年三月家庭の都合に依り同校を中途退學し爾來家に在りて農業に従事しながら青年訓練所に通ひ昭和二年六月志願兵として佐世保海兵團に入團し誠實軍務に勵み後軍艦能登呂及常磐等に勤務し同六年十一月海軍砲術學校普通科砲術練習生教程を卒業と共に軍艦由良乗組となり同十一年五月果進して海軍二等兵曹に任ぜられた。尙ほ氏は昭和六年乃至九年事變の功に依り勳八等白色桐葉章を賜はつた。

氏の乗艦由良の所屬戰隊は昭和十二年七月北支事變勃發以來事變の進展に即應す可く待機してゐたが八月に入り上海の風雲愈々急迫を告ぐるや海軍特別陸戰隊輸送のため同月十日内地を出發し翌十一日上海に到着し陸戰隊を揚陸の上吳淞沖に下江して江上警備の任に服してゐた。八月十三日上海に於て日支開戦となるや愈々江上警備を嚴にしてゐたが翌十四日には早くも敵の飛行機七機吳淞沖に襲來し連續二回に亘り我が江上戰隊に對し爆撃を敢行した。各艦は必死防戦し其の一機を不時著せしめて其の他を撃攘した。續いて市政府附近及吳淞砲臺、吳淞鎮其の他の敵陣地を砲撃して之に多大の損害

を與へた。此間氏等艦員は奮戦克く艦の威力を發揮して敵の心膽を寒からしめた。

同日深更所屬戰隊より聯合陸戰隊を揚陸する事となり氏は選ばれて同陸戰隊に編入せられ岡野部隊長指揮の下に假屋機銃中隊杉富小隊に屬し機銃分隊下士官として艦員一同の激勳の辭に送られ驅逐艦に分乘して沿岸の猛火や銃聲に猛る心を躍らせながら肅々として閩の黃浦江を遡江し翌十五日午前二時十五分上海大阪商船碼頭に上陸し第三艦隊司令長官直率の下に便衣隊の掃蕩其他租界警備の任に服したが同日午後所屬部隊は上海特別陸戰隊司令官の指揮下に入つた。十六日未明



より上海北部地區廣中路方面の戦鬪激烈を極め我が軍寡兵頗る苦戦に陥るに及び所屬部隊は之が救援の命に接し内藤中隊は水電路上陣地附近に進出し鎌田中隊は廣中路陣地の南方内藤中隊の右翼に、氏の所屬機銃中隊は鎌田、内藤兩中隊の中間後方に進出し何れも陣地を構築し前面大華農園、粵東中學又は愛國女學校方面の敵と對峙して奮戦を續けてゐた。十七日午後三時頃所屬岡野部隊は越野部隊と共に守備陣地を交代し、愛國女學校附近の敵と對峙する事となつた。そこで各隊は約三百米前進し、鎌田中隊は愛國女學校南方「クリーク」の西方に内藤中隊は鎌田中隊の右翼に各陣地を構へて之に

據つた。此時氏の所屬小隊は鎌田中隊陣地に配屬せしめられた。敵は其の優勢を恃み頑強なる抵抗を試み剩へ屢々逆襲に轉じ來りて銃砲彈の雨を降らし戦鬪は激烈を極めた。されど我は其の都度之を遡へては射ち射つては追ひ敵に多大の損害を與へ克く守備線を確保してゐた。併し敵は尙も執拗に逆襲を繰り返し十八日午後六時頃に至り北方愛國女學校附近の敵は突如所屬鎌田中隊陣地に猛襲し來たので中隊長は直ちに之に反撃を加ふ可く陣地西方にゐた氏の機銃分隊をして中隊本

部階上の晝間陣地に陣地變換を命じた。茲に於て氏は部下分隊を率ゐる弾雨を冒して急速陣地を變換し奮然として部下を叱咤督勵して敵に猛射を浴せ其の適切なる射撃指揮と有效的確なる彈著と相俟つて敵に甚大の損害を與へて敵の心膽を寒からしめたが偶々敵の一彈は無念一彈著觀測中の氏の左胸部を貫いて其場にどつと打ち倒れた。然し剛氣の氏は直ちに半身を起し「大丈夫だ彈藥盒を外して呉れ」と部下の機銃員林二水に命じ尙も射撃を指揮せんとして雙眼鏡を手にせんとしたが口からの出血甚しくして再び起つこと出來ず直ちに部下に依り階下に運ばれたが途中遂に悲壯の最期を遂げた。時に午後六時三十分であつた。併し氏の奮戦と尊き犠牲に依り部下は分隊下士官の意を體し機銃員僅かに三名となるも尙奮戦を續け克く大敵を制壓して遂に之を撃退し得たのであつた。其後陸戦隊は赫々の武勳に依り時の第三艦隊司令長官より譽ある感状を授與せられた、是れ全く氏等の勳功に俟つ所大なりと謂ふ可きである。

氏は上海に於て開戦となるや聯合陸戦隊分隊下士官として上海に上陸し間もなく苦戦中の友軍救援部隊として北部戦線に参加し具に戦場の辛酸を嘗め克く隊長の意圖を體し部下を指導激勵して力戦奮闘以て機銃の威力を遺憾なく發揮し味方戦勝に多大の寄與貢獻をなし遂に敵彈を受けて壯烈なる戦死を遂げた。是れ畢竟純忠赤誠の發露にして其の忠烈は天晴れ軍人の鑑とす可きである。参戦幾日ならずして斯かる忠烈の士を喪ひたるは洵に痛惜の極みなるも、其の赫々たる武勳は永へに海軍戦史に輝き芳名は千載に亙りて埋れず、不滅の英魂は靖國の神と仰がれ神靈尙も皇國を護り且つ一家の前途に尊き加護佑助を垂るるであらう。

因に氏の兄次郎氏は陸軍軍曹、同時春氏は陸軍伍長として今次事變に應召出征して第一線に活躍し任を終へて歸郷したとの事である。

氏は戦死の日海軍一等兵曹に任官し次で功六級金鷄勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍一等航空兵曹勳七等功六級 高橋 哲平

空前の壯舉渡洋爆撃に屢々武勳を奏し惜しくも揚州北方に玉碎す

氏は山形縣飽海郡遊佐村野澤の人にして亡父を喜作、母を繁代といひ大正二年一月に生れ未だ獨身であつた。性剛直にして動作活潑、熱心事に當り初志を貫徹せざれば已まざる氣概があつた。昭和二年三月遊佐小學校高等科を卒業し其後は農業に従事する傍青年訓練所に通ひ心身の鍛鍊に努め昭和六年六月志願兵として横須賀海兵團に入團し水兵となり誠實軍務に精勵し後横須賀海軍航空隊偵察練習生教程を卒業して航空兵となり累進して同十一年十一月海軍二等航空兵曹に任ぜられた。此の間軍艦金剛、赤城、鳳翔及横須賀、館山、第一、第十一の各航空隊に勤務し同十二年七月木更津海軍航空隊附となつた。

昭和十二年七月北支に事變勃發するや、氏は聯合航空隊に編入せられ第三艦隊附屬となり八月上旬以來九州方面前進基地に待機してゐたが八月十三日遂に上海に於て日支間に戦闘開始となるや翌十四日より敵飛行機は上海上空に飛來し我陸戦隊本部、戦線部隊、旗艦出雲其他の海軍艦艇等は勿論各種重要建物、商業地區、旅館等に對し所嫌はず首爆撃を行ひ以て自國民及第三國民等幾多無辜の人々を殺傷するの暴舉を敢てし全上海市民怨嗟の的となつた。當時颯風は上海沖に停滯し海上風浪高く何時鎮まるとも測り知れざる光景に我が海軍航空隊は陸戦隊の惡戰苦闘と敵機の跳梁を耳にし義憤に燃えつつ骸肉の歎を漏らしてゐたが同日午後に至り遂に待望の進撃命令は發せられた。もはや荒天何のその、氏等決死の海軍航空隊將兵は感奮興起猛鷲の羽搏き物凄く上海沖にゐた艦船水上機隊は眞先に激浪を蹴つて離水し上海附近の敵飛行場を襲つて大格納庫を爆破したのを手始めに陸上及艦上攻撃機隊は風を衝いて長驅渡洋爆撃を敢行し敵航空兵力の各重要據點に對し有效なる巨彈を浴びせ茲に支那空軍殲滅の幕は切つて落された。

翌十五日所屬隊に南京爆撃の命が下された。氏は偵察員として平本少佐指揮の下に吉田隊に屬し陸上攻撃機に搭乗し午前九時勇躍前進基地を進發し帽を振る戦友の姿に感激の眸を輝かせつつ、東支那海の怒濤を越え一路支那大陸へと竄進した。數日來の颯風は猶ほ収まらず翼も折れん許りの難飛行を続け聽て大陸上空に差しかかった。風雨は益々激しく密雲のため僚機を見失ふ事も度々であつたが其の内雲の間から湖水が見えた、太湖の上空らしく其の途端に密雲の中から突如敵戦闘機が現れた好敵來れと氏等搭乗の列機は隊長機を陣頭に威風堂々敵に肉薄し忽ち壯烈なる空中戦を演じ約三十分激烈なる戦闘の後僚機と協力し敵機一機を湖中に墜墜し他の一機を湖岸に不時著せしめた。此の戦果に氏等隊員の勇氣は百倍し悠々長江に沿ひ高度二百乃至四百米の編隊で南京に向つて竄進を續けた。間もなく南京胡宮飛行場が雲間から遙か彼方に現れた。氏等搭乗員の意氣は愈々昂揚して機内は緊張し午後三時十五分南京上空に達し高度五百米の編隊で北方から侵入した。折柄起る敵の地上防空砲火を物ともせず隊長機を先頭に一機又一機密雲を破つて急降下し爆弾投下を開始した。此の時氏等は機長指揮の下に全員一致協力規を定めて胡宮飛行場に爆弾を投下した。忽ち起る轟然たる音響と共に黒煙天に沖し大型格納庫一棟並に庫外飛行機數機を爆破した。敵の防空砲火は愈々激しく爆撃終つて飛び上ると小嶺にも敵戦闘機七、八機が挑戦して來た。元より空中戦は我の希ふ所、茲に南京上空に壯烈なる空中戦が始まつた。見敵必勝の我が海軍魂は火と燃えさかつて忽ち敵機二機を撃墜し残る敵機は我が猛威に恐れ、あらぬ方向へと遁走した。聽て戦闘終つて歸途に就き再び嵐を衝いて暗夜の大洋を越え其の重き使命を果し凱歌を擧げて基地に歸著した。次で十七日には淮陰飛行場を襲つて其の重要軍事施設を爆撃し勇戦奮闘敵に甚大の損害を與へて其の心膽を寒からしめた。

越えて八月二十一日には曾我少佐指揮の下に陸上攻撃機隊吉田隊大庭機に搭乗し戦友數名と共に揚州爆撃に向ふ事となつた。午前二時二十分勇躍機上の人となり僚隊入佐隊と相前後して基地を進發し皎々たる満月を銀翼に浴び雲海を脚下に見つつ一路支那大陸へと竄進し午前四時四十五分大陸上空に差しかかった。折柄月は没し暗黒と雲霧のため何時しか入佐

隊と分離し其後僚隊との連絡全く絶え杳として其の行方は不明となつた。當時入佐隊は雲霧のため揚州を發見し得ず爆撃目標を浦口に變更し午前六時十五分同地飛行場を爆撃し其の歸途、時恰も日出に近く視界漸く明瞭に地物を辨別し得るに至り揚州飛行場を發見したが既に吉田隊は同飛行場を爆撃したらしく場内には約十機の敵機二列にあり其の中央に數箇所の爆弾々痕を生じ其の内三機は盛に炎焼し他は大破せる事を目撃した。之れ吉田隊奮戦の戦果なる事は確實である。入佐隊と分離後行方不明となつた氏の隊は地上指揮官との連絡亦断絶し基地にゐた隊員は氏等の成功を祈りつつ憂慮して待つてゐたが正午に至るも吉田隊は一機も歸還せず之を入佐隊の目撃状況から考察するに吉田隊は目指す揚州飛行場を爆撃し多大の戦果を収めたが多數の敵戦闘機の包围を受け猛烈なる空中戦を演じ敵弾のため火災を起し遂に敵地に墜落の運命を辿り愛機と共に隊長以下悉く壯烈なる戦死を遂げたものと認定せられた。併し氏等の緒戦に於ける奮戦と尊き犠牲は我が海空軍の制空權掌握の端緒を拓き爾後の戦闘を有利に導くを得たのであつた。其後所屬隊は其の赫々の武勳に依り時の第三艦隊司令官より譽の感状を授與せられた。是れ全く氏等奮戦の功に俟つ所大なりと謂ふ可きである。

氏は平素より至誠奉公の念厚く航空兵となるや日夜奮勵努力其の技術の研鑽錬磨に努め其の成績亦優良であつた。休暇歸省の際は必ず夜間青年學校に至りて講演をなし郷黨青年に對し海軍思想の徹底普及を計り又志願兵募集に就ては兵事主任に協力し或は講演をなし又は参考書を贈る等其の熱誠は眞に賞讃す可きものがあつた。今次事變に際會し前進基地に進出するや旬日の後には嵐を衝いて長驅東支那海の怒濤千餘軒を翔破して支那大陸に往復し敵の首都南京を襲つて其の飛行場及地上敵機數機を爆破し、更に空戦を演じて敵機を撃墜し次で淮陰及揚州飛行場を空襲して其の重要軍事施設を爆撃する等實に我が空戦史上劃期的渡洋爆撃を敢行し多大の戦果を収めて我が海軍機の威力を遺憾なく發揮し以て海軍の威武を中外に宣揚し惜しくも揚州北方に玉碎した。是れ畢竟獻身奉公、盡忠報國の大信念を具現したるものにして天晴れ空軍將兵の鑑とす可きである。參戰僅かに一週日氏の如き忠烈有爲の士を喪つた事は洵に痛惜の極みである。されど其の行動は

我が海軍空前の壯舉、武人の一生に選む可き死所としては之に優るものなく以て後進を振起せしむるに足る。氏今や瞑すと雖も其の赫々たる武勳は燦として空軍戦史を照らし芳名は千古に薫りて埋れず、不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬の的たる可く氏死して亦餘榮ありと謂ふ可きである。而して其の神靈は尙も皇國を護り又一家の前途に尊き加護照覽を垂れ給ふことであらう。

氏は戦死の日海軍一等航空兵曹に任ぜられ功六級金鷄勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍一等航空兵曹勳七等功六級 瀧澤 萬

水上偵察機勇敢に敵戦闘機と交戦し遂に上海敵陣地に玉碎す

氏は岩手縣東磐井郡長島村長部の人にして父を門之助と云ひ大正三年十一月に生れ未だ獨身であつた。性温順にして頭腦明晰、志操又堅實にして孝心深く常に業務に勉勵し優良青年として賞讃すべきものがあつた。昭和四年三月長島小學校高等科を卒業したが小學校在學中は終始優秀なる成績を挙げ卒業後は兄と共に熱心父母を扶けて農業に従事してゐた。昭和六年六月志願兵として横須賀海兵團に入團し水兵となつたが、後横須賀海軍航空隊偵察練習生教程を卒業して航空兵となり霞ヶ浦、横須賀、館山、佐伯等の各航空隊勤務及軍艦比叡乗組を経て同十年十一月軍艦神威乗組となり累進して同十二年五月海軍二等航空兵曹に任ぜられた。

昭和十二年八月十三日上海に於て日支間に戦闘開始となるや翌十四日より敵飛行機は屢々上海上空に飛來し我が陸戦隊本部及戦線部隊、旗艦出雲其の他の海軍艦艇、帝國總領事館等は勿論各種重要建物商業地區、旅館等に對し所嫌はず百爆撃を行ひ以て自國民及第三國民等幾多無辜の人々を殺傷するの暴舉を敢てし他國民のみならず自國民に對してすら怨嗟の

的となつた。當時颯風は上海沖に停滯し海上風浪高く何時鎮まるとも測り知れざる光景に上海沖合に碇泊中の氏等艦船水上機隊員は陸戦隊員の苦戦を耳にしながら敵機の跳梁に憤慨し進撃命令の降下今や遅しと待つてゐた。同日午後全航空隊に對し待望の命令が下つた。上海沖にゐた我が艦船水上機は真先に激浪を蹴つて離水し、虹橋飛行場を襲つて大格納庫を爆破し開北及北四川路の敵陣地を掃射して多大の損害を與へ尙ほ運動不自由なる水上機を以て敢然輕快なる敵陸上機に挑戦し上海上空に其の二機を撃墜した。翌十五日以來氏は水上偵察機搭乗員として連日上海附近の敵飛行場及敵陣地の爆撃並に租界上空の警戒等に當り熾烈なる敵の地上防空砲火を冒し勇戦奮闘我が陸戦隊に協力して其の戦闘を有利に導き多大の戦果を収め克く其の職責を全うして遺憾なかつた。

八月二十日氏は南部大尉の指揮する水上機隊に屬し機長として水上偵察機に搭乗し浦東及眞茹方面の敵陣地の偵察並に爆撃を敢行し後旗艦出雲の直衛に任じ其の上空を哨戒中恰も午後六時三十分頃であつた、敵の「カーチスホーク」戦闘機四機を上海上空に認め、氏等水上機隊員は好敵來れと勇氣百倍、飛行帽の下から炬眼を爛々と光らせて霧地に敵の戦闘機に迫り猛然攻撃の火蓋を切り茲に壯烈なる空中戦を演じた。併し敵は輕快俊敏、性能最も優秀な戦闘機なるに反し我が戦闘に最も不利な下駄履きの水上機にて其の運動意の如くならず不幸にも氏の搭乗機は其の重要部に敵弾を受け操縦不能に陥り白煙を曳きつつ墜落状態となり上海北停車場北西方敵陣地の濛々たる戦火に依る黒煙の中に機影を没し遂に愛機と共に壯烈なる戦死を遂げた。併し氏等の奮戦と尊き犠牲は我が空軍の制空權獲得の端緒を拓き其の後に於ける我が戦闘を有利に導くを得たのであつた。

氏は今次上海戦勃發するや、水上偵察機搭乗員として上海附近の敵飛行場及敵陣地を襲ひ或は又租界上空の警戒任務に服し更に浦東及眞茹方面の敵陣地の偵察及爆撃を敢行し勇戦力闘空中戦を演じて多大の戦果を収め遂に敵弾を機體に受け敵陣地に玉碎した。是れ即ち獻身奉公盡忠報國の大信念を具現したるものにして天晴れ皇國軍人の面目躍如たるものがあ

る参戦僅かに一週日、氏の如き忠烈なる空軍戦士を喪ひ今や其の壯容に接するを得ざるは洵に痛惜の極みである。併し生きては國家の干城となり死しては護國の神となるは武人の本懐とするところ、氏今や瞑す雖も其の赫々たる武勳は永へに皇軍戦史に輝き芳名は千古に残りて埋れず、不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬の的たるべく氏死して餘榮ありと謂ふべきである。而して其の神靈は尙も皇國を護りて泰山の安きにあらしむべく又一家の前途に尊き加護佑助を垂れ給ふことであらう。

氏は戦死の日海軍一等航空兵曹に任ぜられ次で功六級金鵄勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍一等兵曹勳七等功六級 常木榮吉

累戦武功を奏して惜しくも吳淞敵前上陸に散華す

氏は埼玉縣秩父郡兩神村小森の人にして亡父を竹市、母をトモと云ひ明治四十二年七月に生れ未だ獨身であつた。性温厚質朴にして如何なる難事にも黙々として當り初志を貫徹せざれば已まざる正直一途の人であつた。大正十三年三月兩神高等小學校を卒業し其の後は家に在りて家業を扶けてゐたが昭和五年六月徴兵として横須賀海兵團に入團し誠實軍務に精勵し同九年五月海軍砲術學校普通科砲術練習生教程を卒業し累進して同十二年五月海軍二等兵曹に任ぜられた。此の間軍艦長門、陸奥、海軍砲術學校、横須賀海兵團等に勤務し次で軍艦愛宕乗組中同年七月選ばれて横須賀鎮守府特別陸戦隊に編入せられた。

昭和十二年七月北支事變勃發以來中支方面の風雲亦急を告ぐるや、氏は横須賀鎮守府特別陸戦隊竹下大隊宮野中隊吉田小隊に屬し分隊下士官として八月二日以來旅順に進出し待機してゐたが八月十三日上海に於て遂に日支開戦となり我が軍

寡兵頗る苦戦に陥るに及び所屬大隊は命に依り八月十七日旅順を出發し同月十八日上海に上陸して同地特別陸戦隊指揮官の指揮下に入り其の本部を公大社宅に置き東部支隊左地區隊として楊樹浦「クリーク」以西の地域を警戒し日本郵船碼頭及滙山路の線を占領確保することとなつた。

氏は上陸以來東部租界左地區の敵第一線に進出して其の守備に就き所屬吉田小隊が昆明路と舟山路との交叉點陣地に於て我に十數倍の敵と對峙するや、連日晝夜間斷なき敵襲を受けて激戦を交へてゐたが氏は其の間克く小隊長の意圖を體し部下を指揮して勇戦奮闘敵に甚大の損害を與へて之を撃退し殊に八月二十日午前一時半頃より優勢なる敵氏の陣地に來襲せし際の如きは寡兵を以て奮戦二時間に及び味方に負傷者續出したが、堅忍不撓多數の敵を殲して之を撃退し以て味方の志氣を振起し敵をして一步も守備線内に侵入せしめず克く其の陣地を死守してゐた。斯くて我が陸戦隊各部隊は寡兵を以て大敵を邀撃し惡戦苦闘を續くること旬日、克く租界の安全を確保してゐたが、上海に於ける形勢は益々重大を加へ遂に陸軍部隊の派遣となり其の先遣部隊の一部は上海に到着した。當時上海東部租界に奮戦中の所屬竹下部隊は八月二十一日夜陸軍揚陸掩護の爲め吳淞鐵道棧橋附近に敵前上陸を敢行すべき命を受け、翌二十二日其の守備區域を土師大隊に譲り大阪商船棧橋に集合し暫時休養の後諸準備を整へ同日午後十時半上海招商局棧橋より雲陽丸、當陽丸、信陽丸の三船に分乗し氏の屬する小隊は大隊本部と共に雲陽丸に乗船し勇躍出發の時機を待つてゐた。總て三船は江上艦艇に護衛せられ燈火を隠蔽して肅々として黃浦江を下つた。折柄皎々たる月は一片の浮雲さへなく晴れ渡つた江南の空に懸り、船上の勇士の鐵兜の上に白き光を浴びせてゐた。船は漸次進航を續け翌二十三日午前二時總員上陸準備と共に最上甲板に土囊を上げて機銃陣地を構築し又前後甲板には舳索取方の準備を行ひ午前二時四十五分吳淞棧橋の上流横付豫定地點の壁岸に接するや、敵は忽ち河岸數米前方の塹壕陣地より猛烈なる機銃掃射を浴びせて來たので我亦直ちに輕機銃を以て之に應戦し其の有效的確なる射撃に依つて敵を制壓した。此の間舳索取方に從事せる勇士は直ちに水中に飛び込み敵彈雨注の中に之を附

近の枕に取付け横付終るや更に架橋配置に定められた者亦水中に飛び込み道板を連ねて棧橋を作つた、斯くて架橋完了するや部隊長を始め全員は肩に綾なす白襷の姿も勇ましく直ちに上陸を開始した。氏等の所屬小隊が將に上陸を決心せんとするや河岸に構築せる堅固なる陣地に據つてゐた大敵は早くも之を察知して我に猛射を浴びせて來た。豪膽なる氏は雨霰の如き銃砲彈を物ともせず克く小隊長の意圖を體し部下を叱咤督勵して敵前數米の岸壁に上陸を敢行した。敵は我に向つて亂射亂擊死物狂となつて我が上陸を阻止せんとした。氏は勇氣百倍敵の振舞小癩なりと、ぢり／＼と敵に肉薄攻め立ててゐたが折しも敵の地雷爆發して轟然たる爆音と共に土砂高く空に揚りて砂塵の雨を降らし爆煙濛々として四邊を蔽ふた。氏は敵を撃滅するは此の時ぞと部下を提げ獅子奮迅の勢を以て銃劍を連ね爆煙を潜つて敵陣に突入し肉弾相搏つ白兵戦を演じてゐたが無念！敵の手榴彈のため顔面、頸部等數ヶ所に彈片創を負ひ「残念」の一語を残して遂に壯烈なる戦死を遂げた。併し氏の奮戦と尊き犠牲は我が部隊上陸成功の端緒を拓き所屬大隊は上陸開始後二時間にして見事に敵を驅逐して陸軍部隊揚陸掩護の大任を果し得たのであつた。其の後大隊は特に本上陸戦の赫々の武勳に依り時の第三艦隊司令長官より榮えある感狀を授與せられた是れ全く氏等の奮戦に俟つ所大なりと謂ふべきである。

氏は今次聖戦に参加するや、上海上陸間もなく東部租界守備の任に就き連日連夜不眠不休有ゆる辛酸を嘗め奮戦力闘遺憾なく其の本分を全うした。殊に吳淞敵前上陸に際しては降り布く彈雨の中敢然上陸を決行し勇猛果敢肉弾突撃を敢行し遂に敵彈を受けて護國の華と散つた。壯烈斯くの如きは眞に生死を超越し一意其の重責完遂に邁進せんとする純忠至誠の發露にして天晴れ皇國軍人の鑑とすべきである。參戰旬日ならずして斯かる忠烈の士を喪ひ、今や其の壯容に接する能はざるは洵に痛惜の極みなるも、其の赫々たる武勳は永へに海軍戦史を飾り芳名は千古に薫りて埋れず、不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬の的たるべく、神靈尙も皇國を護り且一家の前途に尊き加護佑助を垂るるであらう。氏は戦死の日海軍一等兵曹に進み次で功六級金鷄勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍一等航空兵曹勳七等功六級 中山 榮

壯烈偉勳を樹て愛機諸共上海敵陣地爆撃戦に玉碎す(兄弟戦死)

氏は福岡縣三井郡太刀洗村高樋の人であつたが其の後家の都合に依り同縣朝倉郡甘木町に移轉した、父を卯六、母をヒサヨと云ひ大正四年十一月二十九日に生れ未だ獨身であつた。性温厚篤實にして思慮周密、短軀であつたが身體頑健で元氣頗る旺盛であつた。又孝心深い人で小學校時代から勉學の暇を見ては父母を扶けて家業にいそしみ、親思ひで又弟妹を愛し温情抱すべきものがあり誠に眞面目の優良青年として近隣の褒め者であつたことである。太刀洗小學校在學中兩親の住所移轉と共に朝倉郡甘木小學校に轉校し昭和五年三月同校高等科を卒業し其の後は家業の豆販賣業に従事する傍青年訓練所に通ひ次で海軍少年航空兵に志願し同六年六月豫科練習生として横須賀海軍航空隊に入隊し刻苦勉勵三ヶ年の後同九年五月同練習生教程を卒業し艦務實習の爲め軍艦島海乗組となつた。後更に霞ヶ浦海軍航空隊飛行(操縦)練習生教程を卒業して大村海軍航空隊附となり昭和十一年度航空檢定成績優等に依り賞狀及航空優等章を授與せられ同年十一月軍艦加賀乗組となり累進して同十二年五月海軍二等航空兵曹に任ぜられた。

昭和十二年八月十三日上海に於て日支戰闘開始となるや、翌十四日より敵機は屢々上海上空に飛來し我が陸戦隊本部、戦線部隊、旗艦出雲其他の海軍艦艇等は勿論各種重要建物及商業地區、旅館等に對し所嫌はず直爆撃を行ひ以て自國民及第三國民等幾多無辜の人々を殺傷するの暴舉を敢てし全上海市民怨嗟の的となつた。恰も其の當時は支那海を北上中の颯風があり海上風浪高く何時鎮まるとも測り知れざる光景に揚子江口沖合數十裡に待機中の我が海軍航空隊は陸戦隊の惡戦苦闘と敵機の跳梁を耳にし義憤に燃えつつ今や遅しと出撃の命令を待つてゐたが此の日夕刻に至り待望の進撃命令は發せられた。待ちに待つた其の命令、氏等決死の艦上攻撃隊は感奮興起、猛鷲の羽搏き物凄く瞬時にして戰闘準備は完成し隊

員の意氣は將に天を衝き戰はずして既に敵を呑むの概があつた。

翌十五日以來氏は連日機翼を休む暇もなく悪天候を冒して難飛行を決行し敵の飛行場又は陣地の爆撃を敢行すること十數回、其の都度勇敢闘敵に多大の損害を與へて偉勳を樹てた。中にも十五日に於ける杭州東方の紹興飛行場爆撃の際には熾烈なる敵の地上防空砲火を冒して其の飛行場及地上敵機多數を爆破し空戦に敵戦闘機一機を撃墜し又二十日には廣徳

飛行場を襲つて其の大格納庫を猛爆し空戦に敵戦闘機一機を屠る等其の功績正に拔群であつた。



越えて九月四日所屬隊に對し上海廣東墓地の敵砲兵陣地爆撃の命が下された。氏は崎長大尉の指揮する艦上爆撃機隊に屬し操縦員として偵察員永野三空曹と共に二番機に搭乗し僚機と共に午後零時十一分勇躍甲板を蹴つて母艦を進發した。此の日天氣は半晴で所々に白雲がたなびいてゐたが氏等の空襲部隊は隊長機を先頭に高度二千米で翼もすれ／＼の緊密なる編隊で威風堂々目的地上空に向つて進した。午後一時二十分頃敵陣地上空に達するや、忽ち敵の地上防

空砲火は一齊に火を吐き我に猛射を浴びせて來た。敵弾は我が列機の前左右に隙間もなく炸裂して我が行手を遮るされど氏等決死の海鷲隊は之を物ともせず、沈著大膽此の彈幕の間から敵の砲兵陣地の位置を見定め、一機又一機と次ぎ／＼に急降下爆撃を開始した。敵は尙も熾んに射つてくる、投下された爆弾は矢の如く落下し見事敵陣地に命中した。轟然たる爆音と共に黒煙は濛々と舞ひ上り土砂も人も諸共に高く空に吹き上げられ瞬く間に敵陣地は爆破された。此の戦闘で氏の機は急降下爆撃に移つた際、高度千米で不幸敵の一弾を燃料油タンクに受けて火を發し高度八百米で火達磨となつた。

併し剛毅の氏は之に屈せず泰然日若尙も機を操縦して爆弾を投下し敵陣地を粉碎した。氏はもはや是れ迄と觀念し機を驅つて敢然死地に突入し愛機諸共蘇州河の中に墜落し壯烈なる戦死を遂げた。

氏は少年航空兵として海軍に身を投じ爾來日夜孜々として學術技能の研鑽練磨に渾身の努力を傾注し其の技術優秀にして有爲の人物として將來を期待せられてゐた。今次上海戦勃發するや艦上爆撃機操縦員として嵐を衝いて屢々大洋を越え支那大陸上空を翔破して敵の飛行場を強襲し其の軍事施設及地上敵機多數を爆破し尙ほ空戦に敵機數機を屠り或は又敵陣地を爆破して地上部隊の戦闘に協力する等連日息つく暇もなく勇戦力闘多大の戦果を收め克く海軍機の威力を發揮し以て聖戦遂行に絶大の寄與貢獻をなした。是れ畢竟生死を超越し獻身以て君國に報いんとする純忠赤誠の發露にして天晴れ空軍將兵の鑑とすべきである。參戦二旬早くも氏の如き忠勇義烈の士を喪つたことは洵に痛惜の極みである。されど其の身は火焰に包まれ死に直面せるに拘らず從容自己の任務を完遂し敢然死地に突入した烈々たる攻撃精神と崇高なる犠牲的精神は眞に大和魂の精華を發揮したものと謂ふべく其の忠烈偉勳は燦として空軍戦史に輝き芳名は千載に薫りて埋れず、不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬の的たるべく氏亦以て瞑すべきである。而して其の神靈は尙も皇國を護り又一家の前途に尊き加護照覧を垂れ給ふことであらう。

因に氏の兄繁樹氏も海軍一等航空兵曹で今次事變に應召し兄弟揃つて上海方面上空に活躍してゐたが昭和十五年三月十一日弟の後を追つて名譽の戦死を遂げたのであつた。實に一家より二名の空の勇士を出した譽の家である。

遺書

大日本帝國に生をうけ兵籍に身を置くの光榮に、克く陛下の膝下に斃るるを得たるは自分ながら死場所を得たるものなり。

大事なる人命と愛機とを消滅せしめたるは眞に申譯なし。
七度生れて皇國を護らん。

長上の武運長久を地下三尺より祈る。

尙ほ兩親兄弟妹宛遺書にも生前の恩を謝し弟妹を訓戒激勵してゐる。眞に感激の涙を催すものがある。

氏は戦死の日海軍一等航空兵曹に任ぜられ次で功六級金鷄勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍一等航空兵曹勳七等功六級 中島 策 郎

空前の壯舉渡洋爆撃に世界の耳目を聳動し惜しくも揚州東方に散る

氏は東京市本郷區田町の人にして幼時父を喪ひ母をキクエと云ひ明治四十四年四月に生れ妻をゆきと云ふ。性温良寡黙にして母に對し克く孝養を盡し常に熱心事に當りて怠ることがなかつた。大正十五年三月高等小學校を卒業し其の後は電信係となりて勤務し克く母の家計を扶けてゐたが昭和四年六月志願兵として横須賀海兵團に入團し機關兵となり忠實軍務に勉勵し後海軍工機學校普通科機關術練習生教程を卒業し後又横須賀海軍航空隊偵察練習生の教程を卒業して航空兵となり累進して同十一年十一月海軍二等航空兵曹に任ぜられ同十二年七月館山海軍航空隊より轉勤して木更津海軍航空隊附となつた。

昭和十二年七月北支に事變勃發するや、氏は聯合航空隊に編入せられ第三艦隊附となり八月上旬以來九州方面前進基地に進出し待機してゐたが八月十三日上海に於て日支間に戦闘開始となるや、翌十四日より敵飛行機は屢々上海上空に飛來し我が陸戰隊本部、戰線部隊、旗艦出雲其の他の海軍艦艇等は勿論各種重要建物又は商業地區、旅館等に對し所嫌はず盲

爆撃を行ひ以て自國民及第三國民等幾多無辜の人々を殺傷するの暴舉を敢てし全上海市民怨嗟の的となつた。當時颯風は上海沖に停滯し海上風浪高く何時鎮まるとも測り知れざる光景に我が海軍航空隊は陸戰隊の惡戰苦闘と敵機の跳梁を耳にし義憤に燃えつつ進撃命令の降下今や遅しと髀肉の歎を漏らしてゐたが同日午後に至り遂に待望の命令は發せられた。もはや荒天何のその、氏等決死の海軍航空隊將兵は感奮興起猛鷲の羽搏き物凄く、上海沖にゐた艦船水上機隊は眞先に激浪を蹴つて離水し上海附近の敵飛行場を襲つて大格納庫を爆破したのを手始めとし更に陸上及艦上攻撃機隊は嵐を衝いて長驅渡洋爆撃を敢行し敵航空兵力の各重要據點に有效なる巨弾を浴びせ茲に支那空軍殲滅の幕は切つて落された。

翌十五日平本少佐の指揮する陸上攻撃機隊は南京爆撃の命を受け氏は吉田隊偵察員として之に搭乘し、午前九時勇躍前進基地を進發し帽を振る戰友の姿に感激の眸を輝かせつつ東支那海の怒濤を越え一路支那大陸へと驍進した。數日來の颯風は猶ほ收まらず翼も折れん許りの難飛行を続け應て支那大陸の上空に差しかつた。風雨は益々激しく密雲のため屢々僚機を見失ふ程であつたが其の内雲間から湖水が見えた太湖の上空らしく、其の途端に密雲の中から突如敵戦闘機數機が現れた。隊長機は列機の陣頭に立ち氏等の所屬各機は之に續いて敵に肉薄し忽ち壯烈なる空中戦を演じ約三十分激烈なる戦闘の後僚機と共に敵機一機を湖中に撃墜し他の一機を湖岸に不時著せしめた。初陣の此の戦果に氏等搭乗員の勇氣は百倍し悠々長江に沿ひ高度二百乃至四百米の編隊で南京に向つて驍進した。間もなく南京胡宮飛行場が雲間から遙か彼方に現はれた。氏等搭乗員の意氣は愈々昂揚して機内は緊張し午後三時十五分南京上空に達し高度五百米の編隊で北方から侵入した。折柄起る敵の地上防空砲火を物ともせず隊長機を先頭に一機又一機密雲を破つて急降下し爆弾投下を開始した。此の時氏等は機長指揮の下に全員一致協力規を定めて胡宮飛行場に爆弾を投下した。忽ち起る轟然たる爆音と共に黒煙天に沖し大型格納庫一棟並に庫外飛行機數機を爆破した。敵の防空砲火は愈々激しく爆撃終つて飛び上ると小癩にも敵戦闘機七、八機が挑戦して來た。元より空中戦は我の希ふ所、茲に南京上空に攻撃機對戦闘機の壯烈なる空中戦が始まつ

た。見敵必勝の我が海軍魂は火と燃えさかつて忽ち敵機二機を撃墜した。聽て戦闘は終つて歸途に就き再び嵐を衝いて暗夜の大洋を越え其の重き使命を果し凱歌を擧げて基地に歸着した。翌十六日には再び大洋を越えて蘇州飛行場を襲ひ、敵の重要軍事施設を爆撃した。斯くて氏は前後二回に互る渡洋爆撃を敢行し其の都度敵の熾烈なる防空砲火を冒し勇戦奮闘敵に甚大の損害を與へて其の心膽を寒からしめた。

越えて八月二十一日氏は曾我少佐指揮の下に陸上攻撃機隊吉田隊森機に搭乗して揚州爆撃に向ふこととなり午前二時二十十分勇躍機上の人となり僚隊入佐隊と相前後して基地を進發し皎々たる満月を銀翼に浴び雲海を脚下に見つつ一路支那大陸へと驀進し午前四時四十五分大陸上空に差しかかった。折柄月は没し暗黒と雲霧のため何時しか入佐隊と分離し其の後僚隊との連絡全く絶え杳として其の行方を知ることが出来なかつた。入佐隊は雲霧のため揚州を發見し得ず浦口爆撃を敢行し其の歸途午前六時十五分過ぎ恰も日の出に近く視界漸く明瞭に地物を辨別し得るに至り揚州飛行場を發見したが既に吉田隊は同飛行場を爆撃したらしく、場内には約十機の敵機二列にあり其の中央に數箇所の爆弾々痕を生じ其の内三機は熾んに炎焼し他は大破せることを目撃した。之れ吉田隊奮戦の戦果なることは確實である。入佐隊と分離後行方不明となつた氏の隊は地上指揮官との連絡亦断絶し基地にある隊員は氏等の成功を祈りつつ憂慮して待つてゐたが遂に正午に至るも氏の隊は一機も歸還せず之を入佐隊の目撃状況から考察するに氏の隊は目指す揚州飛行場を爆撃し多大の戦果を収めたが多數の敵戦闘機と猛烈なる空中戦を演じ孤軍奮闘敵弾のため火災を起し遂に敵地に墜落の運命を辿り愛機と共に隊員悉く壯烈なる戦死を遂げたものと認定せられた。併し氏等の緒戦に於ける奮戦と尊き犠牲は我が海空軍の制空權掌握の端緒を拓き爾後の戦闘を有利に導くを得たのであつた。其の後所屬隊は其の赫々たる武勳に依り時の第三艦隊司令長官より譽の感状を授與せられた。是れ全く氏等奮戦の功に俟つ所大なりと謂ふべきである。

氏は平素より熱心軍務に盡瘁し孜々として其の航空技術の研究練磨に努め其の成績大に見るべきものがあつた。今次事

變に際會するや陸上攻撃機偵察員として嵐を衝いて支那海の怒濤千餘軒を翔破して支那大陸に往復し遠く敵の首都南京を襲ひて其の飛行場を爆撃し更に空戦を演じて敵機二機を撃墜し、次で蘇州及揚州飛行場の爆撃に参加し敵の重要軍事施設竝に地上敵機を爆破する等實に我が空戦史上劃期的渡洋爆撃を敢行すること三回に及び奮戦敵に多大の損害を與へ以て我が海軍機の威力を遺憾なく發揮し海軍の威武を中外に宣揚して遂に揚州東方に玉碎した。其の壯烈なる行動は鬼神をも哭かしむべく其の忠烈偉勳は正に空軍將兵の鑑とすべきである。參戰僅かに一週日而も戰鬥參加三回にして斯かる忠烈有爲の士を喪つたことは洵に痛惜に堪へざる所である。されど其の壯烈なる偉業は我が海軍空前の壯舉、武人の一生に選むべき死所としては之に優るものなく、以て後進を振起せしむるに足る。氏今や瞑すと雖も其の赫々たる武勳は永へに空軍戦史を照らし芳名は千古に薫りて埋れず、不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬の的たるべく氏死して亦餘榮ありと謂ふべきである。而して其の神靈は尙も皇國を護り只一人の母の前途に尊き加護照覽を垂れ給ふことであらう。

氏は戦死の日海軍一等航空兵曹に任ぜられ次で功六級金鷄勳章竝に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍一等兵曹勳七等功五級 梅原 伸 作

累戦偉勳を羨し惜しくも吳淞敵前上陸の激戦に散華す

氏は岩手縣江刺郡田原村田代の人にして亡父を重右衛門、母をトチと云ひ明治四十一年三月に生れ未だ獨身であつた。性温厚篤實にして忍耐力強く又克く父母に仕へて孝養を盡し常に業務に熱心精勵して貯蓄に努め以て豊ならざる家計を扶けてゐた。大正九年三月大田代尋常小學校を卒業し爾來農に従事する傍同村農業補習學校に通學し同十二年三月同校を卒業し部落組合の事業にも參與し其の業績優良にして村人の賞讃を受けてゐた。昭和二年六月志願兵として横須賀海兵團に

入團し誠實軍務に勵み同五年十一月海軍砲術學校普通科砲術練習生教程を卒業し果進して同九年十一月海軍二等兵曹に任ぜられた。此の間砲術學校、軍艦長門、加古、比叡及山城等の勤務を経て横須賀海兵團に勤務中同十二年七月選ばれて横須賀鎮守府特別陸戰隊に編入せられた。



昭和十二年七月北支事變勃發以來中支方面の風雲亦急を告ぐるや、氏は横須賀鎮守府特別陸戰隊竹下大隊大橋中隊渡邊小隊に屬し先任分隊下士官として八月二日以來旅順に進出し待機してゐたが八月十三日遂に上海に於て日支開戦となり所屬部隊は命に依り八月十七日旅順を出發し翌十八日上海に上陸して同地特別陸戰隊司令官の指揮下に入り其の本部を公大社宅に定め東部租界左地區隊として楊樹浦クリーク以西の地域を警戒し日本郵船滙山碼頭及滙山路の線を占領確保することとなつた。

氏は上陸以來渡邊小隊分隊下士官として大連灣路と滙山路又は保定路と滙山路との交叉點の各陣地に轉戦し、殊に八月十九日長大尉の指揮する公平路の敵掃蕩戦に於ては克く小隊長の意圖を體し彈雨を冒して陣頭に立ち勇猛果敢敵陣に突入して奮戦を重ね渡邊小隊長敵彈に斃るるや、直ちに小隊長に代つて小隊を指揮督勵して奮戦を續け、敵手榴彈々片を其の胸部に受けて負傷し一時打ち倒れたが剛毅の氏は「何を小癪な」と再び立上り獅子奮迅の勇を鼓し尙も敵を攻撃して敵に甚大の打撃を與へ遂に之を全く租界外に撃退して克く其の守備陣地を確保した。翌二十日小野兵曹長代つて小隊の指揮をとることとなつた。斯くて我が陸戰隊各部隊は寡勢を以て大敵を邀撃し惡戰苦闘旬日に互り克く租界の安全を確保してゐたが、上海に於ける形勢は益々重大を加へ遂に陸軍の派遣となり其の派遣部隊は

上海に到着した。當時東部租界に奮戦中の竹下部隊は八月二十一日夜陸軍揚陸掩護のため吳淞鐵道棧橋附近に敵前上陸を敢行すべき命を受けた。翌二十二日所屬大隊は其の守備區域を土師大隊に譲り大阪商船碼頭に集合し暫時休養の後諸準備を整へ同日午後十時半上海招商局棧橋より雲陽丸、信陽丸、當陽丸の三船に分乗し勇躍出發の時機を待つてゐた。總て三船は江上艦艇に護衛せられ肅々として黃浦江を下つた。折柄皎々たる月は一片の浮雲さへなく晴れ渡つた江南の空に懸り船上の我が勇士の鐵兜の上に白き光を浴びせてゐた。船は漸次進航を續け翌二十三日午前三時味方驅逐艦、水雷艇の掩護射撃の下に吳淞鐵道棧橋に近づいた。氏等の乗船信陽丸は豫定上陸地點たるドック會社の直ぐ下流に横付けせんとするや突如敵は前方家屋及左方陣地附近から猛射して來たので我が機銃隊亦船上より直ちに之に反撃を加へて制壓した。其の間各員は敵彈雨注の中敏速果敢に舳索及道板の準備を行ひ横付作業は著々と進捗し全員の意氣愈々揚り敵はずして既に敵を呑むの概があつた。午前三時五分岸壁と甲板との間に架橋終ると見るや全員は肩に綾なす白禱の姿も勇ましく脱兎の如く橋を蹴つて上陸を開始した。そこで氏等は小隊長を先頭に中隊の右翼第一線として柴田小隊の右方に進出し當面の群がる敵を撃退しつつ砂山に達した。小隊は一先づ同所に集合して陣容を整へ小隊長は自ら二個分隊を提げて上陸地點より約四十米にある右前方のコンクリート家屋の敵を攻撃して之を撃退占領した。一方氏は先任分隊下士官として殘餘の隊員を指揮し砂山前方コンクリート塊の堆積地に辿り著き先に進出した二個分隊に協力して敵に亂射を加へた。敵亦小銃、機銃を亂射し手榴彈を亂投して我が進撃を阻止せんとし茲に彼我互に激戦を交へてゐたが氏は部下を率ゐて更に前方兩家屋の中間に進出し道路上の敵と相對峙して尙も奮戦を續くること十數分、此の間敵の手榴彈機銃小銃の猛射を被り我が死傷者續出し戦鬪は悽慘を極めた。此の時氏は奮然部下を督勵して敵陣に肉薄せんとして前進したが竹垣に阻まれて進出し難く之を破壊せんとする刹那敵の手榴彈氏の身邊に炸裂し左腕に負傷した。されど氏は屈せず携帶の發煙筒に點火し煙幕を利用して進撃路を開かんと努力中小隊長の命に依り右方の家屋に部下を集結し茲に始めて自ら綱帶を施した。然るに敵陣から

同家屋目がけて頻りに手榴彈を投げつけるので氏は憤然身を挺して敵情を偵察せんと屋外に數歩前進するや又も敵の一手榴彈は其の身邊に炸裂し再び負傷したが尙も之に屈せず同所より約十米の柵を飛鳥の如く飛び越え大聲叱咤敵數名と白兵戦を演じた。されど衆寡敵せず無念に敵彈を右胸部に受け「残念」の一語を残して遂に壯烈極まる戦死を遂げた。小隊は其の後小隊長以下多數の死傷者を出したが僅かの残員を以て勇戦苦闘を続け間もなく陸軍の一隊進出し來り之と協力して遂に鐵道構内の敵を撃退して氏等の奮戦と尊き犠牲に應へ得たのであつた。所屬大隊は特に本戰闘に於ける赫々の武勳に依り時の第三艦隊司令長官より譽の感狀を授與せられた。是れ全く氏等の勳功に依る所大なりと謂ふべきである。

氏は今次聖戦に参加するや上海上陸直ちに東部租界守備の任に就き彈雨の下有ゆる辛酸を嘗め累次の激戦に奮闘して武勳を奏し遺憾なく其の本分を全うした。殊に吳淞敵前上陸に際しては勇猛果敢彈雨を冒して頑強なる敵の抵抗を排撃し決死肉弾突撃を敢行して惜しくも護國の華と散つた。壯烈斯くの如きは眞に死生を超越し一意其の重責完遂に邁進せんとする純忠至誠の發露にして天晴れ軍人の鑑とすべきである。參戰旬日を出ずして斯かる忠誠勇武の士を喪ひたるは洵に痛惜の極みなるも、其の赫々たる武勳は永へに海軍戦史に輝き芳名は武人の華として千古に謳はるべく、不滅の英魂は靖國の神と祀られ神靈尙も皇國を護り亦一家の前途に尊き加護佑助を垂るるであらう。

氏は戦死の日海軍一等兵曹に任ぜられ次で拔群破格の功五級金鳩勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍一等兵曹勳七等功六級 黒畑峯松

斥候長として偉勳を樹て寡兵克く大敵と戦つて上海八字橋に散る

氏は富山縣中新川郡釜ヶ淵村道源寺の人にして父を吉造、母をハヨと云ひ明治四十三年十二月に生れ妻知恵子との間に

長女美知子を擧げた。性温順にして動作活潑又身體頑健にして常に業務に熱心勉勵し諸人の親愛を受けてゐた。大正十四年三月釜ヶ淵小學校高等科を卒業し次で同地農業補習學校を卒業すると共に運送店々員となつたが、昭和三年六月志願兵として吳海兵團に入團し忠實軍務に精勵し後海軍砲術學校普通科砲術練習生教程を卒業し累通して同十一年五月海軍二等兵曹に任ぜられた。此の間軍艦球磨、吳海兵團、軍艦伊勢、特務艦攝津及上海海軍特別陸戰隊等に勤務した。次で同十一年九月田港水兵事件に依り吳鎮守府特別陸戰隊機銃分隊下士官として上海に赴き東部工業地帯の警備に従事し、後同隊廢止と共に同十二年一月上海海軍特別陸戰隊附となつた。

昭和十二年七月北支事變勃發以來中、南支方面に於ける支那側の抗日態度は益々露骨化し特に上海の空氣は日一日と緊迫を加へ八月九日大山中尉射殺事件惹起するや彼我の事態は愈々急迫を告げ當に一觸即發の危機を孕むに至つた。そこで我が上海海軍特別陸戰隊は在留邦人保護のため八月十二日遂に警戒配備に就き萬一に備へてゐたが翌十三日に至るや支那軍前線部隊は一齊に我に向つて發砲し挑戰して來たので隱忍自重してゐた我が陸戰隊も遂に堪忍袋の緒をたち斷乎之に應戦し茲に日支開戦の火蓋を切るに至つた。そこで氏は上海陸戰隊伊藤大隊飯野中隊木村機銃小隊分隊下士官として八字橋地區隊を第一線青雲路橋陣地に進出し爾來敵の大部隊と對峙して激戦十餘日に及んだが其の間氏は風雨に抗し炎暑の中に屢々襲來する敵機の空爆に曝され、且つ敵砲彈は頻に落下炸裂して死傷者續出し、通信連絡の杜絶すること亦屢々にして其の連日に互る惡戦苦闘は言語に絶するものがあつた。されど氏は之等悲惨なる光景を知らざる如く日夜奮戦健闘敵に甚大の損害を與へ克く其の陣地を死守してゐた。二十六日に至るや所屬中隊は南北進撃部隊右翼隊左第一線部隊となり青雲路橋陣地より寶山玻璃廠陣地に移つたが正面の敵情が詳かでなかつたので、翌二十七日氏は敵情偵察と敵の從來屢々利用せし民家の焼打との任務を帯び斥候長として派遣せらるることとなり部下分隊を率ゐ勇躍陣地を進發し途中其の半數の者に對しては焼打準備を命じ他の半數を提げて西寶興路一帶の敵情偵察に向つた。此の時同路に進出するや同路の敵陣

地及屋上から忽ち敵の猛射を受けた。併し氏は平然として部下を指揮督勵し敏速なる行動を以て部下を隱蔽地に導き敢て之に應戦せず仔細に偵察を遂げたる上歸途豫定の焼打を決して首尾よく其の效を奏して歸還した。斯くして氏は新陣地守備に就いたが陣地附近の地形不案内にして且つ當面の敵情も詳かならざるに拘らず沈著果敢克く其の重責を完遂し味方の戦鬪を有利に導いた其の功績は洵に顯著なるものがあつた。

越えて三十一日午前零時十五分氏は其の守備陣地で警戒監視中、重機銃數挺を有する優勢なる敵が逆襲して來たので直ちに之に應戦し部下を叱咤激勵し奮戦三十分敵に痛撃を加へて之を沈黙せしめたが同零時四十六分敵が其の右方に迂迴して我に迫らんとする微候を察知し士藪陣地から上半身を乗出し敵の動向を偵察してゐた時偶々虚空を切つて飛來せし敵の一弾が無念！氏の右胸部に命中し盲管銃創を受け其の場に壯烈なる戦死を遂げた。併し氏の奮戦と尊き犠牲は部下に痛烈なる衝動を與へ爲に部下をして切齒扼腕復仇の念に燃えしめ以て其の陣地を確保して敵をして一步も守備線内に侵入せしめなかつたのであつた。

其の後陸戦隊は赫々の武動に依り時の第三艦隊司令長官より譽の感状を授與せられた。氏は剛膽にして沈著平素より上下の信頼と愛敬を一身に蒐め克く軍務に勉勵し模範下士官として前途を囑望せられてゐた。今次上海戦に従ふや開戦と共に上海西部八字橋地區方面に進出し砲煙彈雨の下連日凡ゆる危険困苦を克服し奮戦敢闘或は斥候長として敵情偵察に或は敵陣家屋の焼打等に奮戦し克く其の本分を完うし以て味方の戦勝に多大の寄與貢獻をなした。其の壯烈なる行動は眞に生死を超越し獻身以て君國に報いんとする純忠赤誠の發露にして正に皇軍精兵の鑑とすべきである。聖戦中途斯かる豪勇の士を喪ひ今や其の颯爽たる風貌に接する能はざるは洵に痛惜の極みなるも、其の赫々たる武動は永へに海軍戦史を飾り芳名は千古に薫りて埋れず、不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬の的るたべく神靈尙も皇國を護り又一家の前途に尊き加護佑助を垂れ給ふことであらう。

氏は戦死の日海軍一等兵曹に任ぜられ次で功六級金鷄勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍一等兵曹勳七等功六級 山本儀三郎

勇戦敢闘衆敵を撃破し惜しくも上海北四川路に倒る

氏は島根縣那賀郡大麻村の人にして父を清吉、母をミチと云ひ大正元年十一月十二日に生れ未だ獨身であつた。性温厚快活にして責任觀念旺盛で率先難事に當るの氣概があつた。孝心殊に深く克く弟妹を愛撫し又常に師の恩を忘れず其の受けたる教訓を克く遵守して絶えず通信し賜暇歸省の際は必ず舊師の訪問を怠らなかつたとのことである。昭和二年三月大麻小學校高等科を卒業し其の後は家に在りて農業に従事してゐた。昭和五年六月志願兵として吳海兵團に入團し忠實軍務に勵み、同七年五月海軍砲術學校普通科砲術練習生教程を卒業し、軍艦那智、古鷹及龍驤等の乗組を経て同九年十一月上海海軍特別陸戦隊附となつた。果進して同十年十一月海軍三等兵曹に任ぜられ戦傷して吳海軍病院療養中同十二年十一月海軍二等兵曹に任ぜられた。尙ほ氏は昭和六年乃至九年事變の功に依り勳八等瑞寶章を賜はり次で同十二年七月勳七等瑞寶章を賜はつた。

昭和十二年七月北支事變勃發以來中、南支方面の風雲亦急を告げ殊に上海に於ける日支間の事態は愈々緊迫を告げ八月九日大山中尉射殺事件惹起せらるるや彼我の情勢は益々悪化し當に一觸即發の危機を孕むに至つた。茲に於て八月十二日上海海軍特別陸戦隊は居留民保護のため警戒配備に就く事となり氏は同地海軍特別陸戦隊佐野大隊今井中隊小西小隊に屬し北四川路確保のため中部日本小學校に到り次で主計科武官室に進出し虬江路以南の警戒配備に就き萬一に備へてゐたが翌十三日に至るや支那軍は我が各前線部隊に對し發砲して挑戦し來たので隱忍自重してゐた我が陸戦隊は遂に堪忍袋の緒

を断ち自衛上断乎之に應戦し同日午後五時陸戦隊司令官は戦闘開始の命令を下し茲に日支開戦の幕は切つて落された。斯くて同夜は彼我の間に激戦が展開され銃砲聲は殷々として天地に轟き紅蓮の焰は炎々として大上海の空を焦し實に凄惨なる光景を呈した。

當時氏等の陣地附近には家屋密集し地形複雑にして加ふるに敵は家屋に堅固なる陣地を構築して猛撃し来る等定に我に



不利なる市街地域であつたが氏は分隊下士官として克く部下を指揮督勵し敵の猛烈なる銃砲火を冒し斥候となりて敵情を偵察し屢々有利なる報告を齎し或は陣地の構築に將又其の警戒に連日連夜有ゆる危険困苦を克服して奮闘活躍し克く北四川路の重要地點の確保に任じてゐた。越えて八月二十二日に至るや、敵は新鋭部隊を増援せしもの如く其の行動漸次活潑となつたので氏等は益々警戒を嚴にし

止んだ、敵の襲來するには非ずやと思ふ間もなく、果然敵の大部隊は虬江支路上に月明の下を怒濤の如く逆襲に轉じて來た。そこで中隊右翼陣地たる北四川路と虬江支路との交叉點を守備してゐた氏は部下分隊員を叱咤激勵し勇戦奮闘之に猛烈なる機銃火を浴びせかけたが敵襲は益々急にして中隊長より再三「持ち切れなかつたら突撃を決行せよ」と激勵の傳令があつた、氏は勇氣愈々加り降り布く彈雨の中銃身も灼けん許りに敵に猛射を加へ尙も奮戦を続け部下には負傷續出したが更に屈せず敵を撃滅せずば一步も退かずと獅子奮迅の勢を以て奮戦に奮戦を重ね遂に敵に熾滅的打撃を與へて之を撃退

した。茲に於て更に攻撃に移る可く敵陣地を仔細に偵察し其の情況を小隊長に報告してゐた際、偶々敵の一砲彈氏の至近の距離に落下し轟然たる爆音と共に其の炸裂彈片は不幸氏の右上膊に命中して重傷を負ふた。斯くて氏は後送せられて佐世保海軍病院に入院し更に吳海軍病院に轉院し再起奉公の一日も早からん事を祈願し専心治療に努めてゐたが其の甲斐もなく、破傷風菌に侵されて十一月十六日遂に護國の神となつた。當時の陸戦隊は赫々たる武勳に依り時の第三艦隊司令長官より榮えある感状を授與せられた、是れ全く氏等奮戦の勳功に俟つ所大なりと謂ふ可きである。

氏は今次事變勃發前より上海に駐屯し我が居留民並に帝國權益保護の重任に服し克く其の任務を全うし、愈々開戦となるや最も地形複雑なる市街地域の守備に當り連日晝夜を別たず砲煙彈雨の下敵の大部隊と對戦し奮戦敢闘敵に甚大の損害を與へ以て我が軍戦勝に多大の寄與貢獻をなした。是れ即ち獻身奉公以て君國に報ゐんとする純忠至誠の發露と謂ふ可きである。參戰幾日ならずして斯かる忠勇義烈の士を喪ひたるは洵に痛惜の極みなるも、其の赫々たる武勳は芳名と共に永へに海軍戦史に輝き不滅の英魂は靖國の神と仰がれ神靈尙も皇國を護り又一家の前途に尊き加護佑助を垂るるであらう。氏は戦死の日海軍一等兵曹に任ぜられ次で功六級金鷄勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍一等兵曹勳七等功六級 松本文友

勇戦奮闘武勳を羨し惜しくも上海油公司の激戦に散華す

氏は大分縣宇佐郡北馬城村の人にして亡父を幸、亡母をソノといひ、明治四十五年二月二十五日に生れ未だ獨身であつた。性温順にして勤儉力行の人で責任觀念強く自己の信念に對しては之を貫徹せざれば已まざる氣概を有してゐた。海軍出身後兩親を喪つたが其の生前は勿論、死後と雖も休暇を得れば必ず展墓のため歸郷して其の靈を慰むる等洵に親孝行者

にて海軍出身後も僅かの給料を割いて弟の學資の一部に充て近隣の賞讀を受けてゐた。大正十二年三月馬城小學校を卒業し同年四月宇佐中學校に入學したが都合ありて十五年中途退學し其後は家に在りて父母を扶けて製麵業に従事し昭和四年六月志願兵として佐世保海兵團に入團し爾來誠實軍務に精勵し同七年四月海軍水雷學校普通科練習生次で同十年十二月同校高等科練習生教程を卒業した。此間軍艦常務及霧島、驅逐艦檜及彌生等を経て驅逐艦三日月乗組となつた。而して昭和

十一年度魚雷發射檢定成績優等に付き賞狀並に魚雷發射優等章を授與せられ同十一年十一月昇進して海軍二等兵曹に任ぜられた。

氏の乗艦三日月は僚艦と共に昭和十二年七月支那事變勃發以來事變の進展に即應す可く待機してゐたが八月十三日上海に於て日支開戦となるや出動命令を受け八月十五日勇躍征途に就き翌十六日未明上海に到着し直ちに聯合陸戰隊を揚陸する事となり氏は同陸戰隊に編入せられ菅井部隊長指揮の下に春日中隊眞木小隊に屬し分隊下士官として上海に上陸し同地海軍特別陸戰隊司令官の指揮下に入つた所屬中隊は當時北部戰線油公司の突角陣地に於て苦戦中の橋本大隊



救援の命を受け同日午後二時トラックに分乘し公園坊に急行して同地の警備に當る事となつた。氏の所屬小隊は更に水電路陣地に進出して秋吉、山田兩小隊と協力し當面の敵と激戦を交へてゐたが翌十七日同陣地を撤退し公園坊の所屬中隊本部に復歸した。越えて八月十九日午後一時所屬中隊はB陣地の西隣の油公司の最前線陣地に進出した。同陣地の前方は沙涇港クリークを隔てて江灣時計臺附近の敵に、右は體育女學校、左は愛國女學校の敵と相對峙し敵は之等三方面より同陣地に向つて毎夜十數回互る夜襲を繰り返し戰鬪激烈を極めてゐたが我が軍寡兵克く之に猛烈なる反撃を加へて敵を制壓

撃退してゐた。

二十日午前二時頃より敵は全線に互り攻勢に轉じ次から次へと新銳を入れ換へ疾風迅雷の勢で大舉逆襲して來た。小銃機銃弾は忽ち雨霰の如く飛來し彼我の銃砲聲は殷々として天地を震撼し戰場は熾火の焦熱地獄と化した。併し氏等隊員は之を意に介せず意氣軒昂敵を邀へては射ち、射つては追ひ奮戦又奮戦敵の強襲を受けてから實に四時間我亦相當の死傷者を出したが遂に敵に徹底的打撃を與へて之を撃退した。此間氏は分隊下士官として克く小隊長の意圖を體し部下を叱咤激勵し率先死地に立ち執拗なる敵の逆襲を僅かな兵力で支へ壯烈鬼神も泣く奮戦を續け其の行動正に拔群であつた。斯くして天明と共に敵は漸次後方陣地に退却し戰鬪稍緩漫となり、漸く一息つくと共に傷いた部下を懇に勞つてゐたが、正午頃「腹が減つては戦は出來ぬ」と笑ひ乍部下をして輪番に食事に就かした。折柄敵の飛行機二機が突如密雲を破つて油公司上空に現れて味方陣地に爆撃を敢行せんとしたので之を認めた氏は時を移さず「空襲ツ」と警報し敢然自ら機銃を執つて敵機を狙ひ引金に手を掛けた一刹那今迄沈黙してゐた敵陣地から小銃の猛射を浴びせられ無念飛來せし一弾は氏の頭部及左右下腿部に命中し銃把を握つた儘其の場に壯烈なる戦死を遂げた。其後陸戰隊は赫々の武勳に依り時の第三艦隊司令長官より光輝ある感状を授與せられた。是れ實に氏等の奮戦と尊き犠牲に俟つ所大なりと謂ふ可きである。

氏は今次上海戦に臨むや聯合陸戰隊分隊下士官として驅逐艦より派遣せられ上陸直ちに味方増援部隊として北部最前線の激戦に参加し連日連夜を分たず砲煙彈雨の下を馳驅活躍し奮戦力闘克く其の本分を全うし以て我軍戦勝に多大の寄與貢獻をなし遂に護國の華と散つた。其の壯烈なる行動は眞に一死以て君國に報ひんとする純忠赤誠の發露にして正に軍人の鑑とす可きである。参戦幾何ならずして氏の如き忠勇義烈の士を喪ひたるは洵に痛惜の極みなるも、其の赫々たる武勳は永へに海軍戦史を飾り芳名は千載に互りて埋れず、不滅の英魂は靖國の神と仰がれ神靈尙も皇國を護り又一家の前途に尊き加護照覽を垂るるであらう。

氏は戦死の日海軍一等兵曹に任ぜられ次で功六級金鵄勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍一等兵曹勳七等功五級 増淵茂二

奮戦肉弾となつて敵陣に突入し惜しくも吳淞敵前上陸に玉碎す

氏は栃木縣河内郡豊郷村海道新田の人にして實父を小林隆信、實母をタイといひ、大正二年三月二十三日に生れ其後増淵清吉の養子となり養母(亡)をエイと言ひ妻好との間に長男充、長女久子の一男一女を挙げた。性温順著實、寡黙にして義務心厚く常に業務に熱心精勵し致々として倦むことを知らず。又體力頑健にして柔道四段の伎倆を有してゐた。大正十五年三月豊郷高等小學校を卒業し同年四月縣立宇都宮中學校に入校し、同校第三學年在學中海軍に志願し首尾よく合格の上昭和五年六月横須賀海兵團に入團し爾來勉勵努力の效空しからず同七年五月海軍砲術學校普通科砲術練習生教程を卒業し果進して同十一年十一月海軍二等兵曹に任ぜられた。此間海軍砲術學校、軍艦長門、木曾、比叡及山城等に勤務し同十二年七月横須賀鎮守府特別陸戰隊に編入せられた。

昭和十二年七月北支事變勃發以來中支方面の風雲急を告ぐるや氏は横須賀鎮守府特別陸戰隊竹下大隊大橋中隊柴田小隊に屬し分隊下士官として八月二日以來旅順に待機してゐたが八月十三日上海に於て遂に日支開戦となり彼我の間に激戦が展開され我が軍寡兵頗る苦戦に陥るに及び所屬部隊は命に依り上海海軍特別陸戰隊増援部隊として八月十七日旅順を出發し翌十八日上海に上陸して同地特別陸戰隊司令官の指揮下に入り東部支隊左地區隊として楊樹浦クリーク以西の地域を警戒し日本郵船滙山碼頭及滙山路の線を占領確保する事となつた。

氏等は上陸以來東部租界左地區の第一線に進出して其の守備に當り所屬柴田小隊が遼陽路及荊州路と華德路との交叉點

陣地に於て我に十數倍の敵と對峙し其の間氏等は數次に互る敵襲を撃退し或は進んで敵を攻撃して之を制壓し又は雨飛する敵弾を潛つて斥候の任に服し或は又前方敵陣家屋の焼打に参加し將又屢々我が後方を擾亂せんとする便衣隊の掃蕩に従事して多數の敵を逮捕する等連日連夜不眠不休勇戰奮闘を續けて數々の武勳を奏し敵をして一步も其の守備線内に侵入せしめず克く其の守備陣地を死守してゐた。斯くして我が陸戰隊各部隊は寡勢克く敵の大部隊を撃破して上海租界の安全を確保してゐたが同地に於ける形勢は益々重大を加へ遂に陸軍部隊の派遣を見るに至り其先遣部隊は上海に到着した。當時



東部租界に奮戦中の所屬竹下部隊は八月二十一日夜陸軍部隊揚陸掩護のため吳淞鐵道棧橋附近に敵前上陸を敢行す可き命を受け翌二十日其の守備區域を土師大隊に譲りて大阪商船棧橋に集合し暫時の休養の後諸準備を整へ同日午後十時半上海招商局碼頭より雲陽丸、當陽丸、信陽丸の三船に分乗し勇躍出發の時機を待つてゐた。聽て三船は江上艦艇に護衛せられ燈火を隠蔽して肅々として黃浦江を下つた。折柄皎々たる月は一片の浮雲さへなく暗れ渡つた江南の秋空に懸り船上の我が勇士の鐵兜の上に白き光を浴せてゐた。船は尙も進航を續け翌二十三日午前三時頃味方驅逐艦、水雷艇の掩護射撃の下に吳淞鐵道棧橋に近づいた。氏等の乗船信陽丸は豫定上陸地點たるドック會社の直ぐ下流に近づき横付けせんとするや

突如敵は前方家屋及左方陣地附近から猛射を浴せて來たので我が機銃隊は直ちに船上より之に猛射を加へて敵を制壓し細田小隊は舳索取方及道板の準備を行ひ敵彈雨飛の中各員は敏速果敢に行動し横附作業は著々進捗し全員の意氣愈々揚り戦はずして既に敵を呑むの概を示してゐた。午前三時五分甲板と岸壁との間に架橋が終るや否や右より小野、柴田、並木小隊

の順序に第一線となり機銃各一箇分隊は柴田、並木の兩小隊に分屬し細田小隊は豫備隊として中隊長之を掌握し直ちに上陸を開始した。そこで氏等の小隊は柴田小隊長を先頭に雨飛する敵弾の中を猛然として躍進し海岸近くの小石山を匍ひ上り驀地に敵に接近し左翼の並木小隊の右方竹垣の外側に出んとして左前方トツク會社の右端家屋に據る敵の第一陣地を目標けて驀進した。氏等隊員の勇氣は更に振ふて殺氣天を衝かん許り忽ち銃剣を閃かして飛龍の如く疾驅し敵陣に突撃して之を占領し更に息つく暇もなく前方家屋に突進し附近にゐた敵を撃退しつゝ家の右側を竹垣に沿ひ外側道路に通ずる通用門に迫つた。此頃より敵は益々機銃、小銃を猛射し手榴弾を亂投し、戦闘愈々熾烈となつた。陣頭に立つて奮戦してゐた小隊長を始め多數の負傷者を出したが小隊長以下隊員の意氣は愈々加り其の一箇分隊を先遣して外側道路方面を偵察するに通用門外僅かに五米位を隔てた土手向ふの第二陣地に多數の敵が據つてゐるのを確め一氣に突入せんとして之に肉薄した。此時分隊下士官たりし氏は此の敵に對し部下分隊員の先頭に立ち勇猛果敢彈雨を冒して躍進せし折柄敵の機銃彈及手榴弾に依り兩脚に負傷したが剛氣の氏は神色自若其の負傷を知らざる如く尙も匍匐前進して竹垣一重の敵に肉薄し手榴弾を投げつけて敵に多大の損害を與へ手榴弾が盡くるや石塊を投げつけて敵の心膽を奪つた、其の壯烈無比の行動は眞に鬼神を哭かしむるものがあつた。斯くて氏は板塀出口より猛然として突撃に移り敵前數米に至るや手榴弾を投げつけられ遂に其の場に壯烈なる戦死を遂げた。併し氏等の奮戦と尊き犠牲は我が部隊上陸成功の端緒となり二十三日午前五時頃所屬大隊は見事に陸軍揚陸掩護の任務を果し得たのであつた。其後大隊は其の赫々たる武勳に依り時の第三艦隊司令長官より榮えある感狀を授與せられた。

氏は今次上海戦に参加するや上陸間もなく東部租界左地區守備の任に當り連日連夜有ゆる危険困苦を克服し勇戦健闘遺憾なく其の職責を全うした。其後吳淞敵前上陸に際しては奮戦身に重傷を負ひ乍尙も激闘を続け遂に敵陣に突入して護國の華と散つた。是れ即ち獻身以て君國に報ゐんとする赤誠の發露にして天晴れ皇軍精兵の龜鑑と謂ふ可きである。聖戦初あらう。

氏は戦死の日海軍一等兵曹に任ぜられ次で拔群破格の功五級金鷄勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍一等兵曹勳七等功六級 安東忠男

奮戦敢闘克く戦友の危機を救ひ惜しくも上海天寶路に散華す

氏は大分縣北海部郡下ノ江村の人にして父を太吉、母をシカといひ明治四十一年三月に生れ妻をナルといふ。性温順にして志操堅實、進取の氣に富み、體力强健にして劍道初段の伎倆を有してゐた。大正十一年三月下ノ江小學校高等科を卒業し其の後は農業に従事してゐたが昭和二年六月志願兵として佐世保海兵團に入團し誠實軍務に勵み後海軍砲術學校普通科砲術練習生教程を卒業し果進して同十年十一月海軍二等兵曹に任ぜられた。此の間軍艦陸奥、加賀、上海海軍特別陸戰隊、佐世保海兵團、佐世保防備隊及軍艦金剛等に勤務し同十二年八月佐世保鎮守府特別陸戰隊に編入せられた。尙ほ氏は昭和六年乃至九年事變の功に依り勳七等青色桐葉章を賜はつた。

昭和十二年八月十三日上海に於て日支開戦となるや氏は佐世保鎮守府編成の上海海軍特別陸戰隊増加部隊に編入せられ同隊月岡大隊白石中隊島居小隊に屬し分隊下士官として八月十七日深更内地を出發し勇躍征途に就き同月十九日上海に到着し翌二十日未明招商局碼頭に上陸した。所屬大隊は直ちに同地海軍特別陸戰隊司令の指揮下に入り公平路以西虹口クリック迄の警戒に當り同日午後三時大隊本部を招商局に定め各隊を所要地點に配置して守備に就いた。此時所屬中隊は左第一線として虹口クリック以東新記落路に至る西安路上に各陣地を構へて警戒に任じ所屬小隊は西安路と百花街との交叉點

に陣地を構築して配備に就いた。爾來我に十數倍の敵は開北、浦東方面よりの砲撃と相俟つて氏等の陣地に猛攻し來り敵機亦頻に我が上空に襲來して空爆を決行し便衣隊は各所に出没して狙撃及放火に依り我が後方擾亂を企て通信連絡は途切れ勝ちとなり陣地守備員の惡戰苦闘は言語に絶するものがあつた。氏は此の間分隊下士官として部下を督勵して克く小隊長を輔佐し彈雨の下連日不眠不休の奮戰活躍を續けて大敵を撃退し陣地の死守に努めてゐた。斯くて所屬中隊は二十四日には歐嘉路に、二十五日には通州路に更に二十六日には物華路の線に進出し奮戰又奮戰頑強に抵抗する敵を制壓撃退して敵をして一步も我が守備線内に侵入を許さなかつた。

二十七日午後四時味方戰闘機一機が我が陣地前方の敵地に墜落したので之が救援のため鳥居小隊長指揮の下に二個分隊を派遣せらるる事となり氏は部下を率ゐて之に加り時を移さず救助に赴いたが天寶路に達するや忽ち敵の猛射を浴びせられ奮戰中の氏は右大腿部に貫通銃創を受けた。併し剛氣の氏は之に屈せず克く其の苦痛を忍び射撃目標の指示變換、射彈の修正、地物の利用等に至る迄克く小隊長の意圖を體し部下を督勵指揮しつつ之を隱蔽地に導き負傷戰友の救出に奔走してゐたが、鮮血迸りて力盡き其の場に打ち倒れて人事不省に陥つた。戰友直ちに之を後方病舎に收容し軍醫官の厚き手當を受けてゐたが其の甲斐もなく翌二十八日午後十二時十分遂に名譽の戰死を遂げた。此の戰闘間小隊長を始め負傷者多數を生じ苦戰中なりとの報に接した中隊長は午後六時二十五分自ら部下一個小隊を率ゐて現地に急行し闇夜の中克く敵の抵抗を排除しつつ苦心慘愴、負傷者を收容し同八時半頃陣地に歸還し氏等の奮戰と尊き犠牲に應へ得たのであつた。

氏は今次上海戰に参加するや上陸直ちに東部租界左地區の第一線に進出し砲煙彈雨の下連日連夜の別なく奮戦力闘寡兵克く衆敵を撃破し以て敵に甚大の打撃を與へ遺憾なく其の任務を全うして護國の神となつた。其の身に重傷を負ひ乍尙も烈々たる闘志に燃え小隊長を輔佐して奮闘し斃るる迄其の責務の完遂に邁進せし如きは眞に壯烈鬼神を泣かしむるものがある。斯くの如きは實に生死を超越し一意身を君國に捧げ以て興亞の聖業を翼賛し奉らんとする純忠至誠の發露にして天

晴れ皇國精兵の鑑とす可きである。參戰日を出でずして斯かる忠勇義烈の士を喪ひたるは洵に痛惜の極みである。されど氏や生きては國家の干城となり死しては護國の神となる、武人の本懐之に過ぐるものなかる可く其の赫々たる武勳と芳名は永へに海軍戰史を照らし、不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬の的たる可し氏亦以て瞑す可きである。而して神靈は尙も皇國を護り又一家の前途に尊き加護佑助を垂れ給ふであらう。

氏は戰死の日海軍一等兵曹に任せられ次で功六級金鷄勳章を賜はつた。(恩地)

海軍、一等兵曹勳七等功六級 佐藤 直

彈雨の下陸軍部隊陸掩護に奮戦し惜しくも吳淞敵前上陸戦に斃る

氏は宮城縣本吉郡志津川町の人にして父を留藏、母(亡)をみさほ義母をあやめと云ひ明治四十五年七月十七日に生れ妻浦子があつたが氏の戰死後家庭の都合に依り離籍となつた。性寡黙沈勇にして義務心厚く熱心事に當り不屈不撓の氣概があつた。又孝心深く幼にして實母を喪つたが克く父母及義母に仕へ弟妹を愛撫し人に接し親切にして諸人の親愛を受けてゐた。昭和二年三月志津川小學校高等科を卒業し其後勉學の志を抱き單身上京して法政大學に入學し新聞、牛乳配達等をなし苦學せるも學資に窮し中途退學の上警視廳の馬丁として勤務してゐたが昭和六年一月徵兵として横須賀海兵團に入團し忠實軍務に勵み、後海軍砲術學校普通科及高等科砲術練習生教程を卒業し同十一年十一月累進して海軍二等兵曹に任せられた。此の間軍艦金剛、高雄及驅逐艦神風乗組を経て驅逐艦湖乘組となつた。

昭和十二年七月北支に事變勃發以來氏は驅逐艦湖乘組員として所屬驅逐隊橋本司令指揮の下に僚艦と共に陸軍輸送船團護衛の任務に服してゐた。八月十三日遂に上海に於て日支開戦となり同地にある我が陸戰隊は數十倍の大敵包圍の中に激

戦を交へ悪戦苦闘旬日克く其の警備區域を死守し租界の安全を確保してゐたが上海に於ける形勢は益々重大を加へ其の危険は日を重ぬるに従つて増大するの傾向を生じ遂に陸軍の派遣となり氏の乗艦潮は僚艦と共に陸軍先遣部隊を乗艦せしめて上海に急航し八月二十二日同地に到着した。當時上海東部租界に奮戦中の海軍陸戰隊竹下部隊は陸軍揚陸掩護の爲め吳淞鐵道棧橋附近に敵前上陸を敢行す可き命を受け同日午後十時半雲陽丸、信陽丸、當陽丸の三船に分乗し勇躍出發の時機



を待つてゐた。翌二十三日午前零時三十分氏の乗艦潮は僚艦と共に上海大連棧橋附近より黃浦江兩岸の敵と交戦しつゝ遂次出港し該三隻の輸送船を警護し燈火を隠蔽して肅々として黃浦江を下り揚陸地點吳淞鐵道橋に向け下江した。折柄皎々たる月は一片の浮雲さへなく晴れ渡つた江南の空に懸り艦上に白き光を浴せてゐた時に上海の上空を望めば紅蓮の焰は天を焦し砲聲股々として遠雷の轟くが如く轉た悽愴の感を催さしむるものがあつた。之に反し吳淞鎮方面に近寄れば四邊寂として恰も眠れるが如き静けさであつた。午前二時四十五分頃護衛の先頭艦艇先づ揚陸地點吳淞鎮に向け掩護の火蓋を切れば忽ち同地は静寂の夢破られ我が艦艇の打出す砲火のため建物に忽ち火を發し火焰天に沖して凄慘なる戦火の巷と化した。次で同三時海關港務所の敵陣地及揚陸地點附近に、火焰に照らされた敵の散兵線を認め各艦は一齊に全砲火を之に集中し砲身も灼熱する許りに之に猛射を浴せた。今迄沈黙せし敵兵は江岸より四、五十米の近距離に構築せる堅固なる陣地に據り迫撃砲、野砲、機銃及小銃等を亂射し死者狂ひとなつて反撃し來り我が軍の上陸を阻止せんとした。斯くて僚艦潮は雲陽丸に、氏の乗艦潮は當陽丸に、彈雨を冒して夫々横付作業を開始したが前甲板は全く敵彈に曝露し敵の小銃、機銃彈は

凄まじき唸を立てて雨霰の如く飛來し時々砲塔及艦の外飯に命中して火花を發し其の光景悽愴を極めた。午前三時十二分頃氏の乗艦潮は横付の爲め前後より「サンドレツド」を投げんとするや前方より敵機銃の猛射を浴せられ「残念」「畜生」と悲痛なる叫聲と共に前甲板作業員は相續いて倒れた。此間氏は方位盤指揮所にありて方位盤旋回手の配置に就き雨飛する敵彈を物ともせず砲術長指揮の下に敵陣砲撃に奮闘してゐたが折柄虚空を切つて飛來せし敵の一彈は無念一氏の前額部に命中し惜しくも壯烈なる戦死を遂げた。併し氏等の奮闘と尊き犠牲に依り先づ海軍陸戰隊次で陸軍部隊の上陸を完了し見事海陸部隊揚陸の重任を果たしたのであつた。

氏は今次事變勃發以來驅逐艦乗組員として陸軍輸送船團の護衛に任じ常に暑熱風濤と闘つて克く其の任務を全うし次で吳淞敵前上陸戦には陸戰隊の輸送護衛の重責に任じ勇猛果敢彈雨を冒して敵陣を砲撃し以て敵に多大の損害を與へて我が部隊の揚陸掩護に甚大なる寄與貢獻をなした。氏は本任務に參與するを知るや自ら期する所ありしもの如く其の前日欣然として部下同僚に堅き決意を語り夕食の際にも「もう何時戦死するかも分らんから充分飯を食つて置かうぢやないか」と激励し又輸送船護衛の爲め出港の前後に於ける兩岸の敵陣地攻撃に際しては烈々燃ゆるが如き意氣を以て敵陣を猛撃し「もつと射ちたい」と呟いてゐたが揚陸地點に達し「やるぞ」と一聲鋭く叫んだ利那惜しくも護國の華と散つた。是れ畢竟献身奉公、盡忠報國赤誠の發露にして天晴れ武人の鑑とす可きである。參戰劈頭斯かる忠烈の士を喪ひたるは洵に痛惜に堪へざるも、其の輝かしき武勳は永へに海軍戦史を飾り芳名は千載に薫りて埋れず、不滅の英靈は靖國の神と祀られて國民崇敬の的たる可く神靈尙も皇國を護り又一家の前途に尊き加護佑助を垂るるであらう。

氏は戦死の日海軍一等兵曹に進級し次で功六級金鷄勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍一等航空兵曹勳七等功六級 佐藤彦三郎

壯烈屢々渡洋爆撃に武勳を奏し惜しくも海安鎮附近に散る

氏は福島縣田村郡高瀬村の人にして父を臣旨、母(亡)をヤス養母をハツといひ明治四十二年九月二十三日に生れ妻トヨとの間に長男正彦を擧げた。性温厚寡黙にして實母を喪つた後も克く養母に仕へて孝養を盡し又弟妹を愛撫し一家極めて圓滿で近隣の風評頗る良好であつた。大正十一年三月高瀬小學校尋常科を卒業と共に郡山金透小學校高等科に入學し大正十三年三月同校を卒業し同年四月安積學館に入學翌年三月同館を卒業し其後は鐵道連結手となりて勤務してゐた。昭和五年一月徴兵として横須賀海兵團に入團し誠實軍務に勉勵し、後霞ヶ浦海軍航空隊普通科整備術練習生教程並に横須賀海軍航空隊偵察練習生教程を卒業し累進して同十一年五月海軍二等航空兵曹に任ぜられた。此の間軍艦榛名、赤城並に霞ヶ浦、館山、木更津及第十一各航空隊に勤務し同年十一月再び木更津航空隊勤務となつた。

昭和十二年七月北支に事變勃發し中、南支方面の風雲亦急を告ぐるや氏は聯合航空隊に編入せられ第三艦隊附屬となり八月上旬前進基地に進出し出動準備を整へて待機してゐたが八月十三日遂に上海に於て日支間に戦闘開始せられ翌十四日より敵飛行機は屢々上海上空に飛來し我が陸戰隊本部及戰線部隊、旗艦出雲其他の海軍艦艇等は勿論各種重要建物商業地帯等に對し所嫌はず百爆撃を行ひ以て幾多無辜の人民を殺傷するの暴舉を敢てし全上海市民の怨嗟的となつた。當時颯風は上海沖に停滯し海上風浪高く何時鎮まるとも測り知れざる光景に我が全海軍航空隊は陸戰隊の苦戰と敵機の跳梁を耳にし義憤に燃えつつ空しく天を仰いで心なき暗雲の徂徠を眺めて脾肉の歎を漏らしてゐた。然るに同日午後突如待望の進撃命令が發せられた。もはや荒天何のその氏等決死の海軍航空隊將兵は感奮興起猛鷲の羽搏き物凄く上海沖合にゐた艦船水上機隊は眞先に激浪を蹴つて離水し上海附近の敵飛行場を襲ひて大格納庫を爆撃し艦上及陸上攻撃機隊亦嵐を衝いて長

驅渡洋爆撃を敢行し敵航空兵力の重要な各據點に對し有效なる巨弾を浴びせ茲に支那空軍殲滅の幕は切つて落された。

當時氏は曾我少佐の指揮する陸上攻撃機隊入佐隊に屬し進撃命令今や遅しと待つてゐたが八月十七日蚌埠空襲の命を受け所屬隊僚機と共に勇躍基地を進發し同地飛行場及格納庫を爆撃し翌十八日には上海北西の崑山鐵橋爆撃十九日には南京夜間空襲を敢行し國民政府重要建物を爆撃した。此の間氏等は常に敵の熾烈なる地上防空砲火を冒し勇戦力闘甚大の戦果を収めて赫々の武功を樹て克く其の重大使命を全うした。



八月二十一日氏の屬する入佐隊及僚隊吉田隊は揚州飛行場爆撃の命を受けた。氏は入佐隊三番機々長兼偵察員として陸上攻撃機に搭乘し月光の下戦友の打ち振る帽子を後に見て吉田隊は午前二時二十分所屬入佐隊亦之に次ぎ勇躍前進基地を進發して征途に就いた。機は皎々たる月光を銀翼に浴び雲海を下に見つつ一路東支那海上空を翔破して支那大陸に入つた。折柄月は没し暗黒と雲霧の爲め所屬隊は何時しか吉田隊と分離して高郵湖上空に達したが雲低く機位不明であつたので同四時四十五分機位確認の爲め南下して揚子江上に出で揚州を搜索したが黎明前にて地物辨別し難く且つ斷雲に遮られて遂に之を發見するを得なかつたので揚州爆撃を斷念し目標を浦口に變更し同六時十五分浦口上空に達し同地重要軍事施設に巨弾の雨を降らして多大の損害を與へ悠々歸途に就いた。然るに午前六時二十五分敵戦闘機六機の追撃し來るのを發見した我が方の寡勢を知つて得たりと許り迫つて來た敵機、しかし挑戦された以上敵に後を見せることなき我が荒鷲である攻撃機對戦闘機の壯烈なる空中戦が始まつた。見敵必墜の我が海軍魂は火と燃えさかつて此の中三機と交戦し「ボーイン

グ型一機を不時著せしめ又「カーチス、ホーク」型一機を撃墜し残る一機はあらぬ方向に反轉遁走した。此の一瞬氏の機は間髪を入れず飛退いて敵機の攻撃を避けて再び基地に向はんとしたが不運にも愛機は此の戦闘で右側燃料槽に敵弾を受けて火災を起し忽ち火焰に包まれて海安鎮附近に墜落し氏以下搭乗員六名は愛機と共に壯烈なる戦死を遂げた。併し氏等の緒戦に於ける奮戦と尊き犠牲は我が空軍の制空權掌握の端緒を拓き爾後の戦闘を有利に導くを得たのであつた。

氏は沈著果敢率先難事に當り堅忍不拔初志を貫徹せざれば已まざる氣概が有つた。海軍出身以來孜孜として軍務に精勵し其の航空に對する智識伎倆共に優秀にして部下の指導亦懇切を極め將來有爲の下士官として上下の信頼が厚かつた。今次聖戦に従ふや機長兼偵察員として陸上攻撃機に搭乗し屢々荒天を衝いて東支那海を飛翔して支那大陸に往復し遠く蚌埠、崑山鐵橋、南京を襲ひ奮戦力闘敵に多大の損害を與へて其の使命を全うし次で浦口空襲を敢行し更に空戦を演じて敵機二機を撃墜し遂に敵弾を機體重要部に受けて愛機諸共に名譽の戦死を遂げた。其の壯烈なる行動は眞に生死を超越し一意君國に報むんとする純忠赤誠の發露にして天晴れ皇國軍人の鑑とす可きである。參戰一週日を出ずして氏の如き忠勇義烈の空軍戦士を喪つたことは洵に痛惜の極みである。されど我が海軍の歴史ありてより空前の壯舉たる渡洋爆撃を敢行して樹てたる赫々たる偉勳は燦然として永へに海軍戦史に輝き芳名は千載に薫りて埋れず、不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬の的たる可く氏死して餘榮ありと謂ふ可きである。而して其の神靈は尙も皇國を護り又一家の前途に尊き加護を垂れ長く其の妻子を照覽し給ふことであらう。

氏は戦死の日海軍一等航空兵曹に任ぜられ次で功六級金鵝勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍一等兵曹勳七等功六級 清留清熊

苦戦中の友軍を赴援し奮戦功を樹て遂に上海滙山路に斃る

氏は鹿兒島縣鹿兒島郡吉田村東佐多浦の人にして亡父を與三次、母をツナと云ひ明治四十四年十二月に生れ未だ獨身であつた。性温厚にして體力頑健、元氣旺盛にして何事をなすにも不屈不撓の氣概があつた。大正十三年三月尋常小學校を卒業し其後は家業たる農に従事してゐたが昭和四年六月志願兵として佐世保海兵團に入團し忠實軍務に精勵し後海軍砲術學校普通科砲術練習生教程を卒業し、軍艦羽黒、名取、水雷艇千鳥及驅逐艦三日月等に勤務し同十一年五月軍艦八重山より驅逐艦梅に轉勤し同十二年五月果進して海軍二等兵曹に任ぜられた。氏は驅逐艦梅に乗艦以來中支方面にありて揚子江流域の警備に服し我が國の各種權益の擁護並に在留同胞の保護に任じてゐた。尙ほ氏は昭和六年乃至九年事變の功に依り勳八等瑞寶章を賜はつた。

昭和十二年七月北支事變勃發以來中支方面の風雲亦急を告ぐるに至つたが當時氏の乗艦梅は南京に碇泊中であつたので同艦は日支間の事態悪化に備へて益々警備を嚴にし次で漢口居留民の引揚げに際しては之が護衛の任務に服して安全に其の引揚げを完了せしめた。八月十三日遂に上海に於て日支開戦の火蓋を切るや同艦は通州と七了口間水路の哨戒に當つてゐたが八月十四日敵の飛行機八機編隊を以て同艦上空に襲來して空爆を敢行した。此時氏は高角砲々長として直ちに之に猛砲撃を加へ奮戦克く其の一機を撃墜して遂に敵を撃退した。越えて八月十七日に至るや上海に於ける戦闘は益々激烈となり我が軍寡兵頗る苦戦に陥るに及び氏は選ばれて陸戦隊員となり乗員一同の歡呼の裡に堅き決意を其の眉宇に閃かしつつ勇躍艦を出發し同日午後九時上海に上陸し普中隊會根小隊に屬し分隊下士官として保定路より虹口クリーク三の橋に至る東部左地區の戦線に轉戦し連日晝夜を別たさず不眠不休の奮戦を續け以て敵に甚大の損害を與へた。殊に二十二日昆明路

と舟山路との交叉點に於て苦戦中の竹下大隊吉田小隊に赴援の際は茂海路と昆明路との交叉點附近の戦闘に参加し氏は敵の昆明路を横切らんとする地點に潛伏し勇敢にも該道路を横切る敵を悉く射殺或は刺殺して敵の心膽を寒からしめ頑強に逆襲する敵をして一步も我が守備線に侵入せしめず奮戦克く敵を撃退して爾後に於ける味方の戦闘を有利に導き其の功績は洵に顯著なものであつた。翌二十三日土師大隊の第五陣地には前夜來敵の大部隊の猛襲を受け頗る苦戦に陥つてゐたので同日午後三時氏は小隊長指揮の下に彈雨を衝いて同陣地に赴援し華盛路と瀝山路との交叉點の守備に任じ飛び來る敵彈を物とせし勇猛果敢敵前に於て土囊陣地構築に活躍中、突如敵の猛射を浴びせられたので直ちに之に應戦し敵に猛射を加へて奮戦してゐたが無敵の一彈氏の腹部に命中し其の場に壯烈なる戦死を遂げた時に午後四時五十分であつた。

氏は潑刺として活氣に富み銃劍術、劍道共に初段の伎倆を有し艦内に於ては常に武技の指導員となり砲長としても亦拔群の伎倆を有し尙ほ暗號員及甲板下士官の職務を兼ね日夜粉骨碎身職務に勉勵し上下の信望を一身に蒐めてゐた。今次聖戰勃發するや驅逐艦乗組員として揚子江水路の警戒監視に任じ次で陸戦隊員として連日有ゆる辛酸を嘗め各陣地に轉戦し奮戦敢闘遺憾なく其の任務を遂行し以て我が軍戦勝に多大の寄與貢獻をなし遂に興亞の礎となつて散華した。斯くの如きは眞に獻身奉公以て君國に報ひんとする純忠赤誠の發露にして天晴れ皇軍精兵の鑑とす可きである。參戰幾日ならずして斯かる忠烈の士を喪ひ今や其の壯容に接す可くもなく洵に痛惜の極みである。併し其の赫々たる武勳は永へに海軍戦史に輝き芳名は武人の華として千載に傳へらる可く、不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬の的となるであらう。氏亦以て瞑す可きである。而して神靈は尙も皇國を護り且つ一家の前途に尊き加護佑助を垂るるであらう。

氏は戦死の日海軍一等兵曹に任ぜられ次で功六級金鵄勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍一等兵曹勳七等功六級

菊地龜治

累戦武勳を羨し惜しくも吳淞敵前上陸戦に斃る

氏は宮城縣互理郡山下村高瀬の人にして父を龜吉、亡母をりんと云ひ明治四十二年一月に生れ未だ獨身であつた。性温厚正直にして質實剛健の氣風を有し幼にして母を喪つたが克く父を扶けて農業に勵み家庭圓滿にして近隣の信望が高かつた。大正十三年三月山下高等小學校を卒業し其後は家にありて農業に従事してゐたが昭和四年六月志願兵として横須賀海兵團に入團し誠實軍務に勵み同六年十一月海軍砲術學校普通科砲術練習生教程を卒業し累進して同十一年十一月海軍二等兵曹に任ぜられた。此の間軍艦衣笠、八雲、横須賀海兵團、海軍砲術學校、軍艦榛名、鳥海、驅逐艦曙等に勤務し同十二年七月横須賀鎮守府特別陸戦隊に編入せられた。

昭和十二年七月北支事變勃發以來中支方面の風雲急を告ぐるや氏は横須賀鎮守府特別陸戦隊竹下大隊大橋中隊渡邊小隊に屬し分隊下士官として八月二日以来旅順に進出待機してゐたが八月十三日上海に於て遂に日支開戦となり所屬部隊は命に依り上海特別陸戦隊増援部隊として八月十七日旅順を出發し翌十八日上海に上陸して同地特別陸戦隊司令官の指揮下に入り其の本部を公大社宅に定め東部支隊左地區隊として楊樹浦クリーク以西の地域を警戒し日本郵船瀝山路碼頭及瀝山路の線を占領確保する事となつた。

氏は上陸以來東部租界左地區の第一線に進出して其の守備に就き所屬小隊は大連灣路と瀝山路との交叉點又は保定路と瀝山路との交叉點等の各陣地に轉戦し我に十數倍の敵と對峙し連日間斷なく敵襲を受けて激戦を交へてゐたが氏は其間克く小隊長の意圖を體し彈雨の中に奮戦を續け殊に八月十九日公平路の敵掃蕩戦に於ては敢然敵陣に突入し壯烈極まる白兵戦を演じ小隊長敵彈に斃るるや小隊長の仇を取れと大聲疾呼狂獅の勢鋭く敵陣を突破して敵を租界外に擊退して克く其の

守備線を確保した。翌二十日小隊は小野兵曹長代つて之が指揮をとる事となつた。斯くて我が陸戦隊各部隊は寡勢を以て大敵を邀撃し悪戦苦闘旬日に互り克く租界の安全を確保してゐたが上海に於ける形勢は益々重大を加へ遂に陸軍部隊の派遣となり其の先遣部隊の一部は上海に到着した。當時上海東部租界に奮戦中の所屬竹下部隊は八月二十一日夜陸軍揚陸隊の爲め吳淞鐵道棧橋附近に敵前上陸を敢行す可き命を受け翌二十二日其の守備區域を土師大隊に譲り大阪商船碼頭に集合し暫時休養の後諸準備を整へ同日午後十時半上海招商局棧橋より雲陽丸、當陽丸、信陽丸の三船に分乗し勇躍出發の時機を待つてゐた。聽て三船は江上艦艇に護衛せられ燈火を隠蔽して肅々として黃浦江を下つた。折柄皎々たる月は一片の浮雲さへなく晴れ渡つた江南の空に懸り船上の我が勇士の鐵兜の上に白き光を浴せてゐた。船は漸次進航を続け翌二十三日午前三時頃味方驅逐艦水雷艇の掩護射撃の下に吳淞鐵道棧橋に近づいた。氏等の乗船信陽丸は豫定上陸地點たるドツク會社の直ぐ下流に横付せんとするや突如敵は前方家屋及左方陣地から猛射を浴せて來たので我が機銃隊は船上から直ちに之に應戦して之に的確なる射撃を加へ制壓した。一方細田小隊は舳舻及道板の準備を行ひ敵彈雨注の中各員の敏速果敢なる動作に依り横付作業は著々進捗し全員の意氣愈々揚り戦はずして既に敵を呑むの概を示してゐた。午前三時五分岸壁と甲板との間に架橋終ると見るや全員は肩に綾なす白襪の姿も勇ましく脱兎の如く橋を蹴つて上陸を開始した。氏等は彈雨の中、小隊長を先頭に中隊の右翼第一線として柴田小隊の右方に進出し前面の群がる敵を撃退しつつ砂山に達し同地で一先づ陣容を整へ小隊長は自ら二個分隊を提げて上陸地點より約四十米にある右前方のコンクリート家屋の敵を攻撃して之を占領した。一方氏等殘餘の隊員は先任分隊下士官指揮の下に砂山の前方コンクリート塊の堆積地に辿り著き先に進出した味方分隊に協力して敵に猛撃を加へた。敵亦小銃機銃を亂射し手榴彈を亂投して我が進撃を阻止せんとし彼我互に激戦を交へてゐたが分隊下士官たりし氏は敵の射撃猛烈にして進出困難なるを知り部下を督勵して手榴彈戰を演ずる事數分、敵容易に退却の色を見せず氏は憤然として一舉に敵陣に突入せんと決意し斬起して銃劍を揮ひ進めの號令と共に猛然飛鳥

の如く躍進して同所を飛び越した刹那無念！敵の手榴彈を其の腹部に受け遂に壯烈なる戦死を遂げた。併し氏等の奮戦と尊き犠牲は我が軍戦勝の端緒を開き小隊は續いて敵陣に突入し小隊長以下多數の死傷者を出し僅かの殘員を以て悪戦苦闘を續けてゐたが間もなく陸軍の一隊進出し來り之と協力して遂に鐵道構内の敵を完全に撃退し得たのであつた。其後大隊は本戦闘に於ける赫々の武勳に依り時の第三艦隊司令長官より譽の感狀を授與せられた。是れ全く氏等の獻身奮闘に俟つ所大なりと謂ふ可きである。

氏は剛毅にして古武士の風格を備へ友情厚く部下を愛し其の指導、熱心懇切を極め而も獻身的努力の人であつた。今次聖戦に参加するや上海上陸後直ちに東部租界守備の任に就き連日連夜不眠不休砲煙彈雨の中を馳驅し奮戦力闘遺憾なく其の本分を全うし殊に吳淞敵前上陸に際しては彈雨を冒して頑強なる敵の抵抗を排撃し肉彈突撃を敢行せんとして遂に護國の華と散つた。其の壯烈鬼神の如き奮闘は眞に死生を超越し一意其の重責完遂に邁進せんとする純忠至誠の發露に外ならず。參戦旬日を出でずして斯かる忠勇義烈の士を喪ひたるは洵に痛惜の極みなるも、其の赫々たる武勳は至誠報國の芳名と共に永へに海軍戦史に輝き、不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬の的たる可く神靈尙も皇國を護り又一家の前途に尊き加護照覽を垂るるであらう。

氏は戦死の日一等兵曹に任ぜられ次で功六級金鷄勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍一等兵曹勳七等功五級 樋口榮四郎

累戦武勳を羨し惜しくも吳淞敵前上陸戦に斃る

氏は山形縣東村山郡作谷澤村の人にして父を榮作、母をモトといひ大正二年二月二十四日に生れ未だ獨身であつた。性

寡黙質直極めて眞面目にして責任觀念強く又親兄弟思ひ母校後輩思ひの人で稀に見る優良青年として村内の風評頗る良好であつた。昭和二年三月作谷澤小學校高等科を卒業し其後は農業に従事する傍補習學校に學び尙ほ青年訓練所にも通ひて心身の鍛錬に努めてゐた。昭和六年六月志願兵として横須賀海兵團に入團し誠實軍務に精勵し、後海軍砲術學校普通科並に高等科砲術練習生教程を優良の成績を以て卒業し果進して同十二年五月海軍二等兵曹に任ぜられた。此間軍艦榛

名、八雲、海軍砲術學校、軍艦金剛、山城等に勤務し同年七月横須賀鎮守府特別陸戰隊に編入せられた。



昭和十二年七月北支事變勃發以來中支方面の風雲亦急を告ぐるや氏は横須賀鎮守府特別陸戰隊竹下大隊大橋中隊永井指揮小隊に屬し分隊下士官として八月二日以来旅順に進出し待機してゐたが八月十三日遂に上海に於て日支開戦となり所屬部隊は命に依り八月十七日旅順を出發し翌十八日上海に著し直ちに上陸して同地特別陸戰隊司令官の指揮下に入り東部租界左地區隊として楊樹浦クリーク以西の地域を警戒し日本郵船滬山碼頭及滬山路の線を占領する事となつた。

氏は上陸以來東部租界左地區の第一線に進出し指揮小隊斥候分隊下士官として彈雨の下斥候任務並に各隊との通信連絡に當り沈著豪膽始終克く其の責務を完うし殊に八月二十一日午後七時頃我が華盛路陣地に重機及輕機數挺を有する優勢なる敵が來襲し激戦一時間に及び我が彈藥缺乏之際氏は部下二名を率ひ降り布く彈雨を冒して之が補給を行ひ更に銃を執つて戰鬥に参加し奮戦力闘克く味方戰鬥に寄與する事多大であつた。斯くて我が陸戰隊各部隊は惡戰苦闘旬日寡勢を以て敵の大部隊を撃退し克く租界の安全を確保してゐたが上海に於ける形勢は益々重大となり遂に陸軍の派遣となり其の先遣部

隊は上海に到着した。當時東部租界に奮戦中の所屬竹下部隊は八月二十一日夜陸軍部隊揚陸掩護のため吳淞鐵道棧橋附近に敵前上陸を敢行す可き命を受けた。翌二十二日所屬大隊は其の守備區域を土師大隊に譲り大阪商船碼頭に集合し暫時休養の後諸準備を整へ同日午後十時半上海招商局棧橋より雲陽丸、信陽丸、當陽丸の三船に分乘し勇躍出發の時機を待つてゐた。總て三船は江上艦艇に護衛せられ肅々として黃浦江を下つた。折柄皎々たる月は一片の浮雲さへなく晴れ渡つた江南の空に懸り船上の我が勇士の鐵兜の上に白き光を浴せてゐた。船は漸次進航し翌二十三日午前三時味方驅逐艦、水雷艇の掩護射撃の下に吳淞鐵道棧橋に近づいた。氏等の乗船信陽丸は豫定上陸地點たるドック會社の直ぐ下流に横付けせんとするや突如敵は前方家屋及左方陣地附近から猛射して來たので我が機銃隊亦船上より直ちに之に反撃を加へて敵を制壓した。其間各員は敵彈雨注の中敏速果敢に紡索及道板の準備を行ひ横付作業は著々と進捗し全員の意氣は愈々揚り戦はずして既に敵を呑むの概を示してゐた。午前三時五分岸壁と甲板との間に架橋終ると見るや隊員は肩に綾なす白禱の姿も勇ましく脱兎の如く橋を蹴つて上陸を開始した。そこで各小隊は各所定の線に向つて進出し當面の群る敵を撃退しつつ躍進又躍進し肉彈戰を演じ頑強なる敵の抵抗を排除し遂に敵を鐵道線路外に驅逐して陸軍の揚陸を容易ならしめた。此間氏等指揮小隊員は小隊長指揮の下に中隊本部と共に進撃した。午前三時三十分斥候分隊下士官たりし氏は中隊長より中隊正面の柴田、小野兩小隊間々隙の敵情偵察を命ぜられ斥候長となり部下の後藤、山内、金子の各一等水兵を率ひ敵彈雨注の中竹垣に沿ひ家屋を廻つて突進したが、當時四邊は未だ闇に鎖され視界狭少にして敵情不明であつたので氏は敢然敵の手榴彈機銃彈の雨を冒して更に躍進し遂に竹垣外に進出したが圖らずも友隊柴田小隊の苦戦に陥つてゐるのを目撃すると共に同小隊の側方至近の距離に有力なる敵がゐる事を確認し後藤一水をして直ちに之を中隊長に報告せしめ自ら他の部下二名と共に柴田小隊に協力し當面の敵に猛射を浴せ死力を盡してゐたが偶々敵機銃の集中射撃を被り無念！氏は頭部に貫通銃創を受け惜しくも敵の寸前で壯烈なる戰死を遂げた。併し氏等斥候隊の決死的奮闘に依り爾後に於ける中隊の戰鬥を有利に

導き午前五時所屬大隊は見事に陸軍揚陸掩護の重任を果すを得たのであつた。其後大隊は時の第三艦隊司令長官より譽の感状を授與せられた、是れ全く氏等の勳功に俟つ所大なりと謂ふ可きである。

氏は剛毅果斷命令一下水火も辭せざる氣概を有し其勤務振りは優秀にして將來有望の下士官として囑望されてゐた。今次聖戰に参加するや上海上陸後直ちに東部租界の第一線守備に當り指揮小隊分隊下士官として連日不眠不休の奮戦活躍を續けて克く其の重責を全うし、次で吳淞敵前上陸に際しては勇猛果敢彈雨を冒して敵前に上陸し斥候長として敵陣に肉薄して有効適切の報告を齎し以て中隊の戰鬪を有利に導き、次で敵陣に突入し奮戦敵に甚大の打撃を與へて遂に護國の華と散つた。壯烈斯くの如きは眞に死生を超越し一意其の重責完遂に邁進せんとする純忠至誠の發露にして正に軍人の龜鑑とす可きである。參戰幾日ならずして斯かる忠勇義烈の士を喪ひ今や其の壯容に接する能はざるは洵に痛惜に堪へざるも、其の赫々たる武勳は永へに海軍戰史に輝き芳名は千載に薰り不滅の英魂は靖國の神と祀られて國民崇敬の的たる可く、神靈尙も皇國を護り又一家の前途に尊き加護佑助を垂るるであらう。

氏は戰死の日海軍一等兵曹に任ぜられ次で拔群破格の功五級金鷄勳章並に勳七等青色桐葉章を賜はつた。(恩地)

海軍一等航空兵曹勳七等功六級 毛利健榮

壯烈屢々渡洋爆撃に武勳を奏し惜しくも海安鎮附近に玉碎す

氏は富山縣婦負郡山田村鎌倉の人にして父を辰藏、母をのうといひ大正五年四月に生れ妻をサダといふ。性温厚篤實にして沈著果斷、率先難事に當り不屈不撓の氣概があつた。昭和六年三月山田小學校高等科を卒業し間もなく少年航空兵を志願して首尾よく合格採用となり同年六月豫科練習生として横須賀海軍航空隊に入隊し爾來刻苦勉勵して同練習生教程を

卒業して軍艦摩耶に乘組み後設ヶ浦海軍航空隊に於て飛行操縦術を修得し吳海軍航空隊勤務となり同十一年十一月木更津航空隊附に轉じ果進して同十二年五月海軍二等航空兵曹に任ぜられた。

昭和十二年七月北支に事變勃發し中、南支方面の風雲亦急を告ぐるや、氏は聯合航空隊に編入せられ第三艦隊附屬となり八月月上旬以來前進基地に進出し出動準備を整へて待機してゐたが八月十三日遂に上海に於て日支間に戰鬪開始せられ翌十四日敵飛行機は屢々上海上空に飛來し我が陸戰隊本部及戰線部隊、旗艦出雲其の他の海軍艦艇等は勿論各種重要建物業地區等に對し所嫌はず盲爆を行ひ以て幾多無辜の人民を殺傷するの暴舉を敢てし全上海市民の怨嗟の的となつた。當時颱風は上海沖に停滯し海上風浪高く何時鎮まるとも測り知れざる光景に我が全海軍航空隊は陸戰隊の苦戰と敵機の跳梁を耳にし義憤に燃えつつ空しく天を仰いで心なき暗雲の徂徠を眺め脾肉の歎を漏らしてゐた。然るに同日午後突如待望の進撃命令が發せられた。もはや荒天何のその氏等決死の航空隊將兵は感奮興起、猛鷲の羽搏き物凄く、上海沖合にゐた艦船水上機隊は眞先に激浪を蹴つて離水し上海附近の敵飛行場を襲ひて大格納庫を爆撃し次で艦上及陸上攻撃機隊亦嵐を衝いて長驅渡洋爆撃を敢行し敵航空兵力の各重要據點に對し有效なる巨彈を浴びせ茲に支那空軍殲滅の幕は切つて落された。當時氏は曾我少佐の指揮する陸上攻撃機隊入佐隊に屬し進撃命令の降下今や遲しと待つてゐたが八月十七日に至り蚌埠空襲の命を受け所屬隊僚機と共に勇躍其地を進發し支那海を翔破して同地飛行場及格納庫を爆撃し、翌十八日には上海の北西崑山鐵橋爆破、十九日には南京夜間空襲を敢行し國民政府重要建物に巨彈を投じて之を爆破した。此の間氏等は常に敵の熾烈なる高角砲の彈幕を潛り勇戰健闘多大の戰果を收めて赫々の武功を樹て克く其の重大使命を全うした。

八月二十一日氏の屬する入佐隊及僚機隊吉田隊は揚州飛行場爆撃の命を受けた。氏は入佐隊佐藤機に搭乘し月光の下戰友の打ち振る帽子を見て吉田隊は午前二時二十分、所屬入佐隊亦之に次ぎ勇躍前進基地を進發して征途に就いた。機は皎々たる月光を銀翼に浴び雲海を下に見つつ一路東支那海上空を翔破して支那大陸に入った。折柄月は没し暗黒と雲霧の